

総合研究

# 岩戸満願寺遺跡の研究

— 三浦半島における鎌倉時代寺院の瓦 —



2 0 2 3

神奈川県立歴史博物館

総合研究

# 岩戸満願寺遺跡の研究

— 三浦半島における鎌倉時代寺院の瓦 —



2023

神奈川県立歴史博物館

故 稲村 繁 氏に感謝をこめて



定年退職時の稲村 繁氏 (2017 年)

## 故 稲村繁さんを偲んで

2018年9月23日から開始した岩戸満願寺遺跡出土瓦ほかの再調査は、2023年1月26日をもって資料を収蔵する横須賀市自然・人文博物館（以下、横須賀市博）における諸作業をすべて終了し、その成果がこの度『岩戸満願寺遺跡の研究―三浦半島における鎌倉時代寺院の瓦―』として神奈川県立歴史博物館より刊行されることとなりました。この間、新型コロナウイルス蔓延による中断期間もありましたが、横須賀市自然・人文博物館での調査は9回に及びました。

調査に際しては横須賀市博のご協力、中でも考古学担当学芸員であった稲村繁氏からは会場の設定や出土遺物の事前準備等、多大な協力を得ました。しかし、残念ながら稲村繁氏は2019年11月29日に横須賀市博からの帰宅途中、バスの中で心筋梗塞により急逝されました。バスが終点に到着するまで、どなたにも気づかれず穏やかな表情のままであったそうです。同月の3日と4日に横須賀市博で第4回目の調査を行い、いつもながらの笑顔で協力していただいたばかりであり、にわかには信じがたい出来事でした。それまでの彼のご協力なしには、ここまで辿り着くことは出来なかったと思います。その後は故稲村繁氏の遺志もあり、横須賀市博と残された人文部門の諸学芸員の皆様などからご協力があり、ここまでたどり着くことが出来ました。故稲村繁氏はじめ横須賀市博の方々には感謝申し上げますのみです。

故稲村繁氏は1957年2月に福島県勿来市（現いわき市）で生まれ、1975年4月に茨城大学人文学部文学科入学、1985年3月に国学院大学大学院文学研究科博士課程後期単位取得終了、1987年5月に埋蔵文化財専門職員として横須賀市教育委員会に奉職。1992年4月に考古学担当学芸員として横須賀市自然・人文博物館に移動、2017年3月の定年退職後も再任用職員として考古学担当学芸員を務められました。彼の専門は古墳時代の埴輪、中でも形象埴輪の研究でしたが、晩年には埴輪生産工人集団の動向に注目し、「人物埴輪からみた東国の埴輪生産と供給」（『考古研究』58）が遺作になりました。

横須賀市においては八幡神社遺跡群八幡神社前地点・同遺跡群久里浜中学校地点、満願寺東横穴群等の中世遺跡発掘調査も担当された。これらの遺跡は、現在でも横須賀市内における重要な中世遺跡となっています。埴輪の研究のみならず、多様な問題について考えることがまだまだあったでしょうが、本報告を天の彼方から笑って眺めていただければ幸いです。

（横須賀市教育委員会同期就職の中三川昇）



横須賀市教育委員会就職当初の故稲村繁氏と筆者  
(1987年)



1. 主な軒瓦



2. 尾張産瓦（八事裏山窯含む）瓦



1. 軒丸瓦 No.1



2. 軒丸瓦 No.12



3. 軒丸瓦 No.13



4. 軒平瓦 No.31



5. 軒平瓦 No.32



1. 軒平瓦 No.34



2. 軒平瓦 No.38



3. 軒丸瓦 No.16



4. 軒平瓦 No.44



5. 軒平丸瓦 No.46



6. 鬼瓦 No.124



1. 丸瓦 No.71



2. 平瓦 No.97



3. 平瓦 No.99

## 例 言

1. 本書は平成30年(2018)9月から令和5年(2023)1月までの期間で行われた岩戸満願寺遺跡(神奈川県横須賀市岩戸1丁目4番地ほか)より出土した中世瓦群の遺物再整理調査の成果報告書である。
2. 本書は令和3年(2021)度～令和5年(2023)度 神奈川県立歴史博物館 総合研究「横須賀市満願寺出土中世瓦の分析を通じた永福寺式瓦と鎌倉御家人の総合研究」(研究代表者:渡邊浩貴)の成果である。
3. 本調査は、資料を所蔵する横須賀市自然・人文博物館の協力のもと、平成30年(2018)9月より神奈川県内および周辺地域の有志の研究者が集い再整理を行い、その後、令和3年度より神奈川県立歴史博物館総合研究の県費助成を受けて実施されたものである。
4. 本調査は、東真江、足立佳代、池谷初恵、石川安司、稲村繁(故人)、岩楯英子、宇都洋平、大澤伸啓、押木弘己、川本真由美、小林康幸、曾根博明、高橋香、富永樹之、中三川昇、原廣志、比毛君男、深澤靖幸、松吉大樹、松吉里永子、水口由紀子、矢内智一郎、渡邊浩貴が行った。(五十音順)
5. 本書の執筆は、池谷初恵(伊豆の国市教育委員会)、押木弘己(鎌倉市教育委員会)、小林康幸(鎌倉市役所)、高橋香(公益財団法人かながわ考古学財団)、中三川昇(横須賀市教育委員会)、松吉里永子(株式会社博通)、渡邊浩貴(神奈川県立歴史博物館)が行った。(五十音順)
6. 資料を所蔵する横須賀市自然・人文博物館には、作業場所や機材類の提供など調査の際に多大なるご協力を頂いた。記して御礼申し上げる。

## 凡 例

1. 本書に掲載した遺物の縮尺・指示は次のとおりである。

瓦	1/4
陶磁器・かわらけ・その他	1/3
鉄製品	2/5
2. 遺物の番号は種別ごとの通し番号とし、本文・挿図・表・写真図版とも一致する。
3. 遺物観察表における計測値はcmであり、( )は残存値、[ ]は復元値、-は不明または計測不可能を示す。

## 目次

追悼写真・文	
巻頭図版	
例言	
凡例	
第I章 遺跡の位置と周辺の環境	1
1. 遺跡の位置	1
2. 周辺の地形と地質	1
3. 歴史的環境	4
第II章 遺跡・調査の概要	6
1. 満願寺遺跡の発掘調査の経緯と経過	6
2. 満願寺遺跡の主な遺構等	9
3. 遺物再整理、報告書作成の経緯と経過	11
第III章 出土遺物	13
1. 瓦	13
2. 瓦以外の遺物	18
第IV章 考察	53
1. かわらけ・陶磁器―鎌倉出土品との比較を通じて―	53
2. 鬼瓦	57
3. 三浦佐原一族の本拠と造寺活動―満願寺出土中世瓦群との関連から―	65
4. 瓦の位置づけ	80
5. 中世の岩戸	87

## 挿図目次

第1図 岩戸山満願寺の位置	2
第2図 岩戸山満願寺周辺の地形	3
第3図 岩戸山満願寺周辺の地質	3
第4図 周辺の遺跡分布図	5
第5図 満願寺遺跡と隣接遺跡	6
第6図 満願寺遺跡の現況地形図と調査地域図	7
第7図 第1次調査試掘坑平面図	7
第8図 第1次・第2次調査試掘坑平面図	8
第9図 満願寺遺跡の遺構配置図	10
第10図 第2次調査旧本堂礎石跡等平面図	10
第11図 出土瓦(1)―軒丸瓦―	19
第12図 出土瓦(2)―軒丸瓦―	20

第13図	出土瓦 (3) 一軒丸瓦一	21
第14図	出土瓦 (4) 一軒丸瓦・軒平瓦一	22
第15図	出土瓦 (5) 一軒平瓦一	23
第16図	出土瓦 (6) 一軒平瓦一	24
第17図	出土瓦 (7) 一軒平瓦一	25
第18図	出土瓦 (8) 一軒平瓦・丸瓦一	26
第19図	出土瓦 (9) 一丸瓦一	27
第20図	出土瓦 (10) 一丸瓦一	28
第21図	出土瓦 (11) 一丸瓦一	29
第22図	出土瓦 (12) 一丸瓦一	30
第23図	出土瓦 (13) 一丸瓦一	31
第24図	出土瓦 (14) 一丸瓦一	32
第25図	出土瓦 (15) 一丸瓦一	33
第26図	出土瓦 (16) 一丸瓦一	34
第27図	出土瓦 (17) 一丸瓦一	35
第28図	出土瓦 (18) 一丸瓦・平瓦一	36
第29図	出土瓦 (19) 一平瓦一	37
第30図	出土瓦 (20) 一平瓦一	38
第31図	出土瓦 (21) 一平瓦一	39
第32図	出土瓦 (22) 一平瓦一	40
第33図	出土瓦 (23) 一平瓦一	41
第34図	出土瓦 (24) 一平瓦一	42
第35図	出土瓦 (25) 一平瓦一	43
第36図	出土瓦 (26) 一平瓦一	44
第37図	出土瓦 (27) 一平瓦一	45
第38図	出土瓦 (28) 一平瓦一	46
第39図	出土瓦 (29) 一平瓦一	47
第40図	出土瓦 (30) 一平瓦一	48
第41図	出土瓦 (31) 一鬼瓦一	49
第42図	出土瓦 (32) 一道具瓦一	50
第43図	瓦以外の遺物	51
第44図	鉄釘	52
第45図	鎌倉市大倉幕府周辺遺跡の位置	54
第46図	鎌倉におけるかわらけ変遷の一例	55
第47図	渥美窯産短頸壺の事例	56
第48図	相模国鬼瓦出土遺跡	58
第49図	相模国の鬼瓦	59
第50図	播磨国・尾張国・三河国・駿河国の鬼瓦	61
第51図	武蔵国の鬼瓦	62
第52図	満願寺遺跡出土瓦のセット関係	81
第53図	満願寺遺跡出土瓦と永福寺跡出土瓦の比較	83
第54図	相模国出土の八事裏山窯産瓦	85
第55図	中世前期の想定地形と中世遺跡と寺社の分布図	88

第56図	満願寺遺跡と周辺遺跡の調査地点	88
第57図	満願寺東横穴群・飯盛塚の調査遺構位置図と第2号穴実測図	89
第58図	満願寺東横穴群第2号穴出土の中世土器・陶器	89

## 付 表

付表1	瓦観察表	92~98
付表2	瓦以外の遺物観察表	99・100

## 写真図版目次

図版1	1. 満願寺境内の調査状況（東から） 3. D-Eトレンチと礎石の配列（東側収蔵前より撮影）	2. B(右)・C(左)トレンチ（本堂前より撮影）
図版2	1. Dトレンチ内発見の礎石及び根石 3. 本堂下の根石（本-2号）	2. 本堂下の根石（本-1号）
図版3	1. 本堂下の根石（本-3号） 3. A・Dトレンチ交点付近検出の礎石	2. Eトレンチ及び拡張区発見礎石
図版4	1. Eトレンチ内の礎石(E T r - I - 3号) 3. Dトレンチ内の礎石(D T r - 1号) 5. Dトレンチ内の礎石(D T r - 3号)	2. Eトレンチ内の礎石(E T r - II - 1号) 4. Dトレンチ内の礎石(D T r - 2号) 6. Aトレンチ拡張部発見の礎石(D T r - 4号)
図版5	1. 瓦溜り I (A T r) 3. 軒平瓦出土状況 (A T r 瓦溜り I)	2. 鬼瓦出土状況 (A T r 瓦溜り I)
図版6	1. 本堂跡と東側建物址の中間雨落及び前庭の瓦敷 3. Aトレンチサブトレ内で発見された瓦敷	2. 本堂跡東側建物址の西南隅基壇と瓦堆積状況 4. 本堂跡東側建物址の西南隅基壇、前庭部に積まれた平瓦
図版7	軒丸瓦 (1)	
図版8	軒丸瓦 (2)	
図版9	軒丸瓦 (3)	
図版10	軒平瓦 (1)	
図版11	軒平瓦 (2)	
図版12	軒平瓦 (3)	
図版13	軒平瓦 (4) ・丸瓦 (1)	
図版14	丸瓦 (2)	
図版15	丸瓦 (3)	
図版16	丸瓦 (4)	
図版17	平瓦 (1)	
図版18	平瓦 (2)	
図版19	平瓦 (3)	
図版20	平瓦 (4)	
図版21	平瓦 (5)	
図版22	平瓦 (6) ・鬼瓦 (1)	
図版23	鬼瓦 (2)	
図版24	道具瓦	
図版25	かわらけ	
図版26	陶磁器・その他の遺物	

# 第 I 章 遺跡の位置と周辺環境

## 1. 遺跡の位置

横須賀市は神奈川県南東部、相模湾と東京湾に挟まれた三浦半島のほぼ中央部に位置し、市域の面積は約 100km<sup>2</sup>で三浦半島の過半を占めている。

岩戸満願寺遺跡（岩戸山満願寺境内、以下満願寺遺跡と略称）は横須賀市域東部の岩戸 1 丁目 4 番地ほかに所在している。近隣に鉄道路線は走っていないが、横浜横須賀道路の佐原インターから南南東 600 m ほどの位置にあり、東京湾内湾の馬堀海岸から約 3.9km、東京湾外湾の久里浜湾からも約 3.9km と現況ではやや内陸に入った場所に位置している（第 1 図（1））。満願寺遺跡の所在地は、久里浜湾に流下する現平作川支流の岩戸川により形成された谷戸の中ほどに位置していた。現在は大規模宅地造成により周囲の地形が大きく改変され、往時の地形はほとんど留めていないが、かつては東京湾岸の久里浜地域から内陸部の大矢部・衣笠地域を繋ぐ古道の中間地点でもあった場所である（第 1 図（2））。

## 2. 周辺の地形と地質

横須賀市が所在する三浦半島の地形・地質は、西北西－東南東方向に延長する 5 本の活断層によって大別される。海岸沿いの地域には更新世の海成段丘が数段分布し、完新世にたびたび起きた地震時の地盤隆起により隆起海蝕台もみられる。地質的には約 5000 万年前の遠洋性深海底堆積物よりなる嶺岡層群の堆積に始まり、より新しい葉山層群の下部にはブロック化した超塩基性岩（蛇紋岩類）が含まれている。両層群を作る堆積物の一部はフッ石や粘土鉱物に変化し、地滑りを起こしやすい土質となっている。三浦半島の大半を占める三浦層群・上総層群は深海性の泥流起源堆積物（凝灰岩・砂岩泥岩互層）である。これらより新期の地層は浅海～陸生層であり、主に箱根・富士火山起源の関東ローム層に覆われている。最も新しい地層は縄文時代以降に旧河谷などを埋積した沖積層と埋立地などの人工地盤である。

満願寺遺跡は三浦層群の砂岩凝灰岩互層を基盤とする標高 70 m 前後の丘陵地に囲まれた狭隘な谷戸の中（標高 20 ～ 22 m 前後）に位置しているが、周囲の丘陵地は大規模な宅地開発により造成され、現状ではその面影を留めていない。満願寺遺跡の立地する低地は北方に広がる現平作川流域の沖積層から繋がる岩戸川が形成した沖積地である。また、北側から続く岩戸川とその支流は満願寺近辺で大きく東西に分岐する不自然な形状を呈しているが（第 4 図（2））、これは満願寺遺跡の近辺を走ると考えられている衣笠断層系の活断層群の影響を受けたものと思われる。この活断層に沿って東側には久里浜湾近くまで続く小規模な地溝帯状地形が認められる。また、この西側延長部分に大矢部・衣笠地域があり、活断層に沿って葉山町まで連続する地溝帯状の低地が繋がっており、中・近世期にあっては幹線道路と言えないまでも陸上交通上は利便な地形であったかと思われる。なお、北方に広がる沖積層地帯の多くは縄文時代前期の海進最盛期には東京湾から続く海域となっていた場所で、その後は海退に伴い徐々に沖積が進行して陸地化していくものの、中世前期頃でも少なくとも佐原付近までは海域であったかと想定されるところである。これらの地域は江戸時代前期にはその大部分の地域が内川新田として耕地化するが、海域想定範囲の境界線付近には近代まで太郎崎・用崎・台崎などの出崎を思わせる小字名や船倉・船着き・汐場などの舟運や製塩に関わるかとも思われる小字名が残されていた。

### 【参考文献】

蟹江康光 1985 横須賀文化財シリーズ第 2 集『横須賀の地質』横須賀市教育委員会

蟹江康光 1988 「第 1 編第一章 三浦半島の生い立ち」『横須賀市史（上巻）』横須賀市

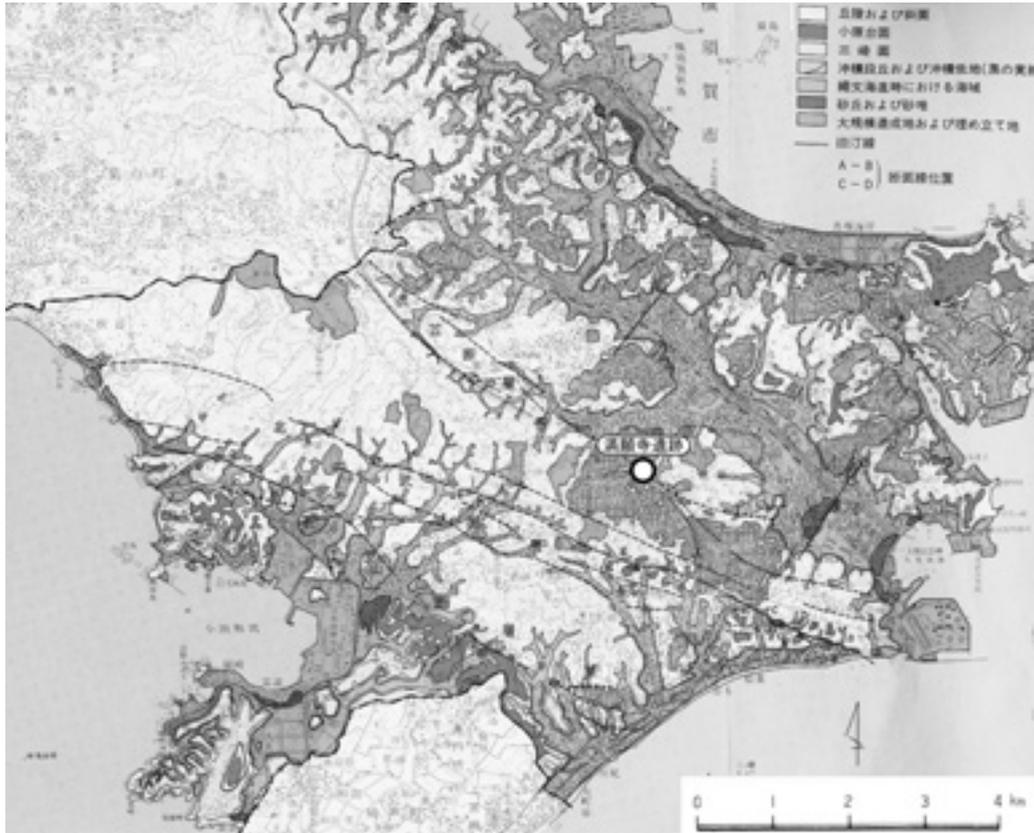


(1) 平成12年発行 1:50000地形図「横須賀」 (○ 満願寺遺跡)



(2) 昭和29年発行 1:50000地形図「横須賀」 (○ 満願寺遺跡)

第1図 岩戸山満願寺の位置 (1/50,000)



第2図 岩戸山満願寺周辺の地形 (蟹江 1985 より一部改変)



第3図 岩戸山満願寺周辺の地質 (蟹江 1989 より一部改変して掲載)

### 3. 歴史的環境

#### (1) 中世以前の周辺の遺跡

横須賀市の周知の遺跡は、旧石器時代から近代までの479遺跡である。旧石器時代の遺跡は始良丹沢パミス(AT)降下以前の時期から細石刃の時期までの遺跡が確認されているが、市域西部の相模湾岸沿地域に多く所在しており、陥し穴状土坑群を伴う遺跡(打木原遺跡や船久保遺跡ほか)も複数発見されている。縄文時代の遺跡は市域のほぼ全域にみられるが、市域東部の東京湾岸地域に夏島貝塚や茅山貝塚、吉井貝塚等の縄文時代早期から後期の貝塚遺跡が複数所在している。弥生時代では中期後半以降の遺跡が多く、東京湾岸沿いの上ノ台遺跡や相模湾岸沿いの高原遺跡などで大規模な集落跡が発見されている。古墳時代以降では前代から継続する遺跡も多いが、相模湾沿いの内原遺跡が比較的大規模な集落跡である。高塚古墳は中期以降からで、東京湾岸地域に比較的集中している。特に後期の琴弾埴輪が出土した蓼原古墳や前方後円墳を含む大塚古墳群、八幡神社古墳群など古久里浜湾岸(後述)に多く分布している。後期以降の横穴墓は市域全域の海浜部付近に数多く所在している。奈良・平安時代では市域のほぼ中央付近に初期寺院の宗元寺跡が所在し、近隣地に公郷窯跡や石井瓦窯想定地などの瓦窯群がある。宗元寺跡は相模湾岸の鎌倉方面から東京湾岸の「走水」付近まで繋がっていたと想定されている宝亀2年以前の「東海道駅路」の背後に位置しており、付近に御浦郡衙が所在したとも考えられている交通の要衝地でもあった。また相模湾岸の入江間際に築かれた乗越遺跡の乗越窯跡では相模国分僧寺の創建期瓦を生産すると共に、旧相模国内では唯一の須恵器生産も行われている。

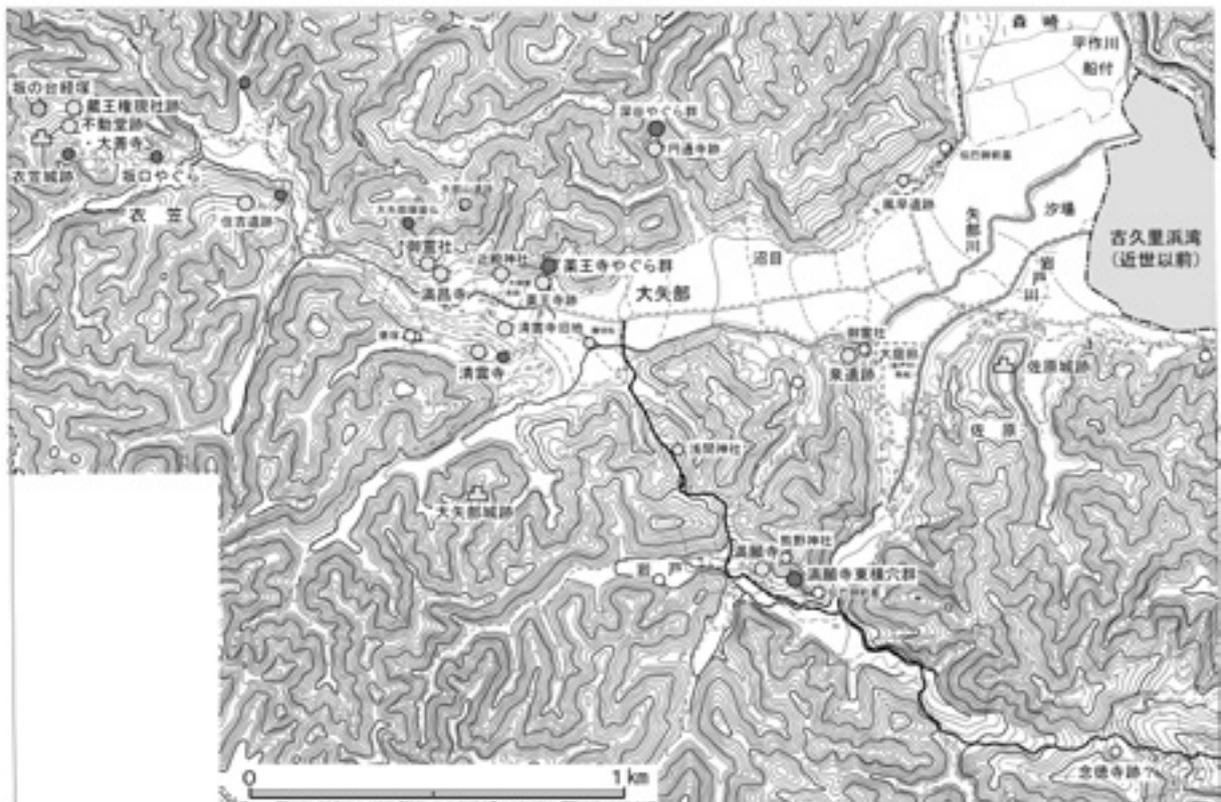
#### (2) 岩戸山満願寺周辺の遺跡(第4図)

満願寺遺跡が所在する岩戸川流域と北側に広がる矢部川流域には弥生時代以前の遺跡は極めて少なく、岩戸の谷戸入口付近の佐原地域に弥生時代中期後半以降の集落が営まれた佐原泉遺跡(350)や佐原城跡遺跡(90)、高部遺跡(351)があるものの、その他は大矢部地域北側丘陵上の矢部山遺跡(475)や衣笠地域の住吉遺跡(203)など小規模な遺跡のみである。一方、大矢部・衣笠地域北方の平作川流域には弥生時代中期以降の集落跡の米の台遺跡(52)や集落跡と方形周溝墓群が発見された蛭畑遺跡(51)ほか、比較的多数の遺跡が所在している。古墳時代以降では高塚古墳は確認されていないものの、古墳時代後期の横穴墓が平作川北側丘陵地に多数築かれているが、満願寺の近辺では隣接地に満願寺東横穴群(449)があるものの、矢部川流域はほぼ皆無である。同時期の集落跡としては佐原泉遺跡(350)があり、この遺跡は平安時代まで継続している。また平作川の北側には初期寺院の宗元寺跡が所在するほか、近辺の公郷瓦窯や石井瓦窯想定地なども所在しているが、大規模な集落跡は確認されていない。

しかし中世期以降になると岩戸には満願寺遺跡(204)、やぐらとして再利用された満願寺東横穴群(449)が、大矢部地域では風早遺跡(354)、円通寺跡(84)・薬王寺遺跡(85)・満昌寺遺跡(421)・清雲寺遺跡(348)等の寺院跡や経塚の可能性もある矢部山遺跡(475)・無名塚(202)、深谷やぐら群(86)・満昌寺やぐら群(344)・薬王寺やぐら群(87)・清雲寺やぐら群(346)等多数のやぐらが築かれている。また大矢部地域西側の衣笠地域では、丘陵上の衣笠城跡(89)内に坂の台経塚(83)・尾崎山経塚(443)・坂口やぐら(200)・旗立岩やぐら(444)等があり、低地部分には住吉遺跡(203)・飯盛塚(448)・亀割やぐら(199)・慈眼寺やぐら(447)等があり、中世初期以降急速に開発が行われていった様相が窺われる。また、大矢部地域を取り囲むように衣笠城跡(89)や大矢部城跡(93)・佐原城跡(91)・小矢部城跡(120)等の三浦一族にちなむ伝承を残す中世城郭遺跡が存在するが、これまでの発掘調査ではいずれも明確な城郭遺構は確認されていない。



(1) 周辺の遺跡(埋蔵文化財包蔵地)等分布図



(2) 旧地形と中世遺跡等の分布図 (原図は陸地測量部、明治39年測量、一万分の一「久里浜」)

第4図 周辺の遺跡分布図 (1/25,000)

## 第Ⅱ章 遺跡・調査の概要

### 1. 満願寺遺跡の発掘調査の経緯と経過

岩戸山満願寺（以下、満願寺とする）は寿永三年（1184）の佐原義連が一堂を建立し、平家滅亡後改たためて大伽藍を建立し満願寺と号したと伝わる寺院で現在は臨済宗建長寺派に属している。本格的な伽藍整備が完成したのは、貞応三年（1224）に義連子息の佐原家連が京都泉涌寺の開山俄禅房俊苧を招請し梵宇（寺院）の供養を実施した頃ではとの考えが一般的である。現本堂背後に斜面中腹、観音堂があり、その東側には佐原義連墓と伝わる凝灰岩製の五輪塔がある（第5図）。

満願寺遺跡は概ね往時の岩戸山満願寺の寺域とその関連地域と考えられる遺跡で、北側に丘陵を背負い岩戸川に南面した狭小な谷戸内の微高地に立地している。東側隣接地には中世期にも再利用された満願寺東横穴群や石塔類が置かれた性格不明の飯盛塚があり、それらの東側尾根の先端部に巴御前の墓とも伝わる風化の著しい凝灰岩製の大型五輪塔がある（第6図）。

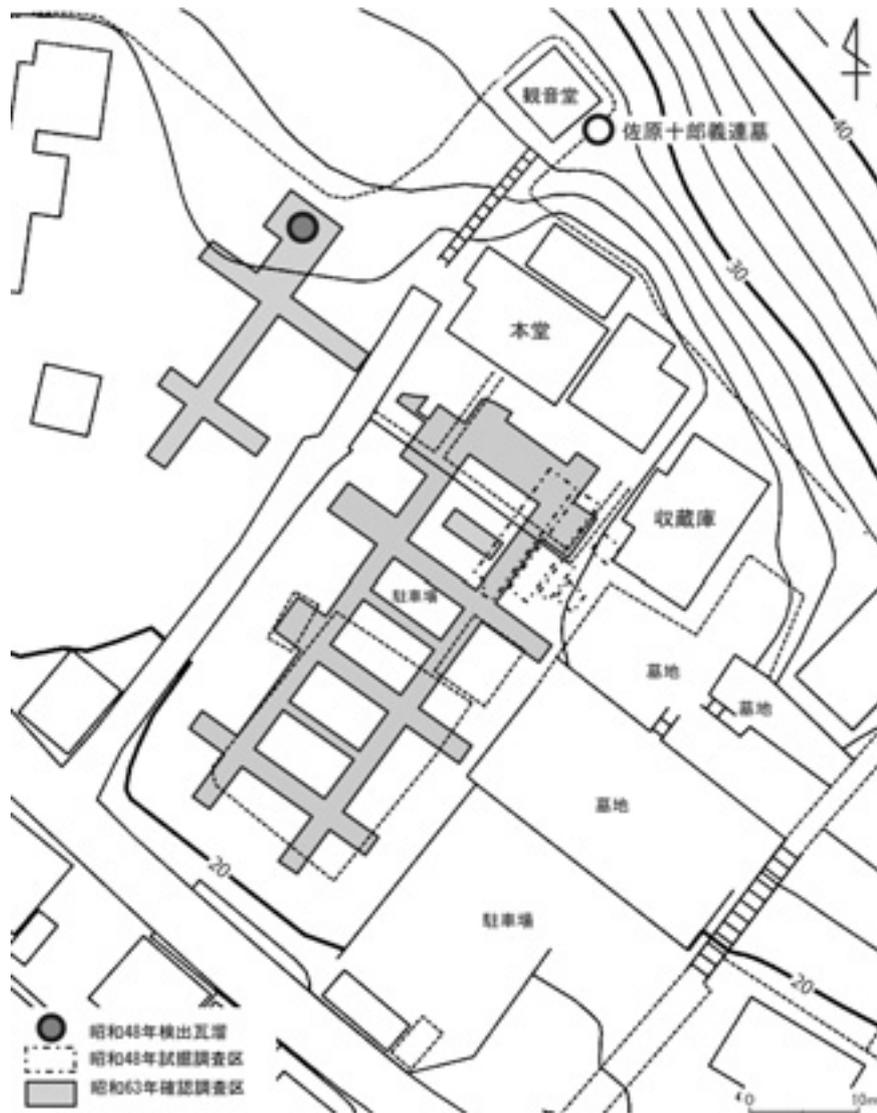
#### 第1次調査

満願寺には運慶一派に関わる仏師による鎌倉時代初期の作とされる「木像菩薩立像・木像地藏菩薩立像」（国指定重要文化財）が伝わり、現本堂背後の斜面中腹にある観音堂に祀られていたが、建物が老朽化し安全対策も万全でなかったため、昭和48年（1973）に重要文化財の収蔵庫建設工事が開始された。当初の建設予定地は現本堂西側の竹林であった場所であるが、基礎の掘削工事を開始したところ鬼瓦片を含む瓦溜が発見された。このため建設地予定地は現本堂の南東側に変更された。これを受けて横須賀市教育委員会は遺構・遺物の有無を確認するための試掘調査を行った（第6図）。

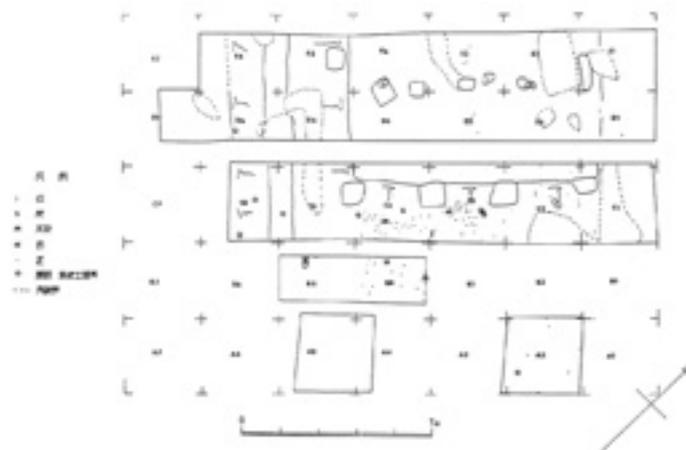
調査期間は昭和48年（1973）12月22日～27日で、調査面積は約70㎡である。調査の結果、複数の柱穴跡が確認され、多数の瓦片や土器・陶磁器類も出土したことから、収蔵庫の建設位置を当時は斜面地であった現収蔵庫の位置に変更することになった。この時の調査記録は公式には報告されておらず、詳細な内容は不明である。



第5図 満願寺遺跡と隣接遺跡



第6図 満願寺遺跡の現況地形図と調査地域図 (1/700)

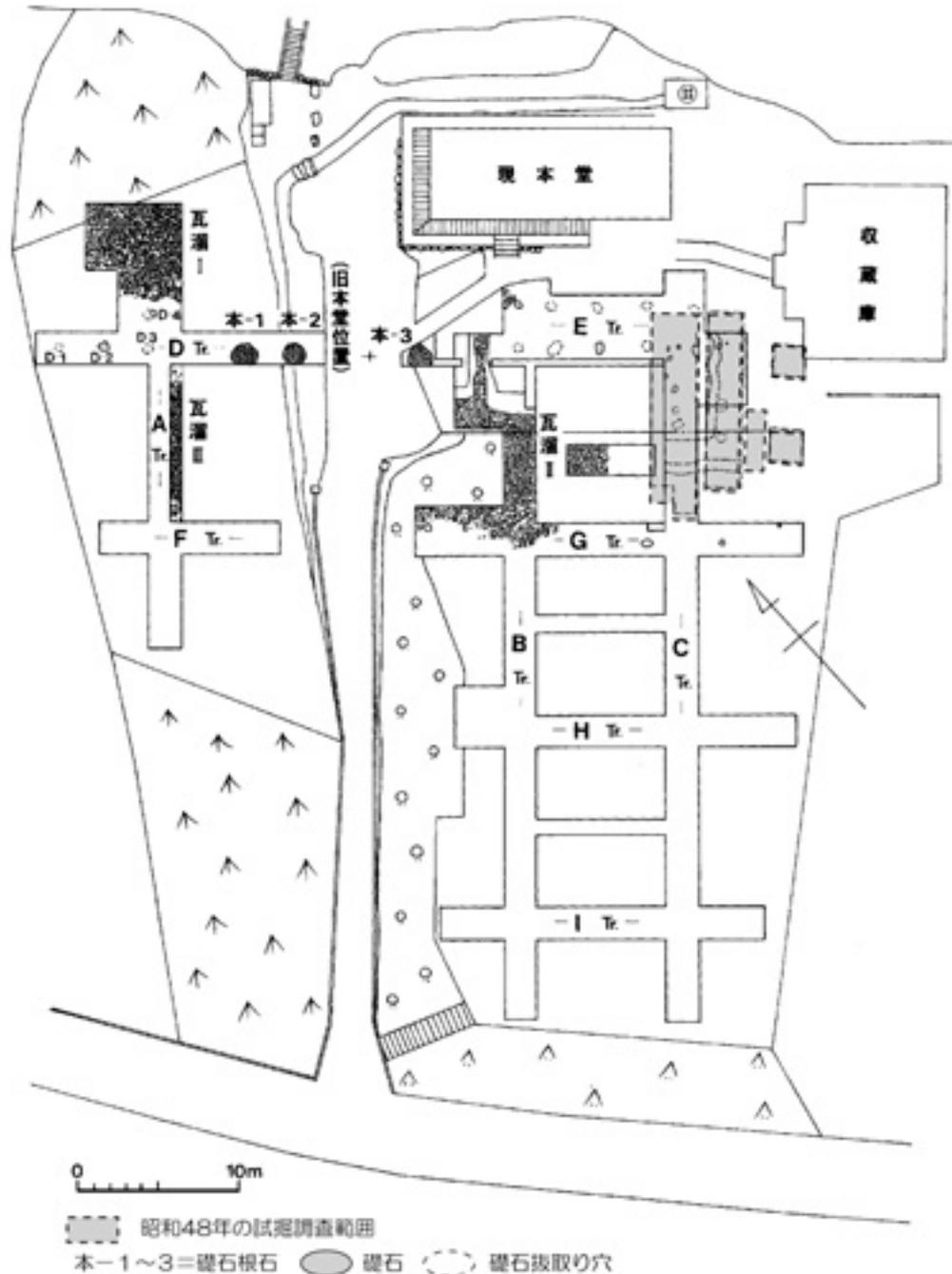


第7図 第1次調査試掘坑平面図 (1/200)

## 第2次調査

昭和63年(1988)には伽藍整備のための確認調査が横須賀市教育委員会により行われた。調査期間は昭和63年(1988)1月10日～3月24日で、調査面積は500㎡である。調査の結果、3棟以上の建物が想定できる礎石や礎石跡、柱穴跡、瓦溜などが確認され、少量の土器・陶磁器類・鉄釘・北宋銭などとともに極めて多量の中世前期の瓦片が出土した。この結果、少なくとも一棟は総瓦葺の仏堂が存在していたことが明らかとなった(第8図)。

その後、平成4年(1992)3月に満願寺境内遺構確認調査報告として『岩戸満願寺』(横須賀市教委1992)が刊行されたが、必ずしもトレンチや遺構・遺物の詳細が明確には示されておらず、課題が残る結果となった。



第8図 第1次・第2次調査試掘坑平面図(横須賀市教委1992第2図を一部改変)(1/450)

## 2. 満願寺遺跡の主な遺構等

満願寺遺跡のこれまでの調査では、3棟以上の建物が想定できる礎石や礎石跡、柱穴跡、瓦溜などが確認され、極めて多量の中世前期の瓦片が出土した。土器・陶磁器類、鉄釘・北宋銭なども出土したが、量はわずかであった（第7図・第8図）。

主な遺構は、瓦葺の仏堂であったと考えられる仮称「中心建物」とその東西で確認された仮称「附属建物」2棟、中心建物の前面に広がる瓦溜Ⅱ・Ⅲと西側附属建物北側の瓦溜Ⅰである。このほか第1次調査では東側附属建物に一部重複または近接した位置で時期や性格不明の柱穴痕が複数確認されており、Gトレンチからも4個の小型礎石が検出されているが、時期や構造・性格などは不明である。また、瓦溜Ⅱ付近より以南の地域では粘質土上に玉砂利を敷いた部分と、その上部に角礫を盛って搗き固め整地している部分、玉砂利を置かず角礫だけで搗き固めた部分等が確認され、時期を違えた数次にわたる地業が行われていたことが確認された。以下は各遺構の概要である。

### 中心建物（第9図・第10図）

旧参道西側のDトレンチの東端部から2か所、参道を挟んだ東側で1か所の計3か所の礎石抜き取り跡が確認された（本-1～3）、以下は省略。いずれも径1m前後の平面規模で、根石と考えられる礫が多数残されていた。現在も参道脇に径80cm前後の安山岩製大型礎石6個が残されているが、これらを設置するのに相応な規模・形状である（第10図）。礎石抜き取り跡の芯々間の距離は本1～本2が約3.1m、本2～本3間が約7.8mで、全体では約11mを計る。本2と本3間は未調査であるが未確認の礎石抜き取り跡が埋もれていると考えられる。これらは全体的な遺構配置からみて、中心的な建物の南端部の礎石痕列と考えられる。未調査のため建物の奥行は確認されていないが、おそらくは柱間3間四方の瓦葺仏堂であったかと思われる。礎石抜き取り跡本3の東約3mの位置で基壇の端が検出され、幅1.2mを計る瓦が敷かれた雨落ち溝と考えられる浅い溝が確認されているが、西側のDトレンチ部分では対応する遺構が確認されておらず、若干課題が残る結果となっている。

### 附属建物（第9図）

中心建物の東西で規模不明の建物2棟が確認されている。いずれも中心建物の礎石中心部から約6m間隔を置いて、礎石列の並びを揃える形で配置されており、中心建物の存在を前提として計画的に建てられたものと考えられる。なお現在のところ、これらの建物が瓦葺であったか否かは不明である。

附属建物Aは西側のDトレンチ内で確認された。小規模な礎石2個と礎石抜き取り跡2か所が確認され、梁行2間（柱間約2.7m前後）以上、桁行1間（柱間約2.3m）の建物が想定されているが、基壇の状況は不明である。報告書では、南北1間、東西に2間以上の細長い建物であった可能性が指摘されているが桁行は不明であり、独立した2間四方や3間四方などの小規模な仏堂等であった可能性も考えられよう。また報告書では、D-1・D-3の礎石抜き取り跡の根石中に中世瓦が混在することから、後世の中心建物再建時の付加建造物かとも指摘されているが、中心建物の建設から間をおきつつ順次建てられた建物とも考えても矛盾はない。この点は附属建物Bについても同様である。

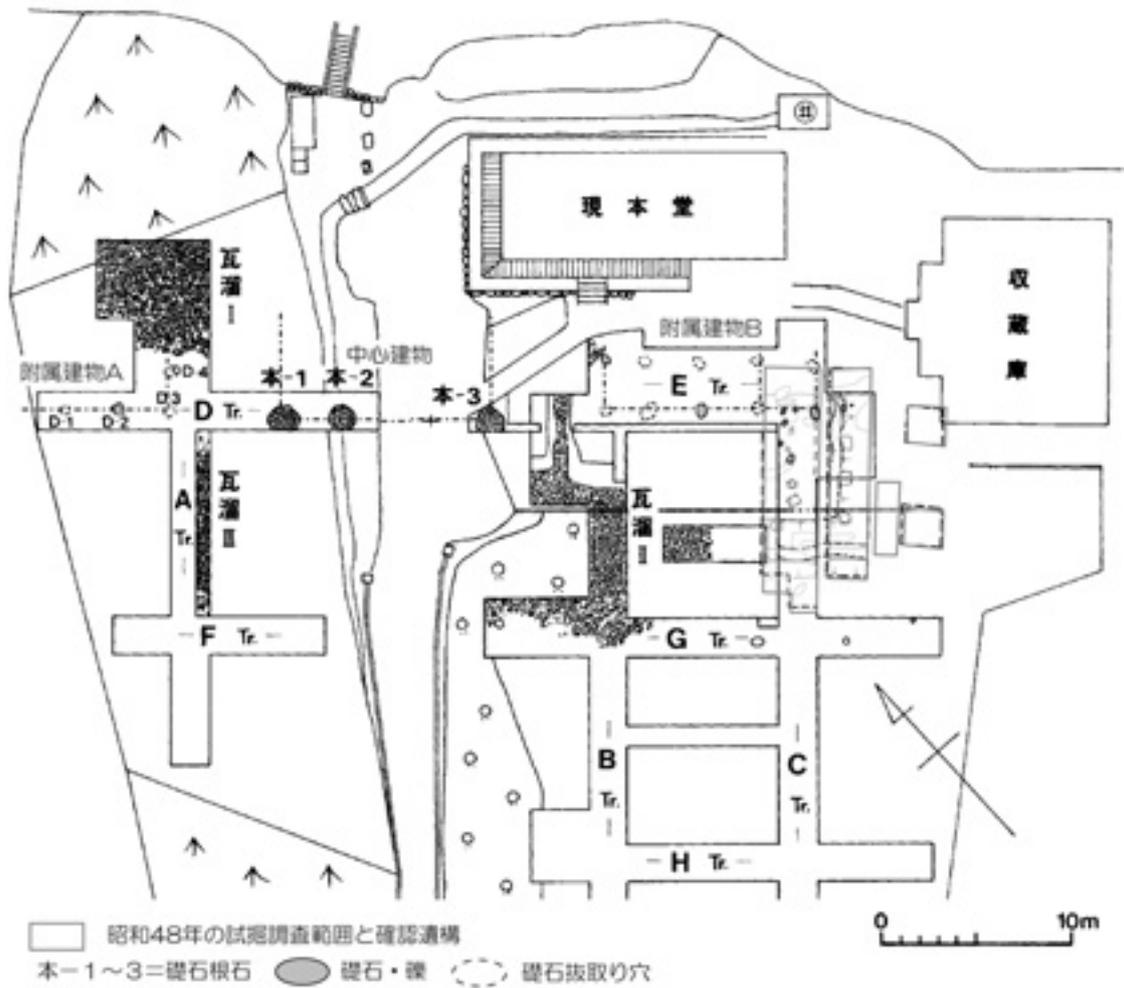
附属建物Bは東側のEトレンチ内で確認された。小規模な礎石3個と礎石抜き取り跡7か所が確認され、報告書では梁行4間（柱間約2.5～3m前後）、桁行1間以上（柱間約2.4m前後）の建物が想定されており、第1次調査で確認された溝状部分を雨落ち部分と仮定して、基壇の東西幅約14mと推定している。北側部分は未調査のため桁行が増える可能性もある点と、東端部の礎石と礎石抜き取り跡の並びが他とは若干ずれている点などから、附属建物A同様、3間四方等の小規模な仏堂等であった可能性も考えられよう。

### 瓦溜（第9図）

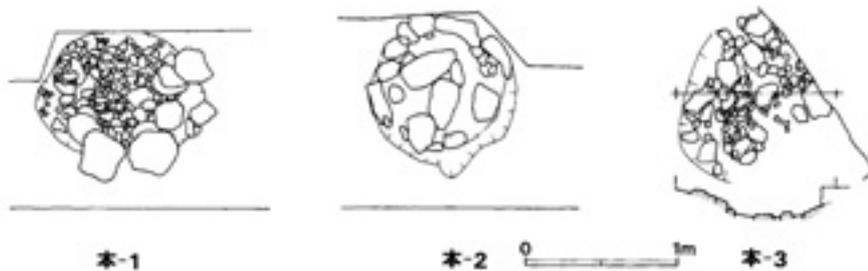
瓦溜が3か所確認されている。Aトレンチ北端部の瓦溜Ⅰ、同トレンチ中央の瓦溜Ⅲ、B・Gトレンチなどの中心建物前面の瓦溜Ⅱである。報告書では、瓦溜Ⅰは比較的小型の瓦片が乱雑に堆積した状態で、基本的に廃棄行為によるものとされているが、瓦溜ⅡとⅢは瓦片が敷き並べられたような状態で確認されていることから、単なる廃棄ではなく意図的な行為の結果かとしている。特に瓦溜ⅡとⅢは東西30m、南北10m前後に広がる一体のものである可能性があり、その場合中心建物の前面に所在した可能性のある池等を埋め、表面に瓦を敷き並べた結果ではとも指摘されている。しかしながら、瓦溜の下層は基本的に未調査であり、実態は不明である。また、瓦葺と想定される中心建物と同時期であったとすると、基壇端部に接する位置となり密着し過ぎた位置であるよう思われる。

【参考文献】

横須賀市教育委員会 1992『岩戸満願寺』横須賀市文化財調査報告書第25集



第9図 満願寺遺跡の遺構配置図（横須賀市教委 1992 第2図を一部改変）(1/400)



第10図 第2次調査旧本堂礎石跡等平面図（横須賀市教委 1992 第3図を一部改変）(1/50)

### 3. 遺物再整理、報告書作成の経緯と経過

本遺跡の遺物再整理は、2018年9月から2023年1月までの約4年間にわたり実施した。その前年の5月に、神奈川県内および周辺地域の有志が集まり、横須賀市自然・人文博物館において横須賀市内出土瓦の見学会を開催した。その折に、博物館収蔵庫に保管されているコンテナ100箱あまりの未整理・未報告の満願寺遺跡出土瓦の存在を知り、再整理を企画したのがきっかけであった。満願寺遺跡の確認調査については1992年に報告書が刊行されているが、掲載されている瓦図は11点のみで、未掲載の瓦の再整理、詳細調査によって、出土瓦全体の様相を明らかにする必要がある。また、満願寺遺跡では愛知県名古屋市の八事裏山窯群の軒平瓦が出土していることで注目されてきたが、それらと伴う在地産瓦の解明も求められている。

横須賀市自然・人文博物館からは、所蔵資料の再整理についての許可をいただき、また、作業場所の提供や機材等についても協力を得ることができた。2020年初めから流行した新型コロナの影響により、博物館に集まったの整理作業は1年半ほど中断を余儀なくされた。その間も各自が自宅でトレースを行うなど地道な作業を続けて今日に至っている。

再整理および報告書作成の経過、参加者は以下の通りである。

#### 実施日と内容

第1回 2018年9月23日(日)・24日(月)

勉強会「岩戸満願寺遺跡の発掘調査について」(中三川昇・稲村繁)

瓦の種別分類、図化資料の抽出

瓦の型式分類、胎土等による分類

瓦の拓本・実測

瓦の破片数・重量の計測

陶磁器・かわらけの実測

第2回調査 2018年12月22日(土)

瓦当瓦の同范検討、分類案決定

瓦拓本・実測

瓦破片数・重量の計測

陶磁器・かわらけの実測

満願寺および関連遺跡・寺社巡見 2018年12月23日(土)

岩戸山満願寺 近殿神社 葉王寺跡 満昌寺 衣笠城

第3回調査 2019年5月3日(金)・4日(土)

瓦拓本・実測

勉強会「宝治合戦後の三浦一族の展開と拠点形成」(渡邊浩貴)

第4回調査 2019年11月3日(日)・4日(月)

瓦拓本・実測

瓦法量、成整形方法等観察表作成

神奈川県立博物館写真撮影対応 2021年3月17日(水)

第5回調査 2021年5月3日(月)・4日(火)

瓦トレース図・拓本の確認、修正

第6回調査 2022年9月19日(月)

報告書作成打合せ

第7回調査 2022年12月17日(土)・18日(日)

瓦トレース図・拓本の確認、修正

瓦観察表の確認、入力、写真撮影

第8回調査 2023年1月15日(日)

報告書作成打合せ

瓦の分類・観察表の確認

写真撮影

第9回調査 2023年1月26日(木)

写真撮影

再整理・巡見参加者 (五十音順)

東 真江	足立佳代	池谷初恵	石川安司
稲村 繁	岩楯英子	宇都洋平	大澤伸啓
押木弘己	川本真由美	小林康幸	曾根博明
高橋 香	富永樹之	中三川 昇	原 廣志
比毛君男	深澤靖幸	松吉大樹	松吉里永子
水口由紀子	矢内智一郎	渡邊浩貴	



調査風景 (1)



瓦収納状況



調査風景 (2)

## 第三章 出土遺物

### 1. 瓦

#### (1) 分類基準

満願寺遺跡出土瓦の整理を実施するにあたり、瓦の種類ごとに分類基準を設けた。なお瓦の型式名としたMA、MN、MM、MHはそれぞれ「まんがんじあぶみ」、「まんがんじのき」、「まんがんじまる」、「まんがんじひら」をアルファベットで表記した頭文字の略号である。

#### 軒丸瓦（鑑瓦）

軒丸瓦は瓦当文様により次の3型式に分類を行った。MA Iは三巴文を瓦当文様とする軒丸瓦、MA IIは蓮華文を瓦当文様とする軒丸瓦である。さらにMA Iについては外区に巡る珠文の間隔の違いにより01、02の2型式に細分した。

MA I 01……外区の珠文の間隔が2.0～2.3cmと広く、巴文の断面形が肉厚に盛り上がっている軒丸瓦（第11図・第12図1～11）

MA I 02……外区の珠文の間隔が1.2～1.5cmと狭く、巴文の断面形が平坦な軒丸瓦（第12図12～15）

MA II ……八葉複弁の蓮華文軒丸瓦で、表面に自然釉がかかる軒丸瓦（第12図16）。図に掲載した資料は瓦当文様の中心部分にある蓮華文を欠損している。愛知県名古屋市の八事裏山窯産を含む尾張産の可能性の高い瓦で<sup>(1)</sup>、軒平瓦MN IIIとセットになる軒丸瓦。参考として第51図に八事裏山窯出土軒丸瓦の拓本を掲載した。

#### 軒平瓦（宇瓦）

軒平瓦は瓦当文様により次の5型式に分類を行った。これらの瓦当文様はすべて唐草文である。さらにMN Iは唐草の文様の違いにより01、02、03の3型式に細分した。

MN I 01……唐草文が細く、外区の珠文は2個+3個で、脇区の珠文は4個の軒平瓦（第14・15図30～37）発掘調査報告書〔横須賀市教育委員会1992〕に拓本及び写真が掲載されているほぼ完形に近い軒平瓦（9ページ第4図7、P L 17）はこれに該当する。

MN I 02……唐草文が細く、外区の珠文は密に連続し、脇区の珠文は5個の軒平瓦（第16図38～40）

MN I 03……唐草文の表現と外区の珠文の巡り方は不明だが、脇区に4個の珠文がある軒平瓦（第16図41）

MN II ……唐草文が太く、外区に珠文がない軒平瓦（第16図42・43）

MN III ……唐草文が太く、外区に珠文がない、自然釉のかかった軒平瓦（第16・17図44～47）。

八事裏山窯産を含む尾張産の可能性の高い瓦で、軒丸瓦MA IIとセットになる。参考として第51図に八事裏山窯出土軒平瓦の拓本を掲載した。

#### 丸瓦

丸瓦は胎土や焼成状態により3型式に分類を行った。

MMA ……混入物がほとんどない精良な粘土を胎土とし、焼成が硬質な丸瓦（第18・19図59～66）。MMAもMMBも凸面には縦方向に縄目の叩きを確認できるが、縄目のなで消し方は一律ではない。

MMB ……混入物が多い粗悪な粘土を胎土とし、焼成がややあまい丸瓦（第19～27図67～83）

量的には出土した丸瓦の大半を占めている。焼成状態が「くすべた」ような状態（二次的な火を受けた可能性）のものや胎土が地元横須賀市の乗越瓦窯で生産された古代瓦に似たものも含まれている。

MMC……表面に自然釉がかかる瓦で、八事裏山窯産を含む尾張産の可能性の高い瓦（第27・28図84～87）。軒丸瓦MMAⅡ、軒平瓦MNⅢ、平瓦MHCと同質の瓦である。

## 平瓦

平瓦は凸面の叩き目や焼成状態により次の6型式に分類した。MHAについては01、02の2型式に、MHBについては01、02、03の3型式にそれぞれ細分した。

MHA 01……混入物がほとんどない精良な粘土を胎土とし、焼成が硬質な平瓦（第28図88～90）。肉眼観察では埼玉県北部の児玉地域の瓦に極めて似た粘土を胎土としている。凸面には縦方向に縄目の叩き目を確認できる。

MHA 02……胎土がMHA 01と同質で、凸面に非常に細かい単位の格子目の叩き目を確認される平瓦（第29図91）。出土した点数はごくわずかである。

MHB 01……MHAよりはやや粗悪な胎土で、凸面の叩き目がMHB 02・03以外の平瓦（第29図92・93）。凸面には、縦方向の縄目叩き目を確認できる。

MHB 02……粗悪な胎土で、凸面に比較的大きな単位の格子目の叩き目（縦横比1：3程度）を確認される平瓦（第29～36図94～109）。量的には出土した平瓦の大半を占めている。

MHB 03……粗悪な胎土で、凸面にある格子目の叩き目がMHB 02より膨らみのある格子目（縦横比2：3程度）となっている平瓦（第37～39図110～117）。格子目の叩き目をなで消しているものと、なで消していないものの両方が存在する。

MHC……表面に自然釉がかかる平瓦で、八事裏山窯産を含む尾張産の可能性の高い瓦（第40図118～122）。軒丸瓦MAⅡ、軒平瓦MNⅢ、丸瓦MMCと同質の瓦である。

これら以外の鬼瓦、道具瓦等については出土点数が少なく、また小さな破片が多いため分類基準を設けていない。

## （2）軒丸瓦（第11図～第14図1～29）

1～11はMAⅠ01の軒丸瓦である。1は瓦当部に接合された丸瓦部分が大きく遺存しており、全体形を知ることができる。MAⅠ01は巴文の断面形が肉厚に盛り上がっている。色調は若干赤みがかかった灰白色で、焼成は硬質、堅緻である。

12～15はMAⅠ02の軒丸瓦である。13は瓦当面の全体がわかる資料で、左巻の三巴文の周囲に20個の珠文が巡っている。MAⅠ02は巴文の断面形が平坦である。このような断面形の比較からは、MAⅠ02よりもMAⅠ01の方が年代的にやや古そうな印象を呈している。色調はMAⅠ01よりも赤みが強い赤橙色で、焼成もMAⅠ01に比べると低い温度で焼かれたのだろうか、やや軟質な印象を受ける。

16はMAⅡの軒丸瓦で瓦当面の中央部分（内区）の蓮華文が欠損しているものの、外区に巡る珠文帯のうち3個の珠文が遺存している。全体に透明な自然釉がかかっており、こうした特徴から八事裏山窯を含む尾張産の瓦である可能性が高い。

## （3）軒平瓦（第14図～第18図30～58）

30～37はMNⅠ01の軒平瓦である。30、31はいずれも瓦当部左端部分の破片である。32、34はいずれも瓦当部右端部分の破片で瓦当文様の中心部が欠損しているが、過去に出土した資料を参考に

すると中心部には花卉の先端が丸みを帯びた4弁の瑞花文があるものと想定される。唐草文を界線で囲み、外区の珠文帯のうち上側と下側では2個を1単位とする珠文と3個を1単位とする珠文を間隔をあけながら交互に連続して並べている。左右両側では縦に4個の珠文をやや間隔をあけて並べている。瓦当部と平瓦の接合技法は顎貼り付け技法である。色調は灰白色で、焼成は硬質、堅緻である。

38～40はMN I 02の軒平瓦である。38、39はいずれも瓦当部左端部分の破片で瓦当文様の中心部が欠損しているが、基本的にはMN I 01の軒平瓦と同様に中心部には4弁の瑞花文があると考えられる。MN I 01との違いは唐草文がやや細い線で表現されていることと、外区上側及び下側の珠文が密に連続して並び、左右両側に縦に並ぶ珠文が5個になっている点である。瓦当部と平瓦の接合技法は顎貼り付け技法で、技法としてはMN I 01と共通である。色調は灰白色で、焼成は硬質、堅緻でMN I 01と共通である。

41はMN I 03の軒平瓦である。瓦当部左端部分の小破片であるが、外区に珠文が縦方向に4個並んだ状態が確認できることからMN I 02とは異なる個体であることがわかる。

42、43はMN IIの軒平瓦である。MN I 01やMN I 02と比べるとやや小型の軒平瓦で、蕨手状に反転する唐草文を界線で囲み、珠文をとまなわない瓦当文様である。色調は赤橙色で、焼成はやや甘く「くすべ」たような状態である。

44～47はMN IIIの軒平瓦である。44は太い唐草文を瓦当文様とする軒平瓦の右側部分の破片である。やや緑色を帯びた透明な自然釉がかかっている。焼成は非常に硬質で堅緻である。八事裏山窯を含む尾張産の可能性の高い瓦であり、軒丸瓦MA IIと組み合わせをなす軒平瓦である。45は小さな破片であるが瓦当文様の中心にある4弁の瑞花の花弁部分の破片である。花弁先端の尖った部分の破片である。MN IIIの瓦当部と平瓦の接合技法は顎貼り付け技法である。瓦当部の裏側には補強用の粘土を多くあてがっており、その断面形は古代瓦によく見られるよう曲線顎の状態を呈している。

#### (4) 丸瓦 (第18図～第28図 59～87)

59～66はMMAの丸瓦である。精良な胎土で、肉眼観察では、埼玉県北部の児玉地域の瓦に極めて似た粘土を胎土としている。凸面には縦方向の縄目叩きが残り、なで消しが加えられている。

67～83はMMBの丸瓦である。胎土は粗悪で、三浦半島産と思しき例も多いが、焼成の程度によって判然としない例もある。凸面調整は、縦方向の縄目叩き後のなで消しが基本である。

84～87はMMCの丸瓦で、胎土・焼成の特徴から、八事裏山窯を含む尾張産と目される。表面に自然釉がかかり、焼成は硬質である。

なお、鎌倉市二階堂永福寺(NY)の丸瓦(男瓦)との比較で述べると、MMAがNY男瓦A類(I期)、MMBがNY男瓦B類(II期)およびD類(III期)、MMCがNY男瓦C類(I期)に概ね相応するものとみられる。永福寺I期は創建期を含む1192～1231年頃、同II期は1235～1280年頃、同III期が1287～1315年頃に年代比定されている。

#### (5) 平瓦 (第28図～第40図 88～123)

88～90はMHA 01の平瓦である。精良な胎土で、肉眼観察では、埼玉県北部の児玉地域の瓦に極めて似た粘土を胎土としている。凸面には縦方向の縄目叩きを加えられている。

91はMHA 02の平瓦である。MHA 01と同質の胎土で、埼玉県北部の児玉地域の瓦に極めて似た粘土を胎土としている。凸面に非常に細かい単位の格子目の叩きが施されている。

92・93はMHB 01の平瓦である。MHAよりもやや粗悪な胎土であることから、MHBに含めた。ともに凸面に縦方向の縄目叩きが施されている。

94～109はMH B 02の平瓦である。粗悪な胎土で、凸面に比較的大きな単位の格子目の叩き（縦横比1：3程度）が施されている。量的に出土した平瓦の大半を占め、残存の良好な資料も多い。

110～117はMH B 03の平瓦である。粗悪な胎土で、凸面の格子目叩きがMH B 02より膨らみがある（縦横比2：3程度）。110・112・114のように、凸面の格子目叩きが見えなくなるまでで消されている例も散見される。

118～122はMH Cの平瓦である。胎土・焼成の特徴から、八事裏山窯を含む尾張産と目される。表面に自然釉がかかり、焼成は硬質である。

なお、鎌倉市二階堂永福寺（NY）の平瓦（女瓦）との比較で述べると、MHA 01がNY女瓦A類（I期）、MHA 02がNY女瓦B類（I期）、MH CがNY女瓦F類（I期）に概ね相応すると思われる。なおMH B 02・03はNY女瓦D類（II期）と近似するものの、凸面叩きの格子目形状に差がみられる。詳細な比較検討は、今後の課題であろう。永福寺I～III期の年代観については、前項（4）を参照されたい。

#### （6）鬼瓦（第41図124～129）

124～129は鬼瓦である。124の鬼瓦は、紋様は、鬼面で珠文帯と眼の部分の上半部が残存する。範づくりではなく手づくりによる成形で、珠文帯は沈線による区画を施した後、円筒状の工具を用いて押印している。鬼瓦の厚みは5.5cmである。珠文の直径はおおよそ3.4cmで9個残存している。眼の表現も円筒状の工具による押印で表現され、眼の上半は眉毛状に粘土凸帯を貼り付け、ナデにより成形している。その盛り上がった部分に沈線がむかって左眉部分に11条、右眉部分にも11条描かれている。固定装置は背面に把手が付くタイプで、若干背面がくぼみ、把手状に粘土板が残る。胎土は精良で白色粒子を含み、やや白色がかかったあまい焼成である。125は、珠文帯のみ残存するが他は剥離している為、文様は不明である。外縁端が傾斜し、範による成形の可能性が高い。剥離部分に、未貫通の釘穴状のくぼみがみられ、固定装置は釘穴の可能性が高い。厚みは2.6cmで、124と比較すると薄手である。126は右脚部分である。むかって左側は抉り部分に該当し、ヘラ削り調整である。文様は、珠文帯のみが残り、帯の区画は124同様、沈線による区画で、円筒状の押印で珠文帯を表現している。表面の調整はナデ調整で、部分的に糸切痕跡が残る。厚みは4.1cmである。127は珠文帯部分が残存する資料である。区画された沈線で、円筒状の工具による押印で珠文を表現する。裏面に凸状の突起があり、ナデによる調整である。胎土は、やや粗く、暗褐色の焼成である。128は円錐形を呈するもので、裏面は剥離している。表面は指頭による調整が施されており、成形した痕跡が顕著である。鬼瓦のほぼの部分の可能性が高い。129は薄い粘土板に棒状の粘土を貼り付け成形した資料である。根元部分から先端にかけてナデによる調整を施す。鬼面の牙部分に相当する可能性が高い。胎土は精緻で、焼成は須恵質である。

#### （7）道具瓦（第42図130～133）

130～133は熨斗瓦である。130は、凸面調整が斜格子でMH B 02型式に相当する。左側面はヘラ削りによる調整で、右側面は破碎した後、破面を磨った痕跡があることから割熨斗である。凹面はナデ調整であるが、凸面調整の叩きが薄く転写されて残存する。両端側を側面にそってヘラ削り調整する。131は、凸面側はナデ調整であるが、凹面側は糸切痕跡が明瞭である。側面、端面も糸切痕跡が明瞭に残る。132は凹凸面ともにナデ調整である。側面はヘラ削り調整である。133は凹凸面ともにナデ調整で、穿孔がみられる。端面は離れ砂を使用しているのか砂粒が付着する。胎土はやや粗い。

## (8) 瓦の出土量

再整理にあたり、収蔵されていた満願寺遺跡出土の瓦全点について点数・重量の計測を行った。その結果は下表の通りで、総破片数 13,813 点、総重量 2491.23Kg であった。胎土別にみると、いずれの種類の瓦についても、粗とした胎土 B の瓦が最も多く、点数で 97%、重量で 98% を占める。トレンチ調査による部分的な発掘調査であり、さらに下層まで調査が及んでいないため、満願寺の瓦総体を示す数値ではないが、乗越瓦窯の瓦に近似する在地産のものが主体であることは確実である。

なお、胎土 B の完形丸瓦の重量は平均 2.9Kg であり、平瓦は 4.7Kg である。単純計算ではあるが、発掘調査によって出土した胎土 B の丸瓦は 157 点、平瓦は 423 点となる。調査範囲が非常に限定的であったこと、また、瓦溜や礎石の状況を考慮すれば、総瓦葺きの建物を想定可能な結果となった。

### 【註】

(1) 満願寺遺跡出土の瓦のうち、掲載した No.16・86・118・119 について蛍光 X 線分析が行われ、化学組成データが公表されている [梶原・竹原 2013]。分析の結果、満願寺遺跡の瓦は八事裏山窯と化学組成上非常によく似た胎土であることが示されている。

梶原義実・竹原弘展 2013 「蛍光線分析からみた猿投窯東山地区における中世瓦の生産と供給」『日本文化財科学会第 30 回大会発表要旨集』日本文化財科学会第 30 回大会実行委員会

岩戸満願寺遺跡出土瓦集計表

点数は破片数、接合した破片は 1 点と数えた

種別	胎土分類 文様・調整分類	A (精良)		B (粗)						C (陶器質)		不明		計	
		点数	重量	B		三浦		くすべ (三浦含)		点数	重量	点数	重量	点数	
				点数	重量	点数	重量	点数	重量						
軒丸瓦	MA I 01					10	5.00							10	29
	MA I 02					4	1.54	1	1.50					5	
	MA II									1	0.08			1	
	不明					13	3.46							13	
軒平瓦	MN I 01					6	2.67	2	0.16					8	29
	MN I 02					3	1.82							3	
	MN I 03					1	0.06							1	
	MN II							2	0.50					2	
	MN III									4	1.60			4	
	不明					3	0.75	8	1.39					11	
	(報告書不掲載)														
丸瓦		8	0.50	1	1.65	12	17.86	4	3.69	4	0.49			29	2665
	(報告書不掲載)	9	1.10	2344	406.03			283	26.50					2636	
平瓦	01 縄叩き	3	2.50	2	0.38									5	11080
	02 格子目叩き	1	0.15			13	27.35	3	1.67					17	
	03 格子目叩き			1	0.60	5	6.60	2	1.42					8	
	その他					1	0.90			5	1.08			6	
	(報告書不掲載)	149	26.60	8143	1390.95	824	189.90	1924	351.00			4	0.20	11044	
鬼瓦					3	1.58	1	0.32			2	6.03		6	
道具瓦			1	0.10	2	3.15			1	0.40				4	
計		171	30.95	10493	1802.76	898	259.49	2231	388.55	14	3.25	6	6.23	点数 13813 点	
						粗計	13622	2450.80						重量 2491.23Kg	

## 2. 瓦以外の遺物

第 43 図には、瓦以外の遺物 42 点を掲げた。おもに報告書〔横須賀市教育委員会 1992〕の掲載資料を再実測したものだが、鉄釘など経年劣化が著しい遺物については実測が困難であったため、報告書から転載した。

### (1) かわらけ (第 43 図 1～24・42)

1～24 はロクロ成形で、底部外面に回転糸切り痕、内面には横方向のナデが施される。計測値から小皿 (1～13)・中皿 (14～16)・大皿 (17～24) に分類した。

胎土は鎌倉の出土例と近似しており、白色針状物質 (海綿骨芯) や雲母粒、泥岩粒などを含むものが基本となる。付表 2 で A としたものは粉質、B としたものは粗土で、筆者が鎌倉で用いている胎土分類に準じた。ちなみに今回の資料にはなかったが、筆者分類の C は水簸された精良土で「薄手丸深」タイプに、D は B・C の中間的な精良土で鎌倉初期の手づくねかわらけに、E は砂質感が強く鎌倉初期のロクロかわらけに使用される傾向がある。A は南北朝～室町・戦国期の資料に多く、B は鎌倉中期～南北朝期を通じてロクロかわらけの胎土として主体となる。

小片からの復元資料が多いため、計測値・器形については不確定要素を残すが、体部が内湾気味に立ち上がる資料が主体となる。これら個々の年代観を示すことは難しいが、概ね鎌倉時代後半～南北朝期の所産であろう。器壁が厚く外反器形の 8～10・14 など新しく、室町期～近世に位置付けられよう。8・9 は「近世墓」からの出土とされる。

42 の手づくねかわらけは本書作成作業の最終盤で所在を確認した資料であるため、挿図の最後尾に配した。口縁部のナデは強く、端部もナデによって面取り状に整形されている。胎土は砂粒を多く含み、他のロクロかわらけよりは精良である。焼成は良好で、硬質である。

### (2) 陶磁器 (第 43 図 25～34)

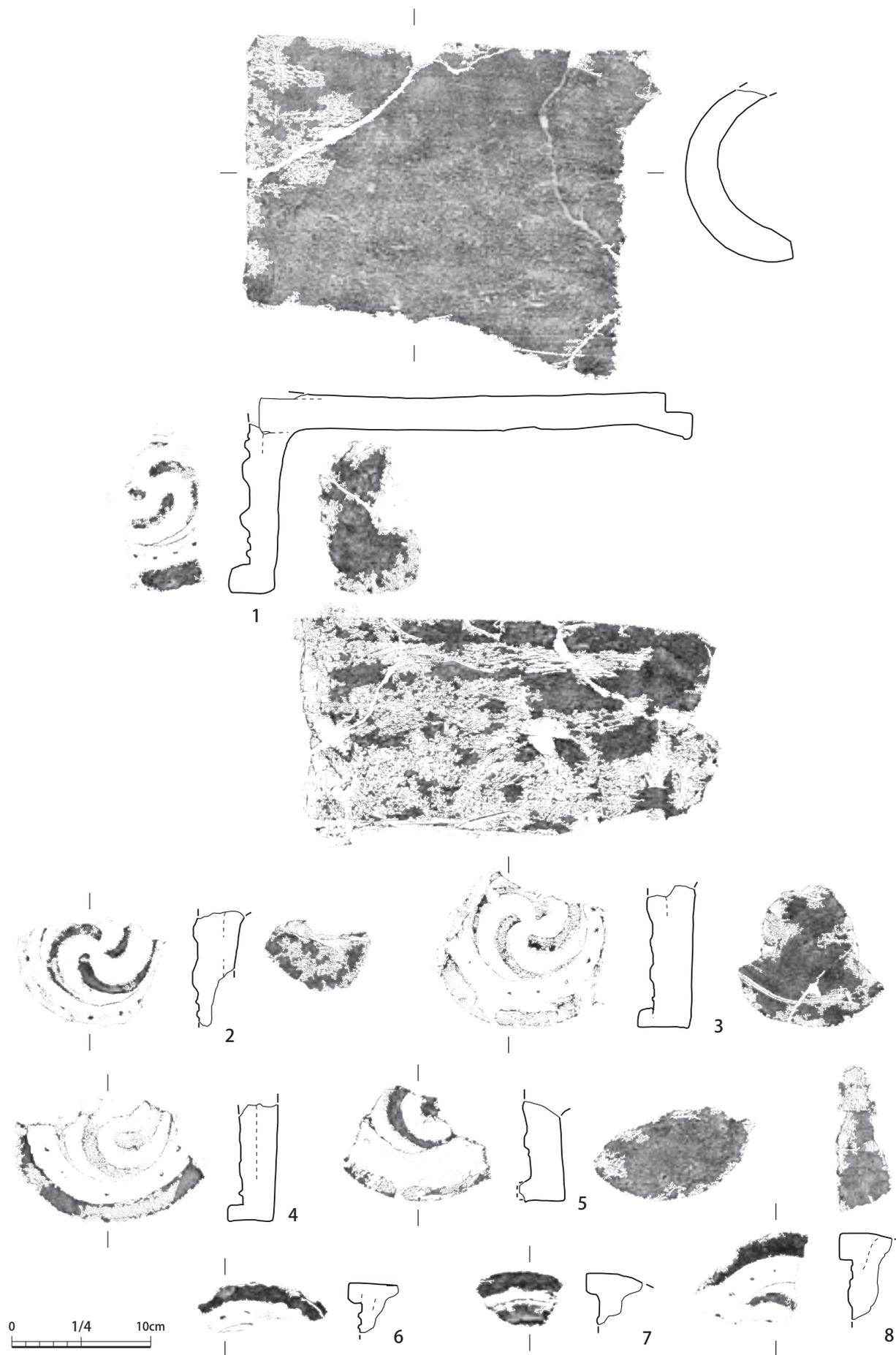
陶磁器も細片ばかりで、具体的な器形を復元できなかった例も多い。常滑窯産の片口鉢Ⅱ類 (29) は 9 型式、甕 (30) は 7 型式に当たると見られ、ともに 14 世紀代の生産地年代が想定される。瀬戸窯産の灰釉平碗 (27) は鉢の可能性もあり、やはり 14 世紀以降の所産と見るべきだろう。陶磁器類で唯一、渥美窯産の短頸壺 (33) は鎌倉時代の前半、あるいはそれ以前まで遡り得る。

### (3) その他 (第 43 図 35～41)

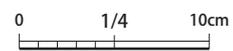
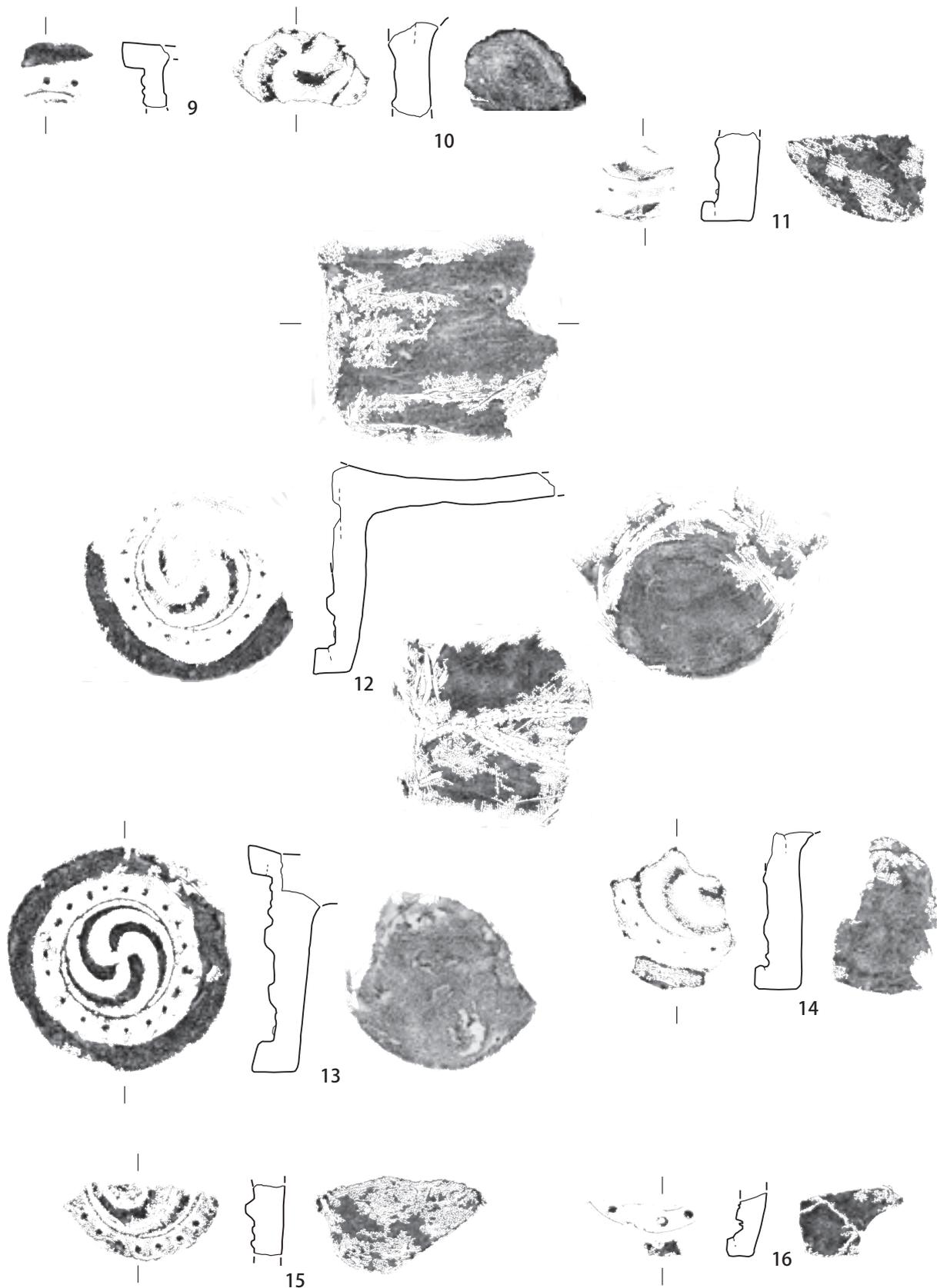
瓦質土器の香炉? (35) は南北朝期以降、土製焙烙 (36) は近世以降の所産か。管状土錘 (37・38) は、所産年代による特徴を見出し難い。39 は銅製品で飾り金具か。40 は北宋銭で元豊通寶。1078 年初鑄。41 は古代の須恵器甕で、胴部小片を転用した研磨具。割れ口の一边が研磨により摩耗している。鎌倉では常滑甕片を研磨具として再利用した資料が至る所で出土しており、「すり常滑」と呼称している。当資料も、研磨具としての使用は中世以降に下る可能性が高いだろう。

### (4) 鉄釘 (第 44 図)

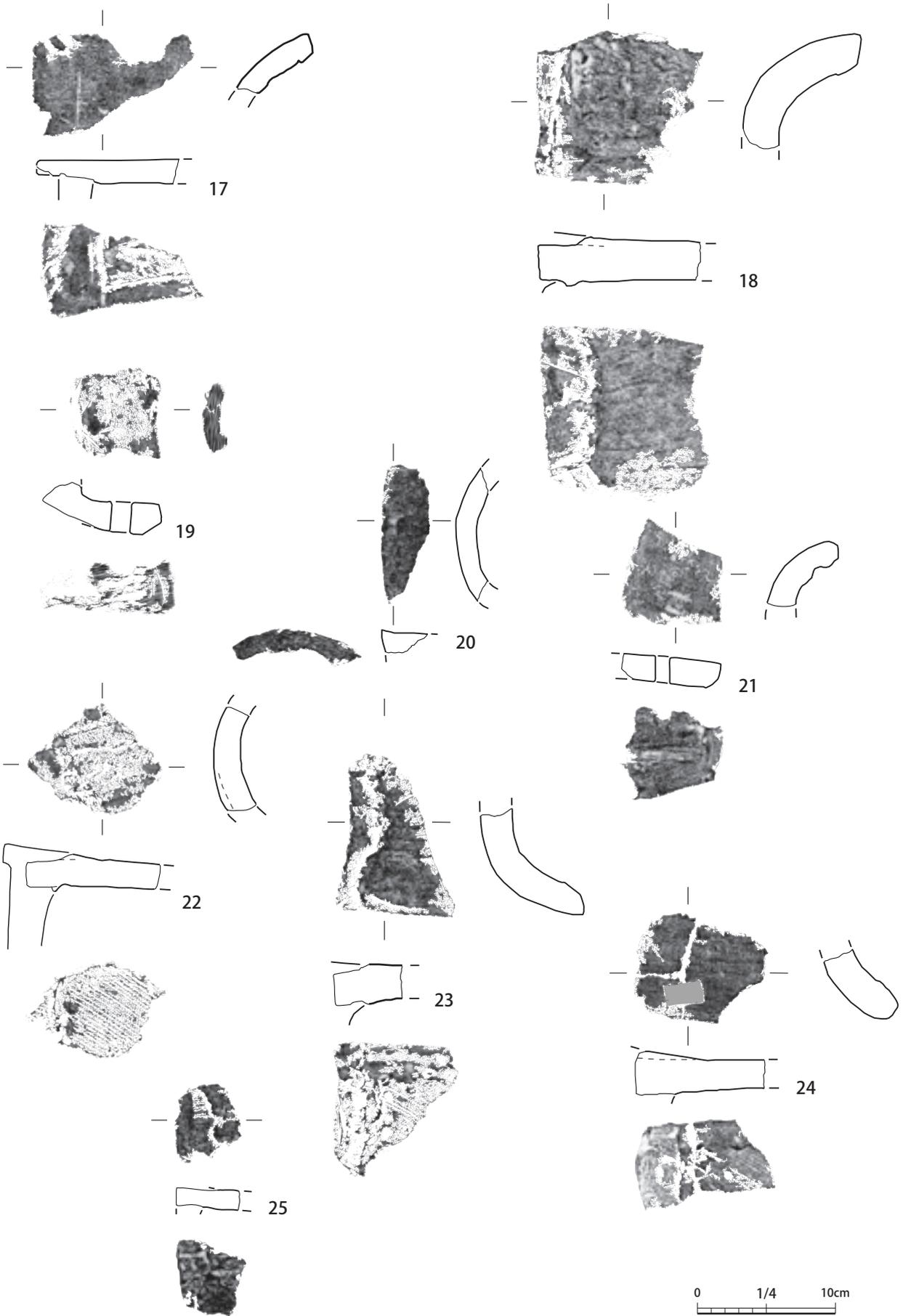
報告書 (横須賀市教育委員会 1992) によれば、鉄釘は 200 本近く出土し、すべて角釘で丸釘は含まれていないとされている。A 類: 長さ 10cm 以上・径 1.5cm、B 類: 長さ 10cm・径 1.0cm、C 類: 長さ 5～7cm・径 0.5～1.0cm、D 類: 長さ 2cm・径 0.5cm に分類され、C 類が過半数を占める。



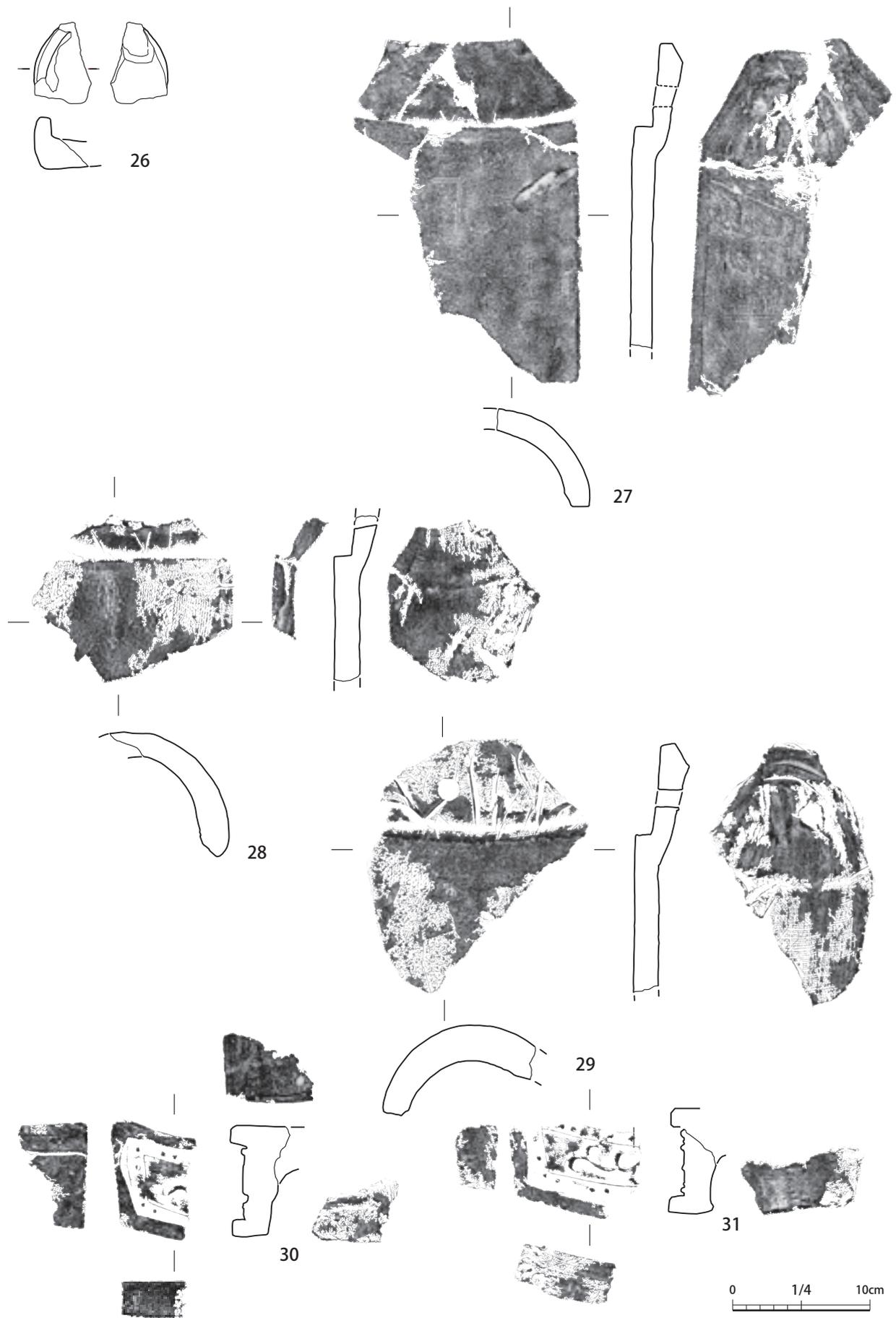
第 11 图 出土瓦 (1) - 軒丸瓦 - (1/4)



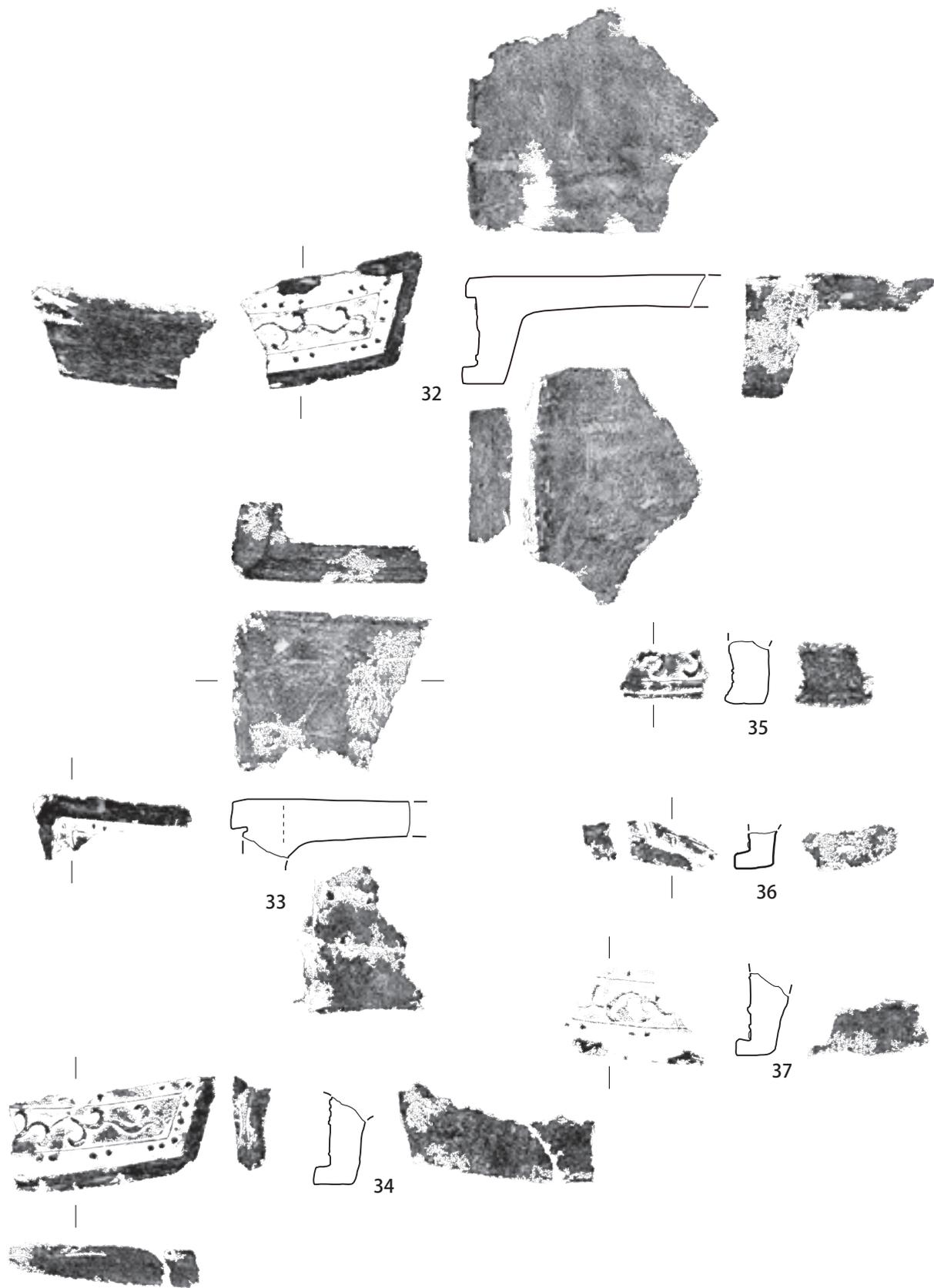
第12図 出土瓦(2) -軒丸瓦- (1/4)



第13図 出土瓦(3) - 軒丸瓦 - (1/4)



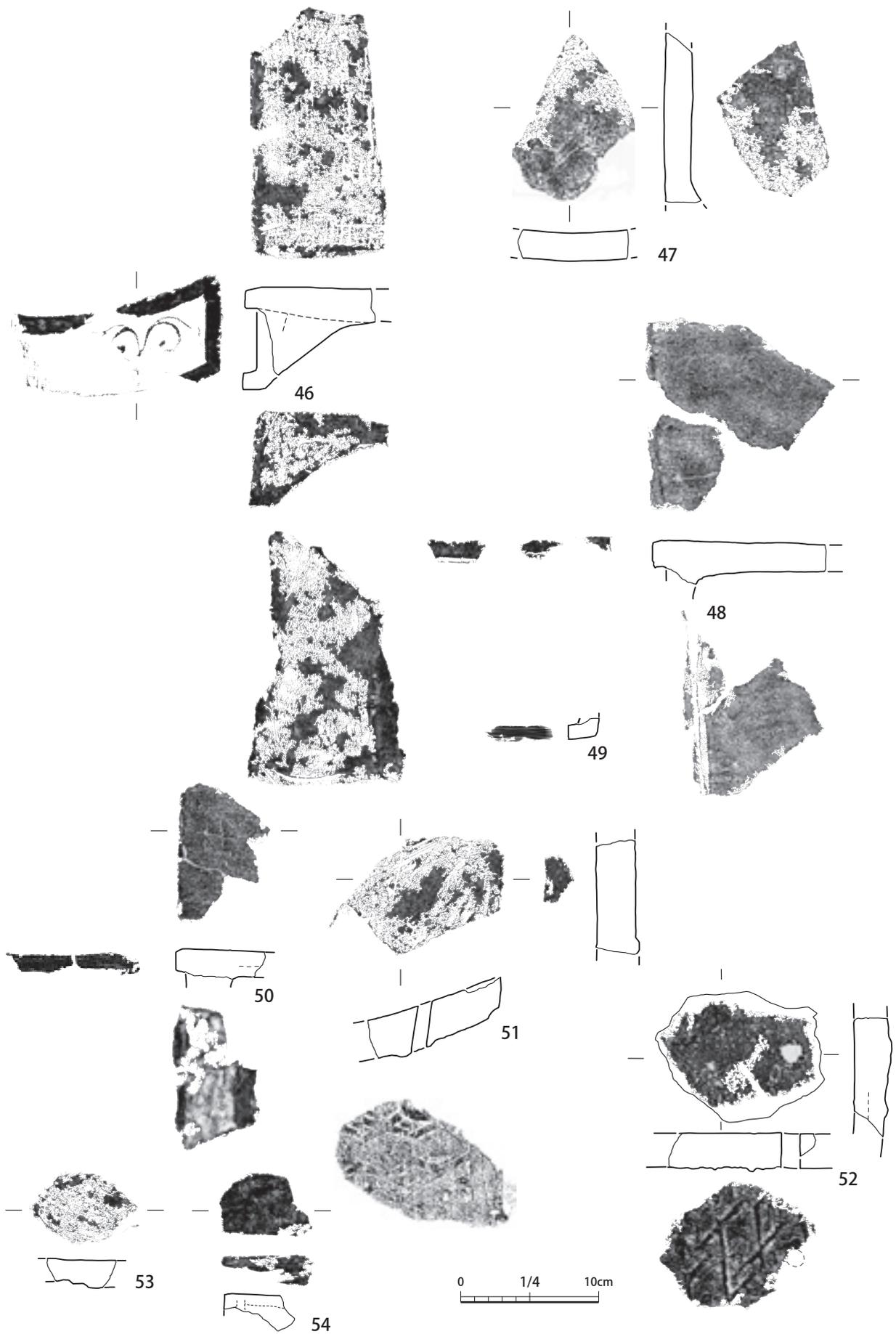
第14图 出土瓦(4) -軒丸瓦・軒平瓦- (1/4)



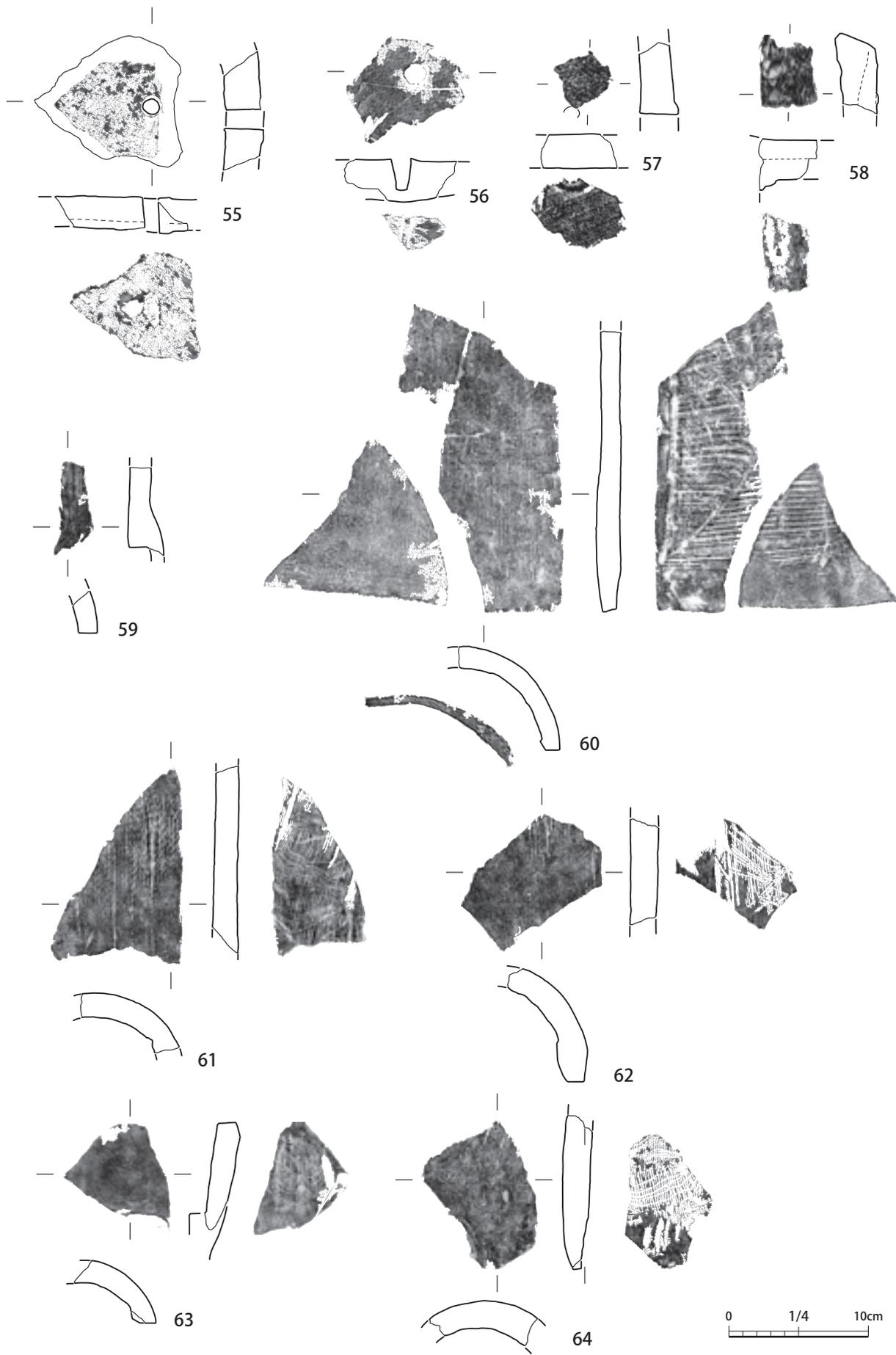
第15圖 出土瓦(5) 一軒平瓦一 (1/4)



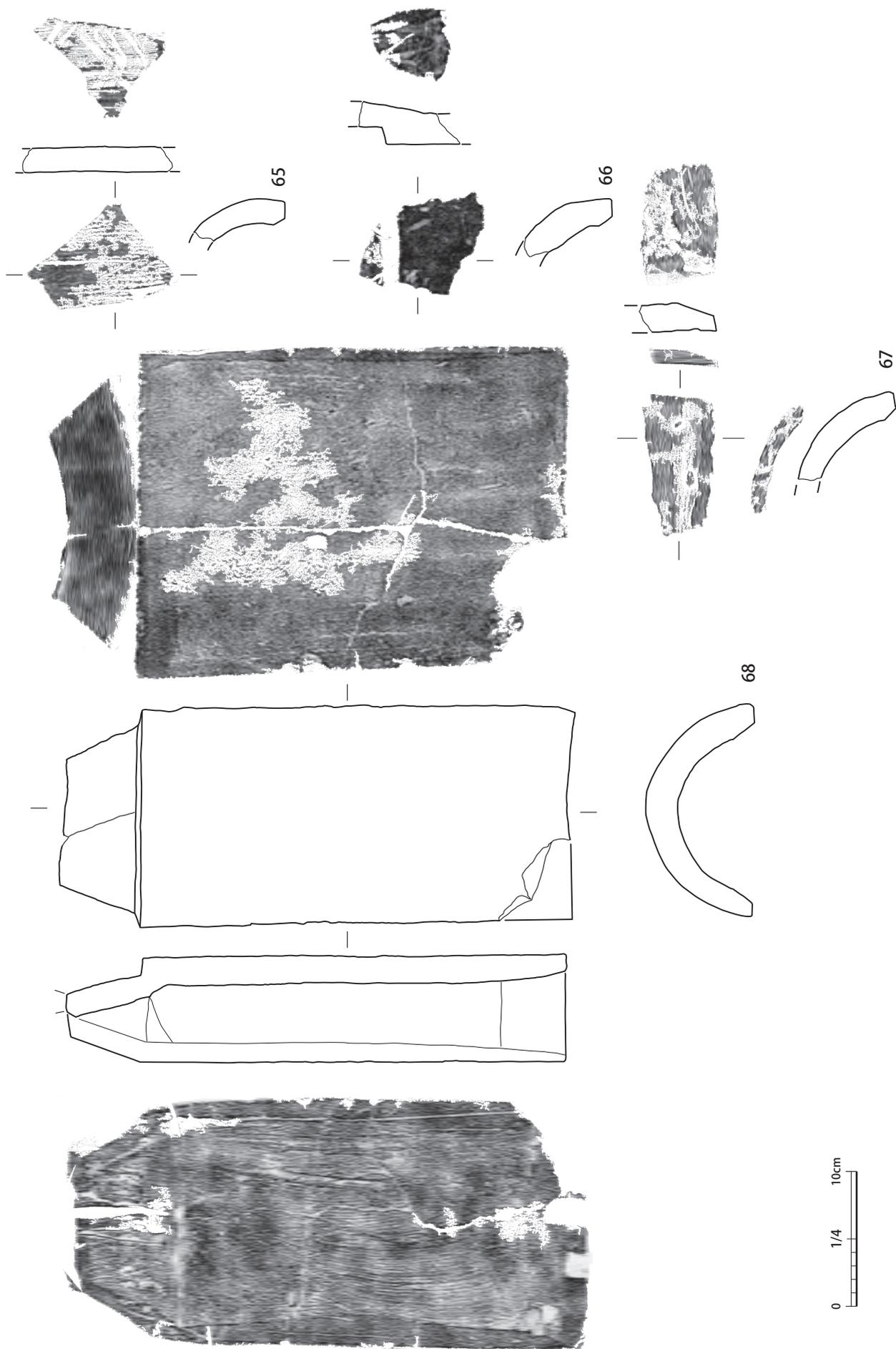
第16图 出土瓦(6) 一軒平瓦一 (1/4)



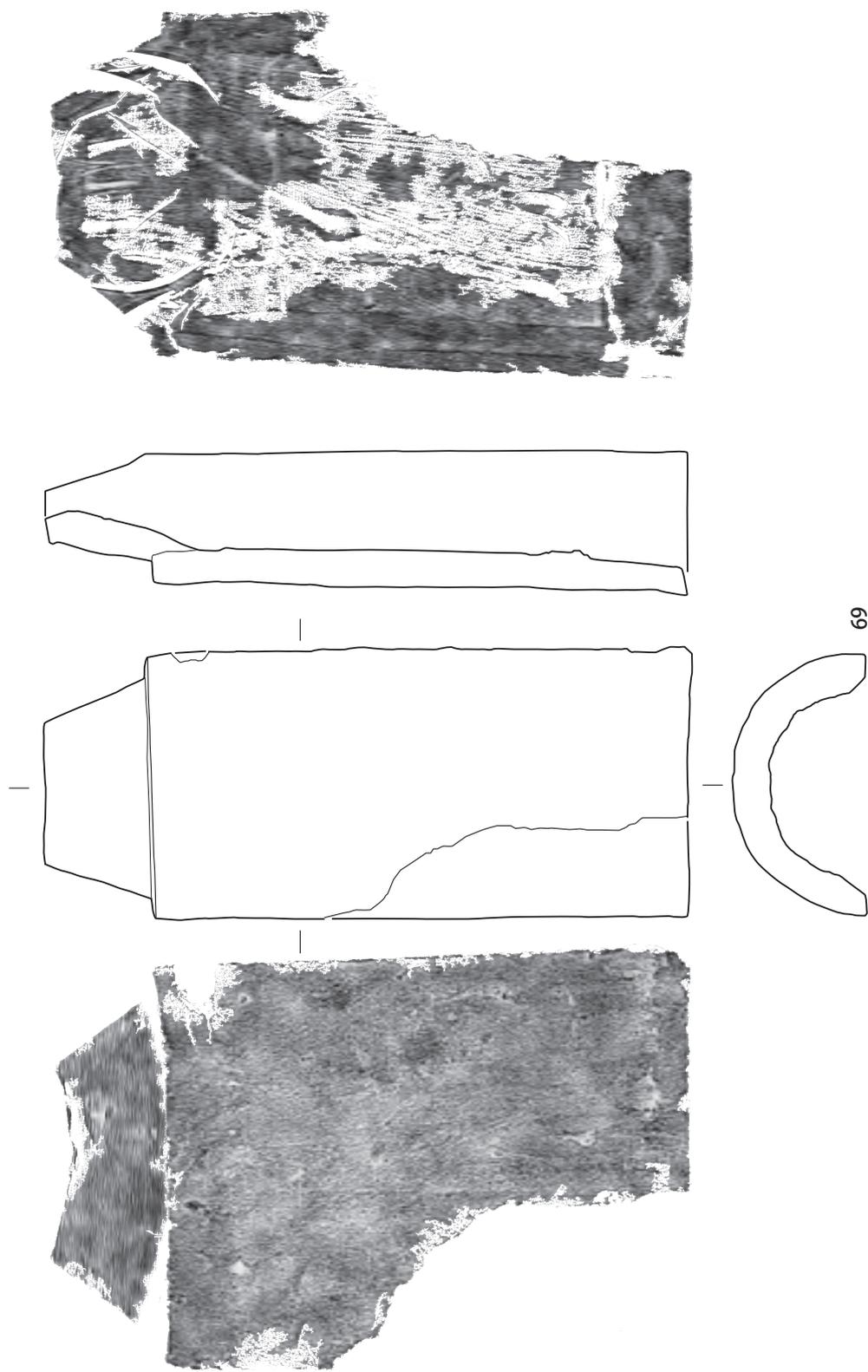
第17図 出土瓦(7) -軒平瓦- (1/4)



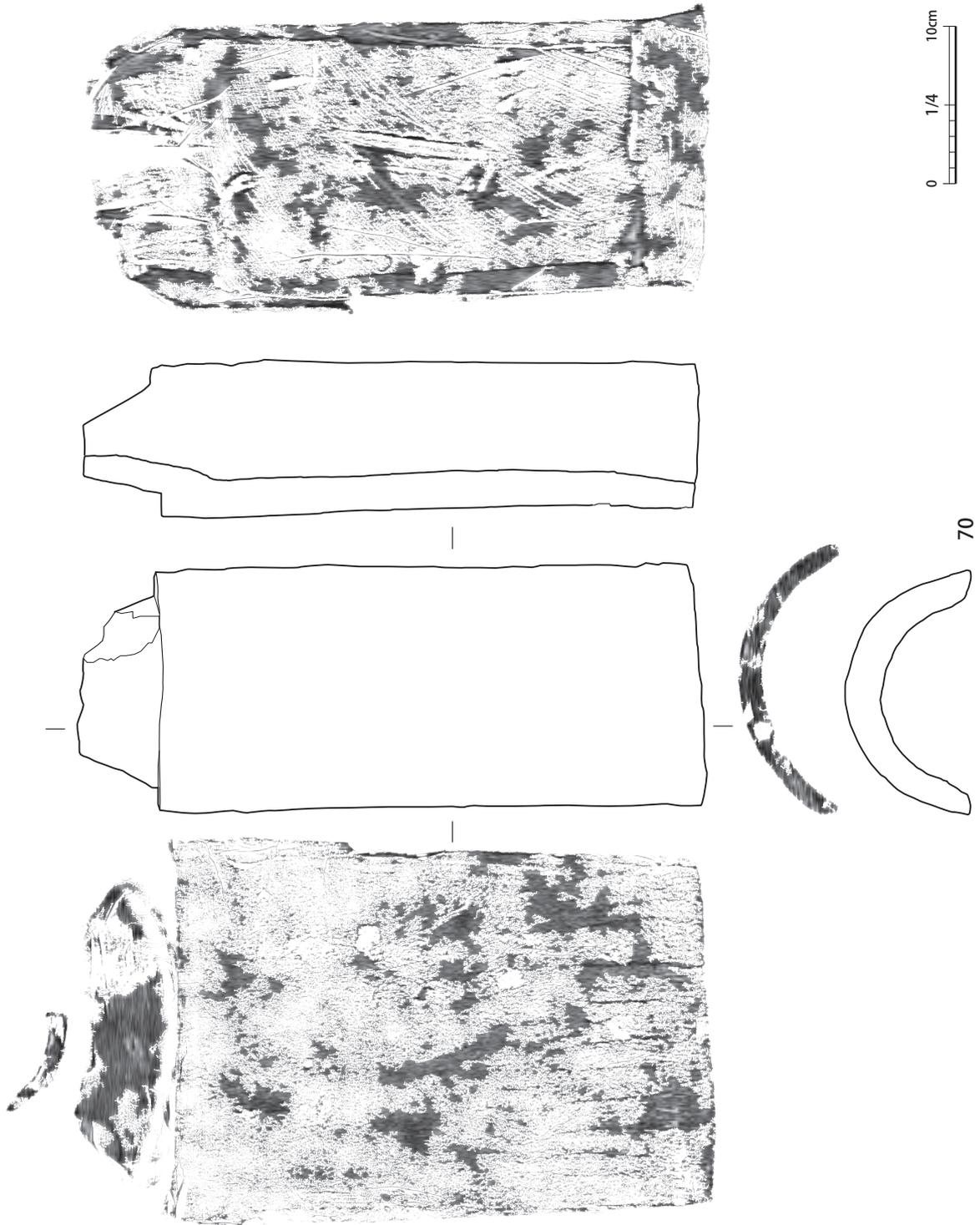
第18图 出土瓦(8) -軒平瓦・丸瓦- (1/4)



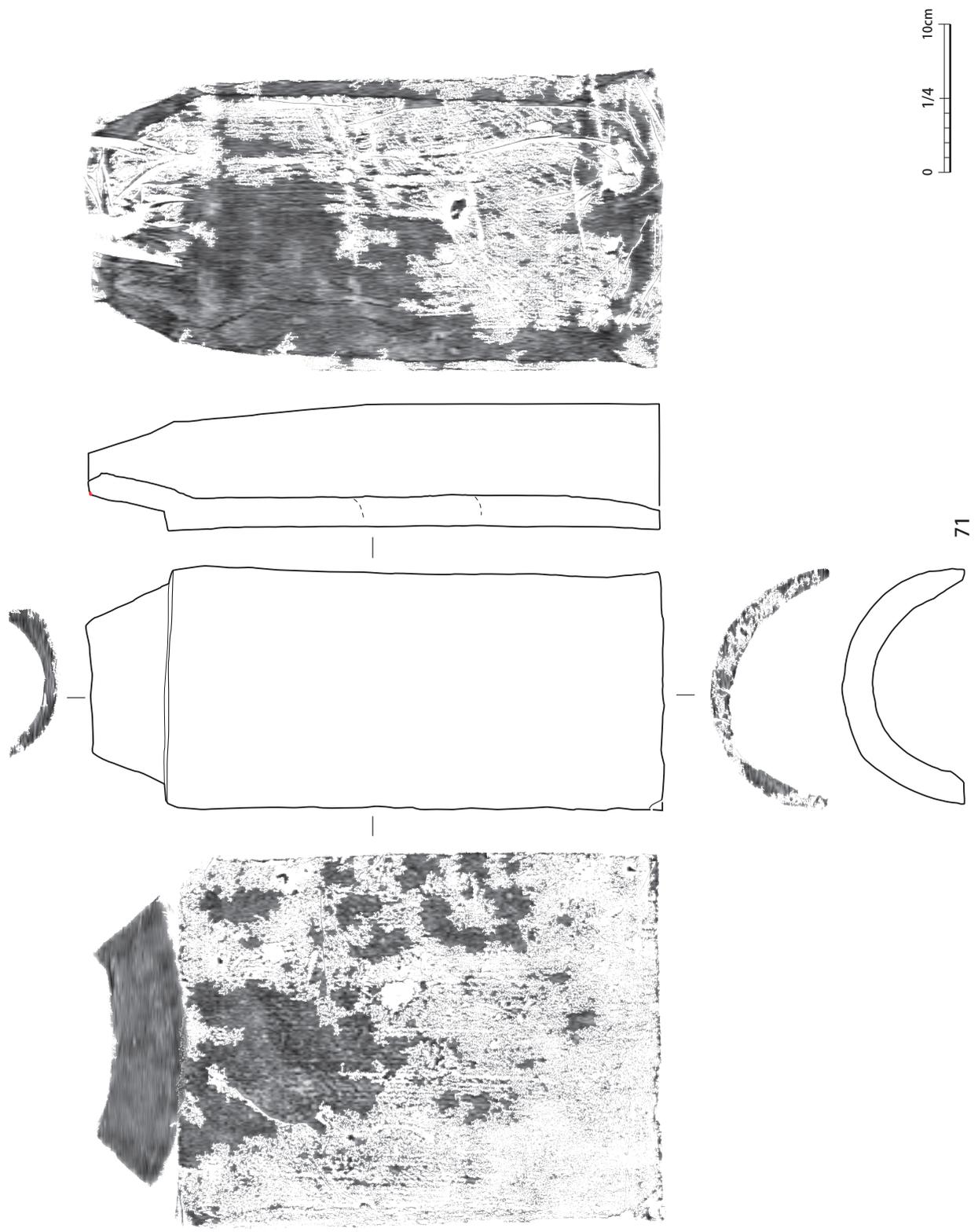
第19图 出土瓦(9) - 丸瓦 - (1/4)



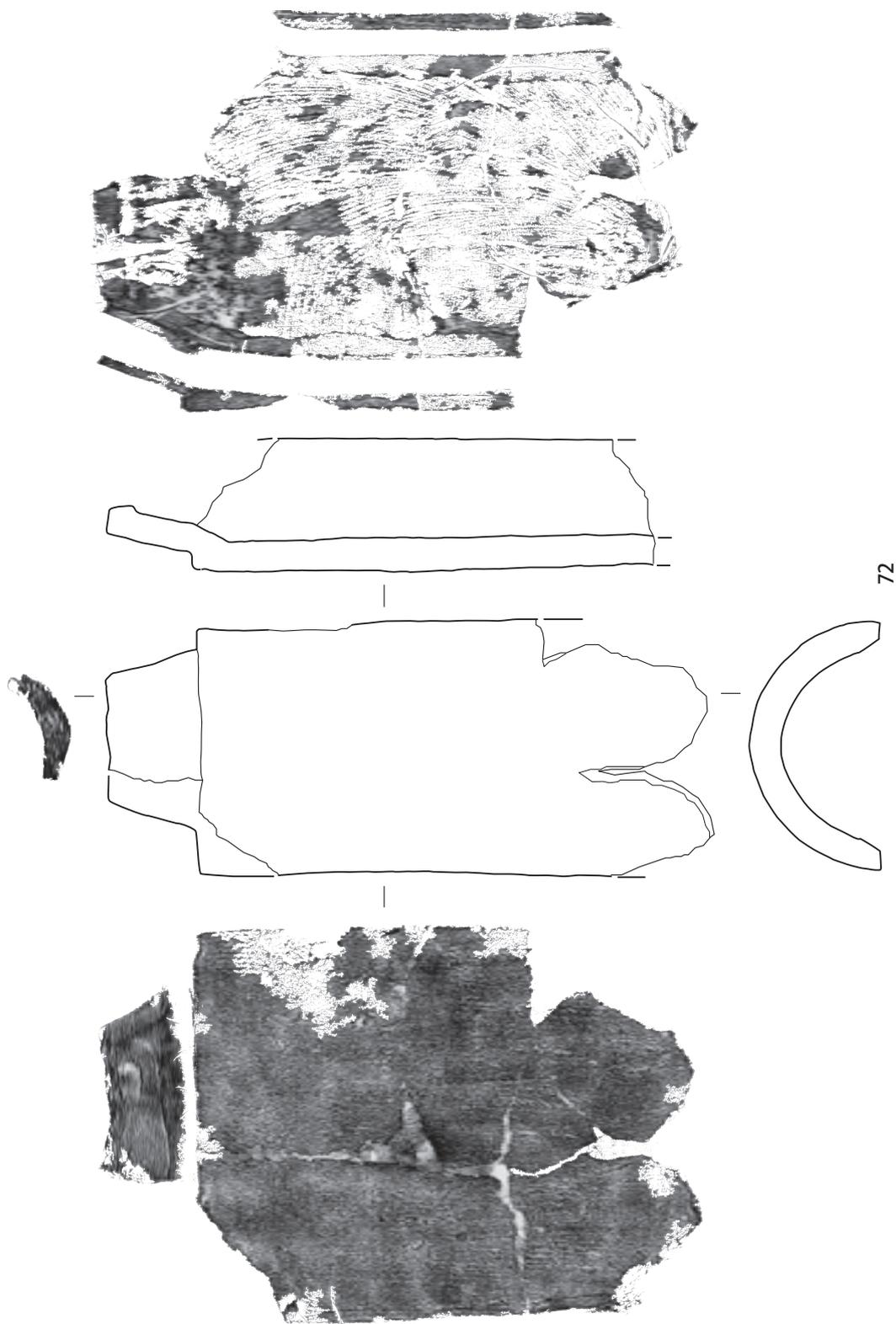
第20図 出土瓦(10) -丸瓦- (1/4)



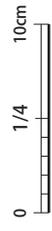
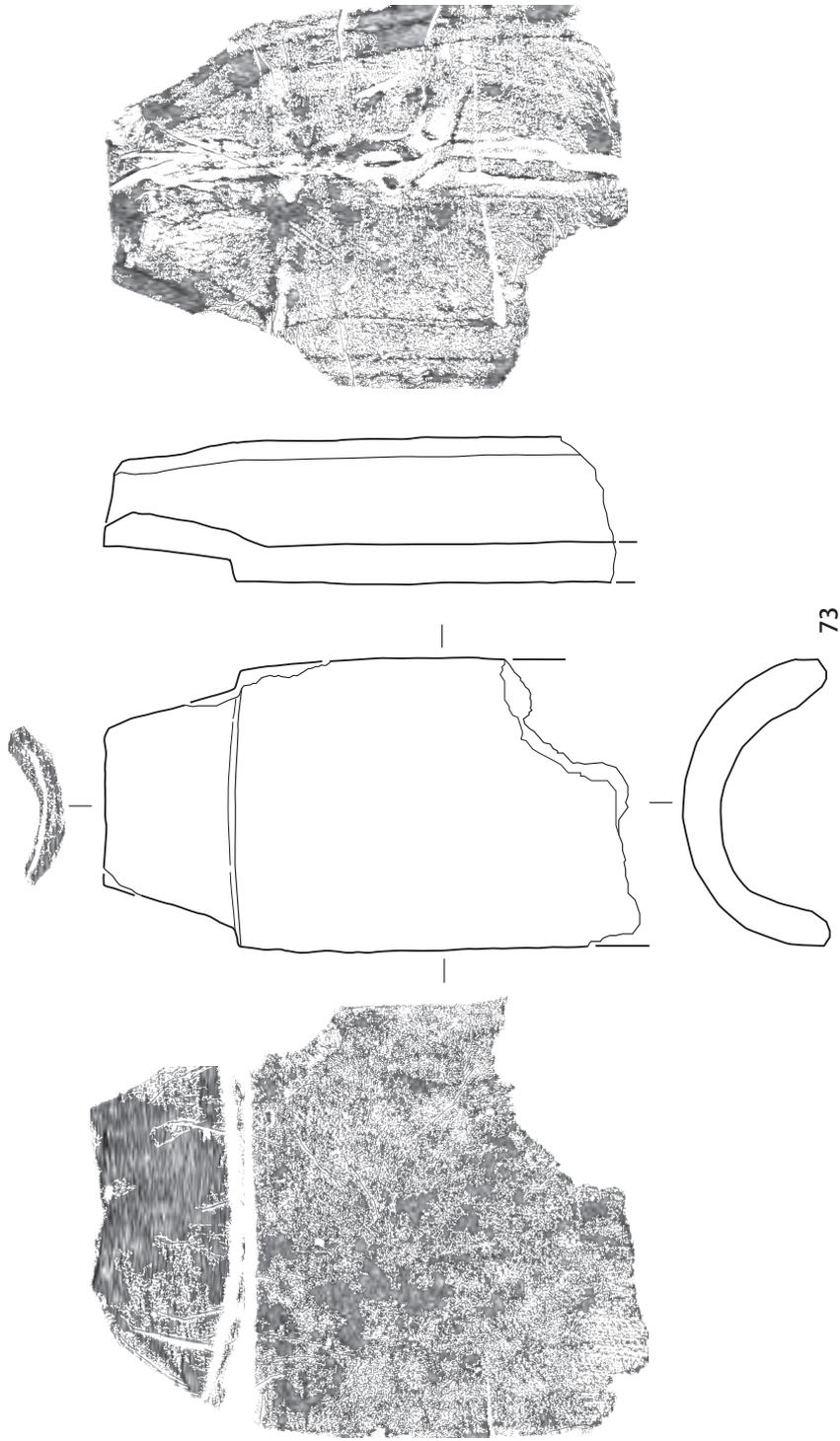
第21图 出土瓦(11) -丸瓦- (1/4)



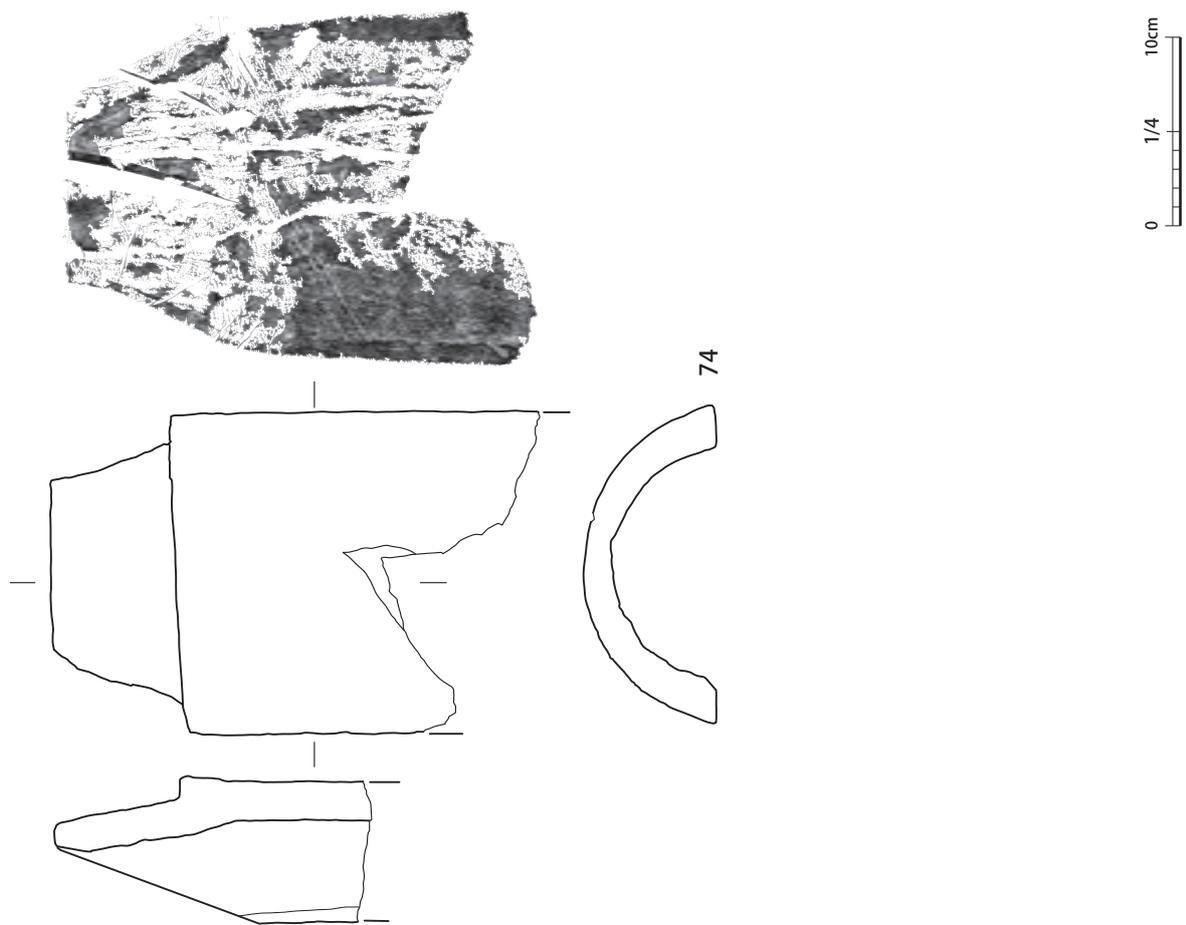
第22图 出土瓦(12) 一丸瓦一 (1/4)



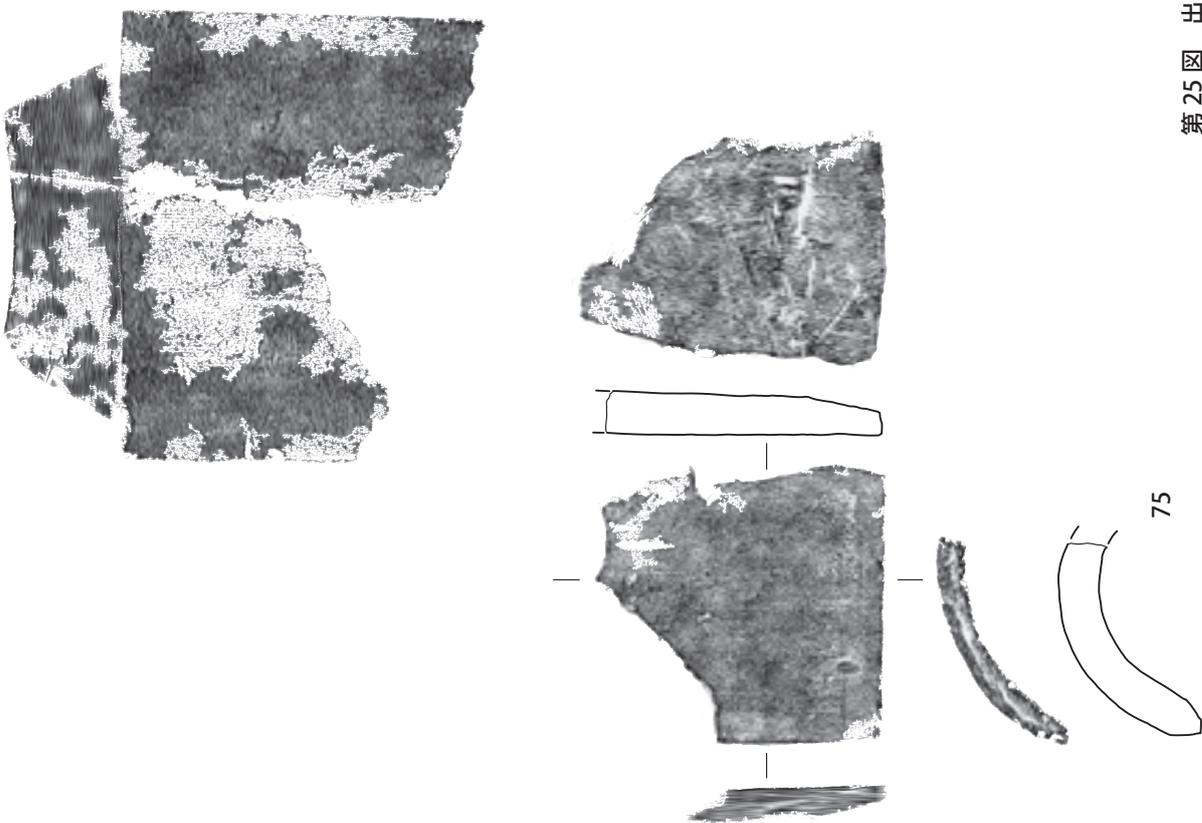
第23图 出土瓦(13) - 丸瓦 - (1/4)



第24图 出土瓦(14) -丸瓦- (1/4)

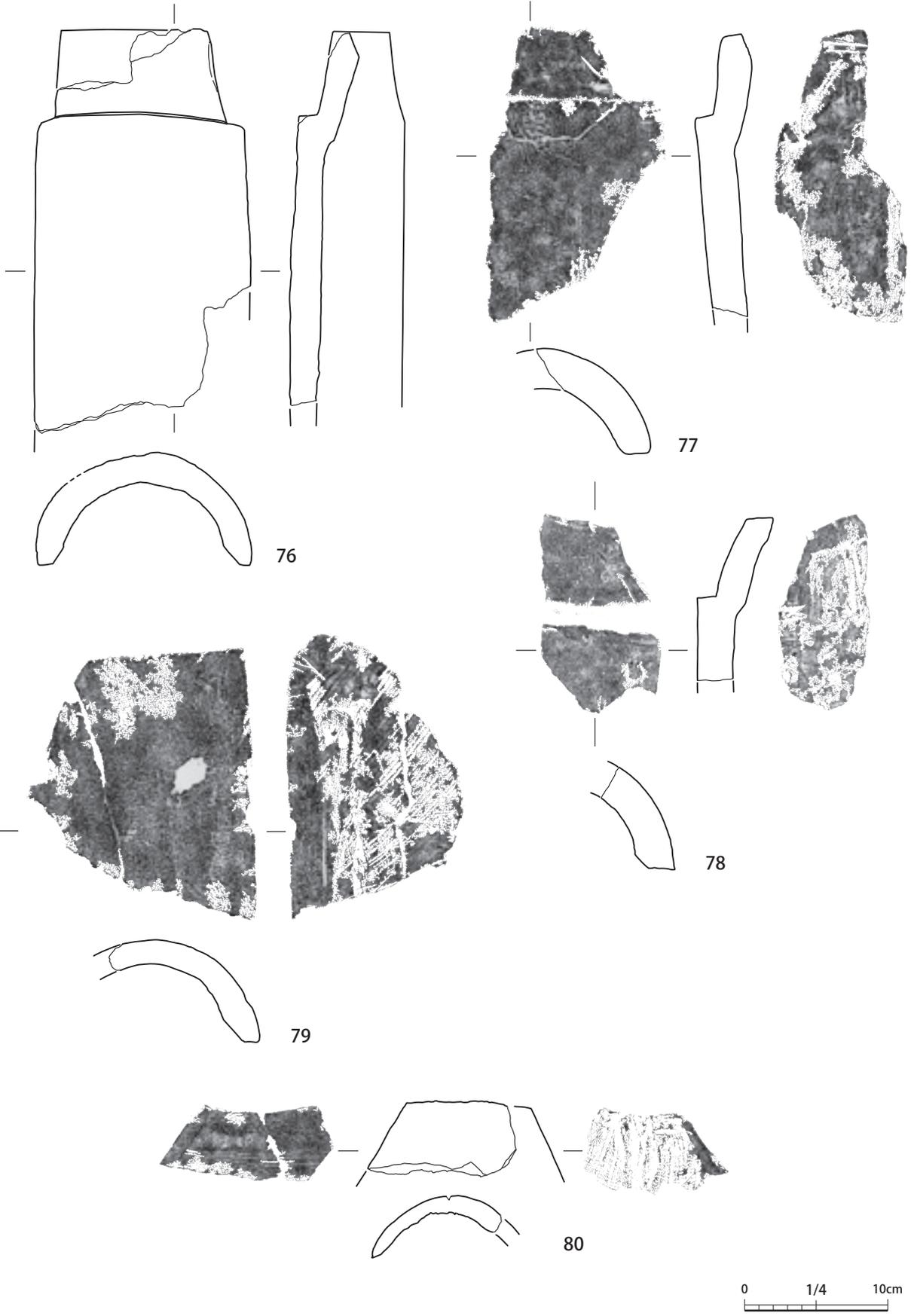


74

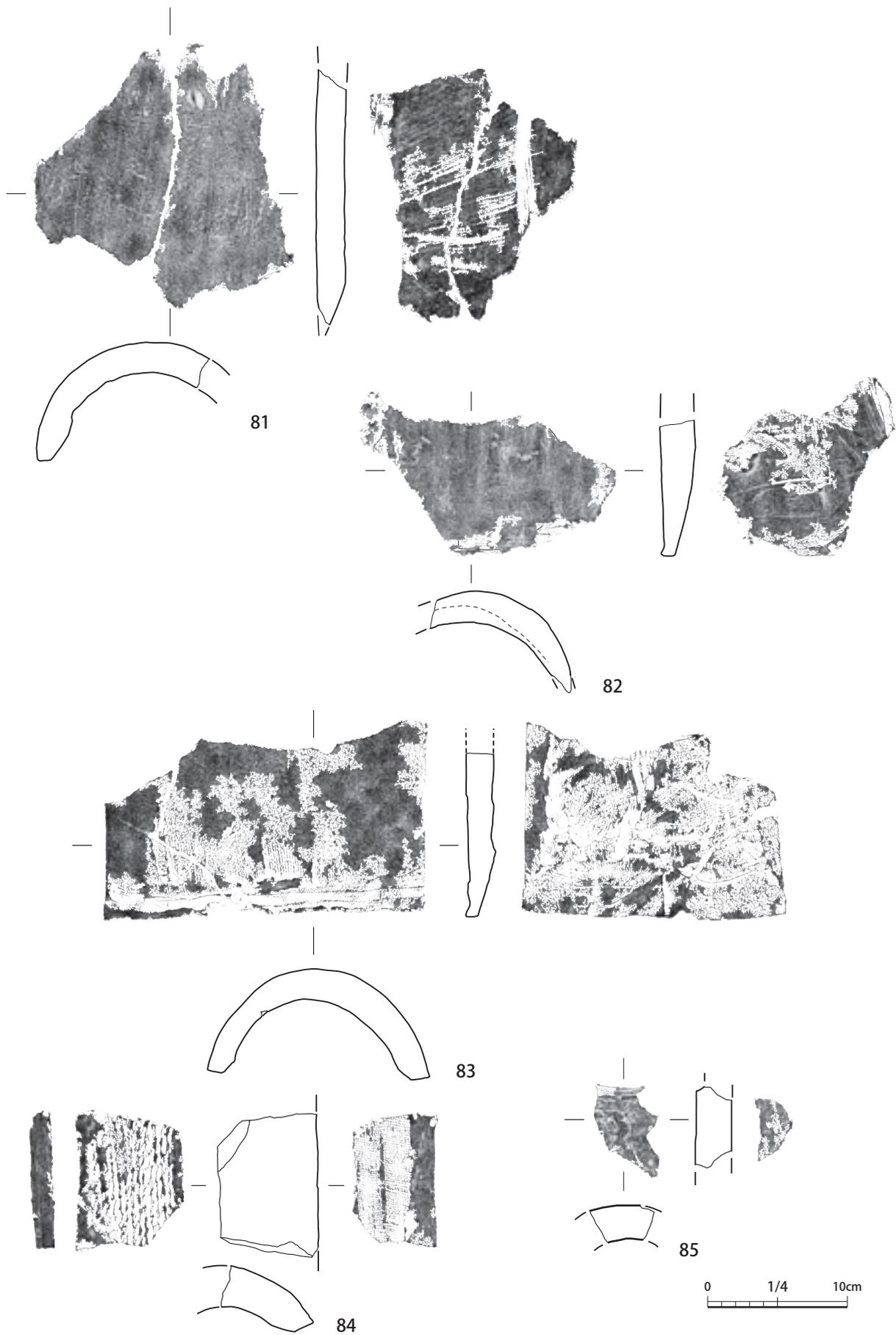


75

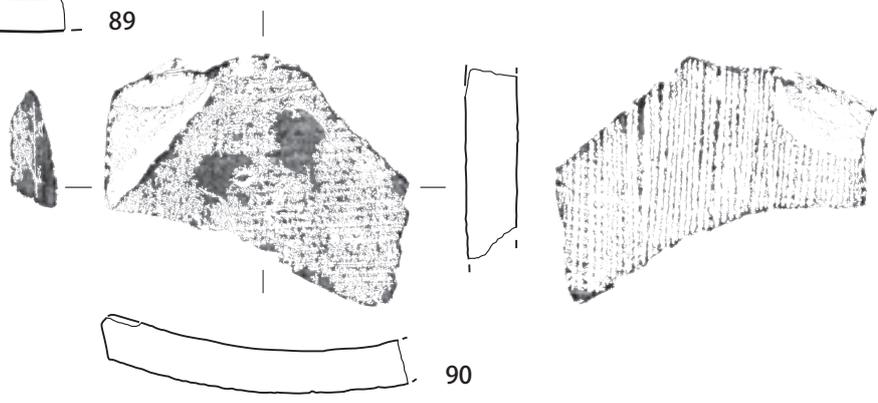
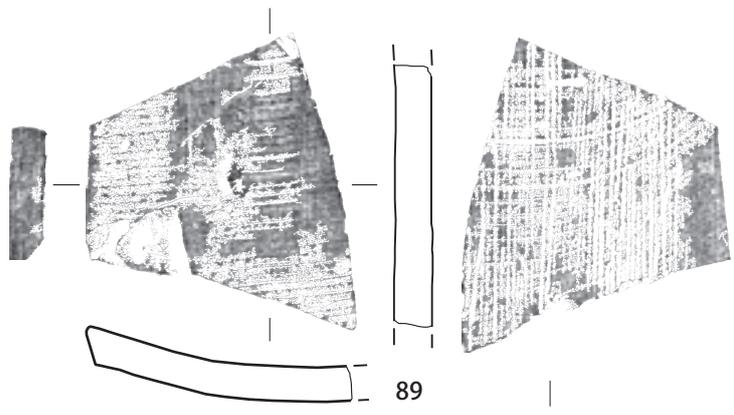
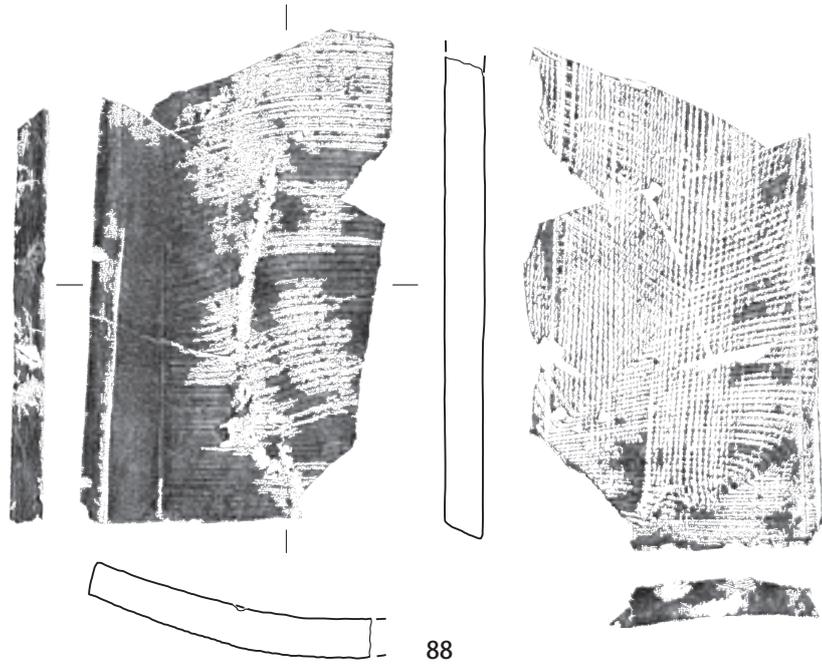
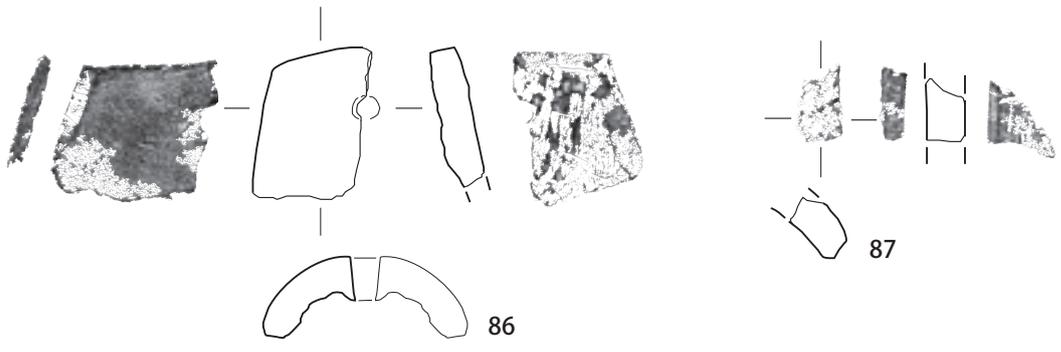
第25图 出土瓦(15) - 丸瓦 - (1/4)



第26图 出土瓦(16) -丸瓦- (1/4)

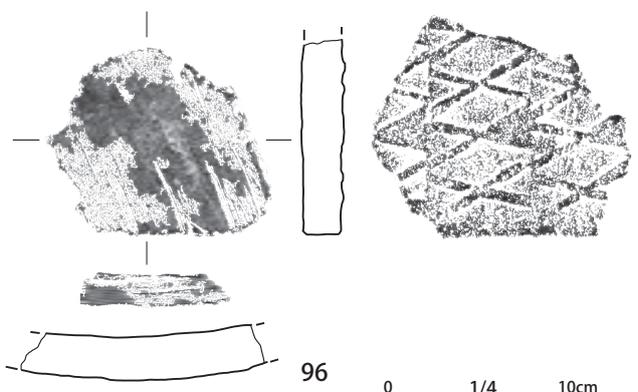
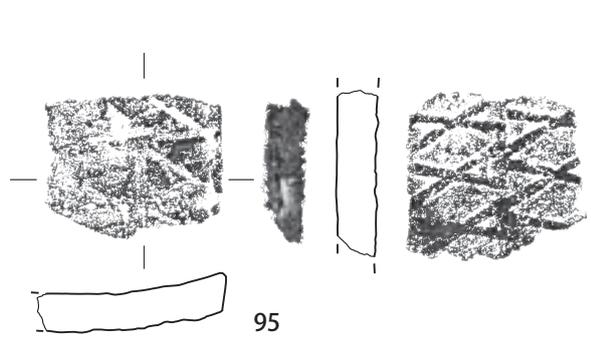
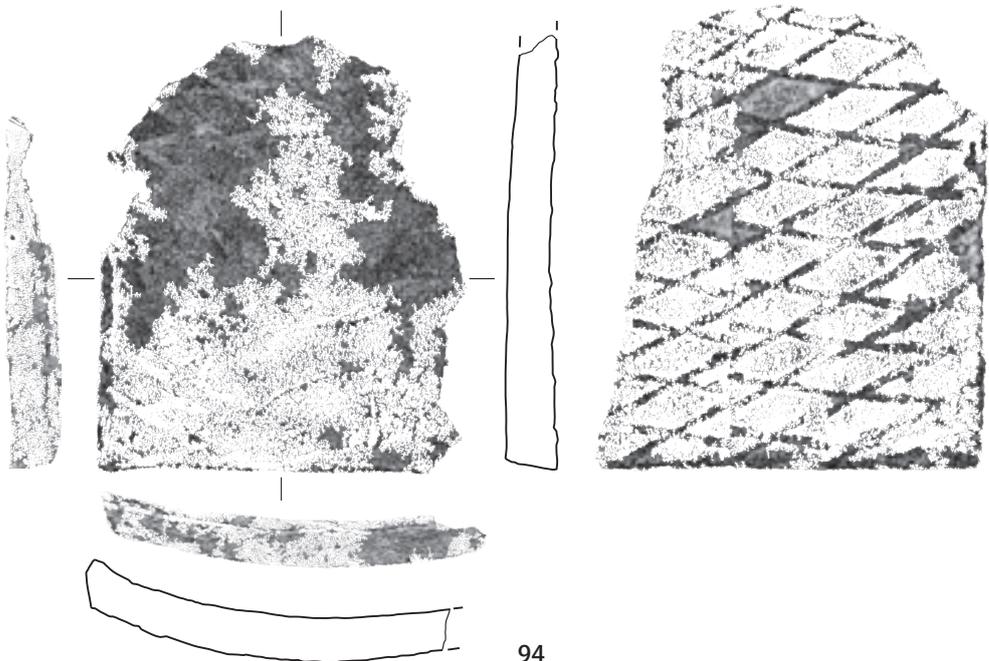
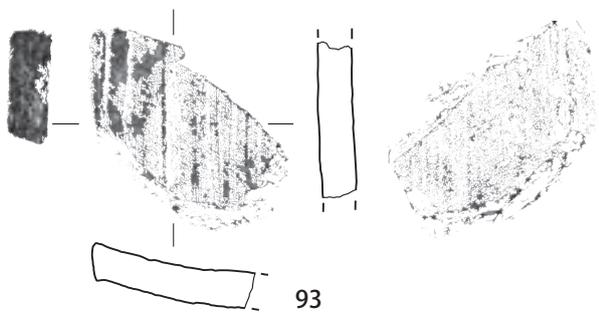
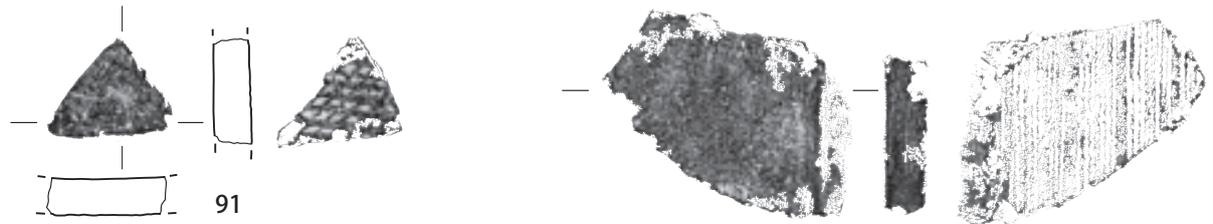


第 27 图 出土瓦 (17) -丸瓦- (1/4)



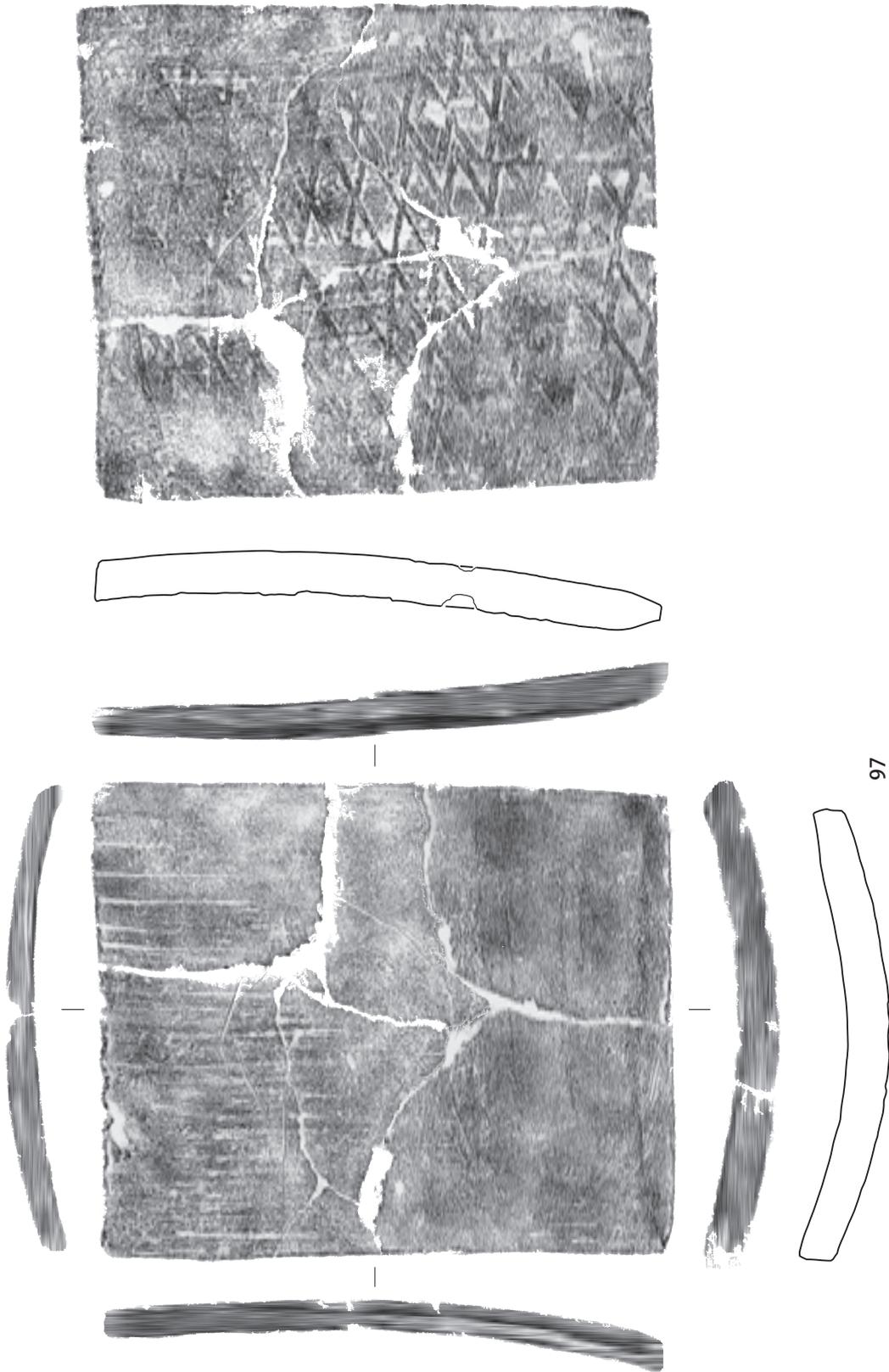
0 1/4 10cm

第28图 出土瓦(18) -丸瓦・平瓦- (1/4)



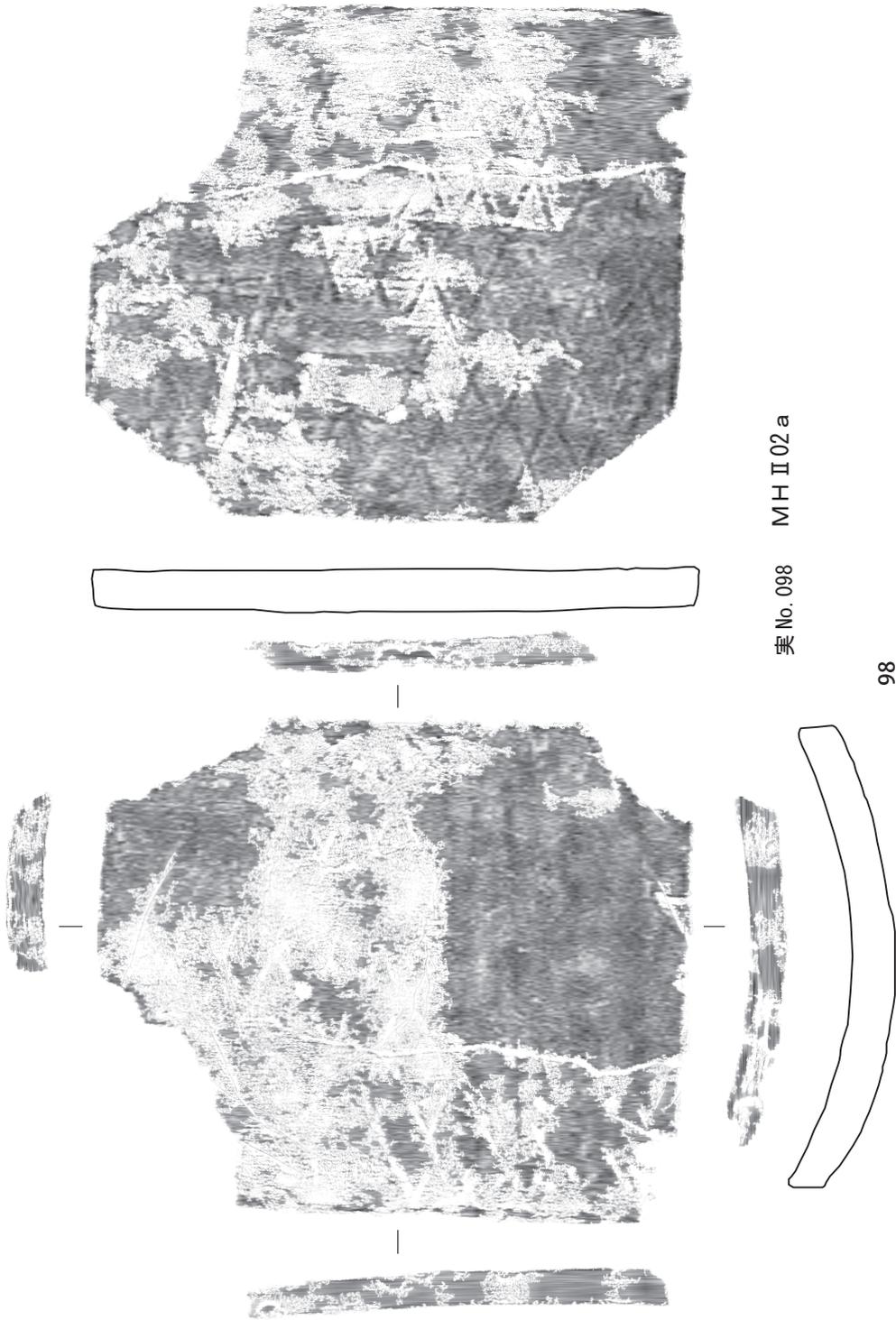
0 1/4 10cm

第 29 图 出土瓦 (19) -平瓦- (1/4)



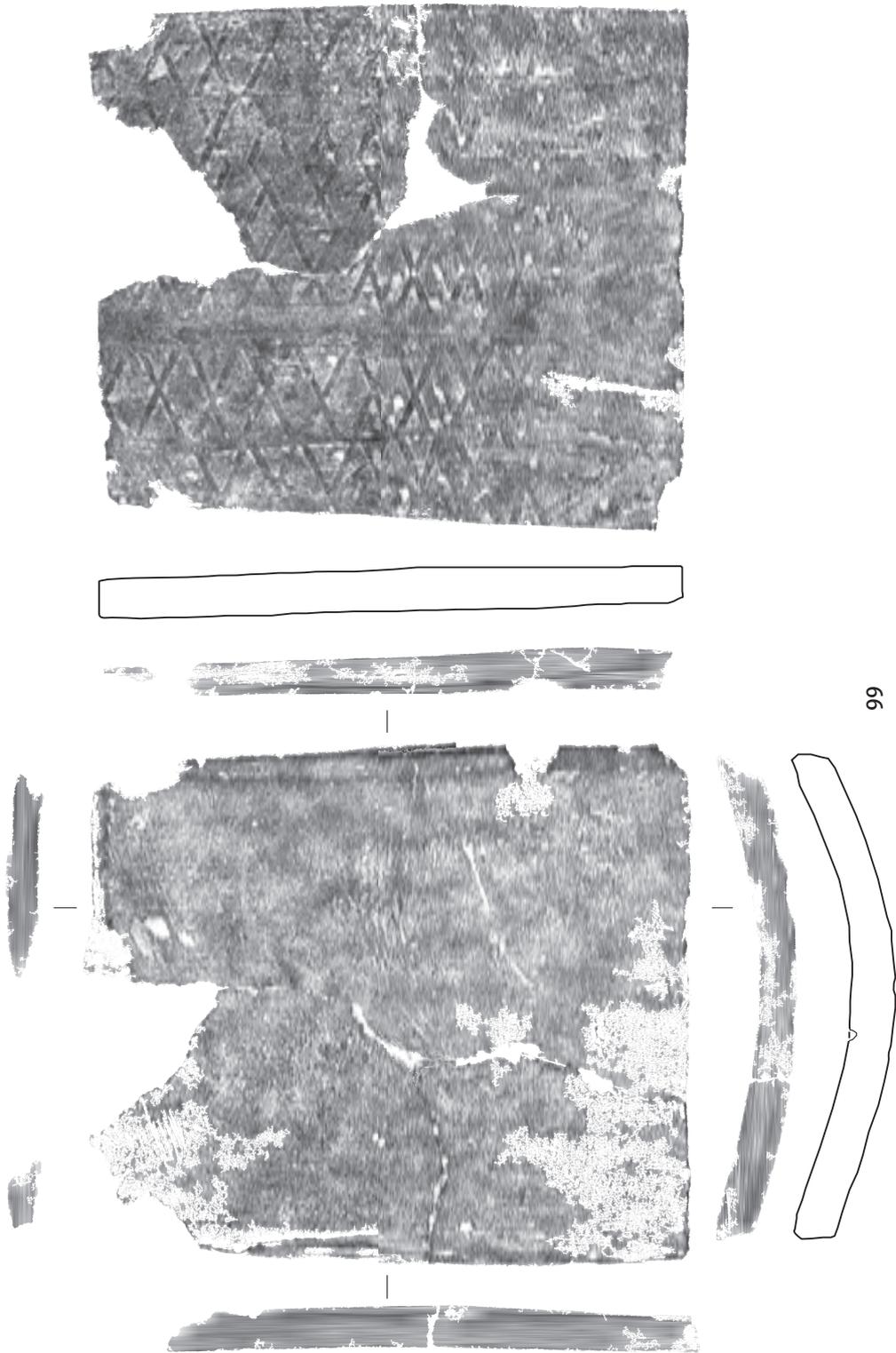
第30图 出土瓦(20) - 平瓦 - (1/4)

0 1/4 10cm

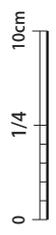
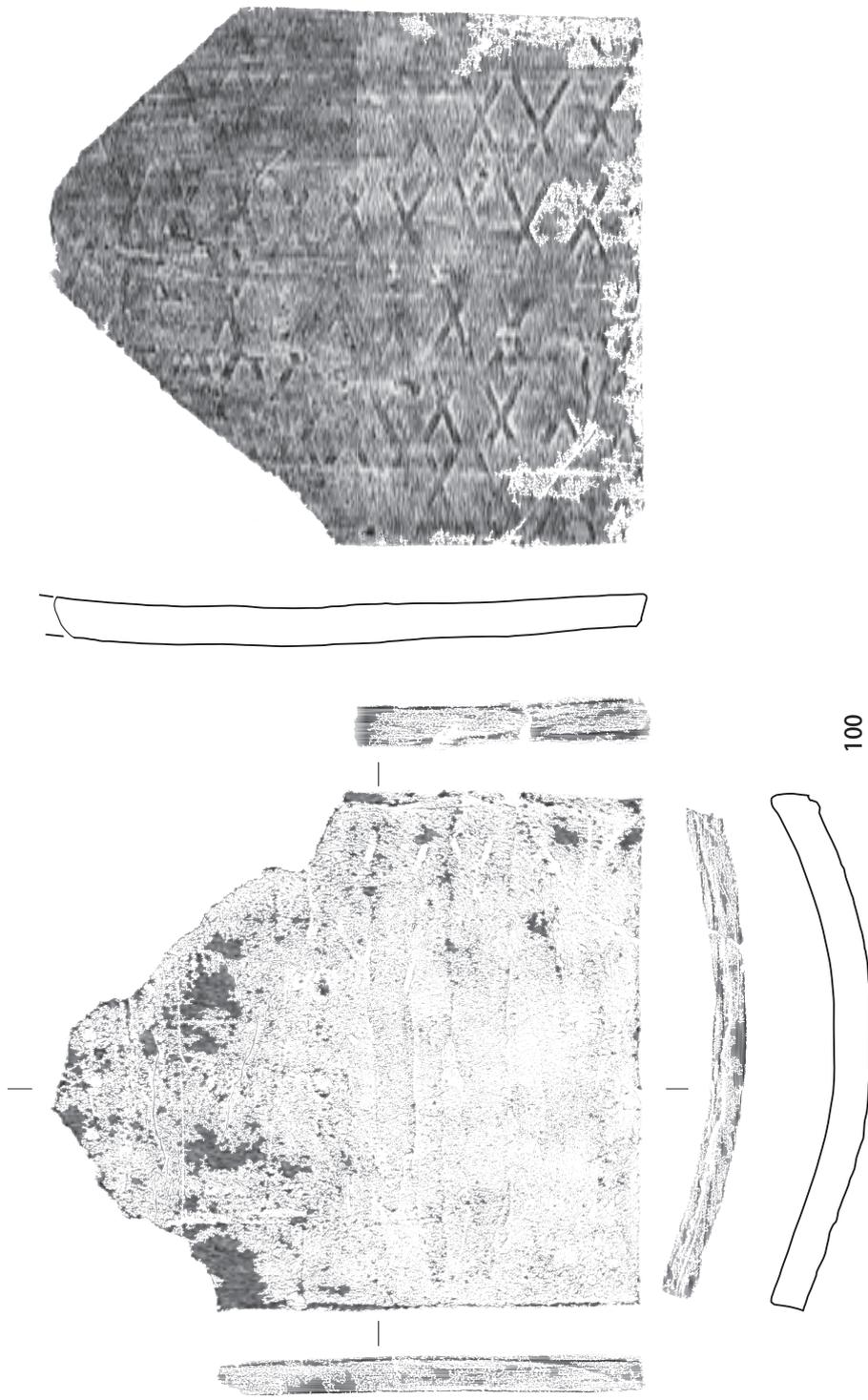


実 No. 098 MH II 02 a

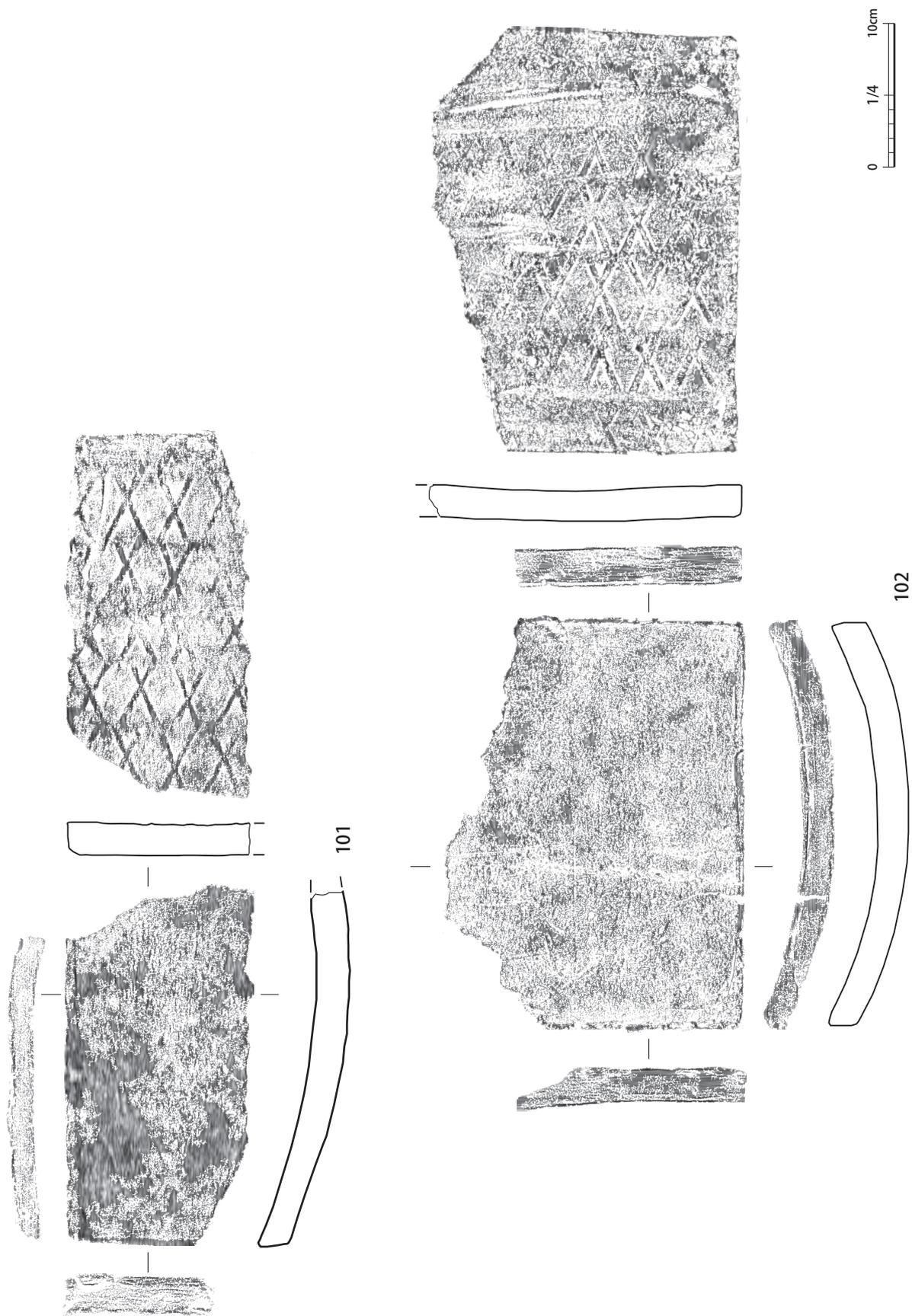
第31図 出土瓦(21) -平瓦- (1/4)



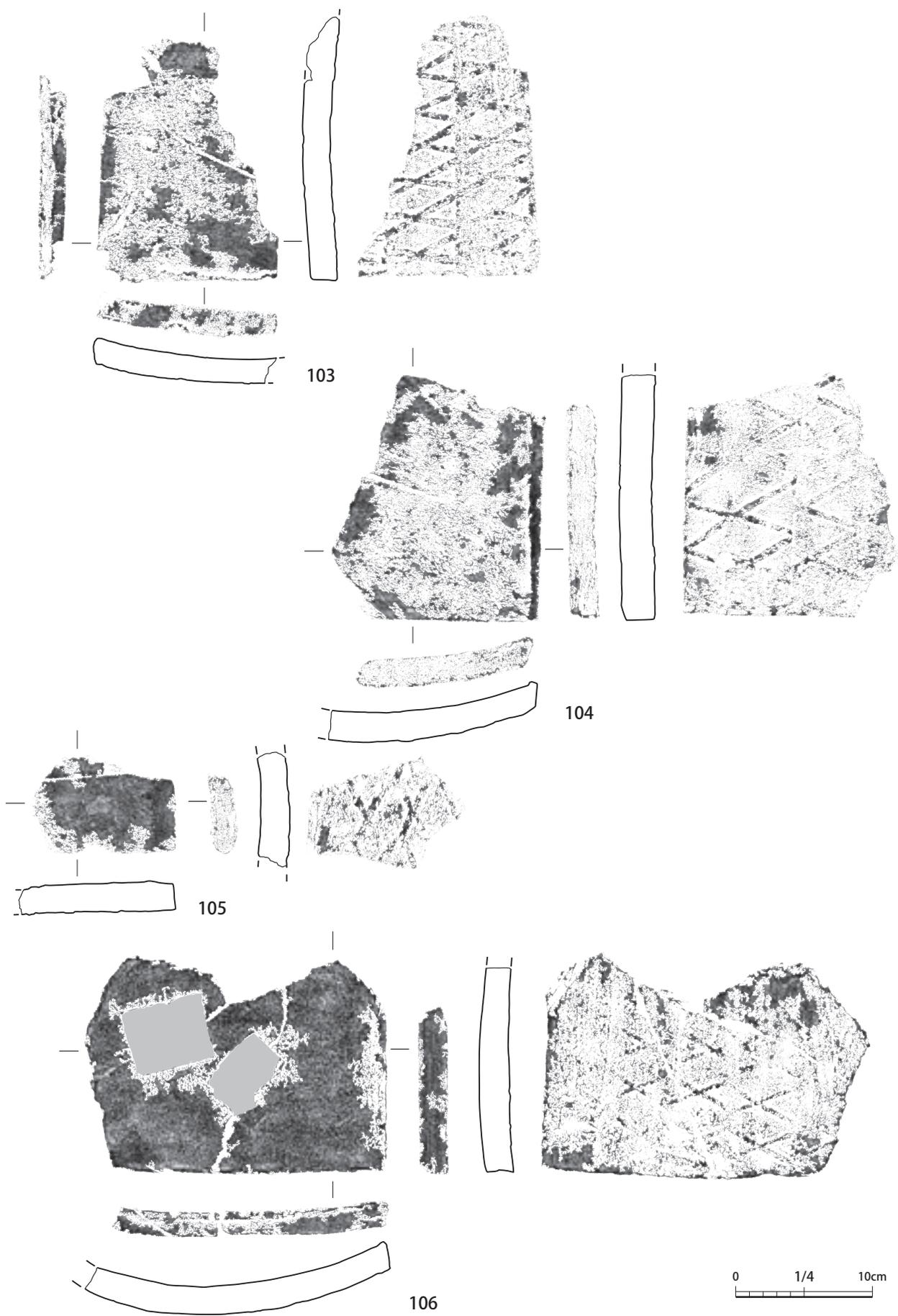
第32図 出土瓦(22) 一平瓦一 (1/4)



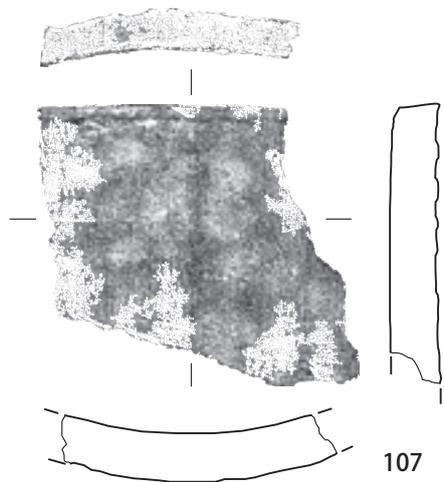
第33图 出土瓦(23) —平瓦— (1/4)



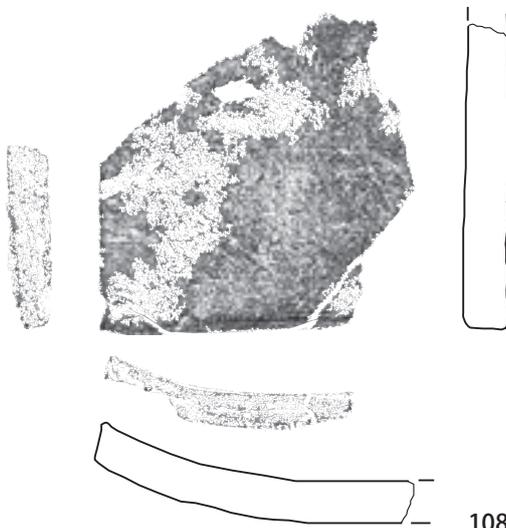
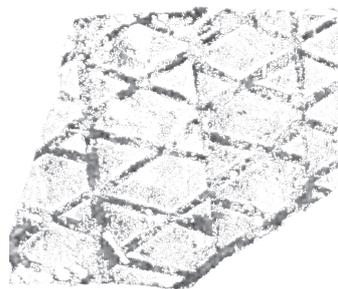
第34図 出土瓦(24) -平瓦- (1/4)



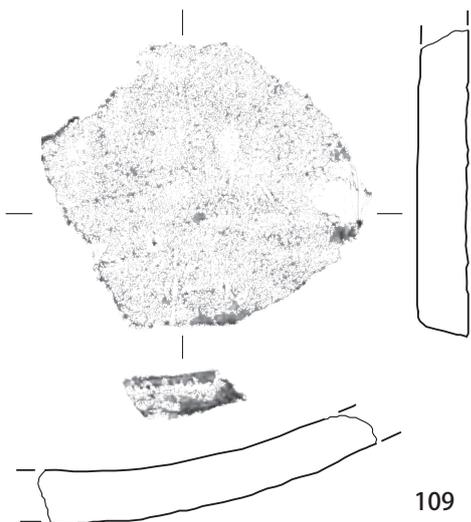
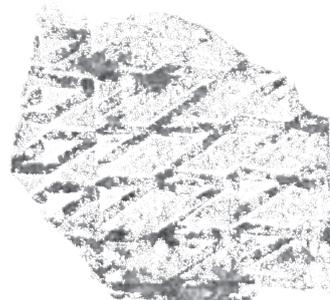
第35図 出土瓦(25) -平瓦- (1/4)



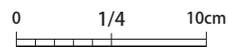
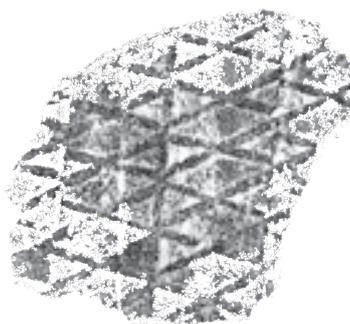
107



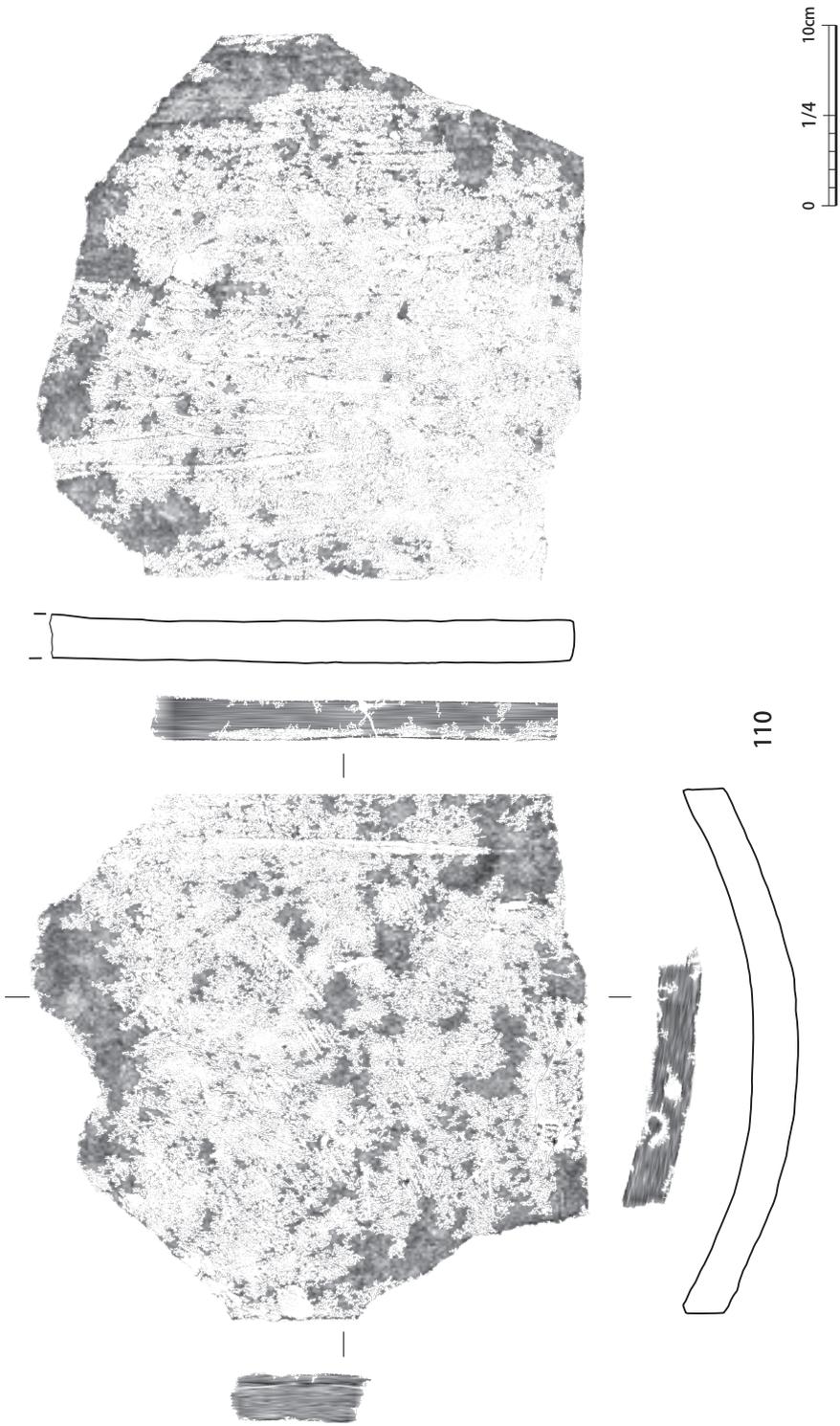
108



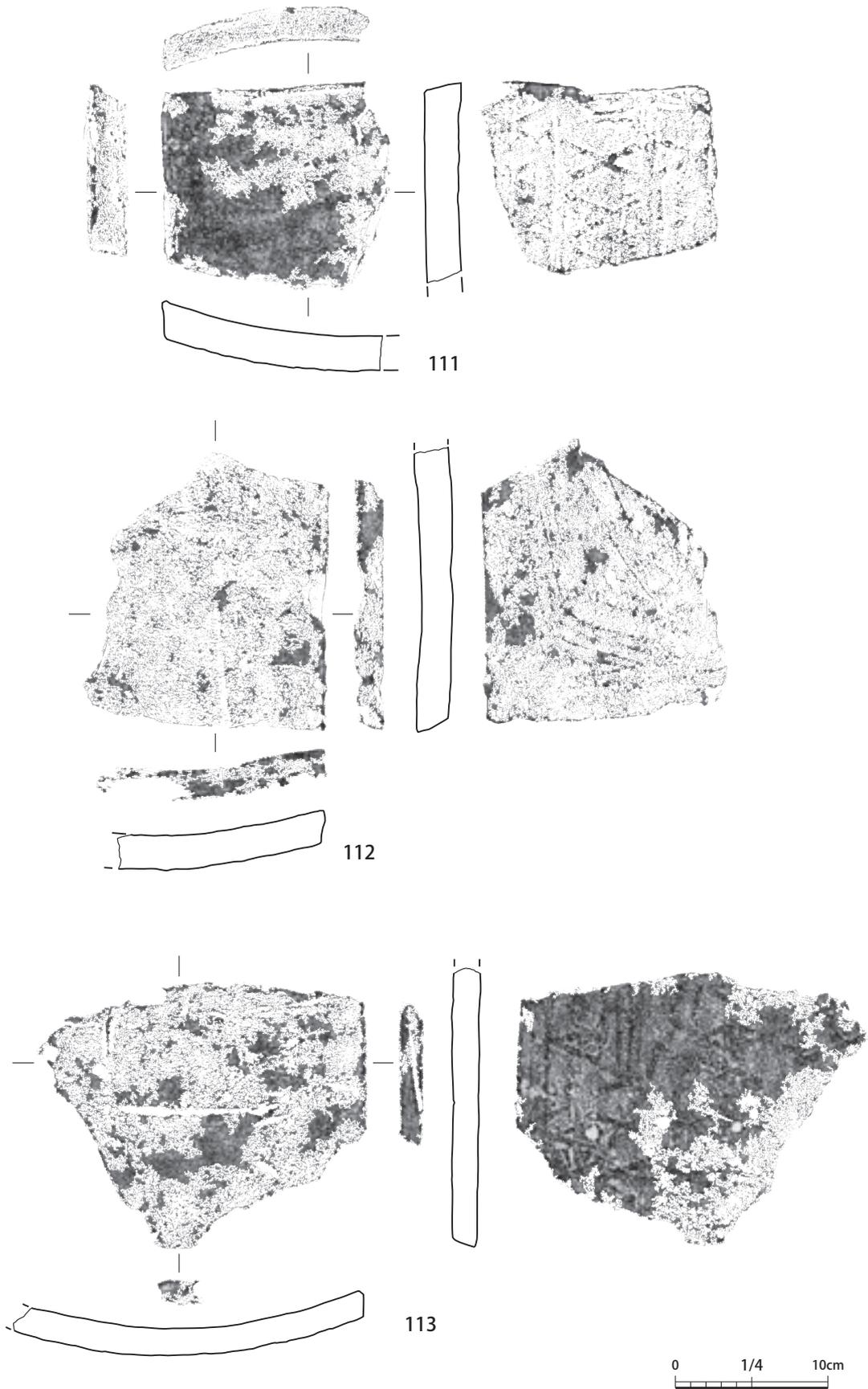
109



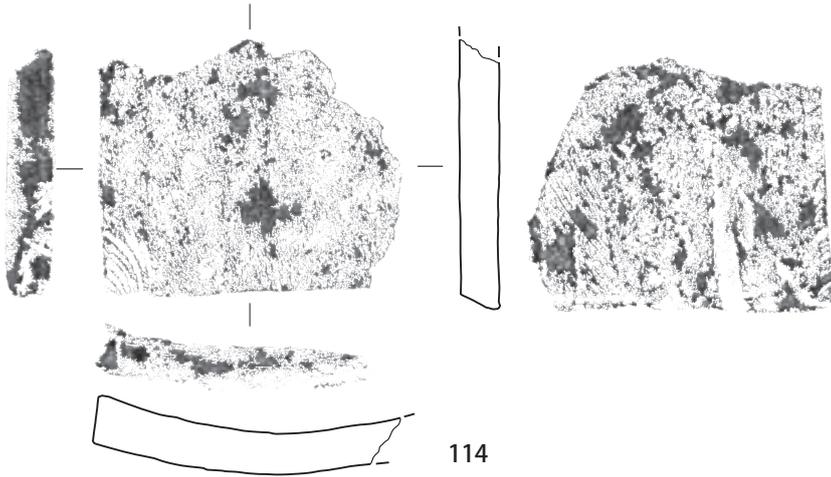
第36图 出土瓦(26) -平瓦- (1/4)



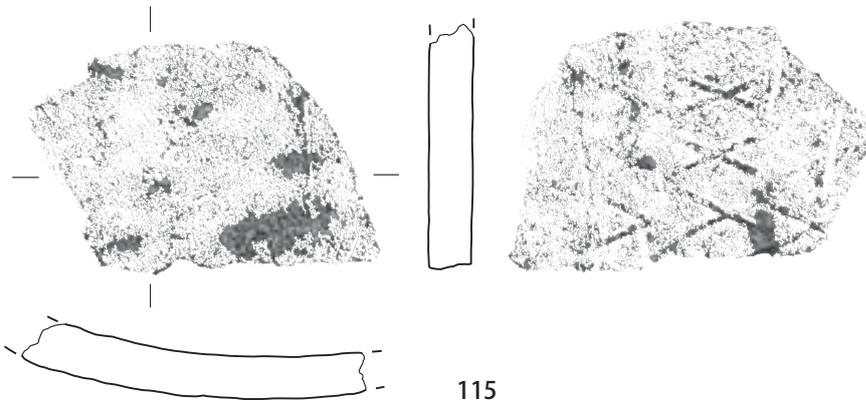
第37图 出土瓦(27) 平瓦—(1/4)



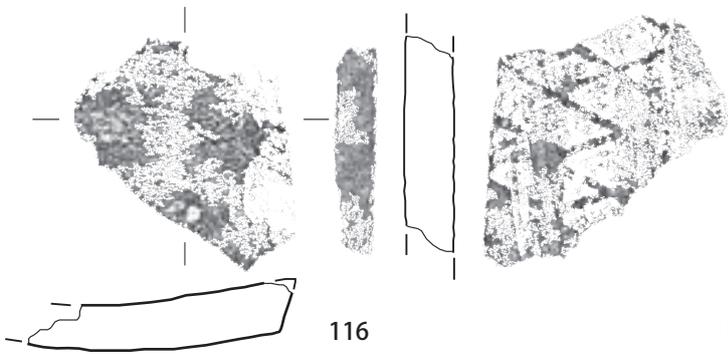
第 38 図 出土瓦 (28) -平瓦- (1/4)



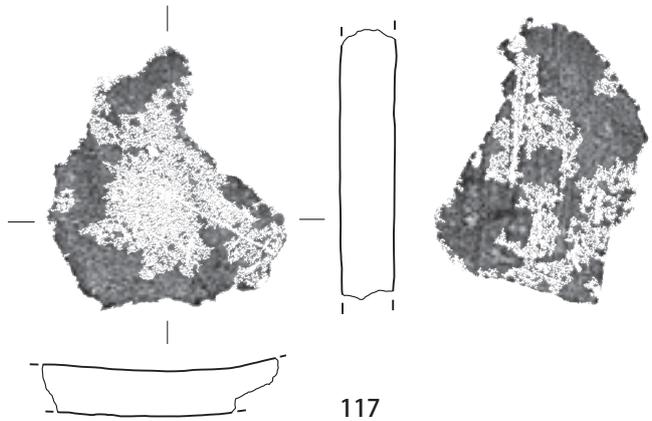
114



115



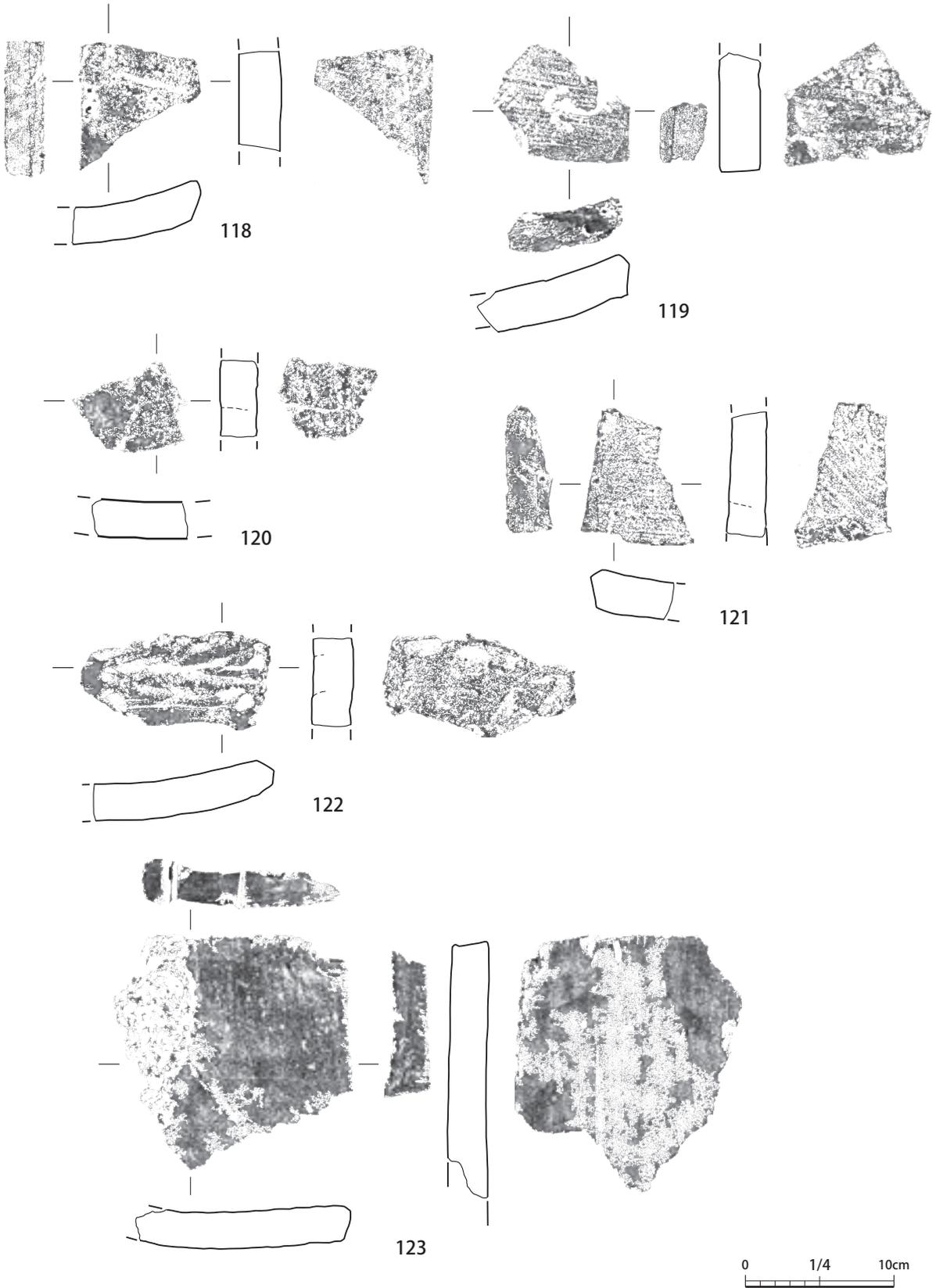
116



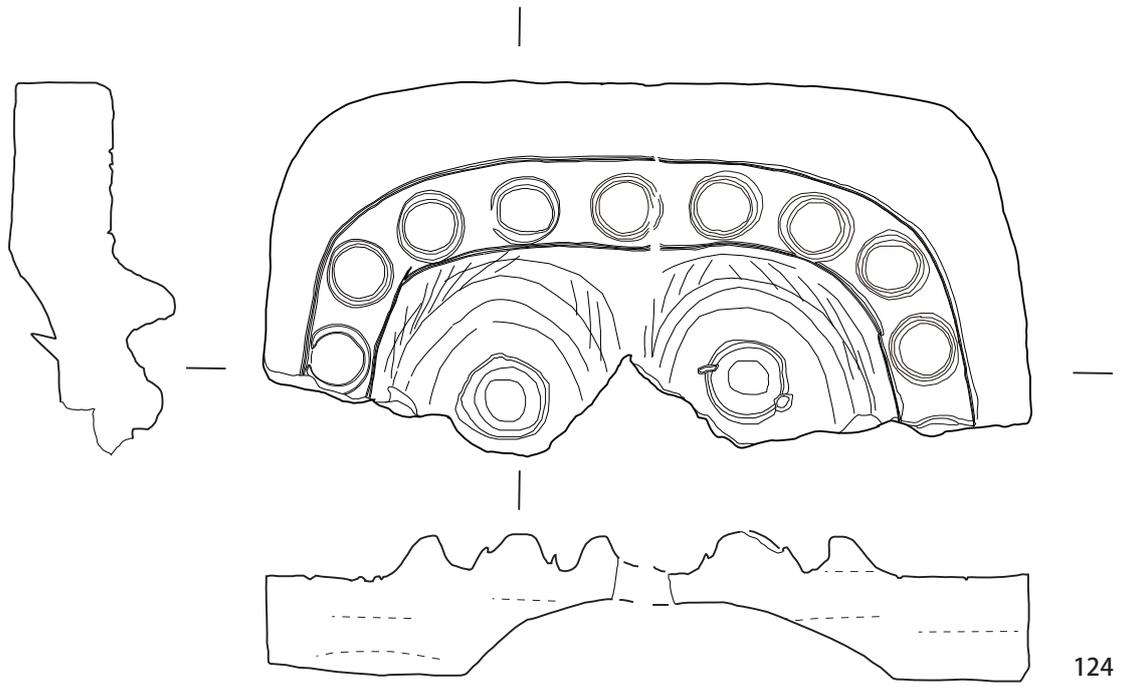
117

0 1/4 10cm

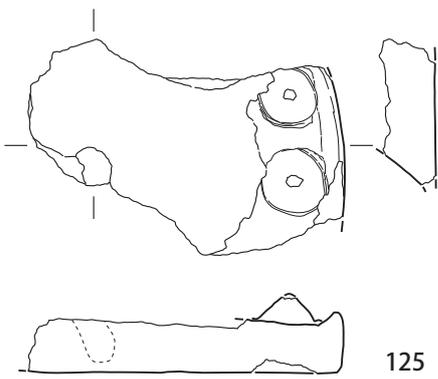
第 39 图 出土瓦 (29) -平瓦- (1/4)



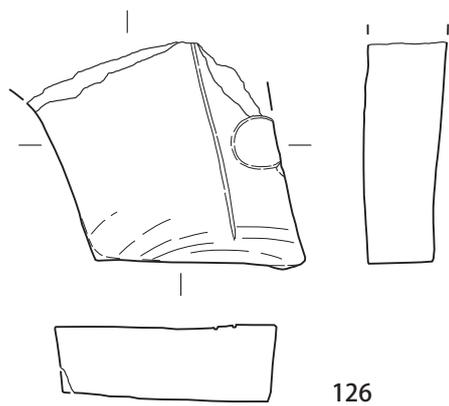
第40图 出土瓦(30) —平瓦— (1/4)



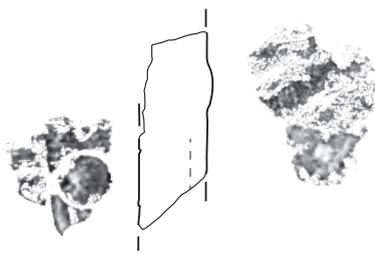
124



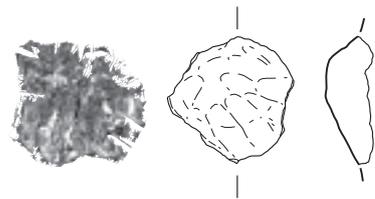
125



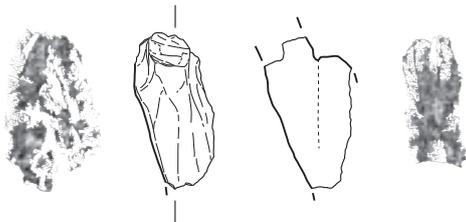
126



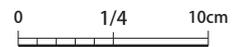
127



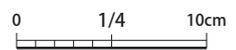
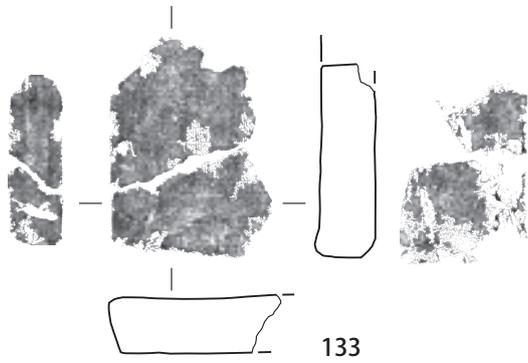
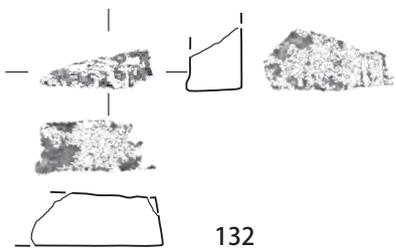
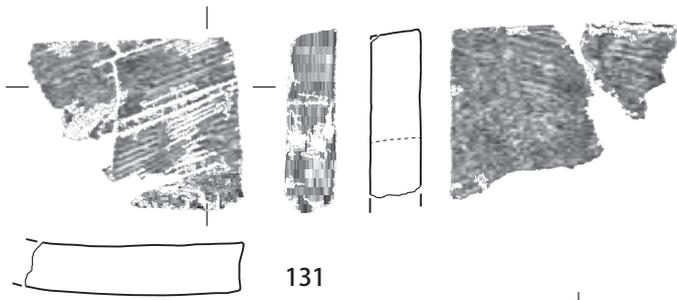
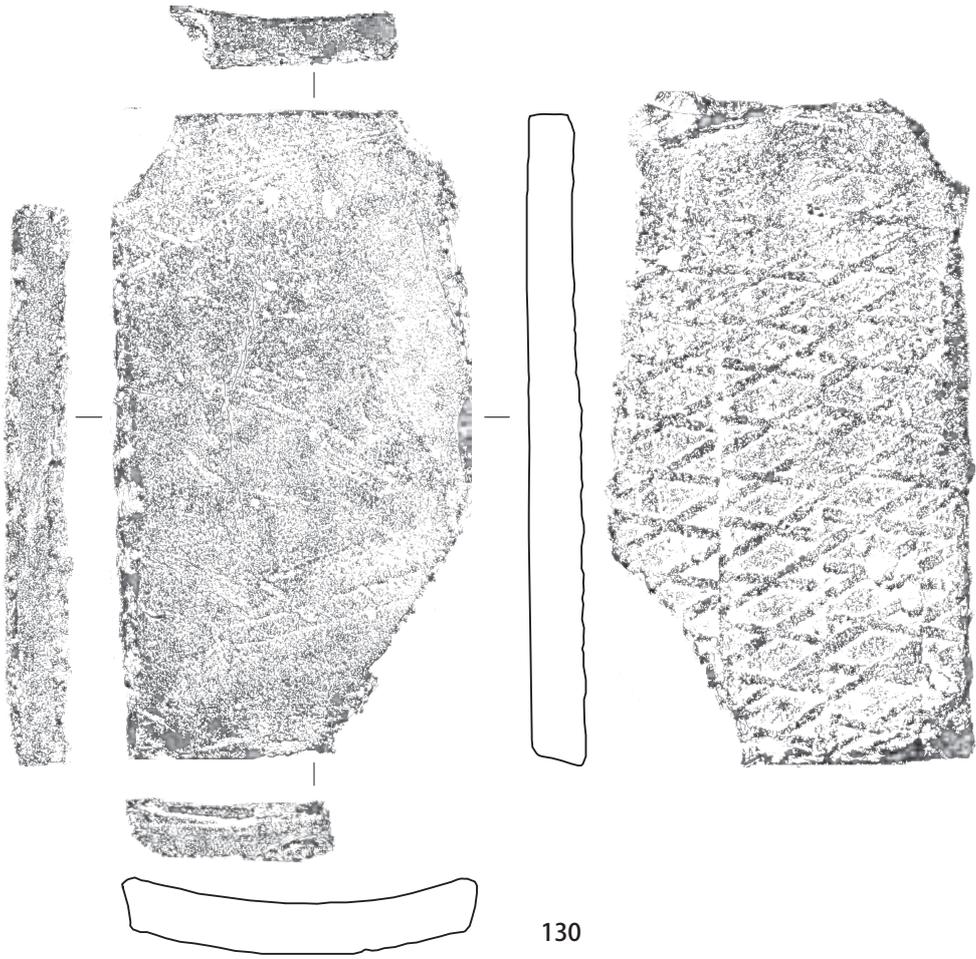
128



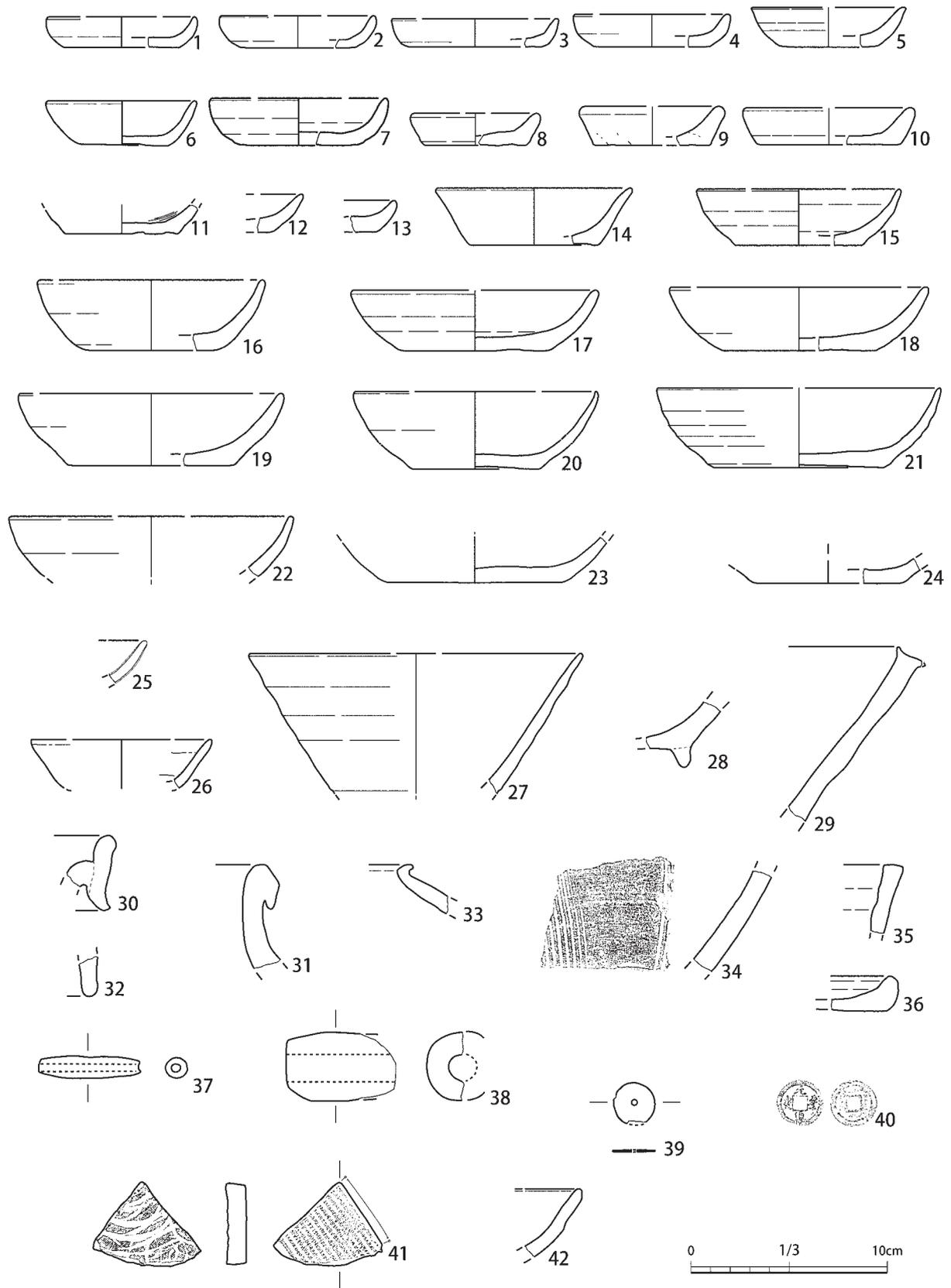
129



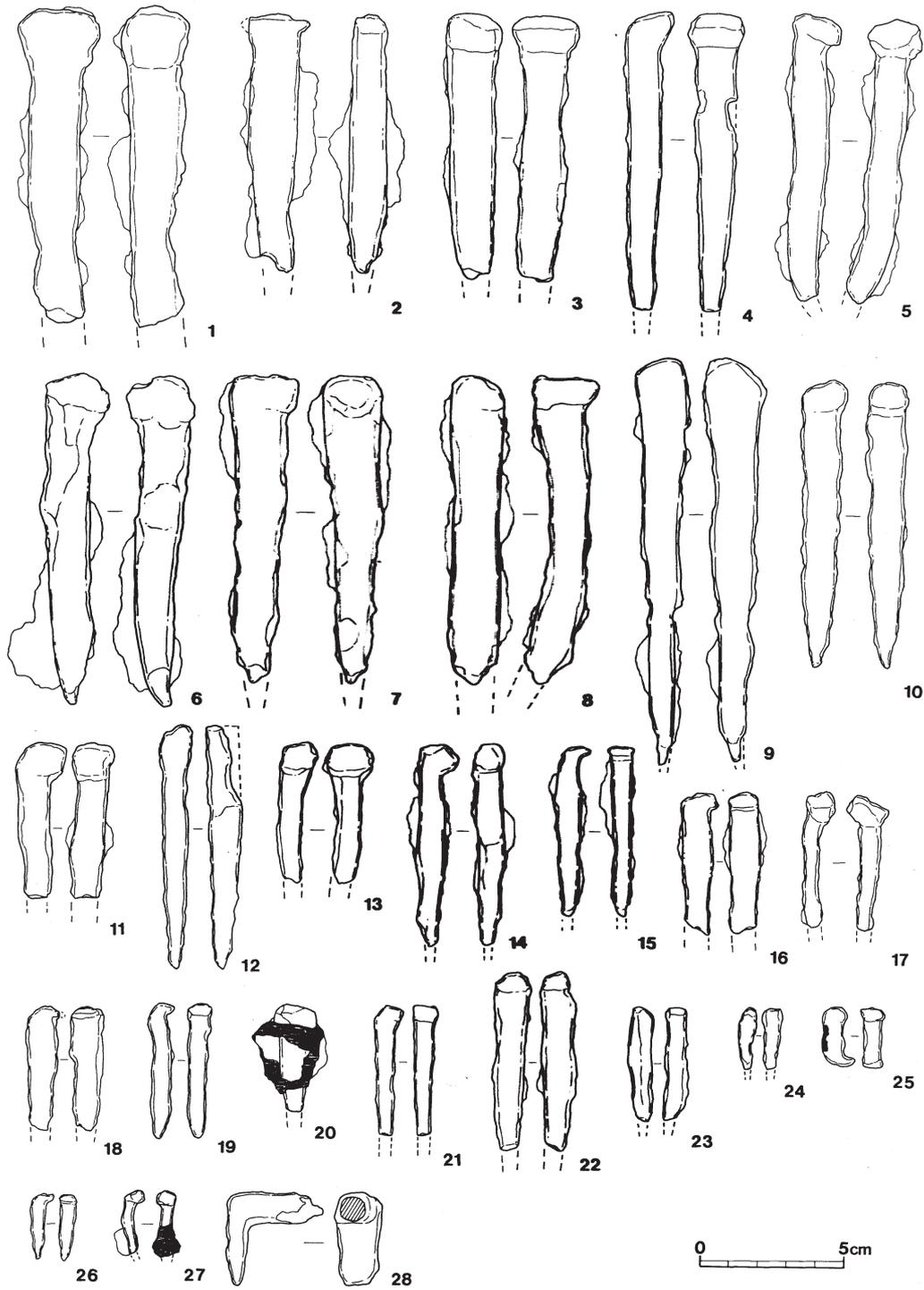
第41图 出土瓦(31) -鬼瓦- (1/4)



第42图 出土瓦(32) —道具瓦— (1/4)



第43図 瓦以外の遺物 (1/3)



第44図 鉄釘 (2/5)

「岩戸満願寺—満願寺境内遺構確認調査報告—」横須賀市教育委員会 1992年より転載

## 第IV章 考察

### 1. かわらけ・陶磁器—鎌倉出土品との比較を通じて—

押木 弘己

はじめに

今回の報告において、図化点数が瓦に次いで多かったのは、素焼きの土器皿「かわらけ」であった。資料個々の特徴については第三章2(1)を参照されたいが、再実測時における筆者の観察所見として、第一に器形・胎土の特徴は鎌倉の出土品と非常に近似していることが指摘できる。鎌倉からの搬入品とまでは断言できないが、地理的距離を考えれば、その供給元が鎌倉と同じであったと考えることに支障はないように思える。したがって、満願寺跡出土かわらけの特徴から読み取れる編年的位置付けには、鎌倉における先行研究の成果が適用できるものとする。本論では、鎌倉のかわらけ編年を念頭に置きながら、これと対比させる形で満願寺跡出土かわらけの年代的な位置付けを試みたい。なお、満願寺跡出土かわらけについては、形態的特徴から14世紀代という年代観が既に示されている〔中三川2015〕。

鎌倉の「かわらけ」編年

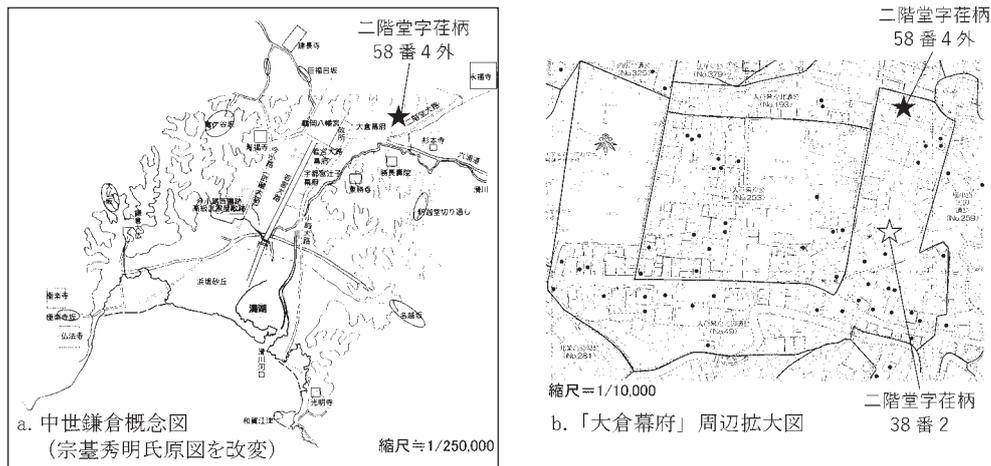
近年、鎌倉のかわらけ編年の研究史がまとめられた〔松吉2016〕。これまで、当地の第一線で遺跡調査・研究に携わってきた先学諸氏によって様々な編年案が示されてきたが、キーポイントに置かれる出土例は共通しており、土器型式の変遷自体は概ね共通認識が得られている。どちらかといえば型式学的検討が先行したため、形態的に特徴のある資料が重視される傾向が強く、結果的に層位や一括性への配慮を欠いていたという批判もある。とはいえ、伴出する陶磁器類の特徴を踏まえた編年であることは各成果とも共通しており、それは精緻な到達点を迎えてもいる〔宗墓2019〕。同一地点における一括出土例を序列化した近年の成果〔鎌倉かわらけ研究会2016〕は、伴出陶磁器を含め数量分析も取り入れており客観性を高めたが、層位・遺構間切り合いによる直接的な新旧関係は把握できず、あくまでも型式学による先行研究が土台にあった上での成果である。また、手づくねかわらけが消失した以降の、鎌倉後期～南北朝期の型式変化についてはカバーしておらず、研究上、同一手法によって後続するかわらけ編年を構築する必要性も生じた。

中世都市鎌倉において、武家政権が所在した期間に当たる鎌倉時代初期～南北朝・室町時代前期＝12世紀後葉～15世紀中葉の土地利用が連綿と見て取れる遺跡は、実をいうと非常に少ない。鎌倉時代初期の遺跡は頼朝御所や鶴岡八幡宮・永福寺などが置かれた大倉エリアに主体があり、若宮大路界限→海浜部という順で都市域の拡大が鎌倉時代を通じて段階的に進み、南北朝期に入ると再び大倉エリアを中心とする散漫な土地利用へと後退することが、発掘成果の蓄積により確認されている。つまり、頼朝～足利公方の段階を通じた土地利用が広く確認できるのは大倉エリアのみということになり、そのなかでも、後世の削平を免れて層位的に土地利用の連続性を見出せる地点、とりわけ良質な出土品から遺物様相の変化を把握できる調査例はきわめて限られている。

以下、その希少な事例の一つ、大倉幕府周辺遺跡群・二階堂字荏柄58番4外地点〔原ほか2002〕の成果から中世鎌倉における遺物変遷を概観し、満願寺跡出土かわらけの参考としたい。

大倉幕府周辺遺跡群（二階堂字荏柄58番4外）の遺物様相

第45図には、当該地点の位置を示した。a図からは、大倉幕府（頼朝御所）・鶴岡八幡宮・勝長寿院・永福寺など、頼朝期に建てられた幕府重要施設と至近にあることが分かる。b図の★が当該地点、☆は先述した一括出土例の検討対象となった字荏柄38番2地点である。双方、南北に約160m離れている。☆地点に南接する市道は東方の永福寺に向かう「二階堂大路」の名残とされ、これに近い数地点で道路



第45図 鎌倉市大倉幕府周辺遺跡の位置

側溝と思しき大型溝も確認されている。

第46図が字荏柄58番4外地点の出土かわらけで、図面上方から上層出土＝新相かわらけの順で配列している。年代観は、報告書〔原ほか2002〕の所見に基づいている。かわらけと同一層から出土した陶磁器類については図示せず、説明文のみを掲げた。

鎌倉かわらけの編年では、手づくね製品の消失と、「薄手丸深」など内湾基調で大・中・小の三法量に分かれる期間の年代観が課題として残る。前者は13世紀代のどこまで下らせることが妥当なのか、後者については14世紀代をほぼ完全に含み込む現行の捉え方では長期間に過ぎないのか、という論点の検証を要しよう。特に後者について、鎌倉期から南北朝期という時代の転換期も内包するため、なぜ政治体制の変革期にかかわり様相に大きな変化が生じなかったのか、その理由についても説明を尽くす必要があるように思う。

#### 満願寺遺跡出土かわらけとの比較

第43図に掲げた満願寺跡出土かわらけは小片が主体であるため、推定復元径に不確定要素は残るが、内湾で身深となる器形の資料が主体となり、これに外傾・外反器形の資料（8～10・14など）が少量加わることが指摘できる。鎌倉の例（第46図）に照らすと、前者はⅢ～Ⅳ期に、後者はⅣ期以降に位置付けることができる。後者については、8・9に「近世墓」出土との注記があることから、戦国時代～近世まで下る可能性も考えておきたい。

上述した比定年代の課題は残しつつも、鎌倉編年との比較の結果、満願寺遺跡出土かわらけは14世紀代に主体を置くのが妥当、というのが筆者の現状認識であり、先行研究〔中三川2015〕を追認する結果となった。満願寺の創建期とされる12世紀末～13世紀初頭とは年代的に大きな差があり、出土瓦より後出的様相が強い。14世紀以降の満願寺において、かわらけを用いた法会などが行われたことの微小な証跡といえるかもしれない。無論、トレンチ下層など境内の地下に、創建段階の土器・陶磁器が遺存している可能性は十分に想定できる。近隣の満願寺東横穴墓群では手づくねかわらけなど13世紀代と見なせる資料が出土しているというので、岩戸地区を広く見渡した考察も、今後の課題である〔中三川2015〕。

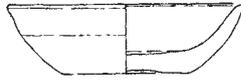
再三述べているように、満願寺遺跡出土かわらけの胎土には鎌倉出土のものと明確な差を見出すことができない。付表2でBとした胎土はⅡ期以降の鎌倉で最も多いもので、量産化＝大量需要にともない、鎌倉周辺の各所で採掘された粘土が十分に精選（水簸）されないまま使用されたと考えられる。今回は筆者の経験に基づく肉眼観察の所見に依拠したに過ぎないが、将来的に満願寺遺跡跡出土かわらけについて理化学的分析を施すことで、鎌倉との近似性（または相違点）、延いては生産の実態について一歩

IV期（第1面上）14c末～15c代



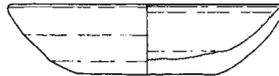
- ・ロクロかわらけの・外反・厚手化が進行
- ・瓦質土器の火鉢・風炉が目立つように
- ・碗皿類は瀬戸窯製品が主体
- ・常滑甕は8型式まで

IV期（第1面下～第2面）14c末～15c代



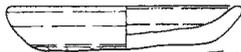
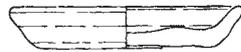
- ・かわらけはロクロ製品のみ、外反・厚手化する段階
- ・瀬戸窯製品の碗皿が存在感を増す→貿易陶磁器は減少傾向に

III～IV期（第2面下～第3面）14c前～末葉



- ・手づくねかわらけが消失、かわらけはロクロ製品のものに
- ・龍泉窯系青磁の蓮弁文碗+坏皿類（細蓮弁文碗をともなう時期）
- ・白磁口禿碗・皿+口禿型押文皿
- ・常滑甕は6a型式まで

II～III期（第3面下～第4面）13c後葉



手づくね



手づくね

- ・龍泉窯系青磁の幅広蓮弁文碗が出現、坏皿類の大型品（盤）も
- ・白磁口禿碗が出現

II期（第4面下～第5面）13c中～後葉



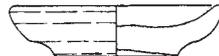
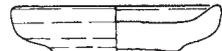
手づくね



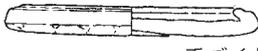
手づくね

- ・龍泉窯系青磁の劃花文碗・皿が主体、同安窯系は減少
- ・白磁・青白磁は小物類が中心に
- ・常滑甕は5型式まで

I～II期（第5面下～第6面）13c前～中葉



手づくね



手づくね



手づくね

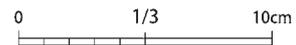


手づくね



手づくね

- ・龍泉窯系青磁の劃花文碗・皿が主体、同安窯系も定量
- ・白磁・青白磁も散見
- ・碗・壺+小物類



第46図 鎌倉におけるかわらけ変遷の一例

(大倉幕府周辺遺跡・二階堂字荏柄58番4外地点：原ほか2002を基に作成)

踏み込んだ検討に繋ぐことができるように思う。膨大な量が消費された都市鎌倉のかわらけが、どのような生産・流通の過程を経てもたらされたのか。鎌倉を支えた生産領域や、流通・貢納体系などの問題にも通じる情報が、小さな土器片には含まれているかもしれない。

#### 陶磁器について

細片化した資料に限られ、全体器形を復元・凶化できた資料は皆無であった。第Ⅲ章で述べたように14世紀以降の製品が主体を占めるなか、唯一渥美窯産の短頸壺（第43図33）は鎌倉時代の前半以前に遡る可能性をもつ。渥美窯における壺・甕類の生産は13世紀前葉頃までには終焉するようで、鎌倉での出土状況も、概ねこれを裏付ける内容となっている。よって当資料については満願寺の創建に近い生産年代を想定して良いだろう。

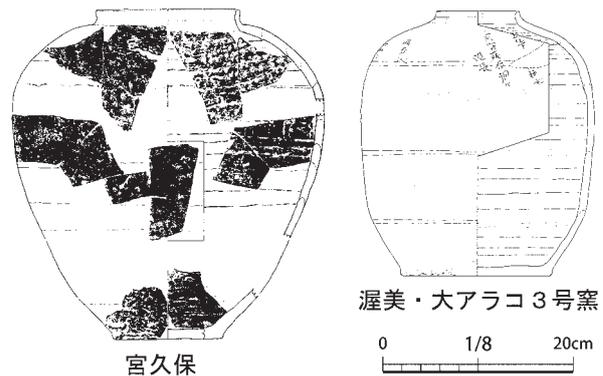
筆者自身、鎌倉において渥美窯産の短頸壺に直に接した経験がないので正確な評価は難しい。比較対象としての的確ではないかもしれないが、神奈川県下では綾瀬市の宮久保遺跡で「藤原」銘の渥美産短頸壺が出土している（第47図左）。右図は渥美の大アラコ3号窯の出土品で〔安井2012〕、焼成前の刻銘から藤原顕長が三河守に在任していた12世紀中葉の作とされる。宮久保の短頸壺も同様の作例と考えられ、渋谷氏関連の居館跡とも推定される同遺跡の建物群が、この頃まで遡る根拠とされている〔國平1988〕。

細片であり口頸部の屈曲具合も異なる満願寺跡の短頸壺であるが、満願寺の時代的特性を考える上で貴重な情報を含んでいるように思える。

以上、雑駁な論述に終始したが、かわらけ・陶磁器について鎌倉の視点からコメントを付した。今後も研究が進展することを期待して、結びとしたい。

#### 【参考文献】（第Ⅲ章2（1）と共通）

- 國平健三 1988 「綾瀬市宮久保遺跡出土の中世遺物について—「藤原」銘短頸壺との遺物群構成—」『東国土器研究』第1号 東国土器研究会
- 横須賀市教育委員会 1992 『岩戸満願寺』横須賀市文化財調査報告書第25集
- 原 廣志ほか 2002 「大倉幕府周辺遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書18（第1分冊）』鎌倉市教育委員会
- 安井俊則 2012 「第2章第1節15 大アラコ古窯跡（田原市）」『愛知県史 別編窯業3 中世・近世常滑系』愛知県
- 中三川 昇 2015 「三浦半島東岸中部の古代末～中世初期遺跡群について—三浦氏本貫地とその周辺地域における遺跡群の様相—」『考古論叢神奈河』第21集 神奈川県考古学会
- 鎌倉かわらけ研究会 2016 『鎌倉かわらけの再検討—大倉幕府周辺遺跡の一括資料の分析から—』鎌倉かわらけ研究会・科学研究費補助金「平泉研究の史料学的再構築」
- 松吉里永子 2016 「鎌倉かわらけ研究史」『鎌倉かわらけの再検討』（上掲書）
- 宗基秀明 2019 「鎌倉出土かわらけの系譜と編年—東国社会の変質と中世の成立（後）：かわらけの編年と中世社会」『鶴見大学紀要』第56号 第4部 人文・社会・自然科学編 鶴見大学



宮久保  
第47図 渥美窯産短頸壺の事例  
（左：國平1988、右：安井2012より転載）

## 2. 鬼瓦

高橋 香

はじめに

鬼瓦は屋根を飾る瓦の中で最も目立つ瓦である。大棟の両端、降り棟、隅棟の先端を飾り、屋根を風雨から守るといった実用的な面とともに、建物全体の構成を印象づける意義のある瓦である。鬼瓦のルーツは古代からはじまり、大きさなど規模から屋根構造を考える判断材料となる。一般的に「鬼瓦」は、蓮華紋、鬼面紋の2種の文様意匠に大別され、そのうち鬼面紋は、「平城宮式」「南都七大寺式」の2タイプに分類される〔毛利光 1980〕。各型式には特徴があるが、鬼瓦の周縁にそって珠文帯を施すタイプは「南都七大寺式」に相当し、九州地方で展開する「大宰府式」鬼瓦も同様に珠文帯をもつ。南都七大寺式の流れを組む鬼瓦が、平安京の時期になるとより鬼面を盛り上がらせ、眉に振り表現するなど、範から抜き出した後にヘラなどで調整を加え、より立体的な鬼瓦へとようになっていく。ところが、10世紀代にはいと、とたんに口の上唇がさがり、迫力にかけたユーモラスな顔になっていくという変化がよみとれる。今まで天を威嚇するようないかつい表情であったのが、とたんにだらけた表情へと変化することが全国的にみられる傾向である。

相模国内において、瓦を使用する建物が10世紀代以降減少傾向となり、瓦の使用が認められるのは永福寺の建立前後からで、鎌倉を中心に相模国内各所で瓦葺き建物が展開する。軒瓦の文様意匠の展開については相模国内を概観している報告はあるが、鬼瓦についてはこれまでになかった〔小林・高橋 2019〕。ここでは、相模国内にみられる鬼瓦を紹介した後、そのルーツはどこにあるのか、また東国内に展開していく鬼瓦についても若干ふれることとする。

### 1. 満願寺遺跡の鬼瓦について

満願寺遺跡で出土している鬼瓦は、範によるものではなく手づくりによる製作である（第41図）。事実記載でも述べているが、粘土板を数枚重ね合わせて鬼瓦の本体を成形し、珠文帯は沈線で区画を施した後、円筒状の工具を押印して珠文をつくる。粘土板の厚みは5.5cmである。珠文径の直径はおおよそ3.4cmで、周縁にそって押印していたのだろう。眼の表現も円筒状の工具による押印で表現され、眼の上半は眉毛状に粘土凸帯を貼り付け、ナデにより成形している。その盛り上がった部分に沈線でむかって左眉部分に11条、右眉部分にも11条の線が描かれている。固定装置は背面に把手が付くタイプで、若干背面をくぼませ、把手状に粘土板をはりつけ、ここに紐などをくくりつけて固定する。胎土は精良で白色粒子を含み、やや白色がかったあまい焼成である胎土のものとやや暗褐色に焼成された胎土のやや粗いものの2種があるようだ。珠文帯の状況から、125は範による型づくりの可能性が考えられる。このことから手づくりによる鬼瓦と範型による鬼瓦の2種が少なくとも存在していると考えてよいだろう。

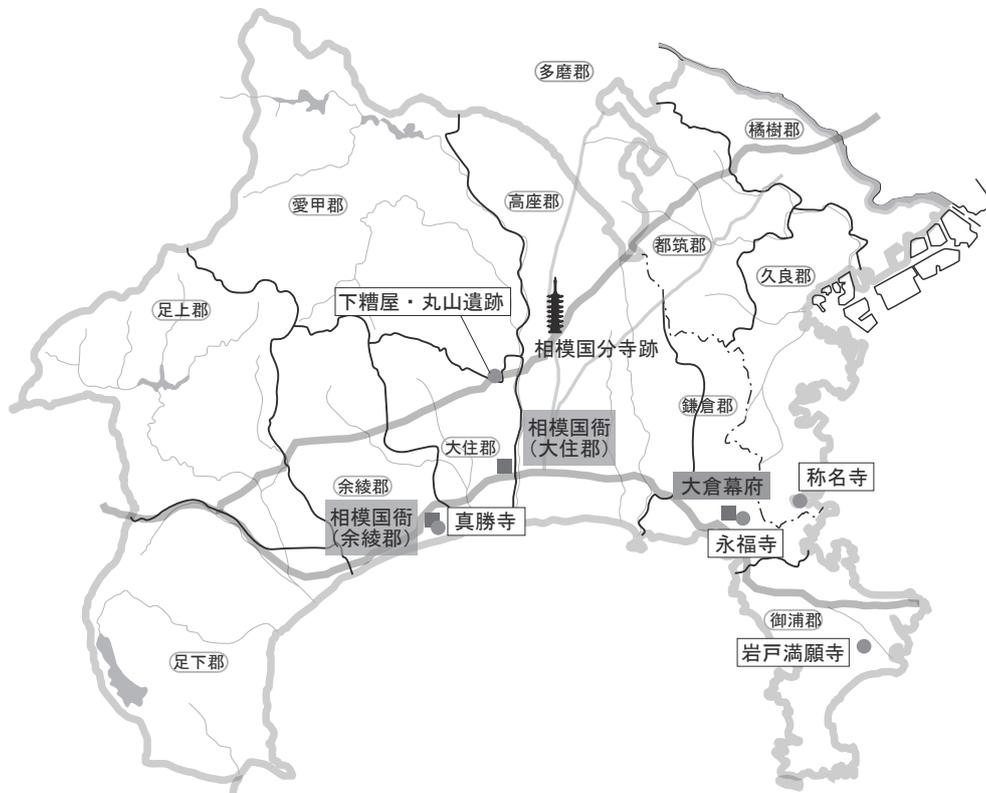
では、鬼瓦の製作時期はいつぐらいであろうか。製作技法からいえることとして、範による型作りから手づくりに変化する時期が、おおよそ鎌倉時代前半頃との見解がある〔山本 1998〕。転換期として挙げられる事例として、法隆寺夢殿の再建期鬼瓦で仁平2（1152）年または永萬元（1165）年に作られたとされる鬼瓦は範による型づくりだが、法隆寺大湯屋の瓦は手づくりである。大湯屋の瓦は平安時代と考えられているが、法隆寺東院の南門付近から出土している鎌倉時代前半と考えられる鬼瓦は手づくりである。平安時代末から鎌倉時代前半頃、範による製作から手づくりへの変化をみることができ、鎌倉時代後期になると完全な手づくりとなり、より立体的な鬼瓦が出現するのである。

## 2. 県内の鬼瓦について～永福寺鬼瓦との比較～

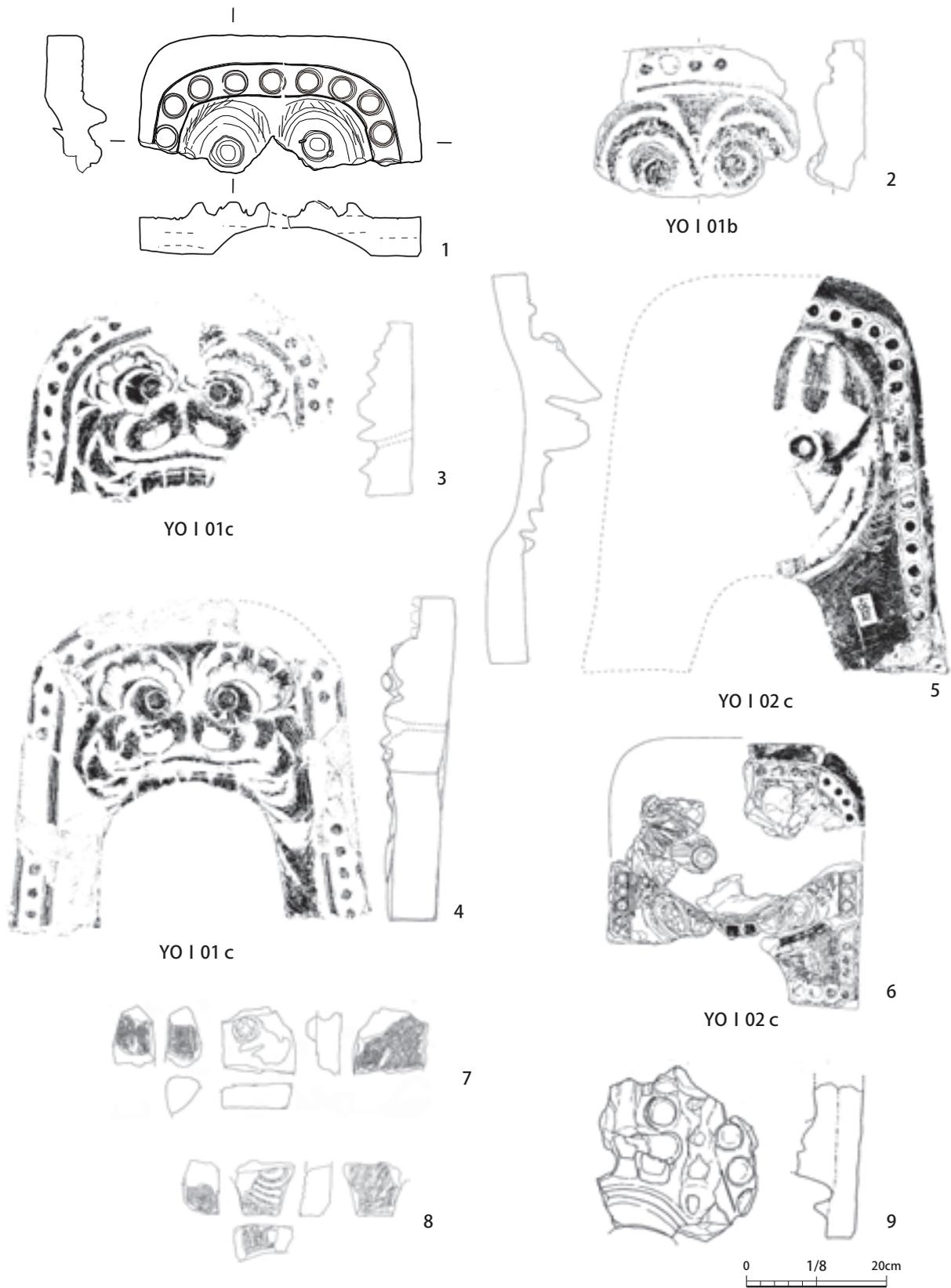
次に、神奈川県内で確認されている鬼瓦の類例について4事例について述べる（第49図）。

永福寺跡（鎌倉市） 永福寺は鎌倉市に所在する源頼朝が創建した寺院である。報告書によれば、4型式13種の鬼瓦片が出土している〔原2002〕。胎土が良土質なもの（YO I類）と粗悪なもの（YO II類）があるとし、範のつくりによるもの（01）と部分的に範を用いた手づくりのもの（02）として分類し、特大、大、中、小があるとした。屋根構造の部位によって作り分けられたと考えられ、製作地としてYO I 01、02は鬼面文の作りが異なるが、良質な胎土であることからI期主要瓦、II期水殿瓦跡の出土事例と類似するとし、ともに同じ生産地を想定している。YO I 01は第49図3・4に図示しているもので、範による製作、眉の部分へらを調整し、眼の部分を引きたつように放射状に調整している。固定装置は釘穴によるものだろうか、鼻の孔が貫通している。抉り部分に歯が表現されていることから軒丸瓦を咬むような表情で、牙は上を向き、巻髪表現が脚部分に凸状に施される。葺き脚部分が高いのは、大棟などの熨斗となる平瓦を多く積む部位に葺いたものと考えられる。02は、範の手づくりとして分類され、満願寺遺跡と同様、珠文帯の珠文は円形のスタンプ状のものを押印し、巻髪は沈線で表現されている（第49図5・6）。裏面もくぼませていることから把手などがとりつく形状と想定される。形状から、YO 1 0 2 cは降棟や隅棟用に相当する。手づくりで作成された鬼瓦の脚部分に「守光」「文長」の2種3型式のスタンプが押印がされており、平・丸瓦ともに押印されているスタンプと共通することから、瓦工場の生産体制を解明するヒントとなる<sup>(1)</sup>。

下糟屋・丸山遺跡（第6地点）（伊勢原市） 下糟屋・丸山遺跡は、伊勢原市に所在する遺跡で中世城郭と考えられている丸山城である。堀とした遺構から鬼瓦2片、中世遺構外から1片が確認されている。堀から出土している鬼瓦片は、半円状に凸出した部位があるが、これが珠文帯に相当するののか眼に相当するののか不明である。報告では「円形の押し付け」とあることから手づくりの部類にはいる。遺構外か



第48図 相模国鬼瓦出土遺跡



1. 満願寺遺跡 2~6. 永福寺跡 7・8. 下糟屋・丸山遺跡 9. 真勝寺

第49図 相模国の鬼瓦

ら出土したとする鬼瓦は葺き脚の右側部が残存するもので、表面、側面はヘラナデにより調整されており、表面はヘラ状工具によって同心円を描いている。沈線はかなり深めにかかれており、髭を巻き上げた表現をする部分と考えられる、とある。しかし、この脚部分に巻きひげを表現するのは古代に多い表現で、中世では永福寺、法隆寺の大湯屋の大棟みられるものの少ない傾向にある。

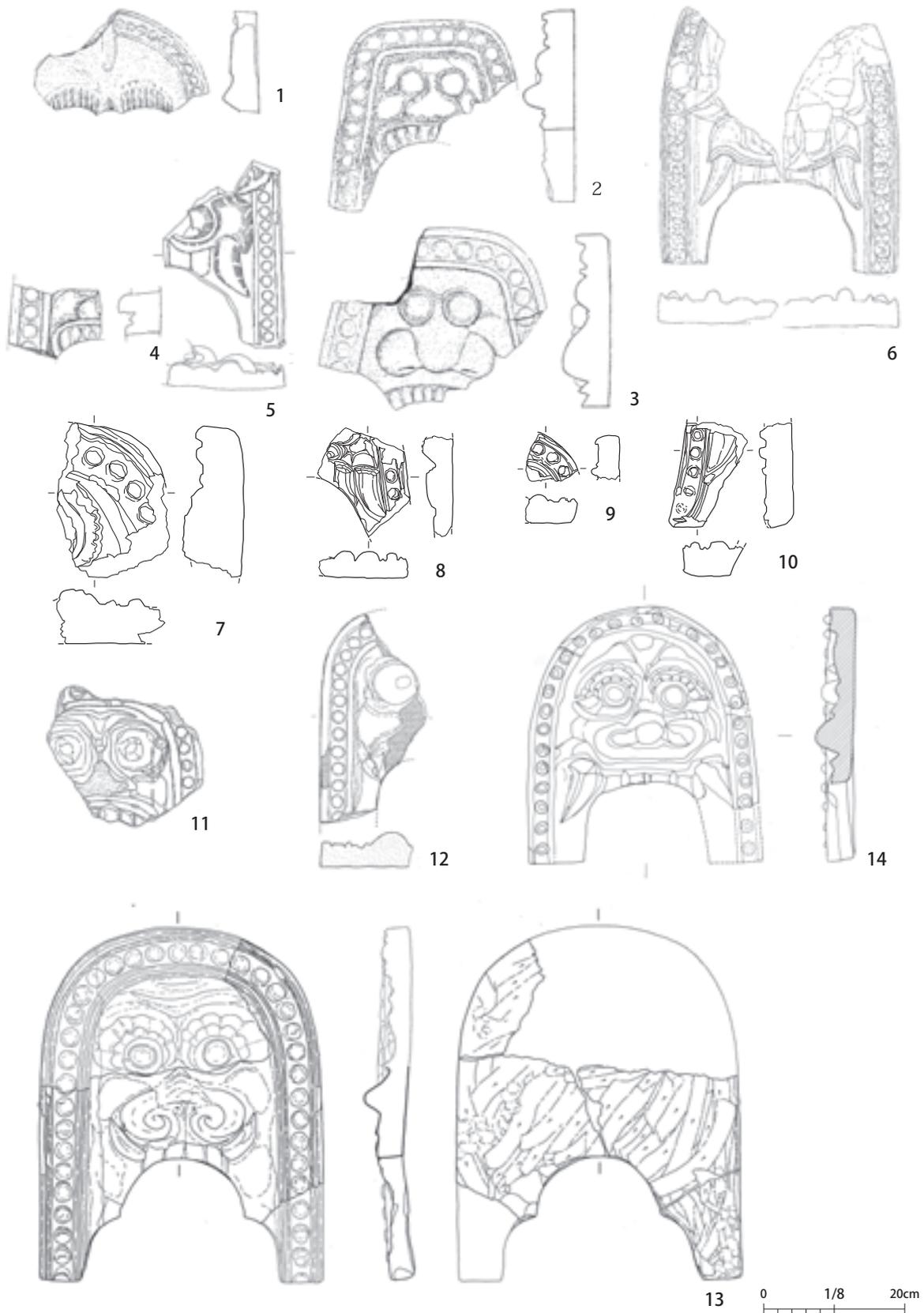
真勝寺（大磯町） 真勝寺は、大磯町に所在する行基創建といわれる寺院で、12世紀以降は六所神社の別当寺となったとされる<sup>(2)</sup>。治承4（1180）年富士川合戦の帰途に源頼朝が論功行賞を行った地とされている。中世瓦は採集瓦であるが、数点確認されており、軒平瓦は陽刻上向き剣頭文、軒丸瓦は左回り、右回りとある。鬼瓦は、珠文帯と鬼面が若干残り、珠文と眼、鼻の部分が残存する資料である。珠文は円形の工具を押印する手づくりによる成形である。

史跡称名寺境内（横浜市） 史跡称名寺は横浜市に所在する、鎌倉後期に創立された真言律宗系の寺院で、金沢北条氏の菩提寺である。13世紀後半～14世紀前半の永福寺Ⅲ期の時期の瓦の特徴に類似し、鬼瓦片は1点確認されている。珠文帯部分の珠文が2か所残存するもので、沈線などの区画があるかは小片の為不明である。厚さは2.3cmとやや薄手の手づくりである。胎土は微妙な砂粒を含み、色調は灰白色である。1点のみの出土であるため判断しかねるが、円形の工具を押印した可能性が高いだろう。

### 3. 満願寺遺跡の鬼瓦のルーツは～相模国の鬼瓦のルーツは～

満願寺遺跡から出土している鬼瓦は、①珠文帯をみると押印していること、②固定装置が把手のタイプの鬼瓦であることから、永福寺でみられる筈による鬼瓦より若干新しい要素が含まれている。となると、相模で最初に導入された鬼瓦は永福寺の鬼瓦であるが、このモデルとなった鬼瓦はどこ資料であろうか。院政期以降、瓦が使用される建物や生産地が限定的になるため、参考になる地域が限られてくる。その中で、構成要素、眼の表現などを参考にすると、鳥羽離宮跡の金剛心院跡の鬼瓦があげられる。

鳥羽離宮は、応徳3（1086）年の中頃、白河天皇による院政が開始される直前に着手され、白河天皇、鳥羽天皇によって約70年間継続された離宮である。院政期の鬼瓦は、筈により製作された鬼瓦で、珠文帯は界線も沈線ではなく凸線で表現され、眼や眉、ほほ、鼻の部分が全体的に突出している。鳥羽離宮の瓦生産は、鳥羽離宮南殿及び東殿は播磨、尾張（東殿のみ）が担い、11世紀後半から12世紀後半まで供給されたと推定されている。金剛心院から出土している鬼瓦の生産地は播磨であり〔上村ほか2017〕、確実な同筈の鬼瓦は確認されていないが、林崎三本松瓦窯、神出窯から鬼瓦が出土している。金剛心院も林崎三本松瓦窯の生産地出土の鬼瓦も筈による製作で、特に林崎三本松瓦窯から出土している鬼瓦の特徴が永福寺跡出土鬼瓦に類似している（第50図13）。主観的な判断にはなるが、突出する眼と眼の周辺を筈の抜き取り後にヘラ状の工具等をもちいて内側から外側へ放射状に調整している様は近いのではないだろうか。また、牙の向きも他の鬼瓦は下向きが多い中、上向きであるところも、林崎三本松瓦窯で作成された鬼瓦を鳥羽離宮でみて永福寺所用瓦にイメージしたのではないだろうか。ただ、葺き脚部分の形状が異なっており、これは屋根構造の違いの相違であると考えられる。満願寺遺跡の鬼瓦は、永福寺より多少遅れて製作にはいったものと考えられるが、同様に鳥羽離宮跡などにみられる鬼瓦の特徴とはまた異なる。眉部分に肉付けさせて沈線を施す意匠は、播磨にも尾張にもみられない。八事裏山瓦窯の瓦の供給があることから、尾張方面からのモデルを探してみたが、該当しそうな個体は残念ながらみられない。隣国である伊豆や駿河方面を概観しても、同様な事例をみつけることはできなかった。駿河では天神洞遺跡から鬼瓦の出土事例があるが、筈づくりの鬼瓦で、陶器質の焼成とあることから尾張方面を産地とする鬼瓦の可能性が高い〔池谷2019〕。むしろ、永福寺跡で出土している手づくりの鬼瓦に沈線による表現がみられることから、永福寺からの影響を考えることも可能ではないだろうか。また、筈型の可能性がある鬼瓦のルーツも、残存部位が狭い為、多くを追求することは困難であ



尾張：1～3. 社山古窯 4. 権現山古窯 5. 吉田第2号窯 6. 萱野古窯 駿河：7～10. 天神洞遺跡  
 三河：11・12. 幸田窯百皿古窯 播磨：13. 林崎三本松瓦窯 14. 鳥羽離宮跡

第50図 播磨国・尾張国・三河国・駿河国の鬼瓦



1・2. 城の内遺跡 3. 岡水川神社 4. 浅見山I遺跡 5. 般若寺 6. 上古寺水川神社遺跡 7. 慈光寺  
8. 伝万福寺跡 9. 青鳥城跡 10・11. 十社神社 12・13. 十三坊廃寺

### 第51図 武蔵国の鬼瓦

る。今後、脚部などの部位が出土することにより屋根構造の判断も可能となる為、資料の増加をまち再検討したい。

やや緩い表情から我々がイメージする荘厳な鬼瓦に近い鬼瓦になるのは、鎌倉時代後期にはいつてからといわれ、鬼瓦製作に関して変化があったと推測されている。瓦範の製作には、官営ないし寺営の工房に属する画工や絵師などが関与しているとされ、その後ろだてがなくなったことで緩い鬼瓦に変化したといわれている [山本 1998]。範の作成には、統制された技術系統のもと製作されたものであったのが、瓦づくり職人の手にうつり、見様見真似でつくようになっていった為、稚拙な表情の鬼瓦が一時展開するのであろう。鎌倉後期になると鬼瓦の表現がより盛り上がり、下顎が表現されるようになる。顔面部を載せる地板がアーチ状から台形に変化し、珠文も大粒になる。鬼瓦はやがて「鬼師」とよばれる鬼瓦専門工人集団による製作となり、より立体的な威厳のある鬼瓦が製作されていく。また、鬼瓦の変化は屋根構造の変化にも起因しているという。8世紀後半頃から棟を高く積む傾向があり、野屋根構造が採用されるとさらに屋根勾配がきつくなり、棟の高さも高くなっていく構造になる。屋根の骨組みの上にさらに材を用い、もう一つ別の屋根を乗せると屋根は全体に高くなり、威圧感がでるような建物となる。よって、隅棟や降棟を二段構成にして、高くなりすぎてしまった棟の高さを逡減する構造が編み出された。それによって棟先をとめていた鬼瓦は、上段部分稚児棟に一つ（二ノ鬼）、棟端に一つ（一ノ鬼）、大小の鬼瓦が葺かれる構造となる [山本 1998]。二ノ鬼の出現については、12世紀後半の絵画資料から判断されることから、院政期頃には大小さまざまな鬼瓦があったことがわかり、出土資料の中で大小があるのは理解できるだろう [島田 2007]。

## おわりに～古代から中世の鬼瓦～

永福寺に導入された鬼瓦は、やがて東国にも展開していく。県内の事例については先に述べたが、永福寺で採用された軒瓦の生産や流通と同様に北武蔵を中心に鬼瓦がみられ、「比企型瓦」と呼ばれる陽刻上向剣頭文軒平瓦に伴って分布する〔石川 2019〕。鬼瓦は、鬼面が簡略化されたとてもかわいらしい表情で、珠文帯は円形状の工具を押印するもので、全体を巡らすのではなく脚部分のみ押印する。眼や鼻は手づくりで粘土を貼り付けて成形している。固定装置は不明であるが、鼻の孔部分が貫通していることからここから固定していたのであろう。近年の成果として、城の内遺跡から永福寺の鬼瓦 Y00 I 01 式が出土しており〔石川 2022〕、鼻と上歯部分の個体がみられる。この資料の他、表面が無文の鬼瓦も出土している。城の内遺跡では永福寺 I 期の軒丸瓦、平・丸瓦がセットで確認でき、武蔵国内では最多の出土量をほこる。これまでに、水殿瓦窯が永福寺の生産窯として周知されているが、城の内遺跡の成果により、児玉地域で永福寺 II 期の瓦生産のみならず永福寺 I 期から永福寺にむけての瓦生産体制が担われてきたことが考えられている。

比企型軒平瓦と共伴とするユーモラスな鬼瓦の意匠であるが、挟り部分に軒丸瓦がおさまるような円形ではなく、やや幅広い楕円状を呈し、一見屋根のおさまりが悪そうにもみえる。形状から主観的ではあるが、尾張の濁池北古窯で出土している鬼瓦に類似するようにみえる。脚部分が長く、珠文帯が濁池北事例は周縁に沿って珠文が巡り、上歯が脚部に少しかかるところまで表現されている。この歯の部分を珠文と捉え脚の部分まで押印してしまった、のかは定かではないが、一見みて近い表現であることはあげておきたい。これらの鬼瓦は小型と中型の鬼瓦があり、おそらく二の鬼等に相当する鬼瓦であると考えられる。

装飾華麗であった鬼瓦も、一見眼を疑うようなデフォルメされた鬼瓦に変化する<sup>(3)</sup>。その変化が鬼瓦の範製作を担っていたコーディネーターがいなくなり、作業工程に変化が現れ、瓦工人が見様見真似で製作した世界であったのだろうか。鎌倉時代前期は、運慶や快慶を生み出した彫刻史上一大画期であった時代であったにもかかわらず、鬼瓦を「稚児鬼」と呼ぶようにこれまでとは異なりユーモラスな鬼瓦が全国的に展開する。山本忠尚氏は「鬼瓦の暗黒時代」と呼んでいるが〔山本 1998〕、その後「鬼師」の出現により鬼瓦専門工人が成立し、立体的な鬼瓦へと形状を変化させる。満願寺遺跡の鬼瓦は、まさにその過渡期の作品であり、「瓦師」がオーダー発注者である壇越の意見を聞きながら、試行錯誤した結果の鬼瓦であったと考えたい。

## 【註】

- (1) スタンプ「文長」は 2 種ある。長方形の押印で印長 6.2cm、印幅 3.3cm のもの、縦の短い長方形で、印長 4.2cm、印幅 2.7cm で「長」の画数を両社区した扁平な字体が特徴的としている。鬼瓦に押印されたスタンプは、軒丸瓦、丸瓦にも同じものが押印されている。
- (2) 竹澤氏編集の「神奈川の中世瓦集成図録」には軒瓦、平、丸瓦は掲載されているが鬼瓦は非掲載である。鬼瓦は現在、大磯町教育委員会に所蔵されている。資料掲載にあたり、大磯町郷土資料館國見氏にご尽力いただいた。
- (3) 例えば武蔵国内だと、武蔵国分寺は平城宮式の正統派の鬼瓦であるのに対し、10 世紀代になると中堀遺跡や大寺廃寺ではデフォルメされた鬼瓦が出現する。高橋 2022 「関東の鬼瓦」参照。

## 【参考文献】

- 愛知県 2016 『愛知県史 通史編 1 原始・古代』  
明石市文化・スポーツ部文化振興課 2017 『林崎三本松瓦窯跡群 発掘調査報告書』明石市文化財調査報告書 第 6 冊

- 池谷初恵 2019「伊豆・駿河・遠江」『中世瓦の考古学』中世瓦研究会
- 石川安司 2019「北武蔵」『中世瓦の考古学』中世瓦研究会
- 石川安司 2022「武蔵の永福寺式瓦 - 軒瓦と平・丸から -」『永福寺式軒瓦の成立と展開～瓦から探る中世寺院造営の背景～』第 11 回中世瓦研究会シンポジウム 中世瓦研究会
- 岩戸晶子 2000「奈良時代の鬼面文鬼瓦 - 瓦葺技術からみた平城宮式鬼瓦・南都七大寺式鬼瓦の変遷」『史林』第 84 巻 3 号 史学研究会
- 上村和直ほか 2017『平成 28 年度京都市埋蔵文化財出土遺物文化財指定準備業務報告書 烏羽離宮金剛心院出土品』京都市文化財研究所
- 神奈川県立歴史博物館 2022『源頼朝が愛した幻の大寺院 永福寺と鎌倉御家人 - 荘厳される鎌倉幕府とそのひろがり -』鎌倉市教育委員会 2002『鎌倉市二階堂国指定史跡 永福寺跡 国指定史跡永福寺跡環境整備事業に係る発掘調査報告書 - 遺物編・考察編 -』
- 桐山秀穂 2019「尾張・三河」『中世瓦の考古学』中世瓦研究会
- 神戸市教育委員会 2018『神出窯跡群発掘調査報告書』
- 小林康幸・高橋香 2019「相模」『中世瓦の考古学』中世瓦研究会
- 財団法人かながわ考古学財団 2010『下糟屋・丸山遺跡（第 6 地点）』伊勢原市都市計画成瀬第二特定土地区画整理事業に伴う発掘調査 かながわ考古学財団調査報告 260
- 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2002『烏羽離宮跡 I 金剛心院跡の調査』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第 20 冊
- 島田敏男 2009「10 降隅棟鬼瓦の①と納まり」『平城宮第一次大極殿の復元に関する研究 4 瓦・屋根』奈良文化財研究所学報第 80 冊 奈良文化財研究所
- 高橋香 2022「関東地方の鬼瓦」『鷗尾・鬼瓦の展開Ⅱ - 鬼瓦』第 21 回シンポジウム 奈良文化財研究所
- 竹中大工道具館 2017『千年の葺 古代瓦を葺く』
- 中世瓦研究会 2022『永福寺式軒瓦の成立と展開～瓦から探る中世寺院造営の背景～』第 11 回中世瓦研究会シンポジウム
- 永井邦仁 2014「愛知県における中世瓦の展開とその特徴」『研究紀要』第 15 号 愛知県埋蔵文化財センター
- 中三川昇 2015「三浦半島東岸中部の古代末～中世初期遺跡群について - 三浦氏本貫地とその周辺における遺跡群の諸相 -」『考古論叢 神奈河』神奈川考古学会
- 奈良文化財研究所 2021『鬼神乱舞 - 護る・祓う・鬼瓦の世界 -』
- 奈良文化財研究所 2022『鷗尾・鬼瓦の展開Ⅱ - 鬼瓦』第 21 回シンポジウム 奈良文化財研究所
- 原廣志 2002「第 4 章 出土瓦について」『鎌倉市二階堂国指定史跡 永福寺跡 環境整備事業に係る発掘調査報告書 - 置物編・考察編 -』鎌倉市教育委員会
- 前田清彦 2022「東海地方の鬼瓦」『鷗尾・鬼瓦の展開Ⅱ - 鬼瓦』第 21 回シンポジウム 奈良文化財研究所
- 毛利光俊彦 1980「日本古代の鬼面文鬼瓦 - 八世紀を中心にして」『研究論集』VI 奈良文化財研究所
- 横浜市教育委員会 2003『史跡称名寺境内旧伽藍跡確認調査報告書 - 平成 12・13 年度史跡称名寺境内旧伽藍跡確認調査に伴う埋蔵文化財調査報告 -』
- 山本忠尚 1998『日本の美術 鬼瓦』No.391 至文堂

## 【図版出典】

- 第 48 図 筆者作成
- 第 49 図 鎌倉市 2002、公財かながわ 2010、横浜市 2003 引用作成
- 第 50 図 桐山 2019 池谷 2019 上村ほか 2017 明石市 2017 引用作成
- 第 51 図 石川 2019.2022 桐山 2019 引用作成

### 3. 三浦佐原一族の本拠と造寺活動 —満願寺出土中世瓦群との関連から—

渡邊 浩貴

はじめに—鎌倉御家人の造寺活動—

神奈川県横須賀市岩戸に所在する臨済宗建長寺派の満願寺は、寺伝で寿永三年（1184）に相模国三浦一族の庶子佐原義連が創建したと伝承される古刹である。鎌倉期に天台浄土系の氏寺として佐原氏に外護され、十四世紀前半頃に明岩正因より臨済禅へ改宗されている（『新編相模国風土記稿』『檀林光明寺志』）。その満願寺境内からは1万点以上の瓦群が出土しており、中世瓦も多数含まれている。これらは、一部がすでに報告書に記載されるものの〔横須賀市教育委員会 1992〕、満願寺出土中世瓦群のなかでの瓦編年の作成、および量的変遷に関する基礎的検討は行われていなかった。この度、県費に基づく神奈川県立歴史博物館総合研究の助成を受けて実施した調査の結果、満願寺中世瓦群について、主に十二世紀末期から十三世紀初頭までに相模地域へ移入されたと考えられている尾張国八事裏山窯産を含む尾張産の可能性の高い中世瓦（蓮華文軒丸瓦、唐草文軒平瓦）が出土していること、などが明らかになっている。

ところで、鎌倉御家人が自身の本拠に、寺院をはじめ様々な宗教施設を造営し地域支配を進めたことはよく知られている。文献史学では、主として寺院を構成する寺僧集団の性格や寺領経営などの組織・運営論、あるいは法会・儀礼の内容分析を通じた地域社会における寺院の役割などの機能論が検討対象であった。勿論、これらの事情の背景に文献史料の残存という制約があるものの、上述の研究はすべて御家人たちが造営した寺院のソフトウェア（コト）の側面を明らかにしたものである。

その一方で、中世寺院そのものは多くのモノ資料から構成される。寺院内の各種堂塔や附属施設などの建築物では、礎石のための石材や建物の基幹部材となる木材、金属類や屋根を葺くための瓦類、各堂塔内には仏像や経典・仏具・荘厳具・調度品、寺領内には石塔・五輪塔・宝篋印塔・板碑などの石造物や経塚・巨樹などが配される。これらは寺院のハードウェア（モノ）をなす。寺院のモノ資料は、これまで建築史学・考古学・美術史学の分野で研究が重ねられているものの、文献史学側から御家人の造寺活動の実態—伽藍配置や瓦葺礎石建物の有無など寺院そのものの性格—への言及はほとんどされていない。考古学の編年観にすべて依拠して寺院を評価することには慎重になるべきだが、隣接諸分野の見解を参照しつつ、鎌倉御家人の造寺活動の実態を把握する試みは決して無駄な作業ではなからう。

佐原氏については、これまで基礎的研究が積み重ねられ、宝治合戦後の動向や鎌倉後期政治史における位置づけなどが明らかにされている〔鈴木 2000・湯山 2011・横須賀市 2012・高橋 2016a ほか〕。ただし、満願寺をはじめ本拠地周辺での動向や造寺・造仏活動の様相や、複数存在する佐原一族の各系統の活動基盤などについては、なお研究の余地を残している。そこで本稿は、前述の満願寺出土中世瓦群の観察で得られた考古学的所見を参照しつつも、文献資料や他の地域資料を用いて、満願寺を外護した三浦氏庶流佐原氏の鎌倉期における本拠地での動向を検討し、佐原一族の展開と造寺活動との相関関係を探りたい。同寺出土中世瓦群の特徴が、それを造営し外護した鎌倉御家人の政治的動向や本拠地での活動と、果たしてどこまでリンクし得るのかは未知数な部分が多いものの、佐原一族の造寺活動の実態、ひいては彼らが形作る本拠の性格とその展開まで踏み込んで検討を加えていく。

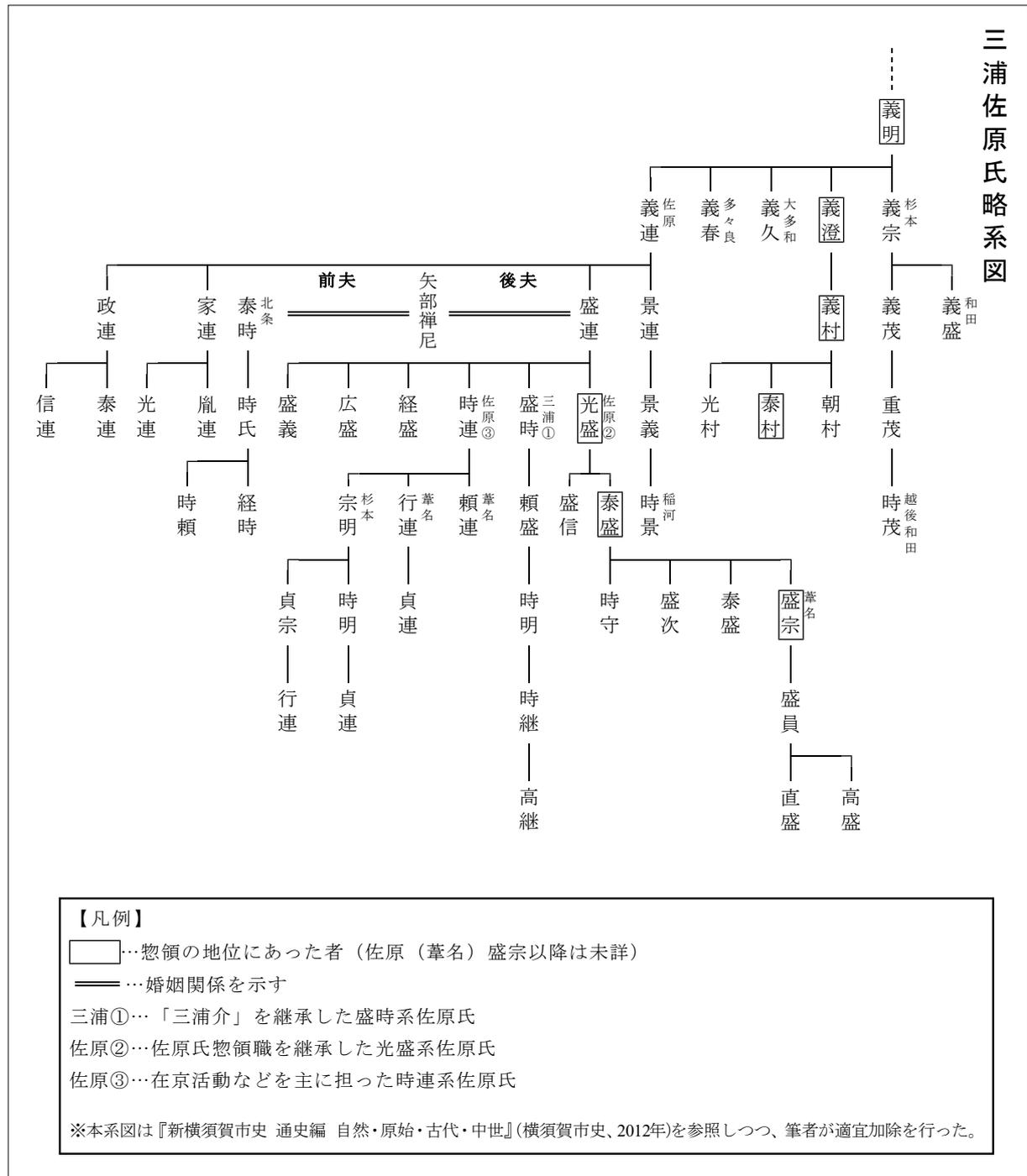
#### 1. 満願寺創建と佐原氏・北条氏

##### (1) 満願寺の創建をめぐる

そもそも佐原氏の氏寺満願寺の創建年代は、近世地誌『三浦古尋録』（作者加藤山寿、文化九年（1812）刊）に採録される寛文五年（1665）「満願寺総縁記」に、「抑此寺之本願者、当国之住人三浦為通之苗

裔三浦介義明之末子佐原十郎義連之建立也、尋其由来、寿永三年〈甲辰〉春源頼朝卿為平家追討、被相催関東諸軍勢、于時義連随彼催促將赴于西国、(中略)然後於岩戸邑建立一字之蘭若「修此寺建立大伽藍、於是号満願寺」と記される。縁起によれば、源頼朝に従軍する佐原義連が西国へ赴くに際して一堂を寿永三年(1184)に建立し、帰郷の後に大伽藍を建立して満願寺と号したことになる。

すでに指摘されるように、合戦への参加を契機に鎌倉御家人の本拠地で仏堂が建立される事例は珍しくない[横須賀市 2012]。奥州合戦に参加する北条時政が文治五年(1189)六月六日に伊豆国の本拠地に願成就院を建立したものと記録され(『吾妻鏡』、実際には文治三年に建立[秋山 2006 ほか])、同年七月十八日にも頼朝が戦勝祈願のため伊豆国北条での造寺を立願している(『同』)。また帰陣後の事例も、例えば奥州合戦に参加した足利義兼は、本拠地に樺崎寺を建立している(「鏝阿寺樺崎縁起并仏



事次第』)。これらを勘案するに、先の満願寺の近世由緒を全くの偽作として排除することはできず、佐原義連による何らかの造寺活動が、頼朝への従軍という出来事に引き掛けて後世に言説化された可能性が高かろう。義連が、少なくとも寿永元年（1182）には佐原を名字と称したため（『吾妻鏡』同年八月十一日条）、本貫地である同地にむしろ宗教施設を何も置かなかったとは想定しづらく、小堂規模の施設の存在は認めてもよかろう。

しかし、満願寺に遺る観音菩薩立像・地藏菩薩立像の二軀の制作年代は十三世紀初頭の慶派仏師によるものとされており〔横須賀市 2009〕、縁起に記載される創建年代と齟齬が生じる。これに対して、佐原義連の没年が元久元年（1204）四月から承元元年（1207）六月以前の時期と推定されるため、満願寺での造寺・造仏時期の開始時期をこれにあてる見解も示されている〔横須賀市 2012〕。

そうしたなか、以下の史料は佐原氏による造寺活動の一端を示すものである。

【史料 1】元仁元年（1224）十月「泉涌寺不可棄法師伝」（『新横須賀市史 I』748 号）<sup>(1)</sup>

同冬十月、依肥州刺史平家連<sup>(佐原)</sup>之請、下向関東、経過十六駅亭、街売之女忘脂粉而受戒、漁獵之男抛網竿而聞法、遂到家連三浦館、供養梵字、投歩鎌倉、二品禪定比丘尼<sup>(北条政子)</sup>〈諱如実、〉并武州刺史平泰時朝臣<sup>(北条)</sup>受菩薩戒、総逗留鎌倉一七日間、或授戒法、或讚仏経、道俗顯々、昼夜無間、

【史料 1】は京都泉涌寺開山で入宋経験のある俊弼が、佐原家連の招請で「家連三浦館」に招かれ、「供養梵字」を催したという内容を記す。これまで当該記事の仏堂供養を満願寺での大規模供養ないしは満願寺の創建時期とする指摘もあるが〔横須賀市 2012〕、そもそも当時の佐原義連の子息には景連・盛連・家連らが複数おり、なかでも長子景連は、建久六年（1195）の源頼朝による東大寺供養に義連の子息の中で唯一随兵として参加し（『吾妻鏡』同年三月十日条）、また元久元年（1204）には、紀伊国熊野山七重塔造営の功により、父義連がかつて任官された「左衛門尉」にも任じられている（『三長記』同年四月十二日条）。官職でみるならば、佐原氏のなかで当初は景連が嫡流と目されていた可能性が高い。そうなれば、家連主催による仏堂供養を、直截に氏寺満願寺の供養（さらには落慶供養）と結論づけるには躊躇され、今一度その背景を検討する必要がある。

## （2）北条時房と佐原家連

俊弼が三浦館に招請される以前、景連はしばしば幕府垵飯役や社寺への將軍参詣の随兵などを務め、またその子息景義も同様に幕府儀礼に従事しており、鎌倉周辺での活動が目立つ。一方の家連は紀伊国南部荘地頭職を有し、当該地での活動がみえるが、承久の乱後になると、貞応二年（1223）に紀伊国守護となっており（『新横 I』714 号）、嘉禎年間（1235~1238）に肥前守に補任され国守を務めている。さらに家連は執権北条一族との関わりが深く、安貞二年（1228）五月十六日に北条時房の子息時直に嫁した娘が男子を出産しており（『吾妻鏡』）、すくなくとも同年以前から北条時房との関係が築かれていた<sup>(2)</sup>。翌年には時房主催の垵飯で家連が行滕・沓役を務め（しかも「左衛門尉」に任官していた）、以後は毎年のように参加がみられることから、急速な北条氏への接近があったとみられる。その結果であろう、寛元三年（1243）七月十七日の將軍藤原頼経の臨時出御供奉人を定めた際に、佐原氏の序列の中で家連が最上位で記載されている（『同』）。

佐原氏の北条氏への接近は、とくに延応元年（1239）の時房主催の垵飯で顕著で、家連をはじめ、子息の胤家・光連や家連兄弟の政連や一族の助連らが参加している（『同』正月一日条）。ほかに家連兄弟の盛連のもとには、もともと北条泰時に嫁していた三浦義村娘が再嫁（後の矢部禪尼）しており、嘉祿二年（1226）には盛連の継子北条時氏（北条泰時と三浦義村娘との子）に随行して六波羅探題に出入りし「在京武士遠江国司」として記録されている（『明月記』同年正月二十四日条）。盛連は遠江守という国守を務めているだけでなく、西園寺家庶流とも姻戚関係を有しており、執権北条一族や京都など独自のネットワークを構築していたことが明らかになっている〔高橋 2016a〕。

さて、以上の佐原一族の動向を踏まえるに、俊苧を招請した元仁元年（1224）では、すでに佐原一族のなかで執権北条一族に接近した家連・盛連が有力勢力として位置付けていたと思われる。とりわけ家連と俊苧とを繋ぐ人的関係においては、嘉禄元年（1225）まで六波羅南方探題を務めた北条時房との姻戚関係が重要であろう。時房は執権北条氏一族のなかで在京活動を担い、彼の拠点となった六波羅探題の地は、俊苧が開山となった泉涌寺と極めて近い地理環境にあった。加えて、時房は建保六年（1218）に、実朝の後継者問題について会見を行うため上洛した政子に同行し、さらに承久元年（1219）の三寅（九条道家の子息、後の頼経）下向の交渉にも加わっていた。当該期の時房は執権北条氏を主導する義時・政子を支えつつ在京活動を主に担い、承久の乱以前の幕府内では、泰時を凌ぐ地位にあったという〔岩田 2016〕。この三寅が誕生する際、道家室の倫子の出産時の戒師を俊苧が務めているなど、入宋僧俊苧と九条家との関係は彼が帰朝した早い時期から築かれていた〔西谷 2018〕。家連が俊苧との間に接点を持ち得た背景に、九条家との繋がりのある北条時房を介した人的関係があったと考えられる。さらに、俊苧の三浦・鎌倉下向の背後には、執権北条氏の意向も垣間見える。俊苧は家連の三浦館で仏堂供養を行った後、その足で鎌倉へ赴き北条政子・泰時の戒師を務め同地で半月ほどの滞在をしている。【史料 1】の時期、在京活動を担った時房は、幕府首脳陣の一人として執権北条義時の死後も鎌倉に戻らず探題として在京を続け〔上横手 1958・渡邊 2015〕、幕府の歳首壇飯儀礼では嘉禄元年（1225）・同二年と正月一日を務めることから幕府内序列ではトップに位置付けていた〔渡邊 2015〕。そうなれば、この度の俊苧の下向は、時房との人的関係を通じて、すでに三浦・鎌倉の地での彼の活動が予定されていたからこそ、上記の行程が組まれたのだろう。俊苧の鎌倉下向は、三浦家連を媒介としつつ北条時房・政子・泰時ら執権北条一族の意向によってなされた事業だったと想像される。

いずれにせよ、佐原家連による俊苧招請と仏堂供養は、北条時房への接近がもたらした文化事業と考えられ、当時の家連の人的関係と一族内での地位を勘案するに、氏寺満願寺の供養を主催する人物としてふさわしい存在といえよう。

## 2. 佐原氏本拠と満願寺の成立過程

### (1) 鎌倉期満願寺の成立と伽藍形成

満願寺遺跡からは、建物遺構として中心建造物に相当する箇所、同寺参道脇に径 80 cm 前後の安山岩製大型礎石 6 個が残されており、これらを設置するのに相応な規模・形状の建物を備えた伽藍配置があったと考えられ、ある段階で建替えや既存建造物の規模拡張を含む再建がなされたという〔横須賀市教育委員会 1992〕。これら伽藍配置の形成は、日想観の行儀を記す『観無量寿経』など多くの浄土教経典を宋から将来した俊苧との関わりが想定されよう。また横須賀市大矢部の清雲寺に所蔵される右膝を立てて坐す形姿の観音菩薩坐像は、もともと三浦為通を開基と伝える大矢部の円通寺（現在は廃寺）にあったもので、明治期に清雲寺に伝来した。この観音菩薩坐像の制作年代は、寛元二年（1244）頃に南宋から請来された泉涌寺の観音菩薩坐像や嘉禎三年（1237）に建仁寺僧が南宋明州の工人に制作させた銘記される菩薩坐像（兵庫県法恩寺）と像容・技法が近似しているため、十三世紀中頃に南宋で造像されたものと考えられている〔横須賀市 2009〕。

その移入契機については、三浦家連と泉涌寺僧俊苧との関係が指摘され〔横須賀市 2009・2012〕、日宋貿易と密接な肥前国神崎荘等を含む彼の肥前守への就任はその想定を補強しようか。また三浦氏惣領の泰村（義村の嫡子）は日宋貿易と関わる筑前国宗像社や肥前国神崎荘の地頭職を持っており、かかる関係から南宋で造像された旧円通寺所蔵の観音菩薩坐像が移されたことも指摘される〔横須賀市 2009・横須賀市 2012〕。三浦義村は寛喜元年（1229）、すでに天台浄土系の僧浄蓮房源延を三浦に招き盛大な迎講を実施しているため（『吾妻鏡』同年二月二十日・二十一日条）、三浦惣領家独自のネット

ワークに基づく請来の可能性もあろう。いずれの理由かは判然としないものの、当該期の三浦氏本拠周辺では惣領家や佐原氏ともに浄土系仏教儀礼の摂取や催行が行われていたことは確かであり、先の仏像はこうした三浦一族の動向を反映した遺物と考えられる。

となれば、俊苧を招請して実施された満願寺供養と、同寺に伝来する十三世紀初頭の慶派仏師制作による観音菩薩立像・地藏菩薩立像の二軀が造像された時期とは、一定の段階差を認める必要がある。後者が果たして先行研究が指摘する佐原義連供養を契機としたものかは確言できないが、少なくとも満願寺での当初の尊像構成が正治二年（1200）に北条時政が故頼朝一周忌に願成就院北隣に仏堂を建立した際の尊像構成とほぼ一致しているため（『吾妻鏡』同年正月十三日条）、同時期頃の制作とみられている〔横須賀市史 2009〕。当該期満願寺での造像を主導した人物に、佐原義連あるいは長子景連を想定できる。また佐原義連が本拠とする当該地に、すでに冒頭で取り上げた「満願寺縁記」に記されるような仏堂が当初からまったくなかったとも考えがたい（義連の動向については次章で検討する）。

## （2）佐原氏の本拠形成

佐原義連の本拠は相模国三浦郡矢部郷のうち、岩戸川が流れる谷戸内に形成されていた<sup>(3)</sup>。当初の居館については考古学的成果が乏しく、岩戸川西側の谷戸舌状地上にあり近世佐原村・岩戸村等を扼する立地にある泉遺跡周辺、満願寺近辺などの候補地が想定されている〔中三川 2015〕。例えば三浦惣領家の本拠について、近世大矢部村付近が居館候補地とされ〔石井 1987〕、満昌寺・近殿神社・薬王寺周辺を三浦惣領家の居住空間に、南隣する清雲寺・円通寺を極楽往生・現世利益を達成する宗教施設に、谷戸奥の坂ノ台経塚や金峯蔵王権現社・別当大善寺・不動堂のある衣笠城跡周辺を聖地と把握する見解も出されている〔齋藤 2006〕。とくに衣笠城跡に近在し大善寺に伝世する伝毘沙門天像は、岩手県平泉町の中尊寺金色堂中央壇にある増長天像に像容・技法ともに酷似しており、平泉文化を色濃く受けた鎌倉初期の制作と指摘される〔横須賀市 2009〕。三浦氏は奥州合戦に参加しており、平泉での浄土文化に接触した結果、この像が一族の聖地とされる地に祀られた可能性がある。三浦氏の奥州合戦参戦を契機に取り入れられた文化遺産といえよう。

そうなれば、佐原義連が西国への平家追討を契機に建立した満願寺の事情とも共通性が見出せる。三浦一族では、治承・寿永内乱での戦争を契機に自身の本拠地内で聖地とされる場所の整備ないしは仏堂の建立が進んだのではないだろうか。佐原義連は『吾妻鏡』等でしばしば「三浦十郎義連」と三浦姓で記載されることが多いものの、少なくとも寿永元年（1182）の御台所御産による諸社奉幣使派遣で三浦十二天社への奉幣使を務めた義連を「佐原十郎」と記す（『吾妻鏡』同年八月十一日条）。義連の時期から佐原の地を本拠地としていたことは確かであろう。そして、当初の佐原氏の本拠は谷戸入り口付近にある泉遺跡周辺にあつて、谷奥の開発が進展するにつれ、満願寺および周辺の社寺整備が進んだのではないだろうか。泉遺跡より十世紀末から十一世紀前半の時期にあたる馬具鉄製品の締具・兵庫鎖片・鏡片が出土し、馬の飼育関係に関わる遺跡の可能性と見られ、また泉遺跡東側には小字「大庭田」という満願寺の飛び地があることも旧寺領としての関係性が窺える〔中三川 2015〕。泉遺跡周辺は平安末期段階で地域の拠点的性格を見出しうるのである。

これらを踏まえるに、本稿では当初の佐原氏の居館空間は岩戸川を流れる谷戸の入り口付近（泉遺跡周辺）にあり、一族の宗教施設として谷戸奥に持仏堂などが設けられていたと想定したい。その上で、満願寺の創建および以後の伽藍形成は、鎌倉期にかかる義連期頃に創建された小堂をベースとしつつ、谷戸内の開発の進展（本拠地支配の深化）とともに、義連あるいは長子景連による慶派仏師の造仏活動や、執権北条氏との関係を強化した家連の俊苧招請による寺容整備および伽藍形成へと段階的に行われたのだろう。とくに満願寺遺跡で見られる堂舎の建替えや規模拡張の様相は、元仁元年（1224）に招請された俊苧の影響と考えられる。推測に推測を重ねたが、本稿では満願寺の成立過程を以上のように

段階的に把握したい。

### 3. 初期鎌倉幕府の造寺活動と佐原一族

#### (1) 慶派仏師との邂逅

前章の文献史料を踏まえた考察に対し、満願寺出土中世瓦群で見出された性格はどのようにリンクし得るのだろうか。

冒頭で述べたように、上述の佐原氏と氏寺満願寺との関係については、本調査で提示した十二世紀末期から十三世紀初頭の尾張産瓦が注目され、同寺の創建期に該当する瓦の可能性はある（本報告書では満願寺Ⅰ期瓦と仮称）。だが、満願寺の創建年代と伝承される寿永三年(1184)の時期に同寺が瓦葺であったとする確証はなく（そもそも伝承通りの創建年代だったことすら確言できない）、これらの瓦群を即座に創建期のものと断じることには慎重でありたい。ただし、満願寺が寺容を整備し始めたのが、慶派仏師による満願寺諸尊の造像事業が端緒と考えられ、かつ満願寺の尊像構成が正治二年(1200)に北条時政が故頼朝一周忌で仏堂を建立した際のもものと類似することから、頼朝が没する前後の1200年周辺からあまり隔たない時期であったと想像される。前述したように、当該期に満願寺での造仏・造寺事業を主導し得る人物は佐原義連あるいは長子の景連であろう。ではなぜ彼らは、慶派仏師に自身の本拠地における造仏事業を依頼することができたのか。

義連・景連親子が慶派仏師と関わる契機に、頼朝による建久元年(1190)十一月の後白河院との会談、そして建久六年三月の東大寺供養の二度にわたる上洛に父子共々供奉したことが考えられる。とくに多くの鎌倉御家人が上洛し参列した東大寺供養では、同時に京・南都での本場の仏教文化に触れる機会となった。例えば、供奉を務めていた武蔵国御家人畠山重忠は、在京期間中に梶尾山の明恵に謁談して浄土宗法門について談議し（『吾妻鏡』建久六年四月五日条）、同国御家人津戸為守も東大寺供養で上洛し法然と出会い浄土宗に皈依しているという（『法然上人伝記』『津戸消息事』）。そうしたなか、同国御家人小代行平は奈良仏師快慶による建仁三年(1203)制作の醍醐寺不動明王像の結縁者末尾に「有道行平」とみえ、奈良仏師と児玉党出身の一御家人と関係があったことが窺える。行平も東大寺供養に参列しており、この経験が慶派仏師と出会う契機となったと指摘されている〔山野 2019〕。

一回目の頼朝による上洛は、途上での様々な政治的パフォーマンスを含みながら、久方ぶりの京都文化を頼朝が直接肌で感じ、多くの文化要素を持ち帰る機会ともなった。頼朝は、鎌倉帰還後に急速な音楽整備や京都楽人の招請依頼を行い、さらに当時後白河院のもとで活躍する奈良仏師康慶との知己を得て、後に永福寺造営期間中の建久二年に大江広元を通じて後白河へ康慶の鎌倉下向を打診し、院近臣日野範綱から「康慶事、委令申候了、下向□（無）異議候歟」という返答を得ている（（建久二年）二月十日「藤原範綱書状」『和歌真字序集（扶桑古文集）』）〔渡邊 2022abc〕。頼朝周辺の造像では康慶を起用し、その他有力御家人北条氏・和田氏・足利氏の造像では弟子運慶が起用されていることから、そこには将軍家と有力御家人との間で差が設けられていることも了解される〔渡邊 2022b〕。二回目の上洛では広く康慶・運慶・快慶らが携わって完成させた東大寺南大門の諸像など、慶派仏師の活動を有力御家人足利氏をはじめその他中小御家人たちが目にする機会となった。それは仏師だけでなく、多くの宗教者と接点を持ち結縁する機会ともなったのである。そうした点を踏まえるに、佐原義連・景連父子が二回目の東大寺供養に供奉して慶派仏師の活動を目の当たりにし、京都社会で交流を持ち、その後本拠地の氏寺満願寺での造像依頼に結実したことも十分推測される。

慶派仏師による満願寺諸像は、かかる佐原義連・景連の東大寺供養参列の結果もたらされた文化受容の遺物と理解したい。

## (2) 源頼朝と佐原義連

佐原義連の本拠にて、慶派仏師による造像がなされた要因には、佐原一族の経済力のみならず慶派仏師を多く起用した源頼朝の影響が考えられよう。実際に、頼朝が鎌倉で成し遂げた様々な文化事業は、御家人たちに大きな影響を与えていった。例えば永福寺は頼朝自身によって主導され建立された著名な大寺院であり、多くの主要御家人が動員されて建造作業が進められ、建久三年（1192）に落慶供養が営まれる。すでに先行研究で指摘されるように、永福寺Ⅰ期瓦と同範・同文関係にある軒瓦は複数の鎌倉御家人本拠地から見つかっており、その理由に自己の支配領域での頼朝権威の利用目的であったり、頼朝と所縁のある御家人が彼に追従し結縁しようとする意識があった、という指摘がされている〔石川2008・小林2022〕。佐原氏と源頼朝との関係をみるに、次の史料は興味深い。

【史料2】『吾妻鏡』養和元年（1181）四月七日条

七日壬子、御家人等中、撰殊達弓箭之者所無御隔心之輩、毎夜可候于御寝所之近辺之由定云々、  
（北条義時）  
江間四郎・下河辺庄司行平・結城七郎朝光・和田次郎義茂・梶原源太景季・宇佐美平次実政・榛谷四郎朝・葛西三郎清重・三浦十郎義連・千葉太郎胤正・八田太郎知重、

以上は、養和元年（1181）に「毎夜可候于御寝所之近辺之由被定」と頼朝の寝所警固を担当するために選定された、北条義時・下河辺行平・結城朝光・和田義茂・梶原景季・宇佐美実政・榛谷重朝・葛西清重・三浦義連・千葉胤正・八田知重の十一名を記した記事である。いずれも頼朝挙兵以来の三浦義明や北条時政・八田知家の子息、つまり二世世代の御家人で構成され、実際にも頼朝寝所を中心に身辺警護を担い（文治五年（1189）に頼朝が彗星を見るため寝所を出た際、佐原義連・結城朝光・梶原景季・八田知重が警固している）、「皆近臣也」と記録された（『吾妻鏡』同年二月二十八日条）。前稿でも指摘したが〔渡邊2022a〕、上記のメンバーのうち、永福寺式軒瓦が出土している関係者を探すと、北条義時（北条時政の子息、願成就院遺跡から出土）、八田（小田）知重（八田知家の子息、三村山極楽寺遺跡・小田城跡）がおり、また多くの検討課題を残すが、黒駒地内「駒ノ墓」（茨城県下妻市）からも永福寺Ⅰ期瓦と同範関係の軒平瓦が報告されている。同所には在来領主の下妻広幹が誅された後、建久三年（1192）に小山朝政（妻は頼朝の乳母寒河尼）が下妻荘の地頭職を得て進出している。結城朝光はこの朝政の弟にあたる<sup>(4)</sup>。

上述の昵近衆とも呼べる頼朝の近臣集団は、有力な御家人のなかより一族の惣領が健在でかつ次世代を担うべき人材たちが選出されており〔菱沼2011〕、血縁や乳母の関係を通じて頼朝個人と密接な関わりがある。頼朝近臣集団に、彼の肝いりで建立した永福寺と同文・同範の瓦を使用したメンバーが複数いたことは、永福寺Ⅰ期瓦の受容を考える際に重要な点になると思われる。

如上の永福寺式瓦の事例を踏まえるに、頼朝と個人的に関係の深い御家人への文化的影響力は非常に大きかったことが窺えよう。佐原義連の本拠において、1200年頃に慶派仏師の造像が行われたことも、やはり頼朝周辺での造像事業が彼の近臣である義連に影響を与えたことは容易に想定できる。他に、文治五年（1189）には運慶による和田義盛らが願主となった浄楽寺での造像がされており、義盛弟の義茂も先の頼朝近臣に選出されている。義連の慶派仏師起用による造像の結果、当初の小堂であった氏寺も、次第に頼朝の文化的影響を受けつつ寺格を整えていったのであろう。

ただし、満願寺の形成過程を文献史料で見た場合、やはり元仁元年（1224）に招請された俊苧の来訪と仏堂建立は重要な起点となったに違いない。とくに満願寺遺跡で見られる堂舎の建替えや規模拡張の様相は俊苧招請の時期とリンクする可能性が高く、寺容整備および伽藍形成へと進んだと思われる。その際に瓦葺礎石建物の存在が想定され、あるいは満願寺出土中世瓦群のなかで、尾張産瓦よりも時期が下る年代とされる鎌倉前期頃の瓦群（本報告書では満願寺Ⅱ期瓦と仮称）はこれに相当するのかもしれない。

#### 4. 宝治合戦後の佐原一族と北遷

##### (1) 宝治合戦後の佐原一族

鎌倉後期以降の三浦一族に関する研究は決して多くはない。それは、かつて公武に跨がる権力および人的関係を構築し、高度な文化レベルを誇った義村やその子息泰村・光村に比して、後の三浦一族に目立った活動が史料上あまり認められないことに起因しよう。しかし、文献史料と満願寺出土中世瓦の両方を検討すると、興味深い動向が看取される。まずは、先行研究を踏まえつつ〔鈴木 2000・湯山 2011・横須賀市 2012・高橋 2016a ほか〕、佐原一族の動向に私見を加えながら詳細に追うこととする。宝治元年（1247）六月の宝治合戦における佐原一族の去就をみるに、惣領家の三浦泰村・光村に与同して自害討死したなかに景連の系統では孫の稲河時景が、家連の系統では子息胤家・光連が、政連の系統では政連自身と子息泰連・信連などが見え、多くの一族が見出せる（『吾妻鏡』同年六月二十二日条）。義連子息の系統の大半が滅亡したこととなり、これまで俊仍招請段階での満願寺の主たる外護者を家連としてきたが、宝治合戦を契機に家連系統の一族の関与は断絶したと見られる。また本拠地についても、同年六月二十日「藤原頼嗣寄進状」（『新横 I』1230 号）では將軍藤原頼嗣が「相模国谷部郷」を鶴岡八幡宮に寄進しており、佐原一族の本拠地も含む矢部郷が宝治合戦後に没収されていた。

その一方で、盛連の子息六人（経連・光盛・盛時・時連・広盛・盛義）は北条時頼亭にいち早く参向し北条氏方へ従い（『吾妻鏡』同年六月二日条）、なかでも矢部禅尼（執権北条時頼の祖母にあたる）を母に持つという光盛・盛時・時連の系統は三浦一族の新たな嫡流として成長していく<sup>(5)</sup>。先学では、盛時・光連・時連をそれぞれ①「三浦介」の地位を継承した系統、②惣領として佐原氏を統括する系統、③横須賀流であり在京活動が顕著にみられる系統、の三系統に整理する。以下、佐原一族のなかで大きな役割を果たしたこの三系統の一族のうち、まずは①盛時系佐原氏と③時連系佐原氏の動向やその活動基盤の変遷を見ていく。

##### [盛時系佐原氏]

宝治合戦後、三浦一族は盛時を筆頭として幕府儀礼に復活し、宝治元年十一月十五日の鶴岡八幡宮放生会では「三浦五郎左衛門尉」と三浦を名乗って先陣随兵を勤める（『吾妻鏡』）。この時の先陣随兵の名簿で、盛時は波多野義重よりも下位に記されたため、「当家代々未含超越遺恨」と不服を申し立てている。もともと盛連系統での名乗りは、祖義連の官職遠江守が重視され、三浦を名乗ることはなかった。しかし、宝治合戦後から盛時は三浦を称しはじめ、かつ三浦一族としての当家意識も芽生えていた〔高橋 2016a〕。同年十二月二十九日の京都大番役結番には三浦惣領家の地位である「三浦介」を名乗り（『吾妻鏡』）、以後、盛時の系統が頼盛・時明と代々「三浦介」を継承する。

かつての三浦一族の権益については、以下の様な一族内での分担が見られる。

【史料 3】建長元年（1249）八月十日「関東御教書」（『新横 I』1263 号）

御公事間事、於遠江前司盛連跡者、可為次郎左衛門尉光盛支配之由、被定下了、至兄弟等新給相模国所々者、為大介沙汰随分限令支配、自今以後相具盛連跡、可被勤仕之状、依仰執達如件、

建長元年八月十日  
相模守（花押）  
陸奥守（花押）

三浦介殿

関東御公事の負担について、佐原氏惣領である「遠江前司盛連跡」は光盛の差配とし、「兄弟等新給相模国所々」は三浦介の地位にある盛時が国衙支配権に基づき分配することが幕府より指示される。盛連以来の惣領職はその嫡子光盛に、かつての惣領家泰村以来の三浦介の地位は盛時へ継承され、なお、「自今以後相具盛連跡」とあるように、一族全体の公事負担の総括者は「三浦介」である盛時と定められる。三浦介の地位を継承した盛時の権益のなかに、国衙に関するものも見られる。建長四年（1252）四月

一日の宗尊親王の鎌倉下向に際し盛時が大磯宿の儲所を盛時が行っており（「宗尊親王鎌倉下向記」『新横補遺』2905号）、淘綾郡大磯は国衙領である。また文永元年（1264）十一月二十一日「関東御教書」（『新横Ⅰ』1369号）では盛時の子息頼盛が石清水八幡宮領「相模国古国府預所」となっている。古国府とは淘綾郡に国衙が移動する前の大住郡旧所在地を指すと思われる。以上は三浦介に関わる国衙関係の権益であり、これを盛時とその一族は継承したのだらう（あるいは【史料3】の「新給相模所々」として新たに獲得したものか）。

盛時の主たる拠点は都市鎌倉と考えられる。建長二年（1250）に北条時頼は鎌倉の「三浦介盛時家」を訪問し（『吾妻鏡』同年六月十九日条）、建治元年（1275）の六条八幡宮造営注文の費用負担では「鎌倉中」分として七十貫文が「佐原遠江前司跡」に賦課される（「六条八幡宮造営注文」『田中穰氏旧蔵典籍古文書』）。これは関東御公事分として御家人に課されたものであるため、【史料3】で「自今以後相具盛連跡」として一族全体の公事負担の統括を三浦介である盛時が務めたことを踏まえるに、この対象は在鎌倉する盛時系統が担ったものである。

以後の盛時系統は、幕府儀礼では諸大夫クラスの有力御家人として参列し、鎌倉末期には笠置城攻めの幕府軍に「三浦介入道（時継）」が加わっている（『太平記』）。その後、足利方へ転身し、三浦時明は鎌倉將軍府の関東廂番となるが（『建武記』）、建武二年（1335）の中先代の乱で三浦時継・時明（盛時系統の庶流）が北条与党となったため、それぞれ斬首・討死している。以後の相模国三浦一族の三浦介の地位を継承したのは高継で、同年九月二十七日「足利尊氏下文」で相模国大介職・三浦内三崎・松和・金田・菊名・網代・諸石・大磯郷などの所領所職を与えている（『新横Ⅱ』1551号）。その後、高明系統が相模国守護職を継承していく。

[時連系佐原氏]

時連の系統に属す佐原氏は、在京活動が活発に見える一族である。時連や子息頼連は頻繁に東使を務めて上洛しており幕府上級御家人層であった。また、建長六年（1254）七月二日には検非違使となっている（「経俊卿記」『新横補遺』2910号）。検非違使は宝治合戦以前まで三浦光村が補任されており、時連系佐原氏が三浦一族のなかの在京勢力としての側面を継承したのであろう。頼連が霜月騒動で安達泰盛方に与同して自害した後も、時連子息の宗明が弘安七年（1284）に検非違使となり（『検非違使補任』）、同九年の後宇多天皇の春日行幸に供奉して従五位上に叙され（『勘仲記』同年四月一日条）、また子息の時明は西園寺家とも繋がりが深い（『公衡公記』正和三年（1314）十月六日・七日・八日条）

その後、宗明の一族は北条得宗被官としての活動が認められる。子息時明は、徳治二年（1307）七月二十六日「小笠原礼書」（『新横補遺』2930号）にて成就御所での北条高時六歳の矢開で、餅の食手一番を勤める。また元亨三年（1323）十月二十五日「北条貞時十三年忌供養記」（『新横Ⅰ』1463号）の参加した北条氏一門や得宗被官長崎氏や諏訪氏のなかに混じって「三浦安芸守（時明）」がおり、有力な得宗被官であった<sup>(6)</sup>。

矢部郷周辺では唯一の事例で、元亨三年（1323）正月「夢窓国師語録」（『新横Ⅰ』1465号）に「相州三浦の横須賀といふ所に、いり海にのそミて泊船庵とて住玉ひける頃」「又三浦の庵を捨て、総州へおはしましける時、其庵の檀那三浦安芸前司貞連もとへつかはされける」との記事があり、時明の子息と思しき貞連が、古久里浜湾内の横須賀入海沿岸にある泊船庵を構えて夢窓疎石を庇護し、海上交通と関わっていた様子が知られる。彼らの本拠地については未詳だが、鎌倉中後期には在京・在鎌倉しつつ、少なくとも鎌倉末期段階までには古久里浜湾沿岸に拠点を有していた。

佐原一族のなかでもとりわけ時連系佐原氏は北条一族との関係が密接であり、南北朝内乱初期の正慶二年（1333）五月二十日「熊谷直経代同直久軍忠状」（『新横Ⅰ』1499号）では「三浦安芸前司（貞連力）」が丹後国熊野郡木津郷にて幕府方として参戦している。だが、その後は足利尊氏方に付き、鎌倉將軍府

の関東廂番に「若狭判官時明」が見え（『建武記』『新横Ⅱ』1523号）、また貞連は尊氏の侍所頭人として活動し（『太平記』）、新田義貞軍との戦闘で建武三年（1336）に戦死する（『梅松論』）。以後の時連系佐原氏は宗明から生じた貞宗・行連の系統が尊氏方として生き延び、室町期も存続していく。

## （2）光盛系佐原氏の本拠と満願寺出土中世瓦群

【史料3】で見た通り、佐原一族惣領の地位は②光盛系佐原氏が継承した。関東御公事の負担では三浦介の地位を継承した盛時がその統括の位置にあったが、幕府儀礼での序列を見るに、建長二年（1250）の將軍藤原頼嗣による由比浦逍遙では、佐原光盛は三浦介より上位の序列で加わり（『吾妻鏡』同年八月十八日条）、六位の衛府尉官職を持つ侍層クラスの中なかでも筆頭格になる。さらに同六年の鶴岡八幡宮放生会の随兵でも（『吾妻鏡』同年八月十五日条）、遠江守の国守に任じられた光盛は、五位の京官・国守の官職持つ諸大夫層クラスに位置づけられている〔高橋 2016a〕。宝治合戦後の佐原一族の地位は、光盛の序列を見るに上昇したと言え、また幕府儀礼における三浦一族全体での序列は光盛系佐原氏が上位として把握されていた。

その本拠地については、すでに紹介したように、宝治元年（1247）に矢部郷が没収され鶴岡八幡宮に寄進されている（「藤原頼嗣寄進状」〔『新横Ⅰ』1230号〕）。だが、【史料3】で佐原氏惣領である「遠江前司盛連跡」は光盛の差配となっているため、矢部郷内のうちの佐原義連が持っていた権益は返付されていた。さらに光盛系佐原氏については、旧三浦惣領家本拠での活動も認められる。

【史料4】文永八年（1271）五月十四日〔板碑銘〕（円通寺旧蔵『新横Ⅰ』1372号）

右志者、先考  
聖靈当十三

(佐原)

（阿弥陀種子）文永八年五月十四日左衛門尉平盛信 年遠忌、為成  
仏得道、造立  
供養如件、敬白、

【史料4】は円通寺旧蔵（現在清雲寺境内）にある板碑銘で、光盛の子息盛信が父の十三年遠忌のために板碑を造立した趣旨が記される。そうなれば、先の鎌倉幕府による鶴岡八幡宮への寄進は、領家が鶴岡八幡宮となったのであり、下地については三浦惣領家に代わって佐原一族（とくに光盛系佐原氏）が有した可能性が高い。史料を欠くため矢部郷内の三浦惣領家旧領と佐原一族との関係が窺える文字資料は【史料4】以外に見出せない。しかし他の御家人での板碑造立事例を瞥見するなら、例えば比企氏の乱で滅亡した比企一族の末裔である比企助員（沙弥明円）が、正中三年（1326）に比企郡内の現青鳥城跡付近（埼玉県東松山市）に板碑を造立したことが推定されている（「青鳥城跡板碑」『東松山市史資料第二巻』）。助員は早歌作者として著名な文化人であり、北条一門の甘縄北条氏にも接近している〔外村 1973・1981、永井 2022〕。こうした関係も奏功してか、かつての一族の本拠地であった比企郡内に何らかの権益を有し、板碑造立へと結びついた可能性が考えられる。また、武蔵国入西郡小代郷を本拠とする小代氏も、重俊の代にかつて宝治合戦の軍功で獲得した肥後国野原荘へ建治元年（1275）に拠点を移している。しかしその後も、弘安四年（1282）に重俊の菩提を弔うため、小代一族が結縁して小代氏居館跡の現青蓮寺（埼玉県東松山市）に板碑を造立している（「青蓮寺阿弥陀一尊板碑」『坂戸市史中世資料編Ⅰ』）。西遷によって相対的にかつての本貫地の役割は低下するものの、小代氏は一族の紐帯を確認するため、小代郷での結集を必要としたのだろう。

以上を勘案するに、【史料4】の板碑造立から、宝治合戦後に佐原一族の惣領となった光盛系佐原氏が、光盛の代よりかつての三浦惣領家の本拠地に進出し、矢部郷を実質的に知行していたことを推測させる。彼ら一族の活動は文化面でも見出せ、鎌倉後期の作例で慶派仏師の手による清雲寺所蔵の毘沙門天立像や、満願寺所蔵の不動明王立像・毘沙門天立像、また鎌倉末期制作とされる満昌寺所蔵の三浦義明坐像

などが矢部郷で造像されている。宝治合戦以前に比してその造像規模は縮小するものの、宝治合戦あたりから一族の曩祖に位置づけられた三浦義明が造像されたことは、新たに惣領となった光盛系佐原氏の関与が想像されよう。

ところで、佐原一族はすでに鎌倉前期から奥州地域との関わりが深く、鎌倉後期には時連系佐原氏など盛連の子息たちが陸奥国会津周辺で活動していたことが知られている〔横須賀市 2012〕。とりわけ光盛系佐原氏は、盛宗（光盛の孫）の妻が永仁三・四年（1295・1296）に会津猪苗代峰村岩城大明神へ神器を奉納し（「新宮雑葉記」「異本塔寺長帳」『新横補遺』2920・2921・2924・2925号）、元弘元年（1333）では盛宗が会津綾金村観音堂を建立している（「新宮雑葉記」「異本塔寺長帳」『新横補遺』2940・2941号）<sup>(7)</sup>。上記の史料は、いずれも近世地誌類に採録される金石文銘によるものだが、光盛系佐原氏のうち盛宗が、鎌倉後期から末期にかけて本拠地を陸奥国会津地域へ移し始めていること、つまり北遷しつつあったことを窺わせる点は重要であろう。

政治史のなかで光盛系佐原氏の動向を確認すると、先に板碑を造立した光盛の子息盛信は、文永九年（1272）二月の二月騒動で「佐原会津六郎左衛門尉、文永九年二ノ 北条時輔縁者自殺」とあるため（「系図纂要」『新横Ⅰ』1373号）、北条時輔に与同して自害していた可能性が高い。また、光盛の子息泰盛から生じた盛宗ら一族は、安達一族と関わりが深い。『蒙古襲来絵詞』には安達泰盛邸の場面で盛宗に比定される「あしなのはんくわん（葦名判官）」が登場している。そして弘安八年（1285）の霜月騒動では、「三浦対馬前司」（頼連、佐原時連の子息）、「葦名四郎左衛門尉」（泰親、盛宗の兄弟）、「同六郎」（時守、盛宗の兄弟）、が泰盛とともに自害し（「安達泰盛乱自害者注文」「安達泰盛乱聞書」ほか（『新横Ⅰ』1397・1398号））、他にも諸系図で同騒動にて盛次が死去している（「三浦系図」）。霜月騒動など、鎌倉後期の政変で光盛系佐原氏は大きな打撃を蒙ったことが知られよう。以後、都市鎌倉周辺で光盛系佐原氏の活動はほとんど見られなくなり、盛員の系統が陸奥国葦名氏となって南北朝内乱を生き延びていく。代わって時連系佐原氏のうち、得宗被官となった宗明の系譜に属する一族が台頭し、幕府儀礼のなかで重要な位置を占めるようになっていく。

さて、佐原一族の氏寺満願寺からは、創建期と目される尾張産瓦よりも、時期が下る年代の鎌倉前期頃の瓦群（本報告書では満願寺Ⅱ期瓦と仮称）が出土し、創建期よりも増加傾向を示している。これら瓦群には前述したように俊苧招請の時期とリンクし得るが、もう一つの可能性として宝治合戦後の佐原一族の造寺活動も示し得る。この時期の満願寺を外護した一族は、佐原義連の跡職など佐原惣領家を継承した光盛系佐原氏を想定することができる。幕府内の序列でも諸大夫クラスへと上昇し、本拠地で一定の造像も行っていることから、三浦一族の新たな嫡流となった光盛系佐原氏が本拠地矢部郷で社寺興隆を図った様子も想像される。また、満願寺遺跡出土中世瓦群は先の仮称満願寺Ⅱ期瓦以降の瓦群は見出されていない。それは、すでに鎌倉末期段階の金沢北条氏の六浦称名寺では本瓦葺建物ではなく檜皮葺や葺棟風建物へと移行した様子が窺えるため（元亨三年（1323）「称名寺絵図」〔原 2006〕）、満願寺でも同様の可能性が考えられよう。また、もう一つの可能性として、そもそも外護者である光盛系佐原氏が霜月騒動の影響などで勢力を後退させ、鎌倉後期から北遷先の会津地域を本拠地として重視し始めた結果も想定できる。いずれにせよ、宝治合戦後の時期も含む満願寺出土中世瓦群の存在は、宝治合戦後に三浦一族が単なる没落勢力となった訳では決してなく、惣領を継承した光盛系佐原氏を中心に幕府内序列で一定の高い地位におり、かつ本拠地でも社寺興隆を図った姿を雄弁に語り得る。

## おわりに

以上、三浦氏庶流佐原氏の動向に着目しながら、満願寺への関与および出土中世瓦群を含む様々な地域資料を踏まえ、同氏による造寺活動の実態を本拠形成と連動させつつ縷々検討を加えてきた。再度、

氏寺満願寺および本拠地矢部郷と佐原一族との関係を中心に、明らかになった点を要約する。

[創建期から宝治合戦以前までの満願寺と佐原一族]

満願寺の創建および以後の伽藍形成は、「満願寺総縁記」にあるような佐原義連期頃に創建された小堂をベースとしつつも、谷戸内の開発の進展（本拠地支配の深化）とともに、義連あるいは長子景連による慶派仏師の造仏活動や、執権北条氏との関係を強化した家連の俊祐招請による寺容整備および伽藍形成へと段階的に行われたものと考えられる。満願寺出土中世瓦群の特徴として見られる、同寺創建期頃のものと思われる尾張国八事裏山窯産を含む尾張産の可能性の高い瓦群（仮称「満願寺Ⅰ期瓦」）については、1200年前後の慶派仏師の手による満願寺での造像が行われた時期に、堂舎の整備が進んだ際のものと思われた（ゆえに本稿は、満願寺が小堂段階の創建当初から瓦葺とする立場をとらない）。

また佐原義連・景連の文化活動において、満願寺の造像では、東大寺供養による彼らの上洛が慶派仏師と接触する機会であったこと、また本拠における慶派仏師起用の要因として、義連が源頼朝の近習として仕えた影響を指摘した。満願寺で体现される佐原氏の文化レベルは、彼らの在京による京都社会との交流、および頼朝個人との密接な繋がりを反映させたものであった。

満願寺と佐原氏の歴史のなかで大きな画期と思われるのは、家連による元仁元年（1224）の泉涌寺僧俊祐の招請である。執権北条氏へ接近した家連は、とくに京都で六波羅探題を勤める北条時房との姻戚関係を築いている。時房は九条道家と政治交渉を重ねた経験を持ち道家子息の三寅（頼経）下向に尽力した。俊祐は道家妻の三寅出産時に戒師を担うなど、九条家と深い交流を持つ。かかる人的関係の結果、本拠地矢部郷へ俊祐が招かれ、仏堂が建立されているのである。満願寺の遺構から堂舎の建替えや規模拡張が窺え、この時期に満願寺の伽藍整備が大きく進展したと思われる。創建期と思われる尾張産瓦よりも、時期が下る年代の鎌倉前期頃の瓦群（仮称「満願寺Ⅱ期瓦」）は、この時期に葺かれた可能性がある。

[宝治合戦後の満願寺と佐原一族]

宝治合戦後、滅亡した三浦氏本宗家に代わって佐原一族が台頭し、①「三浦介」を継承し国衙に関する權益に立脚する盛時系佐原氏、②義連以来の佐原惣領家を継承する光盛系佐原氏、③かつての三浦光村と同様に在京活動を展開し、得宗被官となっていく時連系佐原氏、の三系統が主に活躍する。①は「鎌倉中」と記される在鎌倉勢力として存続し（あるいは大磯など旧三浦一族の国衙權益の地が基盤か）、②は義連跡を知りし満願寺や旧三浦本宗家の本拠地も含む矢部郷を基盤としつつ、鎌倉後期以降に陸奥国会津地域へ北遷し、③は在京・在鎌倉しながら得宗被官として政治的地位を上昇させ、鎌倉後期には古久里浜湾周辺にも拠点を有する、といった変遷を辿っていく。

宝治合戦後の満願寺の外護者および矢部郷の權益は、光連系佐原氏が継いでおり、幕府内の序列でも諸大夫クラスへと上昇を果たしている。また満願寺には鎌倉後期作例の仏像も遺されており、少ない事例ながら造像活動が窺える。先の仮称「満願寺Ⅱ期瓦」はこの時期にも葺かれた可能性が残り、かつ仮称「満願寺Ⅰ期瓦」に比して増加傾向を示す。宝治合戦後の満願寺における堂舎建立は、義連跡職など佐原惣領家を継承した光盛系佐原氏の光盛らが行ったことが想定される。ただし、同一族は、霜月騒動以後から次第に陸奥国会津地域へ本拠地を移し始め、鎌倉・本拠地矢部郷での活動徴証は認められなくなっていく。仮称「満願寺Ⅱ期瓦」は、それ以後の時期に相当する瓦が見出されておらず、満願寺での造寺活動は先の光盛期頃までで、以後はほとんど実施されなかったことになろう。その理由はそもそも本瓦葺建物が採用されなかった可能性も考えられるが、あるいは光連系佐原氏のかかる北遷の動向ともリンクするかもしれない。

本稿では三浦氏庶流佐原氏を事例に、その本拠地での活動の展開を文献史料と中世瓦を含む様々な地

域資料と合わせて復元を試みてきた。満願寺自体の評価において考古学側の見解との間で齟齬を来す部分もあるが、出土中世瓦群の定性的・定量的観察の結果を参考としつつ、佐原一族に関する興味深い文化的側面を明らかにすることができたと考える。

勿論、今後の考古学研究の進展により、満願寺遺跡出土中世瓦の編年やその評価に変更が生じた結果、本稿の見解も修正を求められる部分もある。とくに、ある瓦群の編年観を数年・数十年単位で変動する鎌倉御家人の動向に連動させるには、なお一層の成熟が求められることは言を俟たない。しかしそれでも、これまで鎌倉御家人研究のなかでハードウェアとしての寺院と御家人たちの関係はあまり重視されず、彼らの造寺活動の実態については未詳な部分が多かった。そうしたなかで、中世瓦を他の地域資料とともに御家人本拠での造寺活動を検証する際に積極的に用いたことは重要な試みであると考え。従来中世瓦が、御家人本拠の性格を語る際に用いられることが稀であった点に鑑みるならば、本拠から出土する瓦の存在は、御家人が建立した寺院の性格、ひいては御家人の地域権力としての性格を知る上で極めて重要な地域資料となろう。また上述した仮称「満願寺Ⅱ期瓦」で見られるような宝治合戦前後での瓦群の存在より、これらの瓦群は同寺を外護した佐原一族の権力伸長を示すバロメーターになり得るのかもしれない。

瓦編年の差異や瓦生産と消費地との関係など、鎌倉期東国における瓦生産・流通を巡る課題は山積しているものの、ひとまず、文献史学側からのリアクションとして本稿が、鎌倉御家人本拠の性格や権力の変遷を明らかにする上で、瓦資料が有力な地域資料となりうることを示すケーススタディとなれるならば、それに勝る喜びはない。大方のご叱正を仰ぎたい。

#### 【註】

- (1) 『新横須賀市史 資料編 古代・中世編Ⅰ』『新横須賀市史 資料編 古代・中世編Ⅱ』『新横須賀市史資料編 古代・中世補遺』から引用する際は『新横Ⅰ』○号（○は各巻の資料番号）などと表記する。
- (2) 『吾妻鏡』文治五年（1189）四月十八日条に、北条時房の加冠役に佐原義連が就き、当初時房が名を「時連」と名乗っていたことを踏まえるに（後に將軍頼家に命ぜられて建仁二年（1202）に「時房」に改名する）、北条時房と佐原一族との関わりはかなり早い時期から築かれていたと考えられる。
- (3) 満願寺については、三浦郡佐原郷内とする記述が書籍等で散見されるが、佐原の地が郷名として登場するのは、例えば文禄三年（1594）の「相州三浦佐原之郷御水帳」など近世検地帳であるため、大きく時期が下る。鎌倉期においては、嘉禎三年（1237）に佐原盛連の後家が「矢部禪尼〈法名禪阿〉」（三浦義村娘）と称され、「矢部別庄」に居住していた（『吾妻鏡』同年六月一日条）。夫方で過ごす当時の婚姻居住形態を踏まえるに、北条泰時と離縁した矢部禪尼は、夫盛連方の邸宅に住み、盛連没後はその菩提を弔いながら三浦郡矢部郷内の別荘に居住していたと考えられ〔高橋 2016a〕、鎌倉期の満願寺および佐原一族の本拠地は矢部郷内にあった。

最近、瀬谷貴之「総論 運慶—鎌倉幕府と三浦一族—」（横須賀美術館・神奈川県立金沢文庫特別展『運慶—鎌倉幕府と三浦一族—』吉川弘文館、2022年）にて、これまで満昌寺の創建とされてきた、故三浦義明供養のため源頼朝が「三浦矢部郷内可建立一堂之由思食立」（『吾妻鏡』建久五年（1194）九月二十九日条）という記事を、岩戸満願寺の創建記事とする意見が出された。これは縁起や地誌などの近世由緒をすべて偽作として排除した上でのものだが、満願寺が矢部郷内にあるとなれば全く可能性がないわけではない。同記事を満願寺創建とする論拠は「果たして建久五年までその供養が、三浦氏によって行われなかったとは考え難い」とし、治承四年（1180）の衣笠城合戦で戦死した三浦義明の没年から時期が立ちすぎていることに求める。ただし、三浦義澄らの一族の家祖認識は、治承・寿永の内乱期や和田合戦で平安末期に活躍した三浦為継を曩祖としている（延慶本『平家物語』、『吾妻鏡』建保元年（1212）五月二日条）。三浦義明を家祖とする三浦惣領家の認識は宝治合戦から登場しはじめ（『吾妻鏡』宝治元年（1247）六月八日条）、鎌倉後期頃に形成されたものである〔高橋 2016b〕。鎌

倉初期から三浦義明が曩祖として三浦一族のなかで共有された存在ではなく、ましてや庶流の佐原氏が頼朝発願で満願寺を建立して義明を供養するとは考えがたい。また、義明の供養時期の特徴については、建久五年の義明供養と近い時期の同八年に石橋山合戦で落命した佐那田義忠の供養のため、頼朝は鎌倉山内に証菩提寺を建立している（『同』建長二年（1250）四月十八日条）。佐那田義忠の供養も没年から時期が経過して行われていることになる。これについて先行研究では、当該期が奥州合戦を経て頼朝の軍事権力が清算・再編される時期にあたり、頼朝挙兵時期の敗戦が三浦義明や佐那田義忠の忠義のエピソードとして頼朝自身によって「創造神話」化されていたことが指摘されている〔高橋 2016b・田辺 2009〕。彼らの供養・顕彰が極めて政治的な意図のもとなされていたことに鑑みるに、義明供養の時期は鎌倉幕府権力との連動を想定すべきであろう。何よりも大矢部にある満昌寺には、鎌倉後期・末期頃制作の三浦義明坐像が安置され、宝治合戦後に嫡流となった佐原氏の関与が指摘される〔横須賀市 2009〕。像内修理銘や地誌類から近世段階には確実に同寺にあるため、明治期の廃仏毀釈での移動は認められない。かかる造像がされる時点で、同寺が義明ゆかりの寺院とする共通認識が三浦一族にあり、その認識があるが故に、鎌倉後期に嫡流となった佐原氏の義明坐像の制作があったと理解される。三浦一族の曩祖が鎌倉初期では為通であるのに対し、『吾妻鏡』中に三浦義明顕彰記事が散見する理由としては、幕府の顕彰事業に加え、そもそも編纂物である同歴史書での頼朝挙兵記事が、頼朝の軍事行動に多大な貢献を果たした北条氏・三浦氏・佐々木氏・結城氏らの家の起源譚が含みこまれた各家の由緒を語る集合体であることが影響しよう〔藪本 2022〕。宝治合戦前後から鎌倉後期・末期にかけて、三浦一族の曩祖が義明と認識されたがため、彼ら一族の一とくに佐原氏であろうが一由緒を語る記事がふんだんに盛り込まれるようになったと考えられる。満昌寺が頼朝発願による義明供養の寺院であったため、『吾妻鏡』にはその供養を示す記事が取り入れられ、また同じく義明を曩祖と認識する佐原一族が鎌倉後期・末期頃に満昌寺で三浦義明坐像を造像したのであろう。先の建久五年の記事が三浦惣領家の寺院である満昌寺である蓋然性は崩れない。蛇足ながら、先の意見ではその他の論拠として考古学的見解〔横須賀市教育委員会 1992〕を引用しつつ、満願寺が創建当初から臨池伽藍であったことを述べ、鎌倉永福寺との近似性を強調しているが、これもそもそも当該地で苑池遺構は検出されず、満願寺の伽藍配置形成を本稿で俊苧招請時期としたことから成り立ちがたい。以上の諸点から、満願寺の創建を『吾妻鏡』建久五年九月二十九日条の記事内容に結びつけることはできない。

- (4) 黒駒地内「駒ノ墓」の永福寺式軒瓦に関しては、八田氏の同族小田氏や下妻氏・小山氏・結城氏などさまざまな武士勢力の関与が想定され確定には至っていない。今後の鎌倉前期における当該地の地域情勢を踏まえ、再度出土瓦を定位する必要がある。同所の瓦については佐久間秀樹「駒之墓表採の軒平瓦について」（『下妻の文化』23号、1998年）、『八田知家と名門常陸小田氏—鎌倉殿御家人に始まる武家の歴史—』（土浦市博物館、2022年）に詳しい。
- (5) 佐原一族以外にも、例えば『吾妻鏡』建長二年（1250）三月一日条の京都閑院内裏造営の費用負担として課され御家人のなかに佐原盛連跡・大多和義成跡・長江明義跡があり、三浦一族では、佐原・大多和・長江の一族は宝治合戦後も御家人として存続していた。
- (6) その他に、(文保元年（1317）正月三十日「金沢貞顕書状」（『鎌倉遺文』26194号）では金沢貞顕が、「三浦安芸前司（時明カ）」に金堂の柱三本を申しつけており、佐原時明一族と北条一門との関わりの深さが窺える。
- (7) 『新編会津風土記』（『新横補遺』2931号）には、応長年間（1311~1312）に佐原盛宗家臣の三河権守宗景が会津梁取村で館を建てたという記事を載せる。近世地誌の記載だが、これも会津地域の本拠地化を窺わせる記述であろう。

#### 【参考文献】

秋山哲雄「都市鎌倉における北条氏の邸宅と寺院」（同『北条氏権力と都市鎌倉』吉川弘文館、2006年）  
石井進『鎌倉武士の実像』（平凡社、1987年）

- 石川安司「瓦・仏像・浄土庭園遺構—埼玉県内の鎌倉時代前半を中心に—」（埼玉県立嵐山史跡の博物館編『東国武士と中世寺院』高志書院、2008年）
- 岩田慎平「北条時房論—承久の乱以前を中心に—」（『古代文化』68、2016年）
- 上横手雅敬『北条泰時』（吉川弘文館、1958年）
- 海老名尚・福田豊彦「『田中穰氏旧蔵典籍古文書』「六条八幡宮造営注文」について」（『国立歴史民俗博物館研究報告』45集、1995年）
- 鎌倉市『鎌倉市二階堂国指定史跡 永福寺跡 国指定史跡永福寺跡環境整備事業に係る発掘調査報告書—遺物編・考察編—』（鎌倉市教育委員会、2002年）
- 小林康幸「永福寺式軒瓦と鎌倉御家人」（神奈川県立歴史博物館特別展示図録『永福寺と鎌倉御家人—荘厳される鎌倉幕府とそのひろがり—』小さ子社、2022年）
- 齋藤慎一『中世武士の城』（吉川弘文館、2006年）
- 鈴木かほる「鎌倉後期の三浦佐原氏の動向」（『三浦一族研究』4号、2000年）
- 鈴木かほる『相模三浦一族とその周辺史』（新人物往来社、2007年）
- 高橋秀樹「佐原義連とその一族」（同『三浦一族の研究』吉川弘文館、2016a年）
- 高橋秀樹「「三浦介」の成立と伝説化」（同『三浦一族の研究』吉川弘文館、2016b年）
- 高橋秀樹『対決の東国史2 北条氏と三浦氏』（吉川弘文館、2021年）
- 田辺旬「鎌倉幕府の戦死者顕彰」（『歴史評論』714、2009年）
- 外村久江『早歌の研究』（至文堂、1973年）
- 外村久江「早歌「撰要両曲卷」の成立と比企助員」（『日本歌謡研究』20号、1981年）
- 永井晋『比企氏の乱』（まつやま書房、2022年）
- 中三川昇「三浦半島東岸の古代末～中世初期遺跡群について—三浦氏本貫地とその周辺地域における遺跡群の様相—」（『考古論叢神奈川』21集、2015年）
- 西谷功「泉涌寺開山への諸相」（同『南宋・鎌倉仏教文化史論』勉誠出版、2018年）
- 原廣志「永福寺所用瓦について」（平成十五年度～平成十七年度科学研究費補助金（基盤研究(B)）研究成果報告書『吾妻鏡と中世都市鎌倉の多角的研究』（研究代表者：五味文彦）、2006年）
- 菱沼一憲「源頼朝「御権威」の成立と新秩序」（同『中世地域社会と将軍権力』汲古書院、2011年）
- 桃崎祐輔「常陸三村山採集の永福寺系瓦と「極楽寺」銘梵鐘」（『歴史人類』31号、2003年）
- 藪本勝治『『吾妻鏡』の合戦叙述と〈歴史〉構築』（和泉書院、2022年）
- 山野龍太郎「小代行平に関する覚書」（『日本史学集録』40号、2019年）
- 湯山学『相模武士二 三浦党』（戎光祥出版、2011年）
- 横須賀市教育委員会『岩戸満願寺—満願寺境内遺構確認調査報告—』（横須賀市教育委員会、1992年）
- 横須賀市『新横須賀市史 別編 文化遺産』（横須賀市、2009年）
- 横須賀市『新横須賀市史 通史編 自然・原始・古代・中世』（横須賀市、2012年）
- 渡邊晴美「北条時房について—生誕から連署就任まで—」（同『鎌倉幕府北条氏一門の研究』汲古書院、2015年）
- 渡邊浩貴「権力を“荘厳”する—永福寺と鎌倉幕府・鎌倉御家人—」（神奈川県立歴史博物館特別展示図録『永福寺と鎌倉御家人—荘厳される鎌倉幕府とそのひろがり—』小さ子社、2022a年）
- 渡邊浩貴「鎌倉御家人の造寺活動と地域基盤」（中世瓦研究会『シンポジウム「永福寺式軒瓦の成立と展開」発表要旨、2022b年）
- 渡邊浩貴「東国武士の地域連携と鎌倉幕府の成立—源義朝の政治的・文化的遺産をめぐって—」（『令和4年度公開講座 時代の変換点に生きた相模の人々の暮らし—古代から中世へ—』公益財団法人かながわ考古学財団、2022c年）

## 4. 瓦の位置づけ

小林 康幸

はじめに

出土瓦の整理によって満願寺の寺史の一端が考古学的に明らかになっただけでなく、神奈川県東部、三浦半島地域における中世瓦の様相が明らかになったことには大きな意義がある。ここでは満願寺遺跡出土瓦について、最初に軒瓦のセット関係を明らかにし、瓦の年代を考えたいうえで鎌倉の瓦との比較を行い、八事裏山窯産瓦の満願寺遺跡への供給についても言及し満願寺出土瓦の位置づけを考察する。

### 軒瓦のセット関係

満願寺遺跡出土瓦の年代的な変遷を検討するにあたり、出土瓦とりわけ軒瓦（軒丸瓦・軒平瓦）のセット関係を明確にしておく。これまでの整理作業から満願寺遺跡出土の軒瓦には次のとおり3種類のセット関係を見出すことができる（第52図）。

セット1 軒丸瓦MAⅡ+軒平瓦MNⅢ

セット2 軒丸瓦MAⅠ01+軒平瓦MNⅠ01

セット3 軒丸瓦MAⅠ02+軒平瓦MNⅠ02または軒平瓦MNⅠ03

セット1は八事裏山窯産の瓦で構成されるセット関係である。生産地において考えられている瓦の年代は12世紀末であり<sup>(1)</sup>、文献史料上で明らかな満願寺の創建年代である寿永三年（1184）頃と大きな齟齬はない。満願寺遺跡におけるセット1の出土点数は少量であり、出土瓦全体に占める割合も低い。創建時における満願寺堂宇の規模も明確ではないが、一応、セット1の軒瓦を「満願寺Ⅰ期瓦」＝創建期瓦ととらえておく。

セット2とセット3は基本的に同文のセット関係である。遺物として検討すれば、セット2の方がセット3より若干古い瓦と見することもできるが、瓦が堂宇の屋根に葺かれた状態としてはおそらく同時期の瓦群であろう。

軒平瓦MNⅠ01、MNⅠ02及びMNⅠ03は4弁の瑞花や唐草が簡略・単純化されているが、その文様は軒平瓦MNⅢ、すなわち八事裏山窯の軒平瓦を祖型とする「八事裏山系」の瓦である。過去に出土した瓦当文様全体がよくわかるMNⅠ01を第52図に掲載した。ただ最大の相違は軒平瓦MNⅠ01、MNⅠ02及びMNⅠ03とセットになる軒丸瓦が蓮華文軒丸瓦ではなく、三巴文軒丸瓦であるということである。この差は年代差を示す要素であり、セット2、セット3をセット1よりも後出の組合せと考える要因の一つである。

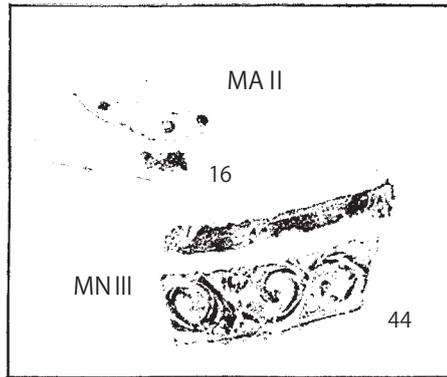
セット2及びセット3の軒瓦とともに屋根を葺いたとみられる平瓦はMHB02aやMHB03bであるが、これらの平瓦が凸面に大きな単位の格子目の叩きを有する平瓦であることから、セット2及びセット3の軒瓦を「満願寺Ⅱ期瓦」ととらえておく。

なお今回の整理作業では軒平瓦MNⅡと組合せになる軒丸瓦は明確に見出せていない。このため現時点ではセット4を見出すことが出来なかった。

### 瓦の年代

満願寺は寿永3年（1184）頃に創建したと伝えられているが、創建期の堂宇が瓦葺であることを前提とするならば寺史のとおり創建期の瓦は12世紀末の瓦となる。創建後の堂宇については、火災であるとか修理・再建といった具体的な記録は伝えられておらず、堂宇の変遷を知ることが出来ない。ただし断片的な記事ではあるが、『泉涌寺不可棄法師伝』という史料に重要な手掛かりを見出すことが出来る。

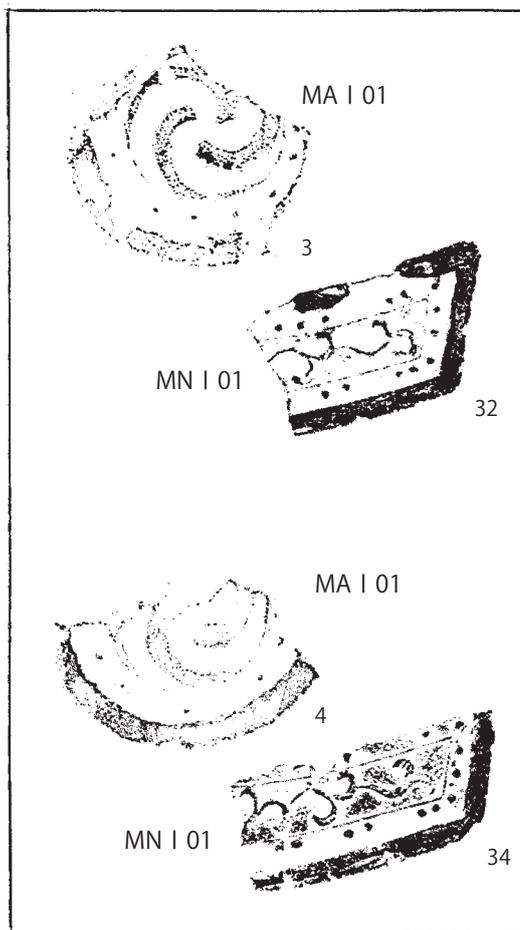
軒瓦セット1



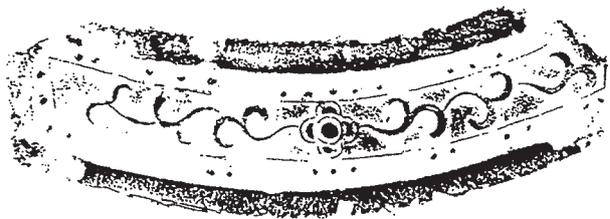
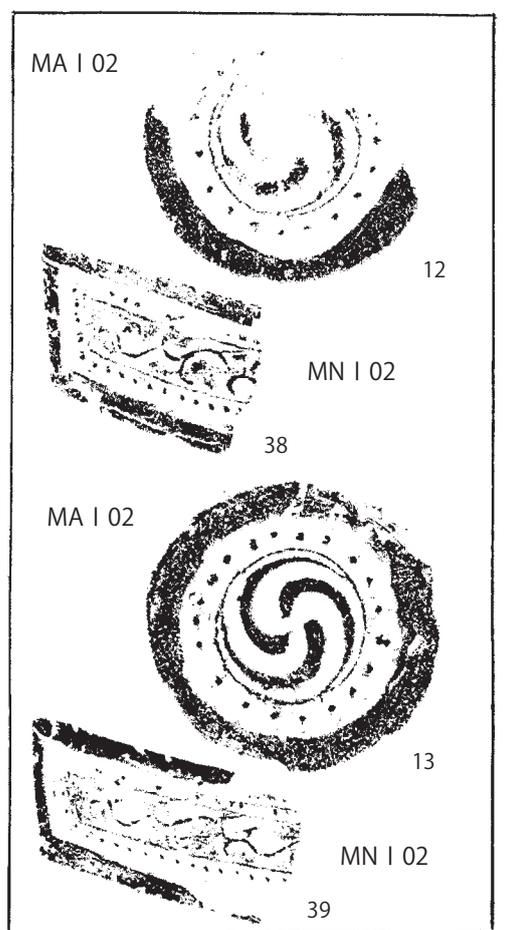
祖型

八事裏山窯出土の軒瓦

軒瓦セット2



軒瓦セット3



参考資料(過去に出土したMN I 01)

八事裏山窯系の系譜

第 52 図 満願寺遺跡出土瓦のセット関係

史料の内容を全面的に支持するのではなく、まず発掘調査の成果から考古学的に判明している事象をふまえたうえで、史料との突合せを行うこととしたい。考古学的に判明している事象は次のとおりである<sup>(2)</sup>。

- ・瓦は層位的に大きく上層と下層にわかれて堆積していること。
- ・発見された礎石建物の前面には瓦を敷き詰めた遺構が発見されており、敷き詰められた瓦がこの礎石建物以前の堂宇（瓦葺建物）に使用された瓦であると考えられること。

このように満願寺は寿永3年の創建以降、明らかに堂宇の再建ないし規模拡張が行われた状況が確認できる。この状況が満願寺Ⅱ期の姿であり、セット2及びセット3の軒瓦、そしてこれらにともなう凸面に格子目の叩きを有する平瓦（平瓦MHB 02やMHB 03）がこの時期の瓦となるのである。特に凸面に格子目の叩きを有する平瓦が13世紀前半から中頃の瓦であることから、この年代が満願寺Ⅱ期の年代になると考えられる

『泉涌寺不可棄法師伝』は京都・泉涌寺の開山である月輪大師 俊 苧<sup>しゅんじょう</sup>（1166～1227）が貞応3年（1224）に佐原義連の子、家連に招請されて家連の三浦館に至り、梵宇（＝寺院）を供養したことを記している。

家連の三浦館の梵宇が満願寺であると考えられている。泉涌寺は俊苧が開山となり建保6年（1218）から大伽藍の造営を開始し、嘉禄2年（1226）に完成している。俊苧が満願寺を訪れたのは泉涌寺造営中のことであるとともに、俊苧の生涯の最晩年といえる時期である。この時期に京都の高僧を招くことが出来た佐原家連の力の大きさを窺い知ることが出来る。俊苧が「梵宇供養」を行った貞応3年（1224）が満願寺Ⅱ期の年代であり、考古学的に想定した満願寺Ⅱ期瓦の年代に符合するのである。

以前、相模の中世瓦を概観した際、今回の検討で満願寺Ⅱ期瓦とした瓦を満願寺の創建期瓦と認識したため、当時はそれらの瓦を相模東部の中世瓦編年においてⅠ期（12世紀末から13世紀初頭）に位置付けたが<sup>(3)</sup>、今回の検討により編年（年代観）をⅡ期（13世紀前半から中頃）に訂正しておきたい。

瓦については年代以外にも検討すべき課題が存在する。満願寺Ⅰ期の瓦にはセット1の軒瓦以外に平瓦MHA 01が存在する。MHA 01は混入物がほとんどない精良な粘土を胎土とし、焼成が硬質な平瓦である。凸面には縦方向に縄目の叩きが確認できる。この平瓦は鎌倉永福寺の創建期に使用された平瓦と同一の特徴を有しており、12世紀末の瓦と考えられる。埼玉県北部、児玉地域の瓦に極めて似た粘土を胎土としており、同地域で生産されたものであろう。問題はこの平瓦がセット1の軒丸瓦MAⅡ＋軒平瓦MNⅢとともに満願寺創建期の屋根に葺かれたかどうかである。軒丸瓦MAⅡ＋軒平瓦MNⅢと同質の平瓦としてはMHCが存在している。だがこのMHCは出土点数が極めて少なく、仮に堂宇の軒先だけをセット1の軒瓦で葺いたとしても屋根全体を葺く平瓦が量的に不足することになる。この不足を補う瓦として平瓦MHA 01が使用された可能性が考えられるが、確証を得るには至っていない。

満願寺の発掘調査は文化財収蔵庫の建設にともなって実施された調査であり、発見された遺構についても保存も図られたことから下層遺構の全体像解明について十分な成果を得るには至らなかった。調査で取り上げられた瓦もそのほとんどが上層の遺構にともなう瓦（Ⅱ期瓦）であり、Ⅰ期瓦の多くは現在も境内の地下に埋蔵されている。Ⅰ期瓦の全容解明は今回の資料整理でも限界があり、将来、下層の遺構やそれらにともなう瓦を調査する機会に恵まれるならば、その機会に委ねざるを得ない。

## 鎌倉の瓦との比較

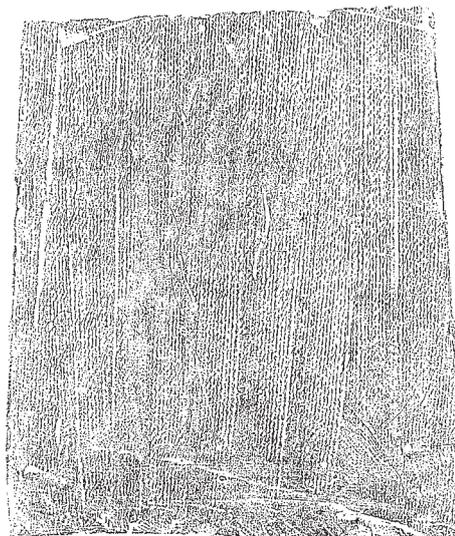
次に満願寺出土瓦を鎌倉の出土瓦と比較してみたい。比較するのは建久5年（1194）に創建された永福寺の瓦である。

鎌倉の永福寺は周知のとおり、鎌倉幕府を創設した源頼朝が奥州合戦で平泉を訪れた後に、平泉で目にした中尊寺などの精舎に感銘を受け、敵味方を問わず合戦の戦没者を鎮魂することを目的に創建した寺院である。一方、満願寺は寿永三年（1184）頃、佐原十郎義連によって創建された寺院である。

満願寺Ⅰ期の  
平瓦凸面  
MHA01



永福寺Ⅰ期の  
平瓦凸面

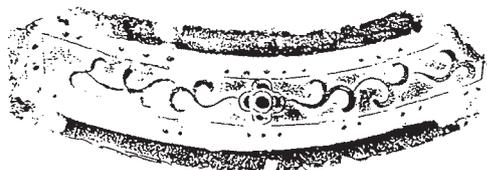


88

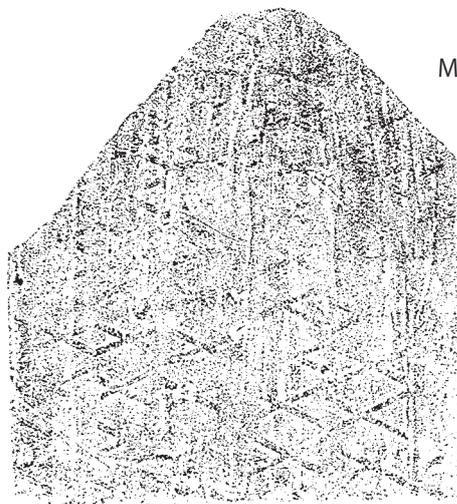


MA I 01

3



満願寺Ⅱ期の軒瓦



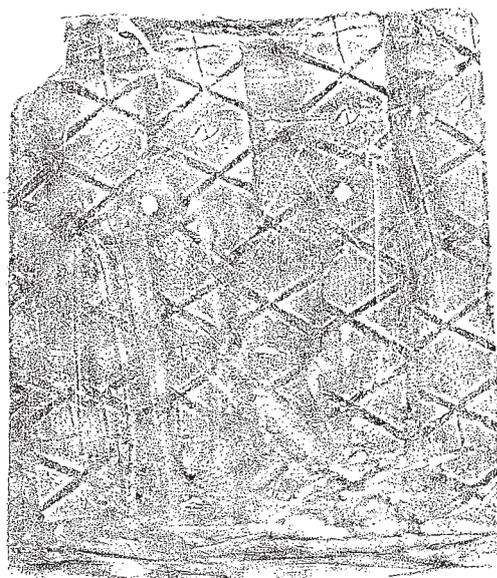
MHB02

100

満願寺Ⅱ期の平瓦凸面



永福寺Ⅱ期の軒瓦



永福寺Ⅱ期の平瓦凸面

第 53 図 満願寺遺跡出土瓦と永福寺跡出土瓦の比較

満願寺遺跡では創建期の瓦（＝満願寺Ⅰ期瓦）として八事裏山窯産の瓦が出土しているが、永福寺でも創建期の瓦として八事裏山窯産を含む尾張産の可能性の高い瓦が出土している。その採用は満願寺が永福寺より10年早いことになる。ただし、永福寺では八事裏山窯産の瓦が創建期瓦の主体ではなく、量的にも少量で客体的存在であることを留意しておかなければならない。

満願寺遺跡の平瓦MHA 01は凸面に縦方向の縄目の叩きをもち、混入物がほとんどない精良な粘土を胎土とし、焼成が硬質な平瓦であるが、永福寺跡でもこれと同一の特徴をもつ平瓦（女瓦A類）が出土している<sup>(4)</sup>。この平瓦は永福寺創建期の平瓦の主体を占めるものであり、同質の丸瓦とともに使用された状況が確認されている。満願寺遺跡の平瓦MHA 01は丸瓦MMAとの組合せが考えられる。こうした特徴を有する永福寺創建期の丸瓦・平瓦は埼玉県児玉郡域で生産され搬入された瓦と考えられているが、同地域で生産された瓦は満願寺でも使用されていたことが明らかになった。鎌倉と横須賀は約20km離れた位置関係にある。

満願寺Ⅱ期瓦とした軒瓦セット2（軒丸瓦MA I 01＋軒平瓦MN I 01）、軒瓦セット3（軒丸瓦MA I 02＋軒平瓦MN I 02）にともなう平瓦は、凸面に比較的大きな単位の格子目の叩きを有するMHB 02、MHB 03である。凸面に比較的大きな単位の格子目の叩きを有する平瓦は永福寺跡でも出土しており、女瓦C類として分類されており、永福寺Ⅱ期とされる寛元・宝治年間の修理瓦（1240年代）として出現している<sup>(5)</sup>。これらの平瓦は13世紀前半から中頃という年代でも一致する瓦である。ただし先に述べたとおり、満願寺Ⅱ期の瓦は貞応3年（1224）の堂宇造営時の瓦と考えられるので、永福寺Ⅱ期（寛元・宝治年間修理）の瓦よりも10数年古い瓦ということになる。このことは満願寺瓦のもつ重要な意義として認識しなければならない。

第53図に示したとおり、満願寺遺跡も永福寺跡もⅡ期の軒丸瓦は三巴文軒丸瓦であるが、セットになる軒平瓦の瓦当文様が満願寺遺跡は唐草文、永福寺跡は下向き剣頭文という違いが生じている。満願寺Ⅰ期のMNⅢの軒平瓦はⅡ期においても生産地が異なるものの、同一の文様系譜に連なる「八事裏山系」の軒平瓦として引き継がれている。にもかかわらず軒丸瓦はⅠ期の蓮華文軒丸瓦がⅡ期には三巴文軒丸瓦へと転換しているのである。

先にも述べたように満願寺の創建は永福寺より10年早いですが、永福寺創建期の主たる軒瓦は「八事裏山系」の蓮華文軒瓦と唐草文軒平瓦の組合せである。この組合せの軒瓦は2001年に永福寺式軒瓦と呼ぶことを提唱し<sup>(6)</sup>、現在では一定の定着がみられている<sup>(7)</sup>。

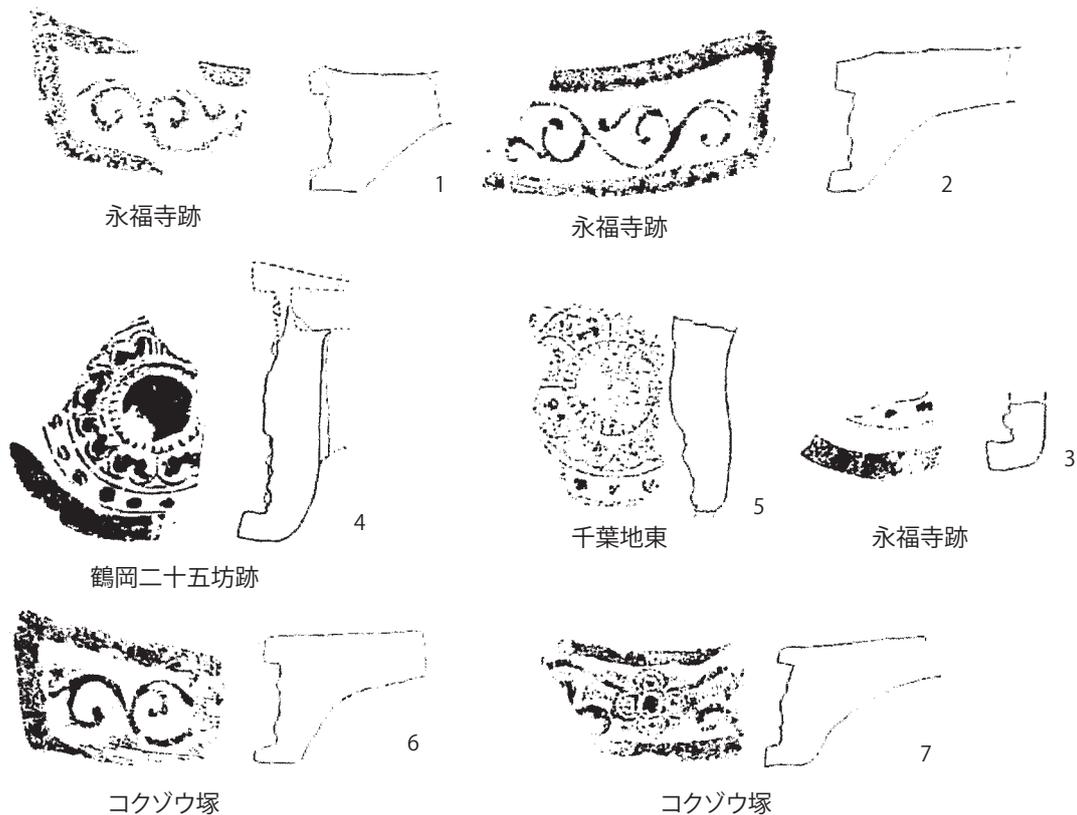
永福寺Ⅱ期の平瓦（＝女瓦C類）は埼玉県美里町の水殿瓦窯で生産された瓦であることが判明しているが<sup>(8)</sup>、永福寺Ⅰ期の瓦も水殿瓦窯周辺の児玉郡域で生産された可能性が高い。満願寺Ⅰ期の丸瓦MMAや平瓦MHA 01は永福寺Ⅰ期の瓦、さらに永福寺Ⅱ期の瓦とその胎土が非常に似ていることから、同様に埼玉県北部の児玉郡域の瓦窯で生産された瓦と考えられる。

#### 八事裏山窯産瓦の満願寺への供給

八事裏山窯で生産された瓦のうち4期（12世紀末）の瓦はこれまでのところ相模国以外での出土は知られていない。相模国内での出土は伊勢原市、鎌倉市、そして横須賀市の3地域に限られている<sup>(9)</sup>。具体的な出土地は伊勢原市のコクゾウ塚<sup>(10)</sup>、鎌倉市の永福寺跡<sup>(11)</sup>、鶴岡二十五坊跡<sup>(12)</sup>、千葉地東遺跡<sup>(13)</sup>、そして横須賀市の満願寺遺跡である（第54図）。筆者は以前、相模における八事裏山窯産瓦の供給先寺院（X寺）の候補地のひとつに満願寺を想定した<sup>(14)</sup>。

このように極めて特殊な出土傾向を示す八事裏山窯産の瓦が一体、どのような理由により満願寺で出土するのであろうか。その歴史的な背景について考えてみたい。

満願寺を創建した佐原十郎義連は鎌倉時代の有力御家人、三浦義明の子（十男）で、三浦本家から分



第 54 図 相模出土の八事裏山窯産瓦

かれて佐原氏を名乗った人物であり、武芸（弓馬）に優れた武士として知られている。源平合戦における一ノ谷合戦における鶴越えのエピソードは有名である。また満願寺には国指定重要文化財の観世音菩薩、地蔵菩薩が祀られており鎌倉時代前期からの同寺の繁栄が窺われる。文献史料の記録どおりであれば満願寺は永福寺より 10 年早く創建されたことになるが、鎌倉時代初期、鎌倉政権や東国社会がまだ安定する以前の時期においてこの 10 年という時間差には大きな意義が認められる。永福寺より 10 年も早く相模国で尾張産の瓦を使って堂宇を建立し、優れた仏像を祀った満願寺の繁栄は同寺を創建した佐原氏の力の象徴そのものと考えられる。

八事裏山窯は尾張国の八事迫の領域内に所在するが、近年、尾野善裕は承久の乱（1221 年）以前から山田氏（清和源氏重宗流）が八事迫の在地領主であったことをふまえ、山田重時が大治年間（1126～1131）に相模守を務めていた時期に三浦氏との関係を築いていたのではないかとの示唆に富む見解を発表している<sup>(15)</sup>。尾野氏は言外に山田氏と三浦氏の関係が三浦一族の佐原氏に結びつくことを期待しているようである。だが満願寺の創建はさらにこの半世紀後のことであり、満願寺で八事裏山窯産の瓦が出土することの決定的な理由が明らかになったわけではない。窯跡所在地の所領関係からの説明は今後も必要になるだろう。

おわりに

今回の検討により満願寺遺跡の瓦の変遷、特に軒瓦のセット関係を明確にし、満願寺遺跡出土瓦をⅠ期瓦とⅡ期瓦に区分することが出来た。その年代についてもⅠ期瓦を 12 世紀末、Ⅱ期瓦を 13 世紀前半に位置付けた。この年代は史料から知られる寿永 3 年（1184）と貞応 3 年（1224）にそれぞれ該当する。これらの年は鎌倉幕府成立前夜、そして承久の乱直後の時期に該当する。満願寺は鎌倉時代前期の東国社会が激動する時期に創建され、再び伽藍の整備が行われた寺院であったのである。源頼朝ある

いは鎌倉幕府が創建、修理をした永福寺の瓦とも比較も行ったが、年代的に満願寺の創建や伽藍整備はそれぞれ永福寺よりも10年程度先行する時期に実施されていることは注目すべき点である。佐原氏の仏教崇敬、文化摂取についての並々ならぬ熱意、尾張や京都との関係性や人脈、そして財力の在り方が満願寺の存在に表出されている。これまで三浦一族という枠組みのなかでとらえられてきた佐原氏について、再考の必要性があると考えられる。満願寺の出土瓦はそうしたことを考えるうえで極めて重要な歴史的意義を有する資料である。

#### 【註】

- (1) 尾野善裕 1992「八事裏山窯址群の基礎的再検討」『古代人』53 名古屋考古学会  
尾野善裕 2022「八事裏山窯の瓦生産」『シンポジウム永福寺式軒瓦の成立と展開発表要旨』中世瓦研究会
- (2) 横須賀市教育委員会 1992『岩戸満願寺—満願寺境内遺構確認調査報告—』(横須賀市文化財調査報告書第25集)
- (3) 小林康幸・高橋香 2019「相模」『中世瓦の考古学』高志書院
- (4) 原廣志 2002「第4章 出土瓦について」『史跡永福寺跡』遺物編・考察編 鎌倉市教育委員会
- (5) 前掲註(4)に同じ
- (6) 小林康幸 2001「埼玉県下に分布する永福寺式軒瓦について」『埼玉考古』第36号 埼玉考古学会
- (7) 小林康幸 2022「永福寺式軒瓦と鎌倉御家人」『永福寺と鎌倉御家人』(神奈川県立歴史博物館特別展図録) 小さ子社
- (8) 小林康幸 1989「永福寺跡出土瓦の生産瓦窯について」『史跡永福寺跡(昭和63年度)』鎌倉市教育委員会
- (9) 高橋香 2022「相模の八事裏山窯産瓦」『シンポジウム永福寺式軒瓦の成立と展開発表要旨』中世瓦研究会
- (10) 厚木市 1999『厚木市史』中世通史編
- (11) 前掲註(4)に同じ
- (12) 原廣志 1981「鶴岡二十五坊跡出土の鏡瓦」『鎌倉考古』V ol.11
- (13) 神奈川県立埋蔵文化財センター 1986『千葉地東遺跡』
- (14) 小林康幸 2020「中世相模における尾張産瓦の受容(予察)」『芙蓉峰の考古学』II 六一書房
- (15) 尾野善裕 2022「八事裏山窯の瓦生産」『シンポジウム永福寺式軒瓦の成立と展開発表要旨』中世瓦研究会

## 5. 中世の岩戸

中三川 昇

### 岩戸満願寺の中世における地理的環境

平安時代末頃の三浦為通や為繼に始まると伝わる三浦一族は、宝治元年（1247）の宝治合戦で宗家が滅亡するまで、衣笠地域や大矢部地域を核として久里浜から衣笠に至る地域に連なる「古久里浜湾西岸遺跡群」[中三川 2015] 一帯を本貫地・拠点としていたと考えられ、当地に数多くの遺跡や寺院、仏像などを残している（第 55 図）。この時期の地理的環境としては、東京湾に面した久里浜付近から北西方向に古久里浜湾（古平作湾とも）の入江が奥深くまで存在していたと想定され、陸路で衣笠・大矢部地域から東京湾への出口となる久里浜地域へと繋ぐ経路はこれらの遺跡群を貫く地溝帯状地形部分にあったと考えられる（図中黒破線）。岩戸満願寺はこの経路のほぼ中ほどに位置しており、「岩戸」の名の如く三浦氏本貫地の中核地帯に入る関門ともいえる場所に築かれていることになる。

### 満願寺遺跡の調査地点と近隣遺跡の調査概要

満願寺遺跡は岩戸満願寺の現境内地とその関連遺構や遺物などを包蔵していると考えられる範囲である。遺跡の標高は 20～22 m 前後で、わずかに南側に向かって傾斜した地形である。遺跡の北側は丘陵斜面で画され、南側はほぼ旧道に画された範囲で、より南側部分は地形的に一段低くなっている。遺跡範囲は北西から南東方向に約 170 m、北東から南西方向に約 56 m ほどである（第 56 図）。満願寺遺跡内では記述の試掘・確認調査以外に現在まで発掘調査は行われていないが、図中に示した地点を含め複数か所で工事立会を行っているが、残念ながらいずれの地点でも遺構・遺物は確認されていない。

満願寺遺跡に隣接する遺跡としては飯盛塚と満願寺東横穴群があり、平成 9 年（1997）2 月に横須賀市自然・人文博物館による学術調査が行われている。正式な発掘調査報告はなされていないが、調査の概要は示されている [稲村 1998]。

塚状地形の飯盛塚では古墳の可能性も考えたトレンチ調査を行っているが、中世とされる播鉢片が 1 点出土したのみで、塚状地形も自然地形であることが確認されている。

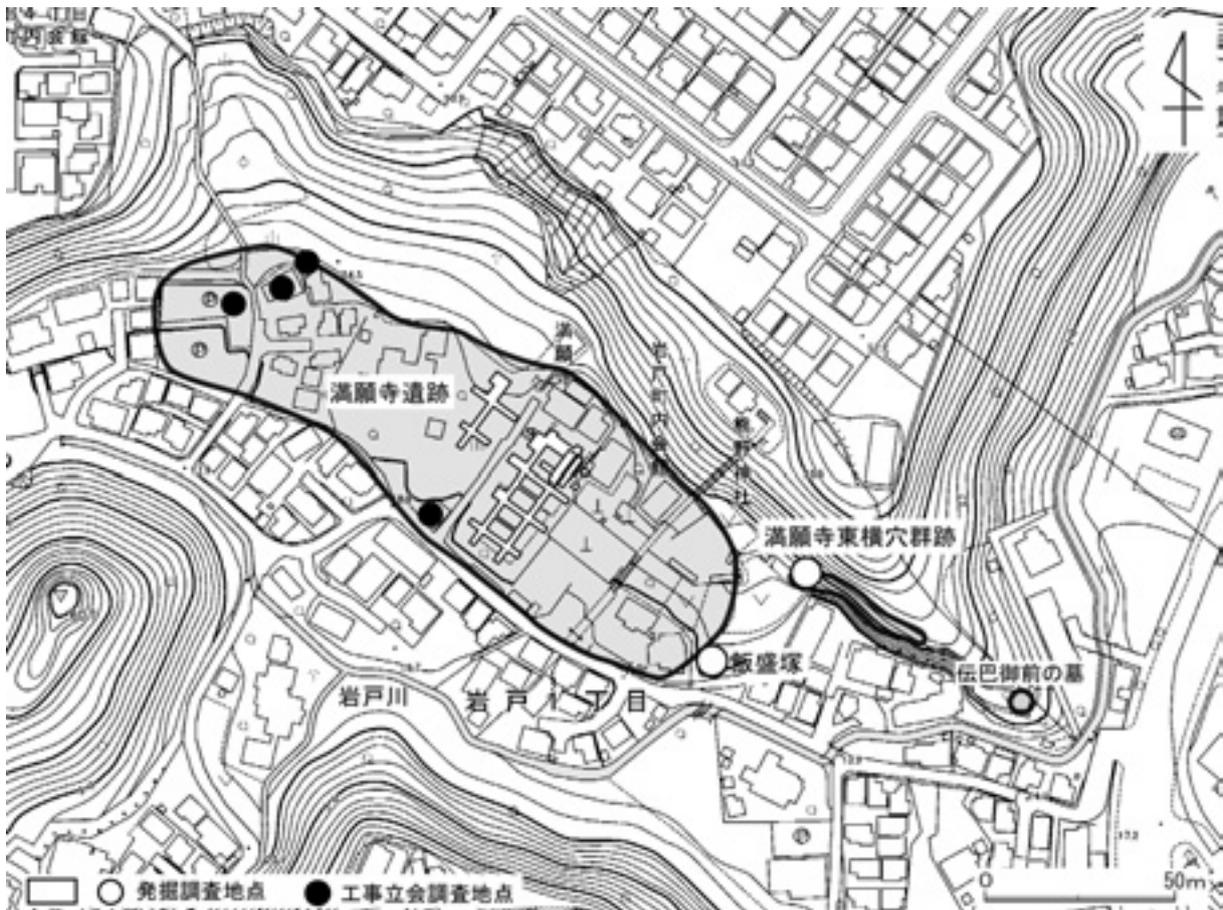
満願寺東横穴群は岩戸満願寺の背後から続く丘陵斜面下部に立地し、横穴墓 6 穴の存在が確認されていたが、満願寺遺跡の東端から 20 m 弱前後の位置にある第 1 号穴と第 2 号穴の横穴墓 2 か所が調査されている。いずれも基本的には古墳時代後期の横穴墓であるが、第 2 号穴内には五輪塔を中心とした石塔類が多数納められており、やぐらに転用されている可能性が考えられた。第 1 号穴では中世の遺構・遺物では五輪塔と宝篋印塔の部材を組み合わせた石塔 1 基が発見されたのみであったが、第 2 号穴では覆土中から、鎌倉時代前半期と考えられる手づくねかわらけ（第 58 図 1）や南伊勢型鍋片（第 58 図 2）、15 世紀前後と考えられるロクロ成形のかわらけ（第 58 図 3・4）、古瀬戸の卸皿（第 58 図 5）などが出土している。これらの遺物がすべてやぐらとして再利用された結果残されたものか否かは検討を要するが、満願寺遺跡のこれまでの発掘調査では、社伝や出土瓦などから鎌倉時代初期と考えられる岩戸満願寺創建期のかわらけや土器類は確認されておらず、手づくねかわらけや南伊勢型鍋の存在は重要である。これらは満願寺遺跡の発掘調査が進展した場合、既調査区の下層部分や未調査地域に鎌倉時代初期の遺物が包蔵されている可能性を示唆する出土遺物と言えよう。今後、満願寺遺跡の調査が進展し、その実態が解明されて行くことを期待したい。

### 【参考文献】

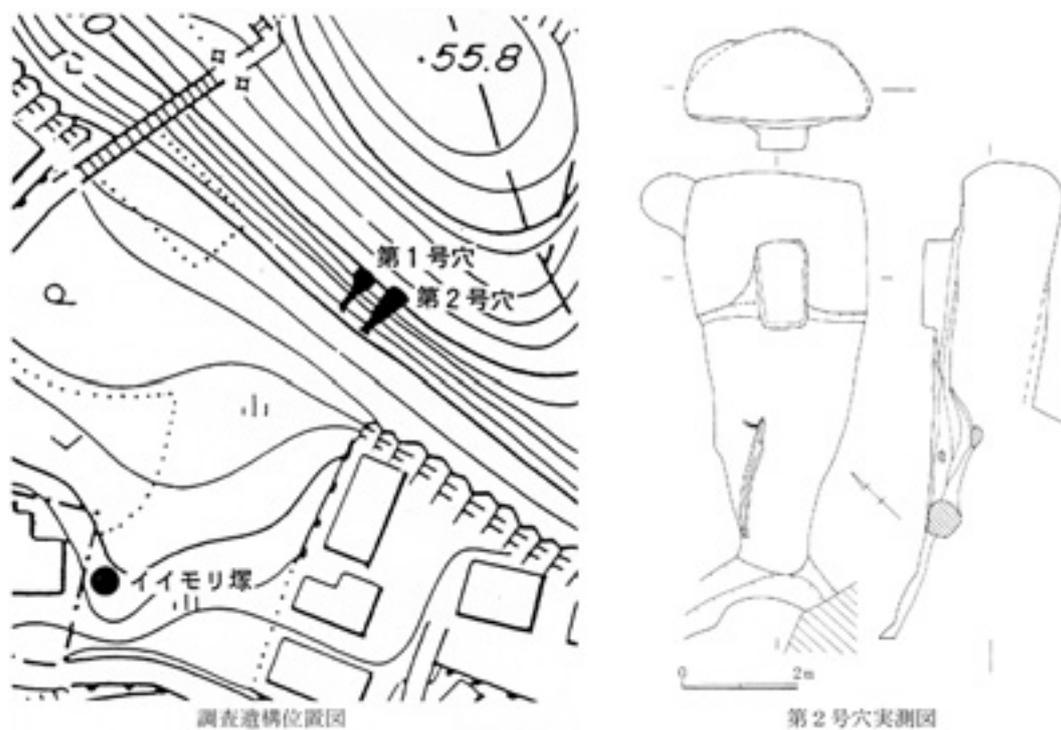
稲村 繁 1998 「イイモリ塚・満願寺東横穴群」『横須賀市埋蔵文化財発掘調査概報集 VI』横須賀市教育委員会



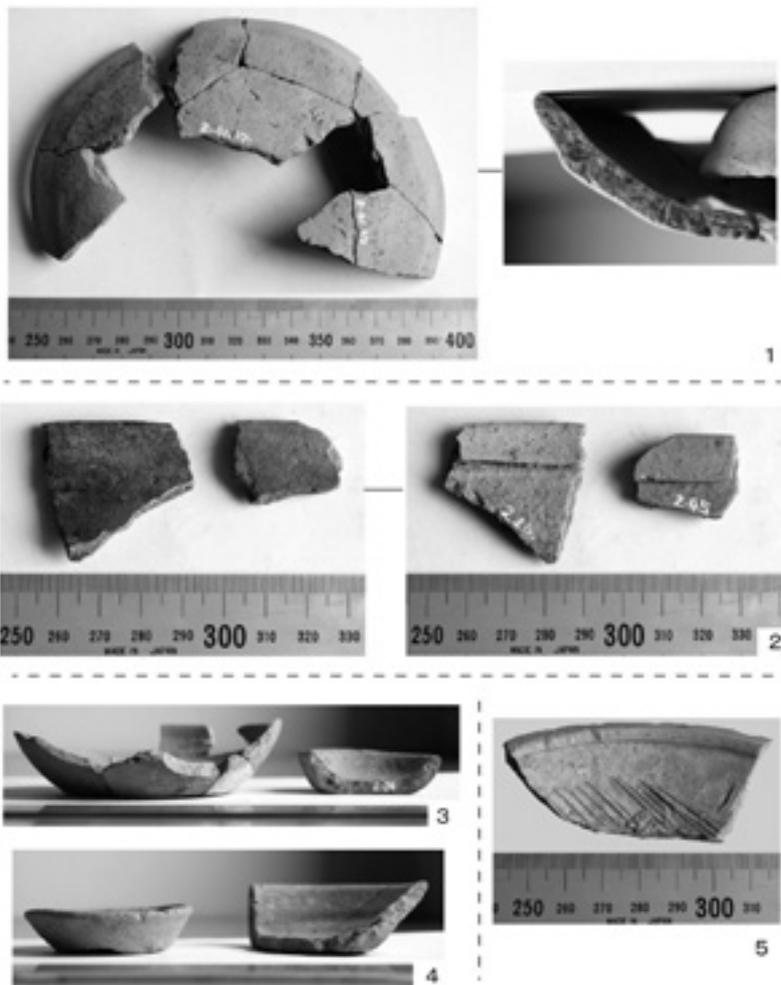
第 55 図 中世前期の想定地形と中世遺跡と寺社の分布図



第 56 図 満願寺遺跡と周辺遺跡の調査地点 (1/1000)



第 57 図 満願寺東横穴群・飯盛塚の調査遺構位置図と第 2 号穴実測図（稲村 1998 を一部改変）



第 58 図 満願寺東横穴群第 2 号穴出土の中世土器・陶器（横須賀市自然・人文博物館蔵）

# 付 表

付表1 瓦観察表

No.	瓦種別	分類	成・整形の特徴	法量 (cm) []は復元値、()は残存値	胎土・焼成 A精良 B粗雑 C尾張	残存	備考
1	軒丸	MA I 01	瓦当面右巴 外区珠文帯 周縁部横ナデ 瓦当裏面ナデ 接合部補充粘土 凹面糸切り痕 玉縁内布目 凸面縄叩き後ナデ 玉縁端部ケズリ	瓦当部内区径 8.1 珠文径 0.7 珠文の間隔 1.5 内縁幅 1.3 径×外縁幅 1.8 外縁最大厚 3.5 幅(13.5) 長(32.4) 玉縁長(2.0) 筒長 30.4 玉縁厚 1.8 筒厚 2.5	B三浦? やや酸化炎	4/5 瓦当 1/3	瓦当面離れ砂
2	軒丸	MA I 01	瓦当面左巴 外区珠文縁 瓦当 裏面ランダムなナデ	内区径 8.5 珠文径 0.5 珠文間隔 2.3 外区珠文数(7)	B三浦?	瓦当 2/3	瓦当面中心に范傷 巴部分にも范傷
3	軒丸	MA I 01	瓦当面左巴 外区部分に木目? 布目 瓦当裏面ランダムなナデ 布目痕明瞭 丸瓦接合部・端部 横ナデ	珠文径 0.6 珠文の間隔 2.2 珠文数(7) 内縁幅 1.5 外縁幅 1.4 外縁最大厚 3.5	B三浦?	瓦当 2/3	瓦当面上房范傷 巴文の尻付近も范傷か
4	軒丸	MA I 01	瓦当面左巴 巴文はヘラで平坦 に調整 珠文帯 周縁ヘラナデ 瓦当裏面ナデ	珠文径 0.4 珠文の間隔 2.2 珠文数(7<内3個欠>) 内縁幅 1.4 外縁幅 1.3 外縁最大厚 3.2	B三浦	瓦当 1/2	范の抜け甘い
5	軒丸	MA I 01	瓦当面巴文 珠文はすべて剥離 巴は低い 外区内縁段状 瓦当裏面横ナデ 指紋あり	内縁幅 1.5 外縁幅 1.3 外縁最 大厚 3.1	B三浦	瓦当 1/4	4と同范か 顎面棒状の圧痕
6	軒丸	MA I 01	瓦当面左巴 外区珠文帯 周縁部ナデ 凸面縦ケズリ	珠文径 0.6 珠文の間隔 1.7 外区珠文数(2) 内縁幅 1.3 外縁幅 1.3 外縁最大厚 3.5	B三浦?	瓦当小片	
7	軒丸	MA I 01	瓦当端部接合部ナデ 丸瓦接合部ナデ 凸面ナデ	内縁幅 1.1 外縁幅 1.3	B三浦? やや酸化炎	瓦当小片	瓦当面離れ砂
8	軒丸	MA I 01	瓦当面左巴 外区珠文縁、 珠文は小振り 表面降灰 周縁部ナデ 丸瓦接合部ナデ 凸面縦ナデ	珠文径 0.6 珠文の間隔 1.7 内縁幅 1.3 外縁幅 1.8	B三浦?	瓦当 1/6	瓦当面外区の圏線范ズレか
9	軒丸	MA I 02	瓦当面左巴文 外区珠文帯 周 縁部ナデ 丸瓦接合部あたりナ デ 凸面縦ケズリ	珠文径 0.9 珠文幅 2.0 内縁幅 1.4 外縁幅 1.4	B三浦?	瓦当小片	瓦当面離れ砂
10	軒丸	MA I 01	瓦当面左巴 瓦当裏面ランダム なナデ 横ナデ 丸瓦接合部凹 面側キザミ?	珠文径 0.7 珠文数(1)	B三浦	瓦当小片	瓦当面巴文の中心部范傷?
11	軒丸	MA I 01	瓦当面左巴 珠文縁 周縁部横 ナデ 瓦当裏面横ナデ	珠文径 0.5 外縁幅 1.3 外縁最大厚 3.4 珠文数(2)	B三浦? 酸化炎	瓦当小片	瓦当面離れ砂
12	軒丸	MA I 02	瓦当面右巴 瓦当裏面ナデ 丸瓦接合部ナデ 凹面布目痕 凸面縦ナデ 縄叩き後ナデ	径 15.1 内区径 8.4 珠文径 0.8 珠文の間隔 1.6 内縁幅 1.6 外縁幅 1.8 外縁最大厚 2.3	B三浦? くすべ	1/8 瓦当 2/3	范端抜け時の接合痕? →范粘土詰め時の順番? 離れ砂
13	軒丸	MA I 02	瓦当面右巴 周縁上部縦ナデ 下部ヘラナデ 瓦当裏面横ナデ	径 15.4 内区径 8.2 珠文径 0.6 珠文の間隔 1.8 内縁幅 1.5 外縁幅 1.8 外縁最大厚 3.0 珠文数(20)	B三浦? 酸化炎	瓦当完存	范傷あり 范端抜けにくかったため か、抜いた後外縁内面側 ナデの痕跡あり 離れ砂
14	軒丸	MA I 02	瓦当面左巴 外区珠文帯 周縁 ナデ 瓦当端部横ナデ 瓦当裏 面ナデ 接合部・丸瓦凹面平行 のキザミ 丸瓦端面は平端未加 工	珠文径 0.6 珠文の間隔 1.9 内縁幅 1.3 外縁幅 1.4 外縁最大厚 3.0	B三浦? 酸化炎	瓦当 1/3	瓦当面離れ砂
15	軒丸	MA I 02	瓦当面右巴 外区珠文帯 瓦当裏面ナデ	珠文径 0.6 珠文の間隔 1.6 内縁幅 1.3	B三浦? 酸化炎	瓦当 1/4	瓦当面離れ砂 范傷多い
16	軒丸	MA II	瓦当面外区珠文縁 外面全面 降灰釉 周縁部横ナデ 瓦当裏面ランダムなナデ	珠文径 0.9 珠文の間隔 1.8 外縁幅 1.1 外縁最大厚 1.6	C八事	瓦当小片	胎土分析済
17	軒丸	瓦当不明	瓦当面貼り付け 凹面布目 凸面縄目叩き 縦ケズリ	幅(7.6) 長(11.9) 筒厚 1.7	B三浦?	小片	
18	軒丸	瓦当不明	凹面ナデ 凸面ナデ(縄不明) 側面ケズリ 面取り 端部ケズリ	径[8.1] 長(12.2) 筒厚 2.6	B三浦 酸化炎	小片	
19	軒丸	瓦当不明	凹面布目摩耗 凸面ナデ	玉縁長 5.4 玉縁厚 2.2	B三浦? 酸化炎	小片	
20	軒丸	瓦当不明	凹面瓦当接合時の弧線? 凸面 ヘラナデ 側面ヘラナデ	幅(9.8) 長(3.5) 筒厚 1.5	B三浦? 酸化炎	小片	

No.	瓦種別	分類	成・整形の特徴	法量 (cm)	胎土・焼成 A精良 B粗雑 C尾張	残存	備考
				[ ]は復元値、( )は残存値			
21	軒丸	瓦当不明	凹面布目 凸面ナデ	玉縁幅(6.8) 玉縁長(7.4) 玉縁厚 2.0	B三浦? 酸化炎	小片	
22	軒丸	瓦当不明	折曲部ナデ 指紋 布目・コビキ痕 凹面布目 コビキ痕 凸面縦ケズリ	幅(7.6) 長(10.2) 筒厚 1.9	B三浦	小片	
23	軒丸	瓦当不明	凹面糸切り 布目 凸面ヘラナデ	幅(10.3) 長(9.3) 筒厚 2.4	B三浦?	小片	
24	軒丸	瓦当不明	凹面糸切り 布目(吊り紐) 凸面ヘラナデ	幅(8.4) 長(9.5) 筒厚 2.5	B三浦 酸化炎	小片	
25	軒丸	瓦当不明	凹面側面付近布目 ナデ 凸面縄叩き後ナデ 側面ヘラナデ	幅(5.1) 長(5.0) 筒厚 1.5	B三浦? 酸化炎	小片	
26	軒丸	瓦当不明	瓦当裏面ナデ	外縁幅 0.7 幅(4.1) 長(6.0) 筒厚 2.2	B三浦? 酸化炎	瓦当小片	
27	軒丸	瓦当不明	凹面糸切り 布目 釘孔 凸面縄目叩き ナデ 側面・端部ケズリ	径[13.4] 長(25.6) 玉縁長 6.3 筒長(19.3) 玉縁厚 1.9 筒厚 1.8	B三浦? 酸化炎	1/3	釘孔に鉄分付着
28	軒丸	MA II	凹面布目 凸面縄叩き ナデ 側面ケズリ 2 回	径[15.6] 長(12.5) 玉縁長(3.3) 筒長(9.2) 玉縁厚 1.6 筒厚 2.0	B三浦	小片	
29	軒丸	瓦当不明	凹面布目 端部ケズリ 凸面ケズリ(一部縄叩き残る)	径[13.2] 長(18.6) 玉縁長 6.8 筒長(11.8) 玉縁厚 1.6 筒厚 2.1	B三浦 酸化炎	小片	
30	軒平	MN I 01	瓦当裏面ナデ 凹面布目 ナデ 顎貼り付け	瓦当部幅 7.2 上外区幅 1.1 下外区幅 1.1 内区幅 5.2 顎面幅 2.6	B三浦?	瓦当 1/6	
31	軒平	MN I 01	瓦当面内区唐草文 瓦当裏面ナデ 顎貼り付け	下外区幅 1.1 内区幅 5.0 顎面幅 3.0	B三浦	瓦当 1/4	
32	軒平	MN I 01	凹面ナデ 凸面格子目叩き 縦ナデ 瓦当面上外区端部ケズリ 瓦当裏面顎部ゆるい横ナデ 瓦当貼り付け	瓦当部幅 7.4 上外区幅 1.4 下外区幅 1.1 内区幅 4.8 顎面幅 3.0	B三浦?	瓦当 1/3	
33	軒平	MN I 01	瓦当面外区珠文帯 2 瓦当端部ケズリ 瓦当側面ヘラケズリ 接合部横ナデ 凹面ナデ 凸面布目 ナデ 瓦当貼り付け	上外区幅 1.4	B三浦?	瓦当小片	瓦当范の抜けが悪いためか、左外区付近だぶつく
34	軒平	MN I 01	瓦当裏面横ナデ 顎貼り付け	下外区幅 1.3 内区幅 4.8 顎面幅 2.7	B三浦?	瓦当 1/3	
35	軒平	MN I 01	瓦当面唐草 下外区珠文 2 コ連続配置 顎貼り付け?	下外区珠文数(2) 顎面幅 2.4	B三浦? くすべ	瓦当小片	
36	軒平	MN I 01	瓦当面下外区珠文帯 瓦当端部横ケズリ	下外区珠文数(1?) 下外区幅 1.1 顎面幅 2.6	B三浦? くすべ	瓦当小片	瓦当面離れ砂
37	軒平	MN I 01	瓦当面内区唐草文 瓦当裏面 縦ナデ 横ナデ 顎貼り付け	下外区幅 1.2 内区幅 4.9 顎面幅 2.5	B三浦?	瓦当 1/6	
38	軒平	MN I 02	瓦当裏面横ナデ 凹面布 ナデ 凸面凹型圧痕 瓦当貼り付け	瓦当部幅 7.8 上外区幅 1.2 下外区幅 1.3 内区幅 4.6 顎面幅 2.9	B三浦?	瓦当 1/3	
39	軒平	MN I 02	瓦当端部ナデ 瓦当裏面横ナデ 凹面ナデ 凸面ナデ 側面ケズリ 顎貼り付け	瓦当部幅 6.8 上外区幅 1.0 下外区幅 0.9 内区幅 4.2 顎面幅 2.1	B三浦?	瓦当 1/2	瓦当面范傷
40	軒平	MN I 02	瓦当裏面 顎貼り付け	下外区幅 1.1 顎面幅 3.0	B三浦?	瓦当 1/4	

No.	瓦種別	分類	成・整形の特徴	法量 (cm) []は復元値、()は残存値	胎土・焼成 A精良 B粗雑 C尾張	残存	備考
41	軒平	MN I 03	瓦当裏面ナデ 顎面ケズリ 顎貼り付け	上外区幅 1.1	B三浦	瓦当小片	
42	軒平	MN II	瓦当内区唐草文 瓦当裏面ナデ 凹面布目 ナデ 顎貼り付け	瓦当部幅 6.5 上外区幅 1.2 下外区幅 1.2 内区幅 3.9 顎面幅 2.4	B三浦?くすべ 酸化炎	瓦当小片	
43	軒平	MN II	瓦当内区唐草文 瓦当裏面縦ナデ 横ナデ 凹面布目 ナデ 顎貼り付け	下外区幅 1.1 顎面幅 2.6	B三浦?くすべ 酸化炎	瓦当 1/4	
44	軒平	MN III	瓦当裏面指頭圧痕 縦ナデ 自然釉 凹面縦ヘラナデ 顎貼り付け	上外区幅 1.4	C	瓦当 1/3	
45	平	MHC	瓦当面唐草文	長(4.0) 厚 2.7	C	瓦当小片	
46	軒平	MN III	瓦当裏面ナデ 凹面糸切り 縦ナデ 顎貼り付け	瓦当部幅 7.4 上外区幅 1.1 下外区幅 1.1 内区幅 4.3 顎面幅 2.4	C	瓦当 1/3	
47	軒平	MN III	凹面斜格子? 凸面写格子転写	長(12.4) 厚 2.0	C	小片	
48	軒平	瓦当不明	瓦当面剥離 ヘラナデ 瓦当裏面ナデ 凹面布目 ナデ 凸面ナデ? 顎貼り付け	上外区幅 1.4	B三浦?	小片	
49	軒平	瓦当不明	瓦当面ヘラナデ(顎裏面)	下外区幅 1.1 顎面幅 2.1	B三浦?	瓦当小片	
50	軒平	瓦当不明	瓦当面剥離 ナデ ヘラナデ 瓦当裏面ナデ 凹面ヘラナデ 凸面ナデ 顎貼り付け	上外区幅 1.5	B三浦?くすべ やや 酸化炎	小片	
51	軒平	瓦当不明	凹面斜格子叩き ナデ 凸面糸切り ナデ 側面・端部ケズリ	幅(13.8) 長(9.8) 厚 2.7	B三浦?くすべ やや 酸化炎	小片	
52	軒平	瓦当不明	凸面格子叩き 釘孔	幅(9.9) 長(11.5) 厚 2.2	B三浦?くすべ やや 酸化炎	小片	凹面・凸面離れ砂
53	軒平	瓦当不明	凹面ナデ? 凸面斜格子叩き	幅(3.0) 最大厚 2.0	B三浦?くすべ	小片	
54	軒平	瓦当不明	瓦当面ナデ 凸面ナデ 顎貼り付け	上外区幅 1.2	B三浦?くすべ	小片	
55	軒平	瓦当不明	表面摩耗 釘孔の縁が高い	幅(8.7) 長(9.5) 厚 2.3 釘孔径 1.2	B三浦? 酸化炎	小片	凹面離れ砂
56	軒平	瓦当不明	凹面布目 凸面ナデ 端部ケズリ	幅(8.0) 長(8.3) 厚 3.0 釘孔径 1.4	B三浦?くすべ	小片	
57	軒平	瓦当不明	凹面ナデ 凸面ナデ 釘孔	幅(5.3) 長(5.1) 厚 2.4	B三浦?くすべ 酸化炎	小片	離れ砂
58	軒平	瓦当不明	折曲部瓦当剥離 瓦当部裏面に厚い粘土	幅(4.1) 長(5.0) 最大厚(3.7) 厚 2.8	B三浦?くすべ	小片	
59	丸	MMA	凹面布目 凸面縄叩き→ ナデ	長(6.3) 最大厚 2.5 厚 1.5	A	小片	
60	丸	MMA	凹面糸切り 布目 凸面縄叩き ナデ 側面・端部ケズリ	径[14.4] 長(20.2) 筒厚 1.7	A	1/3	
61	丸	MMA	凹面布目(とじあわせ痕) 凸面縄叩き ナデ	幅(8.7) 長(14.6) 筒厚 1.9	A	小片	
62	丸	MMA	凹面糸切り 布目 凸面縄叩き ナデ 端部ケズリ	幅(9.3) 長(10.3) 筒厚 2.0	A くすべ	小片	

No.	瓦種別	分類	成・整形の特徴	法量 (cm)	胎土・焼成 A精良 B粗雑 C尾張	残存	備考
				[ ]は復元値、( )は残存値			
63	丸	MMA	凹面布目 凸面ナデ 側面部ケズリ	幅(8.5) 長(7.0) 玉縁厚 1.7	A	小片	
64	丸	MMA	凹面布目 ケズリ 凸面縄叩き ナデ	幅(7.8) 長(10.8) 筒厚 2.0	A	小片	
65	丸	MMA	凹面布目 凸面縄叩き ナデ	幅(7.0) 長(10.8) 筒厚 1.8	Aくすべ	小片	
66	丸	MMA	凹面布目 凸面縄叩き 側面ケ ズリ 2 回	幅(7.7) 長(9.0) 玉縁長(2.5) 筒長(6.5) 玉縁厚 1.9 筒厚 2.2	Aくすべ	小片	
67	丸	MMB	端面ケズリ	幅(8.0) 長(5.6) 厚 1.9	B三浦	小片	
68	丸	MMB	凹面糸切り 布目 綴じ紐 凸面 縦縄目叩き(摩滅) 側面ケズリ 面取り 玉縁端ケズリ 面取り	径 15.9 長 38.2 玉縁長 6.0 筒長 32.2 玉縁厚 2.1 筒厚 2.1	B三浦	ほぼ完存	
69	丸	MMB	凹面糸切り 布目 凸面縄叩き ナデ消し 側・端部ケズリ	径 15.9 長 38.4 玉縁長 6.3 筒長 32.1 玉縁厚 2.0 筒厚 2.2	B三浦?	3/4	
70	丸	MMB	凸面ヘラナデ 側・端部ケズリ	径 15.4 長 37.9 玉縁長 4.7 筒長 33.2 玉縁厚 1.5 筒厚 2.0	B三浦?	ほぼ完存	
71	丸	MMB	凹面糸切り 布目 凸面縄叩き 端部ケズリ	径 15.9 長 38.0 玉縁長 5.2 筒長 32.8 玉縁厚 1.8 筒厚 2.0	B三浦?	完存	
72	丸	MMB	凹面放射状糸切り 布目 凸面 縄叩き→ナデ	径 15.8 長(37.2) 玉縁長(5.3) 筒長(31.9) 玉縁厚 1.6 筒厚 2.0	B三浦?	4/5	
73	丸	MMB	凹面糸切り痕 布目 未調整 凸面縄叩き後ナデ 玉縁成形 時の調整ナデ 側面端部ケズリ 断面粘土板あわせ目?→粘土 板合わせ目部分を指頭でナデ	径 15.4 長(26.7) 玉縁長 6.7 筒長(20.5) 玉縁厚 1.9 筒厚 2.2	B三浦?	2/3	
74	丸	MMB	凹面糸切り 布目 凸面縦縄叩き ナデ 側面ケズリ 面取り 玉縁 端ケズリ	径 16.8 長 26.0 玉縁長 6.8 筒長 19.2 玉縁厚 2.0 筒厚 2.1	B	1/2	
75	丸	MMB	凹面糸切り 布目 凸面縄叩き ナデ	幅(10.1) 長(14.5) 厚 2.4	B三浦 酸化炎	1/8	
76	丸	MMB	凹面布目 凸面縄叩き→ナデ 側・端部ケズリ	径 15.2 長(28.5) 玉縁長(6.5) 筒長(22.0) 玉縁厚 1.4 筒厚 2.0	B三浦?くすべ	2/3	
77	丸	MMB	凹面糸切り 布目 凸面縄叩き 縦ケズリ 側・端部切り 面取り	径 [15.4] 長(21.5) 玉縁長 5.8 筒長(15.7) 玉縁厚 2.0 筒厚 2.5	B三浦?	1/6	
78	丸	MMB	凹面布 凸面(縄目)→ナデ消 し 側面・端部ケズリ	長(14.3) 玉縁長(7.5) 筒長(6.8) 玉縁厚 2.0 筒厚 2.5	B三浦	小片	
79	丸	MMB	凹面糸切り 布目 凸面縄目ナ デ消し 側面ケズリ 面取り 玉 縁端部欠損	径 [14.6] 長(20.7) 玉縁長(0.8) 筒長(19.9) 玉縁厚 2.1 筒厚 2.6	B三浦?くすべ	1/6	
80	丸	MMB	凹面布目 凸面横ナデ 玉縁端 ケズリ	幅(10.3) 玉縁長(5.6) 玉縁厚 1.3	B三浦	小片	
81	丸	MMB	凹面糸切り 布目 凸面縦縄目 叩き ナデ消し 側面ケズリ 面 取り	径 [16.2] 長(19.3) 筒厚 2.2	B三浦?くすべ	1/6	
82	丸	MMB	凹面布目 横ケズリ 凸面縄叩 き 縦ケズリ	径 [15.2] 長(12.2) 筒厚 2.1	B三浦?くすべ	1/8	

No.	瓦種別	分類	成・整形の特徴	法量 (cm) [ ]は復元値、( )は残存値	胎土・焼成 A精良 B粗雑 C尾張	残存	備考
83	丸	MMB	凹面布目 凸面縄叩き→ナデ消し 側・端部ケズリ	径 15.6 長 (14.1) 筒厚 1.8	B三浦	1/4	
84	丸	MMC	凹面布目 凸面縄叩き	幅 (7.4) 長 (10.6) 筒厚 2.6	C	小片	
85	丸	MHC	凹面不明 凸面ケズリ	幅 (4.7) 長 (6.1) 筒厚 2.4	C	小片	
86	丸	MMC	凹面布目 凸面縦縄目 ナデ側面ケズリ 面取り 玉縁端部ケズリ 面取り	幅 (8.4) 玉縁長 (7.8) 玉縁厚 1.6	C八事	小片	胎土分析済
87	丸	MMC	端面ケズリ	幅 (3.6) 玉縁長 (4.3) 玉縁厚 2.0	C	小片	
88	平	MHA 01	凹面糸切り 凸面縄目叩き 側面ケズリ	広端幅 (12.0) 長 (27.3) 厚 2.0	A	1/3	叩き板端部確認 凹面離れ砂
89	平	MHA 01	凹面糸切り 凸面糸切り 縄目叩き	幅 (14.3) 長 (15.3) 厚 1.8	A	小片	凹面離れ砂
90	平	MHA 01	凹面横ナデ 凸面縄目叩き 側面・端部ケズリ	幅 (16.3) 長 (13.5) 厚 2.5	A	小片	
91	平	MHA 02	凹面ナデ 凸面格子目叩き	幅 (6.5) 長 (7.2) 厚 2.0	A	小片	凸面離れ砂
92	平	MHB 01	凹面布目 凸面縄目叩き 側面ケズリ	幅 (10.5) 長 (10.1) 厚 1.8	B	小片	凹面離れ砂
93	平	MHB 01	凹面ナデ 凸面縄叩き 側面ナデ	幅 (12.0) 長 (11.7) 厚 2.2	B	小片	凹・凸面離れ砂
94	平	MHB 02	凹面格子目転写 ナデ 凸面格子目叩き 側面ナデ 広端部斜めヘラナデ	広端幅 (20.3) 長 (24.7) 厚 2.4	B三浦	1/3	凹・凸面離れ砂
95	平	MHB 02	凹面ナデ (格子目叩き転写) 凸面格子目叩き	幅 (10.3) 長 (9.2) 厚 2.1	B三浦? <すべ	小片	
96	平	MHB 02	凹面横ナデ 凸面格子目叩き	幅 (13.4) 長 (11.4) 厚 2.1	B三浦? <すべ	完存	凹・凸面離れ砂
97	平	MHB 02	凹面 ナデ 凸面斜格子叩き	狭端幅 27.5 広端幅 29.5 長 35.4 厚 2.4	B三浦?	完存	凸面離れ砂
98	平	MHB 02	凹面斜格子叩き転写 凸面斜格子叩き	幅 27.1 長 35.3 厚 2.5	B三浦?	4/5	凹・凸面離れ砂
99	平	MHB 02	凹面糸切り明瞭 凸面斜格子叩き、広端側ナデ 側・広狭端面ケズリ	幅 28.9 長 34.6 厚 2.7	B三浦 酸化炎	ほぼ完存	
100	平	MHB 02	凹面横ナデ 凸面格子叩きケズリ 側面ケズリ	広端幅 28.4 長 (33.0) 厚 2.0	B三浦	3/4	凹・凸面離れ砂
101	平	MHB 02	凸面粗い斜格子叩き	幅 (24.8) 長 (12.5) 厚 2.3	B三浦? 酸化炎	1/4	
102	平	MHB 02	凹面ナデ 凸面格子叩き 狭端面・側面ケズリ	狭端幅 28.2 長 (21.6) 厚 2.2	B三浦	1/3	
103	平	MHB 02	凹面ナデ 凸面格子目叩き 端部ナデ	広端幅 (13.8) 長 19.3 厚 2.0	B三浦	1/8	凹・凸面離れ砂
104	平	MHB 02	凸面格子叩き 側面・端部ケズリ	狭端幅 (13.1) 長 18.9 厚 2.1	B三浦? <すべ 酸化炎	1/8	凹・凸面離れ砂

No.	瓦種別	分類	成・整形の特徴	法量 (cm) []は復元値、()は残存値	胎土・焼成 A精良 B粗雑 C尾張	残存	備考
105	平	MHB 02	凹面ナデ 凸面格子目叩き(摩滅) 側面部ケズリ	幅(11.5) 長(8.6) 厚 2.1	B三浦	小片	
106	平	MHB 02	凹面ナデ 凸面格子叩き 側面部ケズリ	広端幅(20.5) 長(16.3) 厚 2.2	B三浦	1/4	凹・凸面離れ砂
107	平	MHB 02	凹面布目 凸面大きい斜格子叩き 狭端部ケズリ	幅(18.1) 長(15.1) 厚 2.6	B三浦?酸化炎	1/8	
108	平	MHB 02	凹面布目 凸面斜格子叩き 側面ケズリ 広端部ケズリ	広端幅(13.4) 長(16.6) 厚 2.1	B三浦?酸化炎	1/8	
109	平	MHB 02	凹面ナデ	幅(17.8) 長(16.3) 厚 2.7	B三浦	1/8	
110	平	MHB 03	凹面糸切り痕明瞭 凸面斜格子叩き→縦ナデ	広端幅(23.9) 幅 29.6 長(31.2) 厚 2.4	B三浦	2/3	
111	平	MHB 03	凹面横ナデ ナデ 凸面格子叩き 側面・端部ケズリ	広端幅(13.9) 長(14.1) 厚 2.3	B三浦	1/8	凸面離れ砂
112	平	MHB 03	凹面ナデ 凸面ナデ 側面ケズリ	広端幅(14.7) 長(18.8) 厚 2.1	B三浦	1/8	
113	平	MHB 03	凹面ナデ 凸面格子目叩き 側面・広狭端部ケズリ	幅(22.7) 長(18.6) 厚 1.8	B三浦?くすべ	1/8	凸面離れ砂
114	平	MHB 03	凹面糸切り 布目 横ナデ 凸面糸切り ナデ 側面ケズリ	広端幅(14.7) 幅(16.4) 長(14.5) 厚 2.3	B三浦	1/8	凹面離れ砂
115	平	MHB 03	凹面縦ナデ 凸面格子叩き	幅(14.0) 長(18.9) 厚 2.2	B三浦?	1/8	
116	平	MHB 03	凹面ナデ 凸面格子目叩き 縦ナデ 側面ナデ	幅(13.3) 長(11.6) 最大厚 2.7	B三浦?くすべ 酸化炎	小片	
117	平	MHB 03	凹面ナデ 凸面格子目叩き+ナデ	幅(13.2) 長(15.7) 厚 2.8	B 酸化炎	小片	
118	平	MHC	凹面自然釉 側面ナデ ケズリ	幅(9.0) 長(9.6) 筒厚 2.6	C八事	小片	胎土分析済
119	平	MHC	凹面自然釉 側面ケズリ	幅(10.8) 長(8.8) 厚 2.8	C八事	小片	胎土分析済
120	平	MHC	凹面布目 凸面斜位縄目? 摩耗のため不詳	幅(7.2) 長(6.0) 厚 2.3	C	小片	
121	平	MHC	凹面布目 凸面斜位縄叩き	幅(7.7) 長(9.2) 厚 2.5	C	小片	凸面離れ砂
122	平	MHC	凹面ナデ 凸面縄 摩耗で不鮮明 端面ケズリ	幅(12.2) 長(6.5) 厚 2.7	C	小片	
123	平		凹面縦方向ナデ 凸面縦方向ナデ 側面ケズリ2回	幅(15.2) 長(17.4) 厚 2.5	B三浦	1/8	
124	鬼		手づくね 沈線区画の珠文帯 押印 粘土貼付け ナデ	幅(38.0) 長(19.0) 最大厚 5.5 珠文径 3.4 外区幅 3.8	不明	1/3	手づくり
125	鬼		表面剥離 周縁珠文帯 裏面糸切り痕明瞭 ナデ 刺突あり	幅(16.4) 長(9.3) 厚(2.6) 珠文径 3.6	B三浦	小片	筈づくり
126	鬼		表面ナデ 裏面ヘラナデ 側面ケズリ	幅(12.2) 長(11.7) 厚 4.1	不明	小片	手づくり

No.	瓦種別	分類	成・整形の特徴	法量 (cm) []は復元値、()は残存値	胎土・焼成 A精良 B粗雑 C尾張	残存	備考
127	鬼		表裏面ナデ 表面周縁珠文帯	幅(5.8) 長(7.6) 厚 4.2 珠文径 3.1	B三浦 やや酸化炎	小片	手づくり
128	鬼		表面ナデ	幅(6.3) 長(6.9) 厚(2.2)	B三浦 酸化炎	小片	類 / 手づくり
129	鬼		表面ナデ	幅(4.6) 長(8.0)	B三浦	小片	牙 / 手づくり
130	道具	熨斗瓦	凹面糸切り ナデ 凸面太斜格子叩き 側・広狭端面ケズリ (右側面スリ=割熨斗)	幅 18.7 長 34.5 厚 2.8	B三浦	4/5	凹・凸面離れ砂
131	道具	熨斗瓦	凹面糸切り痕 凸面糸切り 端部ケズリ 側面糸切り	幅(11.6) 長(9.6) 厚 2.6	B三浦	小片	
132	道具	熨斗瓦	端部ケズリ	幅(7.0) 長(3.4) 最大厚 2.8	A	小片	
133	道具	熨斗瓦	凹面布目ケズリ 凸面ケズリ 側面ケズリ 面取り	幅(8.8) 長(12.2) 最大厚 2.9	B三浦 くすべ 酸化炎	小片	

計測値の単位=cm [ ] は復元値、( )は残存値

胎土 A =粉質 胎土 B =粗土 (ともに白色針状物質あり)

付表2 瓦以外の遺物 観察表

No.	種別	産地	器種	分類		計測値			胎土・色調・焼成	残存	成整形の特徴 ・旧報告書図 No./ 出土位置
						口径	底径	器高			
1	かわらけ			小	ロク口	[7.4]	[5.8]	1.6	B 黄橙色 良好	1/6	外底面板状圧痕 旧図 2/P6
2	かわらけ			小	ロク口	[7.7]	[5.9]	1.7	A 淡橙灰色 やや不良	1/6	旧図 15/P6
3	かわらけ			小	ロク口	[8.4]	[6.6]	1.5	B 淡橙灰色 ふつつ	1/8	旧図 3/DTr C-3 粘土面
4	かわらけ			小	ロク口	[7.7]	[5.8]	1.7	B 淡橙灰色 ふつつ	1/8 以下	旧図 1/ETr 瓦 II
5	かわらけ			小	ロク口	[7.7]	[5.0]	2.1	B 淡橙灰色 ふつつ	口 1/4 底 1/3	HTr (C・DTr) かくれき上面
6	かわらけ			小	ロク口	7.4	4.7	4.3	B 橙褐色 ふつつ	一部 欠損	外底面板状圧痕 旧図 8/DTrC-2 炭化層
7	かわらけ			小	ロク口	[7.6]	[5.1]	2.1	B 黄橙色 良好	1/5	旧図 5/ETr 瓦 II
8	かわらけ			小	ロク口	[6.4]	[5.7]	1.6	B 淡橙褐色 ふつつ	1/3	近世墓
9	かわらけ			小	ロク口	[6.8]	[6.0]	2.0	A 黄灰色 ふつつ	1/4 弱	近世墓
10	かわらけ			小	ロク口	[8.5]	[7.2]	1.9	A 淡黄灰色 やや不良	1/2 弱	外底面板状圧痕 旧図 21/DTr 東 P5 覆土
11	かわらけ			小	ロク口	—	[5.7]	1.5	B 淡橙褐色 ふつつ	底部 1/3	内底面条痕ナデ 外底面板状圧痕 ATr C-2
12	かわらけ			小	ロク口	—	—	2.0	A 淡橙褐色 ふつつ	小片	旧図 17/ATr 瓦 III
13	かわらけ			小	ロク口	—	—	1.6	A 淡橙褐色 ふつつ	小片	瓦 II a-7
14	かわらけ			中	ロク口	[9.7]	[6.4]	3.0	B、スコリア多量 黄橙色 ふつつ	1/8 以下	外底面ナデ? 旧図 9/BTr 瓦 II 確認面
15	かわらけ			中	ロク口	[10.2]	[6.4]	2.9	B 黄橙色 良好	1/6	外底面板状圧痕 旧図 13/DTr C-2 炭化層
16	かわらけ			中	ロク口	[11.2]	[7.0]	3.6	A 淡橙褐色 ふつつ	1/8	旧図 15/ATr 拵 P
17	かわらけ			大	ロク口	[12.4]	[7.8]	3.1	B 灰黄色 やや不良	1/3	外底面板状圧痕 DTr C-3
18	かわらけ			大	ロク口	[12.9]	[7.8]	3.3	A 淡橙灰色 やや不良	口小片 底 1/3	旧図 19/ATr 拵 P
19	土製品			大	ロク口	[13.3]	[8.4]	3.7	B 淡橙灰色 やや不良	口小片 底 1/8	旧図 17
20	土製品			大	ロク口	—	6.4	—	B 橙褐色 やや不良		外底面板状圧痕 旧図 16/ATr 拵 P
21	土製品			大	ロク口	[14.3]	[8.6]	4.1	B 淡橙灰色 やや不良	口 2/5 底 3/5	外底面板状圧痕 P5 覆土
22	かわらけ			大	ロク口	[14.2]	—	(3.1)	A 淡橙褐色 やや不良	口 1/4	旧図 10/DTr C-2 炭化層
23	かわらけ			大	ロク口	—	9.1	(2.4)	B 黄橙色 やや不良		A 拵 P
24	かわらけ				ロク口	—	[7.4]	(1.3)	A 淡橙褐色 やや不良	底 1/4	外底面板状圧痕 旧図 18/P6
25	貿易陶器	龍泉窯系	青磁 皿			—	—	2.2	密 灰白色 良好	口 1/4	釉オリーブ灰色 DTr C-3 炭化層礫面
26	国産陶器	瀬戸	入子カ			[9.0]	—	(2.5)	密 灰白色 良好	口 1/8	自然釉 (淡緑灰色) MDTr C-3 炭化層礫面
27	国産陶器	瀬戸	平碗カ			—	—	(7.2)	やや粗 淡黄白色 ふつつ	口 1/6	灰釉 I・M EBTr 拡張 瓦溜まり I
28	国産陶器	常滑	片口鉢 I カ			—	—	(2.0)	長石 灰褐色 良好	口小片	自然釉 (暗赤褐色) 表採
29	国産陶器	常滑	片口鉢 I			—	—	(3.4)	長石 淡灰色 良好	底小片	体下部外面右回転ケズリ 内面摩耗 ATr 拵 (黄褐色層?)
30	国産陶器	常滑	片口鉢 II	9型式		—	—	(9.0)	長石、石英 淡赤褐色 良好	口小片	体部外面指頭痕 BTrG・H・5 表土
31	国産陶器	常滑	甕	7型式		—	—	(3.9)	密 灰色 良好	口小片	自然釉 (暗褐色) ATr C-2 拵確認面
32	国産陶器	常滑	甕カ			—	—	—	縞状 黒灰色 良好	口小片	BTrC・G-5
33	国産陶器	瀧美	短頸壺			—	—	(2.5)	密 灰黒色 良好	口小片	自然釉orハケスリ施釉
34	国産陶器	備前カ	すり鉢			—	—	—	白色砂多量 暗赤灰色 良好	体小片	内面櫛歯スリ目 (8条以上一単位)、摩耗 表採 ETr 付近

No.	種別	産地	器種	分類	計測値			胎土・色調・焼成	残存	成整形の特徴 ・旧報告書図 No./ 出土位置
					口径	底径	器高			
35	瓦質土器	香炉カ			—	—	[3.5]	白色砂、角閃石 灰黒色 良好	口小片	内外面黒色処理 (いぶし) BTr 瓦 II 確認面上褐色土
36	土器	焙烙			—	—	1.8	角閃石、雲母 黄橙色 良好	口小片	外底面スス付着 GTrE4 表土
37	土製品	管状土錘			長さ 5.2	直径 1.2	孔径 0.5	砂質 黄灰色 ふつう	完形	CTr(G.H Tr 間) 小砂利と西
38	土製品	管状土錘			残長 [5.6]	直径 3.5	孔径 1.4	砂質 黄灰色 ふつう	1/2 弱	BTrC-5 確認面
39	金銅製品	飾金具			直径 2.1	孔径 0.3	厚さ 0.1以下		ほぼ 完形	鍍金一部残存、白色の付着物 ITr
40	銅製品	銭			直径 2.2	孔径 0.7	厚さ 0.1以下			元豊通寶 中国北宋代 1078 年初鑄 I・M・SGH 拡張部
41	須恵器		甕片転用 研磨具		—	—	—	灰色砂 灰白色 良好	胴小片	割れ口を研磨に使用 AH-C-2 拡瓦 I 確認面

# 写真図版

1. 満願寺境内の調査状況（東から）



2. B(右)・C(左)トレンチ  
(本堂前より撮影)



3. D-Eトレンチと礎石の配列  
(東側収蔵庫前より撮影)





1. Dトレンチ内発見の礎石及び根石



2. 本堂下の根石 (本-1号)



3. 本堂下の根石 (本-2号)

1. 本堂下の根石（本-3号）



2. Eトレンチ及び拡張区発見礎石



3. A・Dトレンチ交点付近検出の礎石群



図版4



1. Eトレンチ内の礎石 (ETr-I-3号)



2. Eトレンチ内の礎石 (ETr-II-1号)



3. Dトレンチ内の礎石 (DTr-1号)



4. Dトレンチ内の礎石 (DTr-2号)



5. Dトレンチ内の礎石 (DTr-3号)

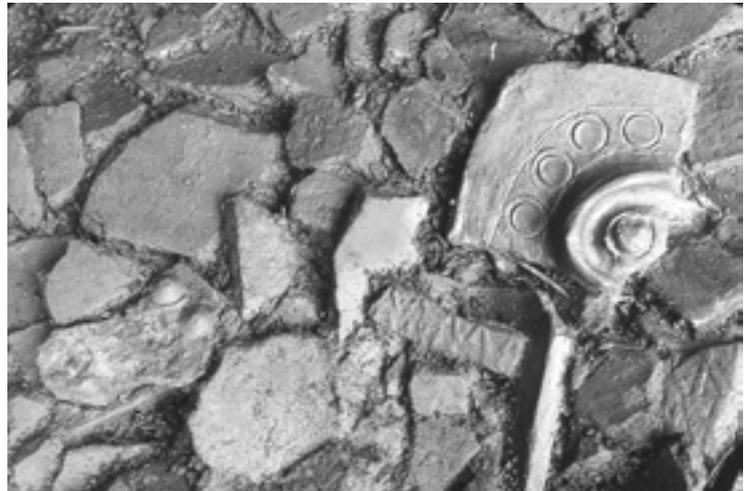


4. Aトレンチ拡張部発見の礎石 (DTr-4号)

1. 瓦溜り I (A T r)



2. 鬼瓦出土状況 (A T r 瓦溜り I)



3. 軒平瓦出土状況 (A T r 瓦溜り I )





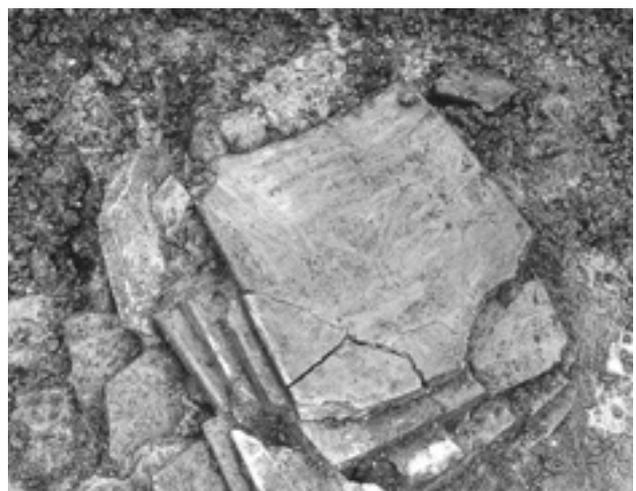
1. 本堂跡と東側建物址の間雨落及び前庭の瓦敷



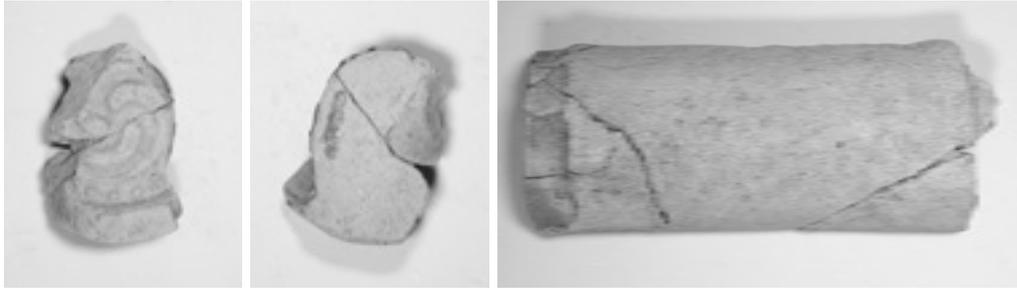
2. 本堂跡東側建物址の西南隅基壇と瓦堆積状況



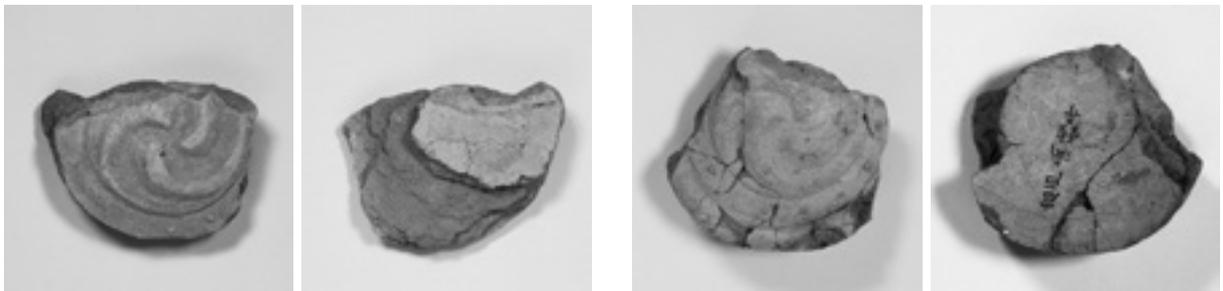
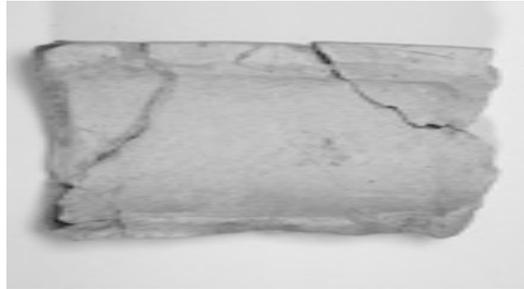
3. Aトレンチサブトレ内で発見された瓦敷



4. 本堂跡東側建物址の西南隅基壇、前庭部に積まれた平瓦

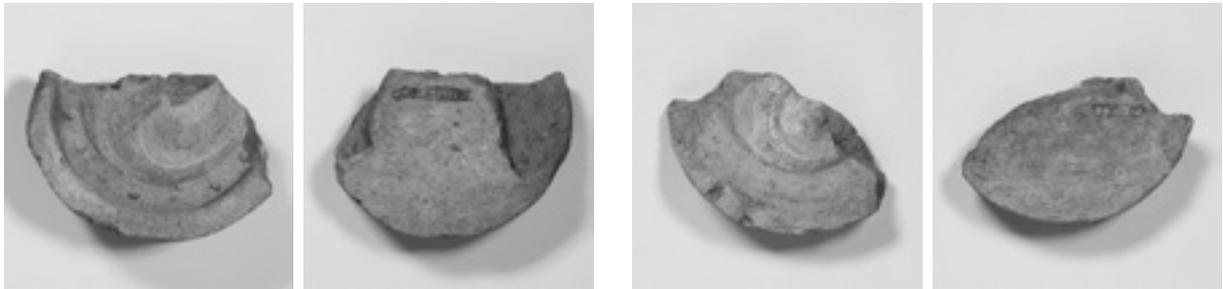


1



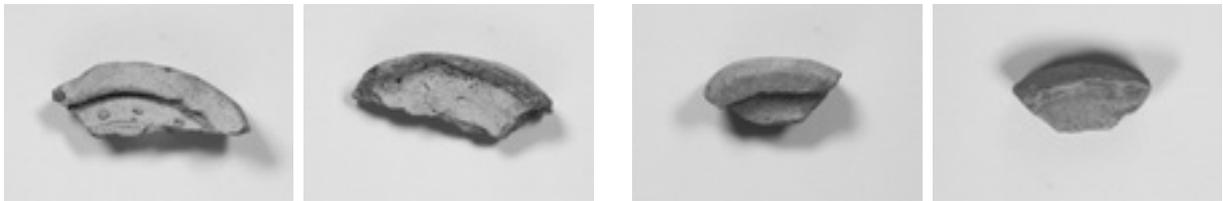
2

3



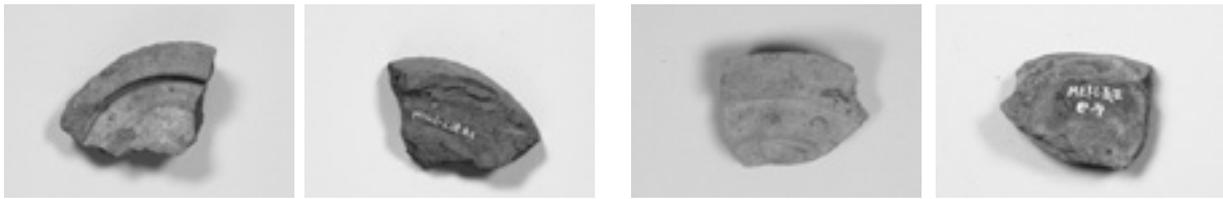
4

5



6

7

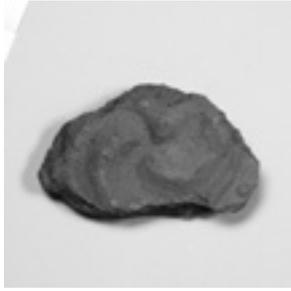


8

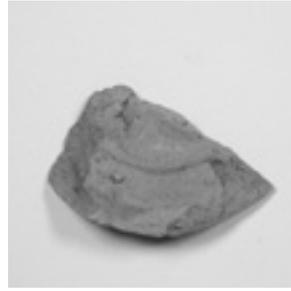
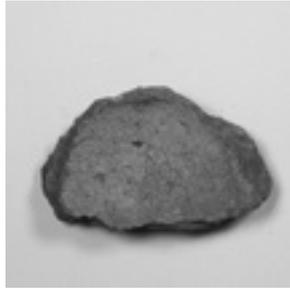
9

軒丸瓦 (1)

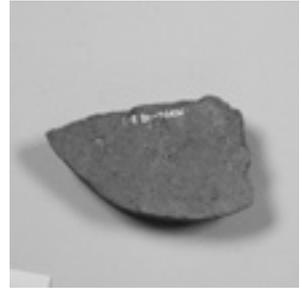
图版 8



10



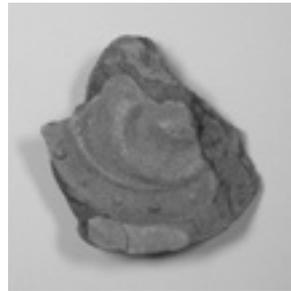
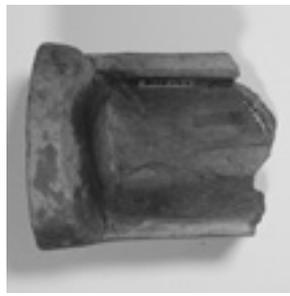
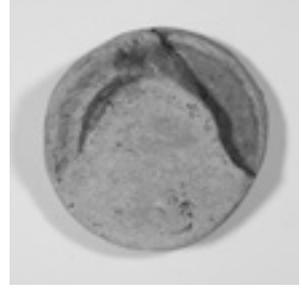
11



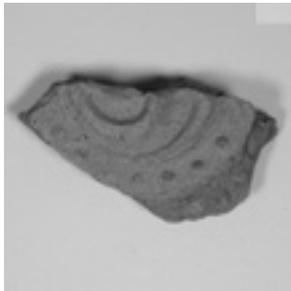
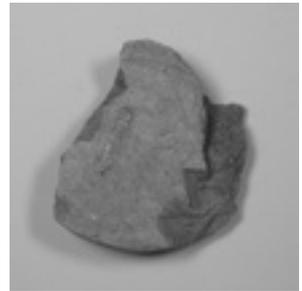
12



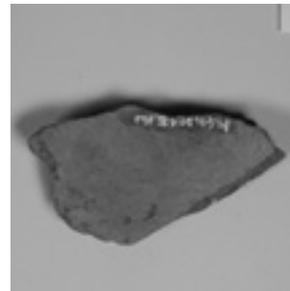
13



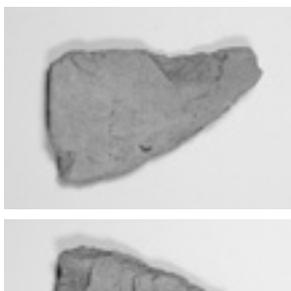
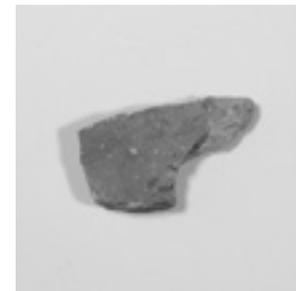
14



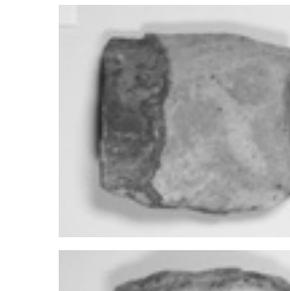
15



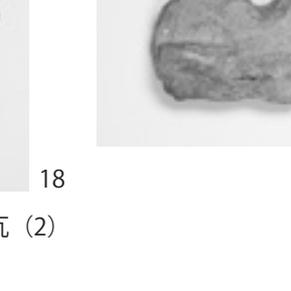
16



17

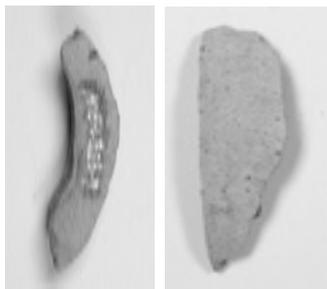


18



19

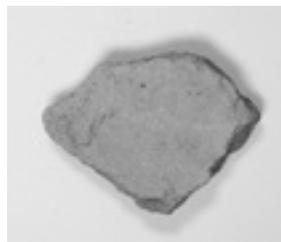
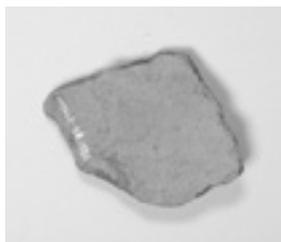




20



21



22



23



24



25



26



27



28



29

軒丸瓦 (3)



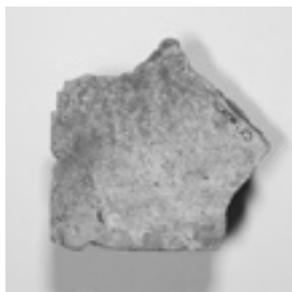
30



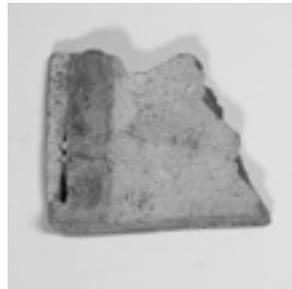
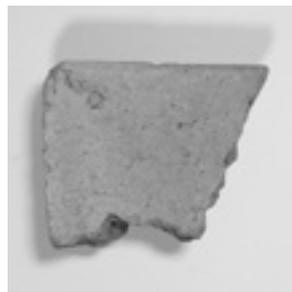
31



32



33



34



35

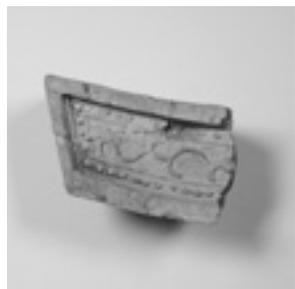


36

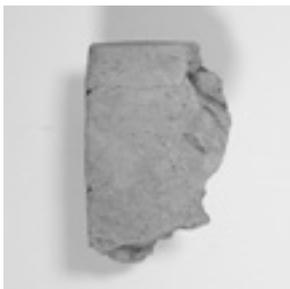


37

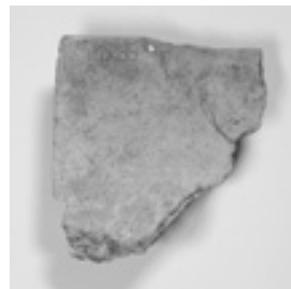




38



39



40



41



42



44



43



軒平瓦 (2)



45



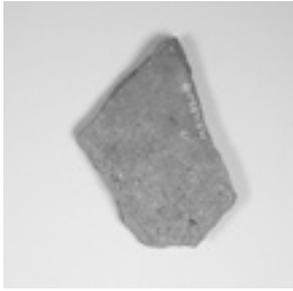
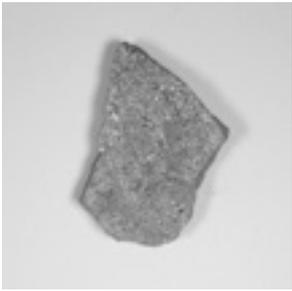
46



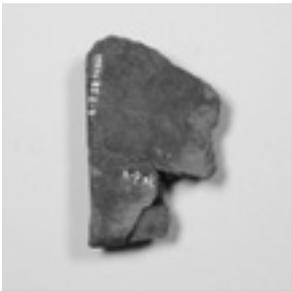
47



48



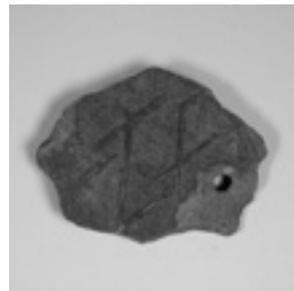
49



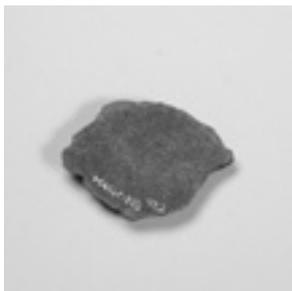
50



51



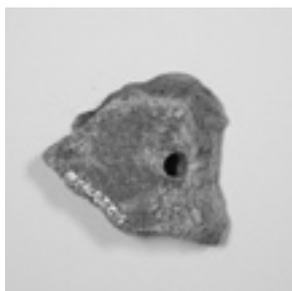
52



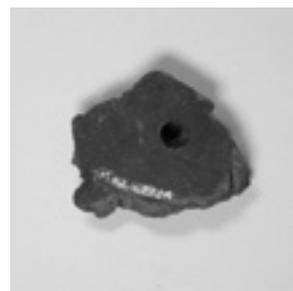
53



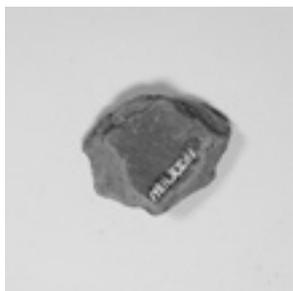
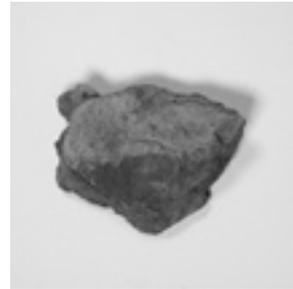
54



55



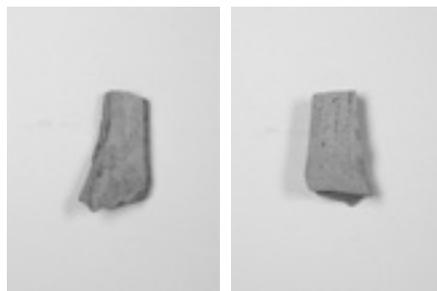
56



57



58



59



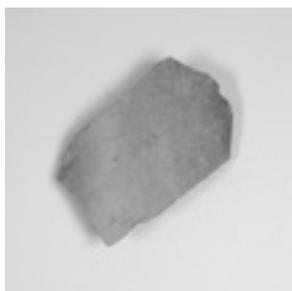
60



61



軒平瓦 (4) · 丸瓦 (1)



62



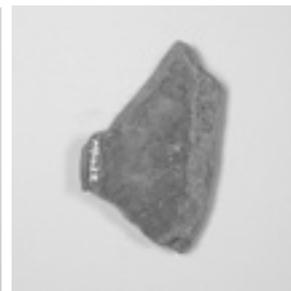
63



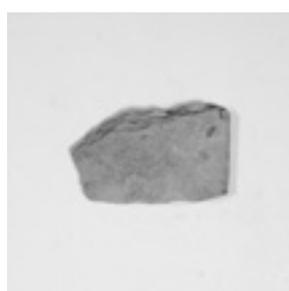
64



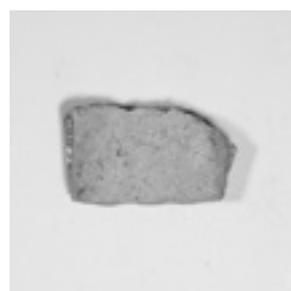
65



66



67

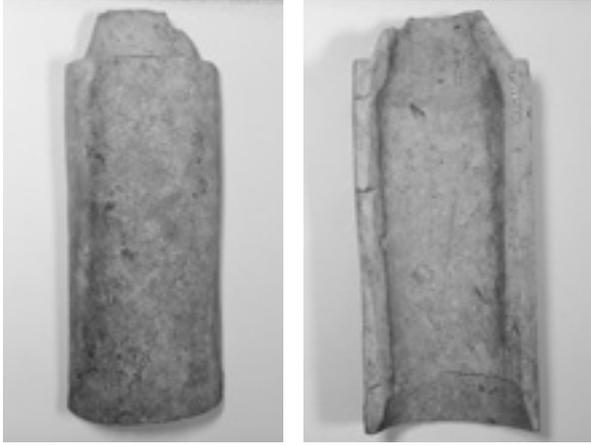


68

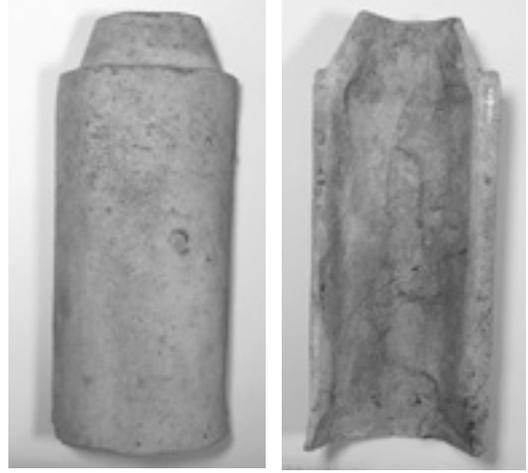


69

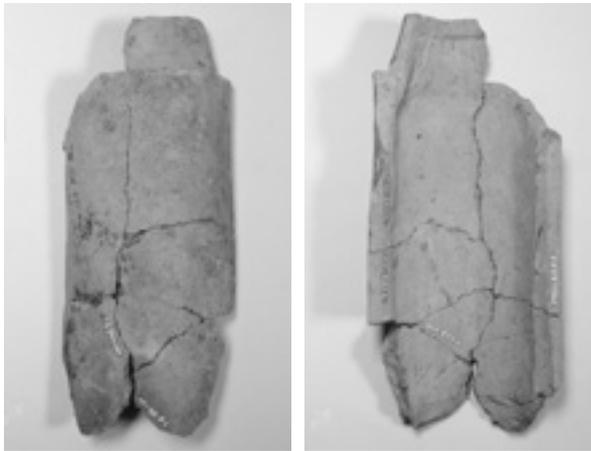




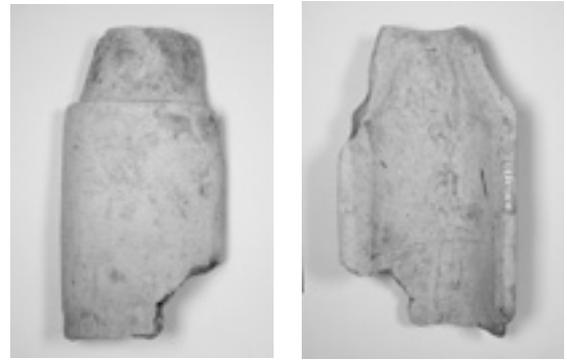
70



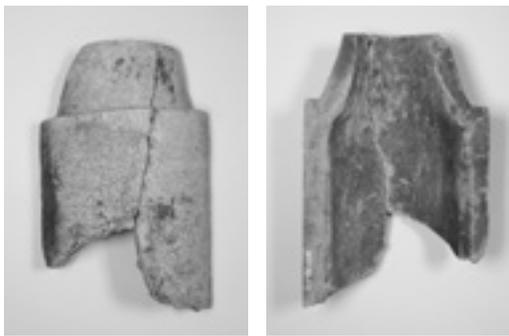
71



72



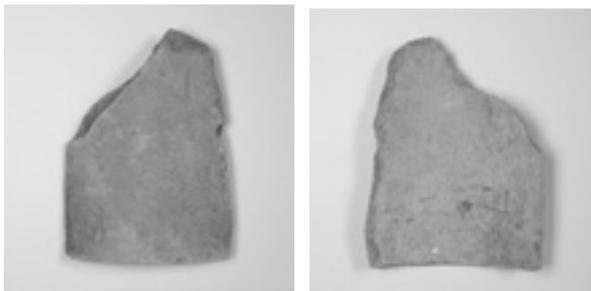
73



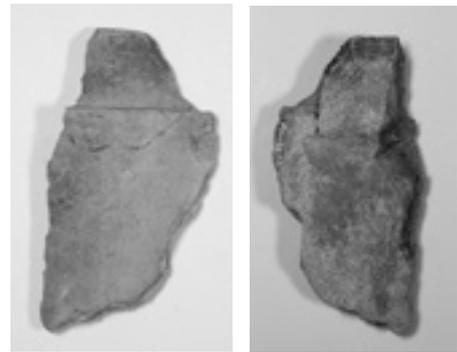
74



76



75



77



78



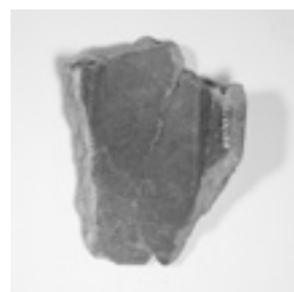
79



80



81



82



83



84



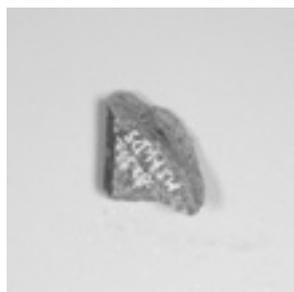
85

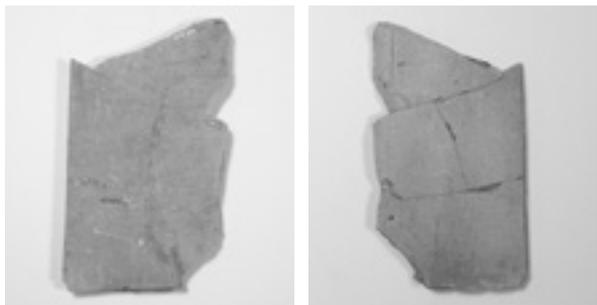


86

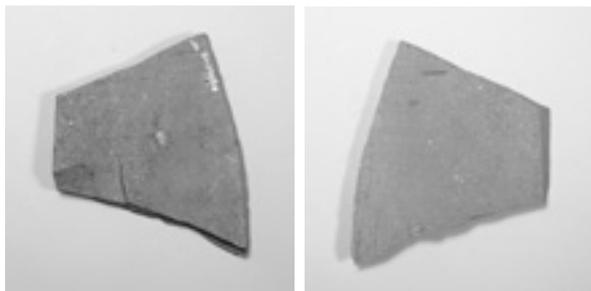


87

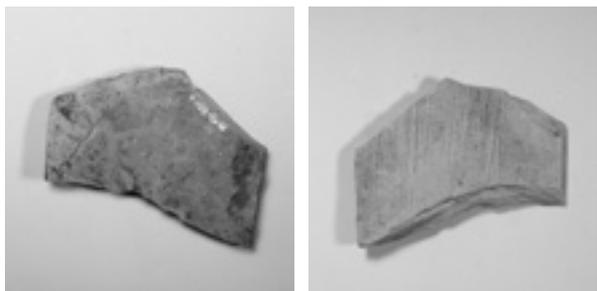




88



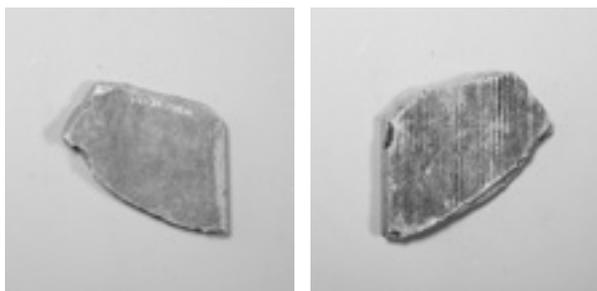
89



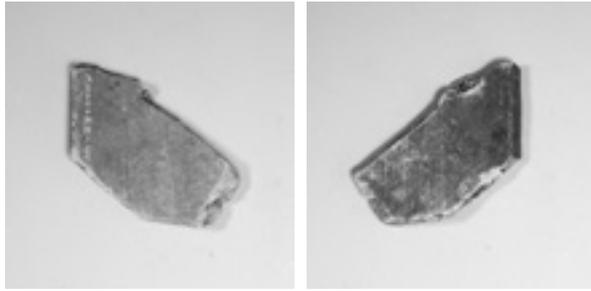
90



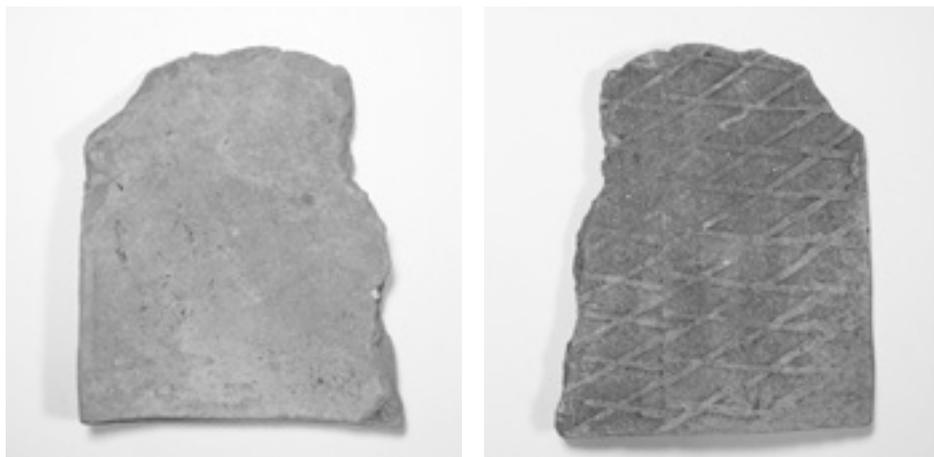
91



92

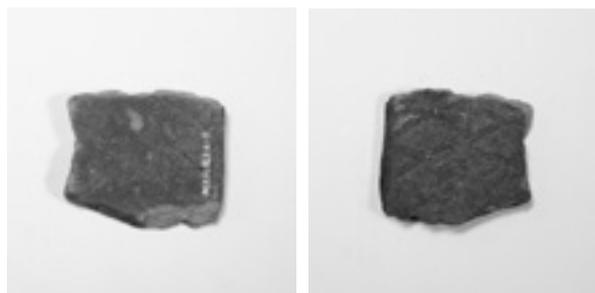


93

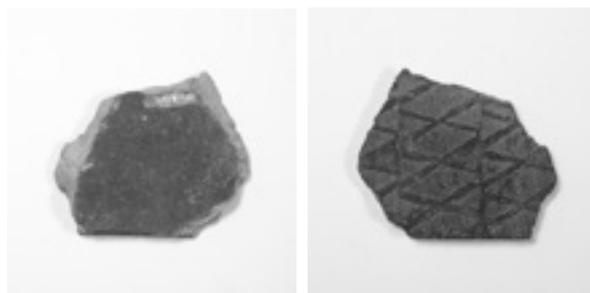


94

平瓦 (1)



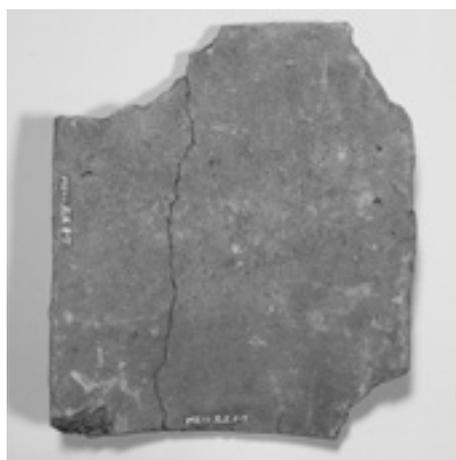
95



96



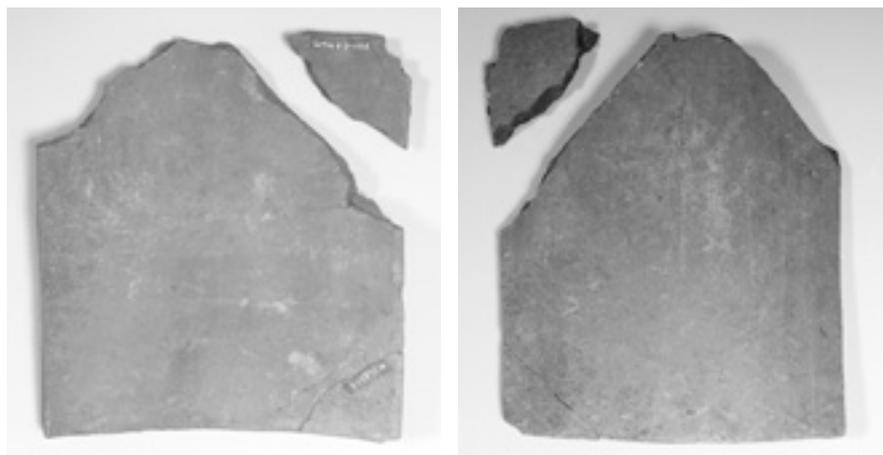
97



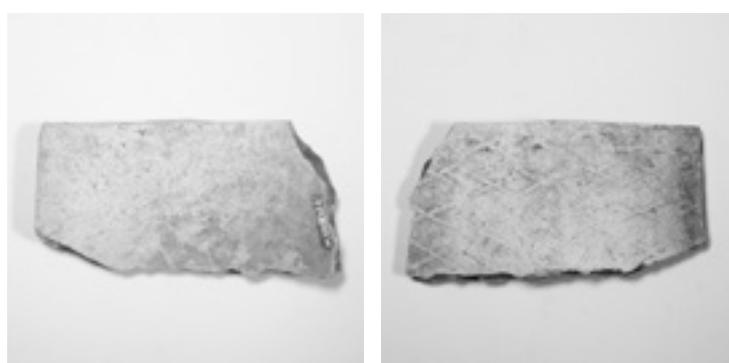
98



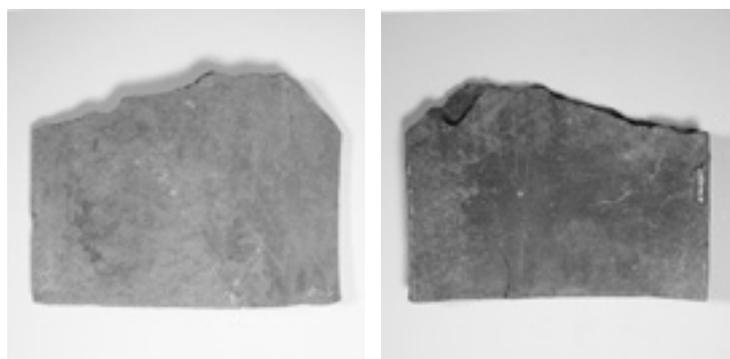
99



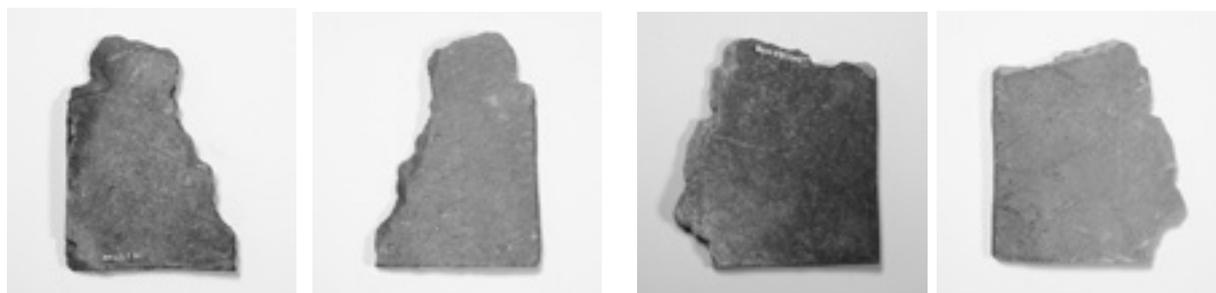
100



101



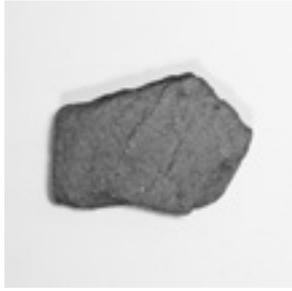
102



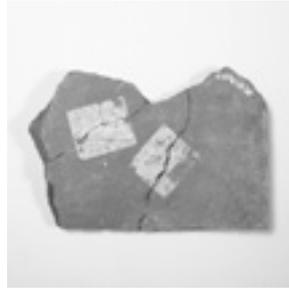
103

104

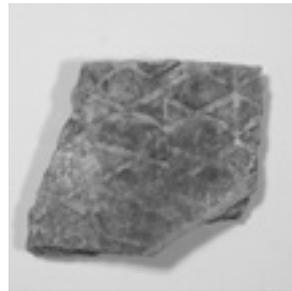
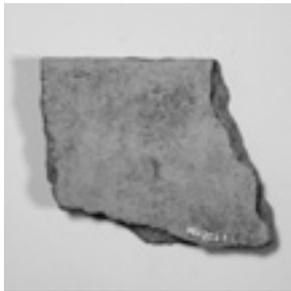
平瓦 (3)



105



106



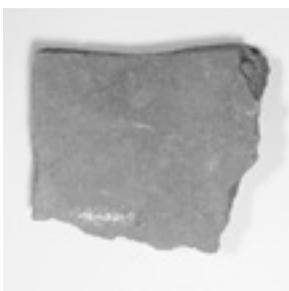
107



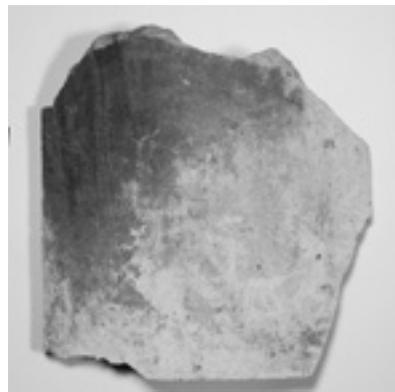
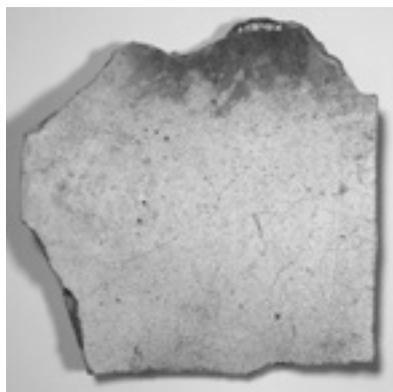
108



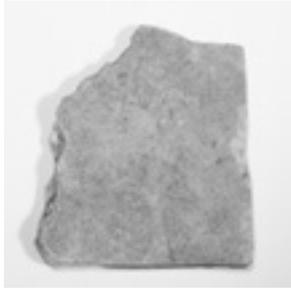
109



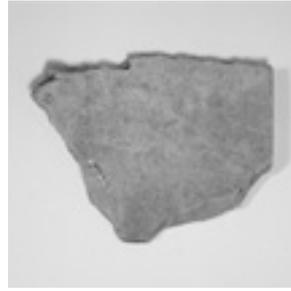
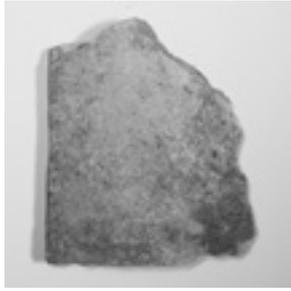
111



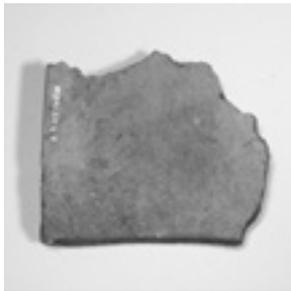
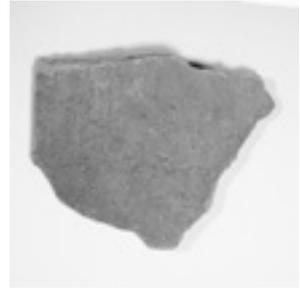
110  
平瓦 (4)



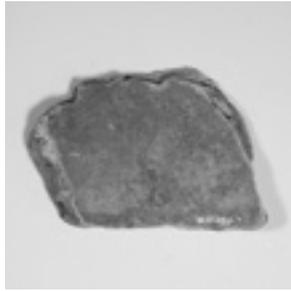
112



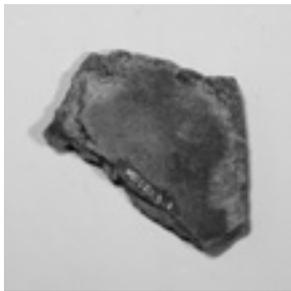
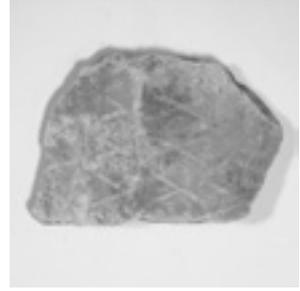
113



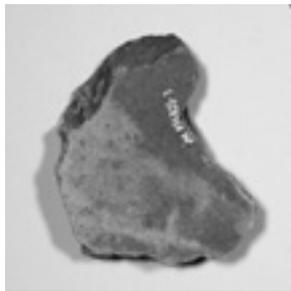
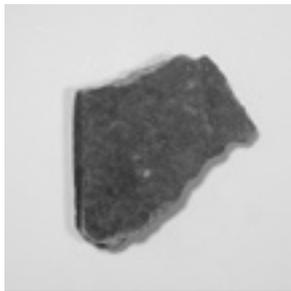
114



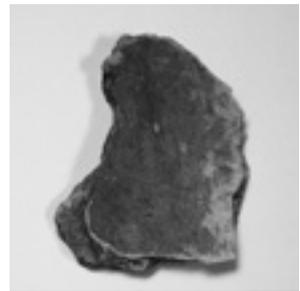
115



116



117

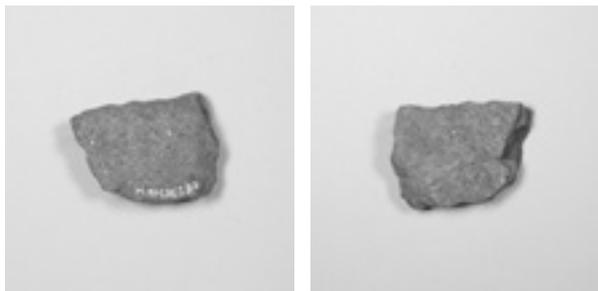


118

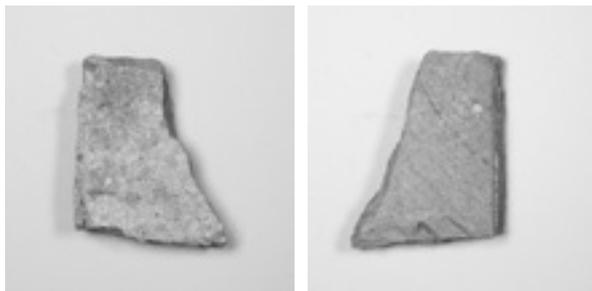


119

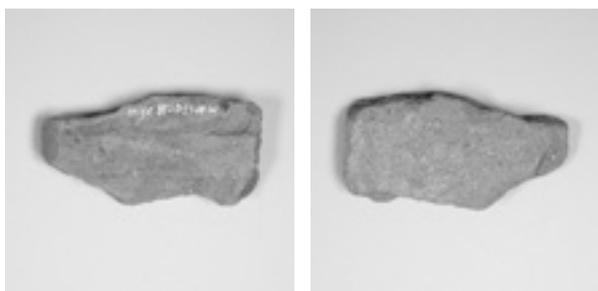




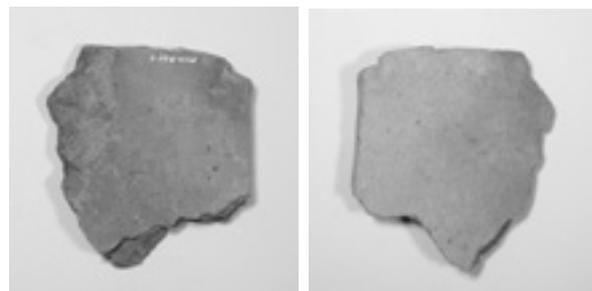
120



121



122



123



124

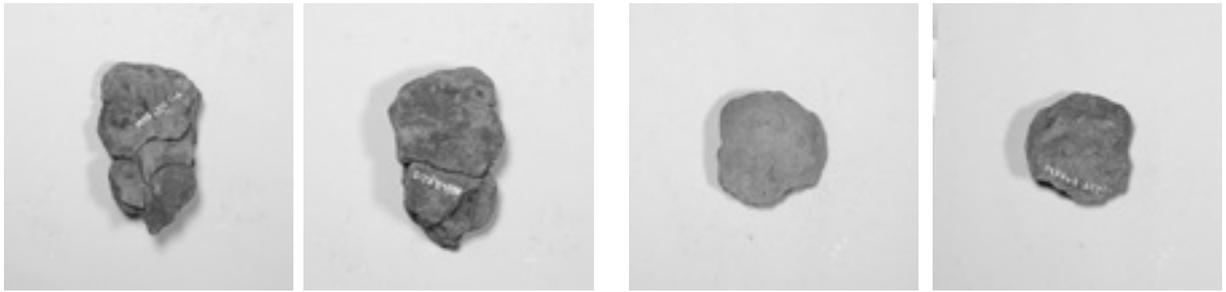


125

平瓦 (6) · 鬼瓦 (1)



126



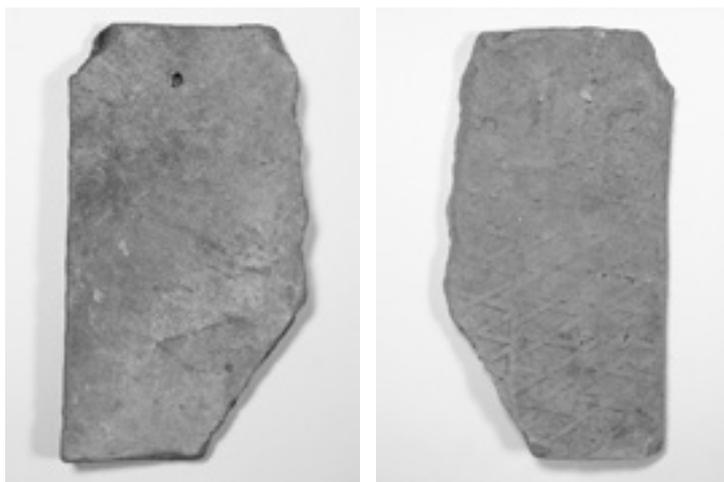
127

128

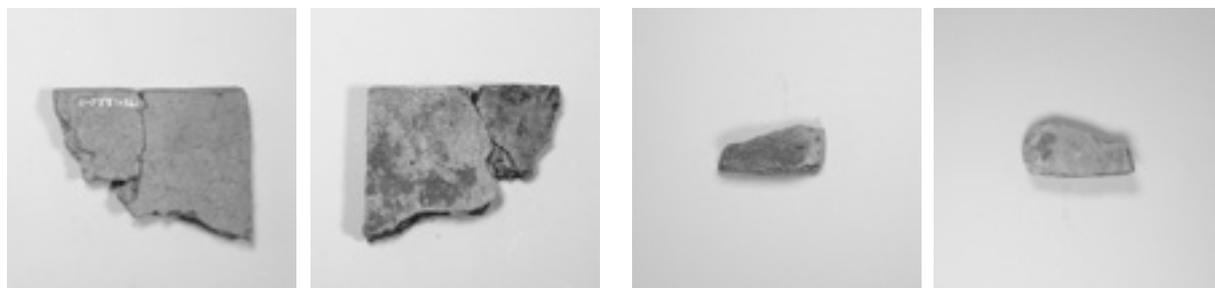


129

鬼瓦 (2)

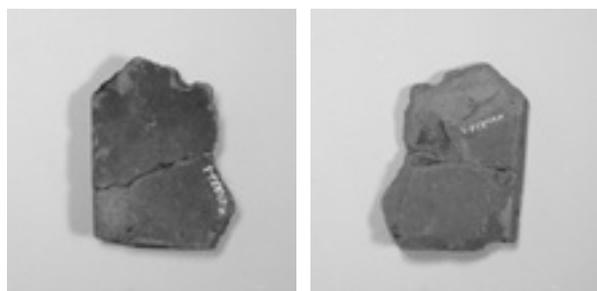


130



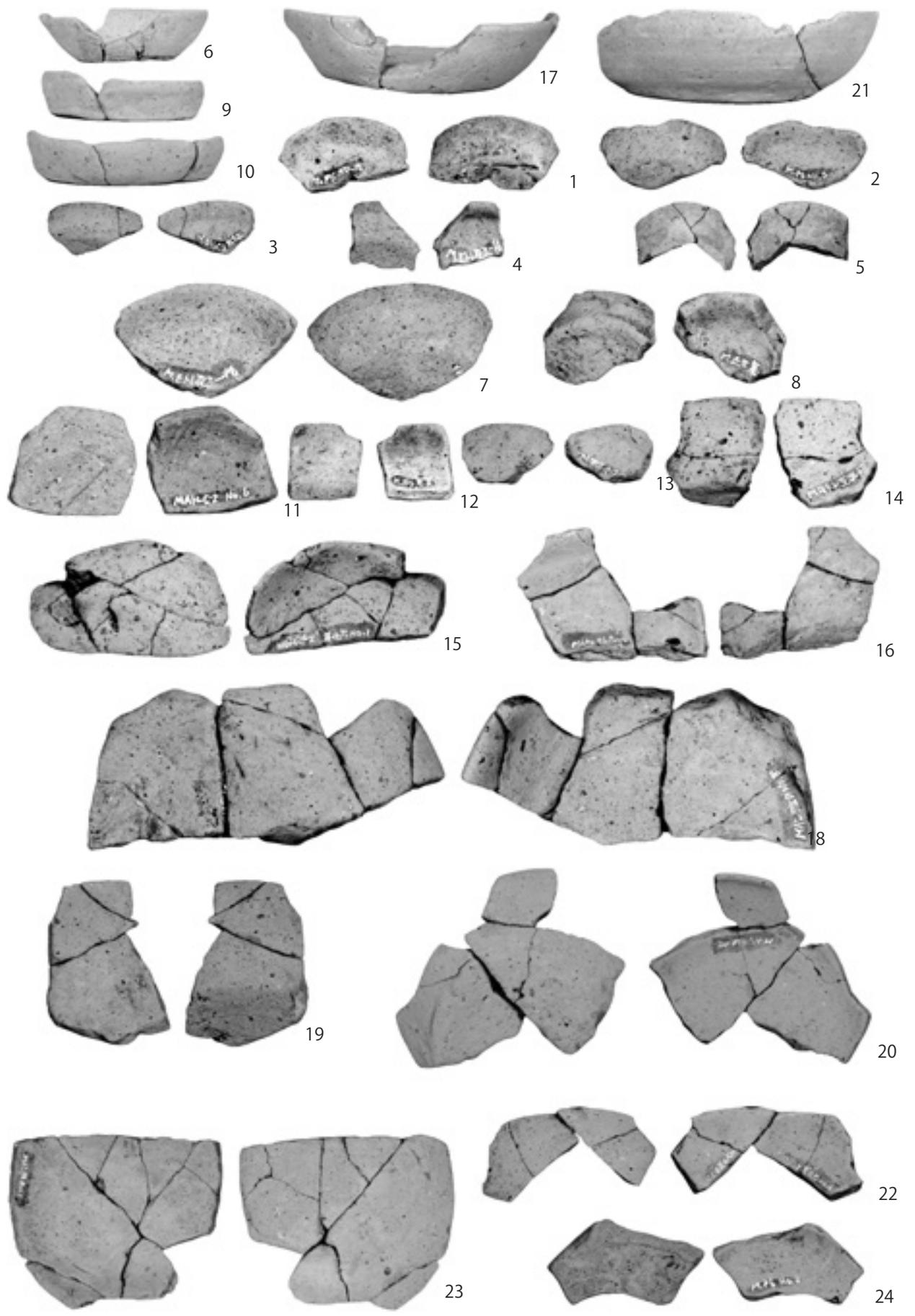
131

132

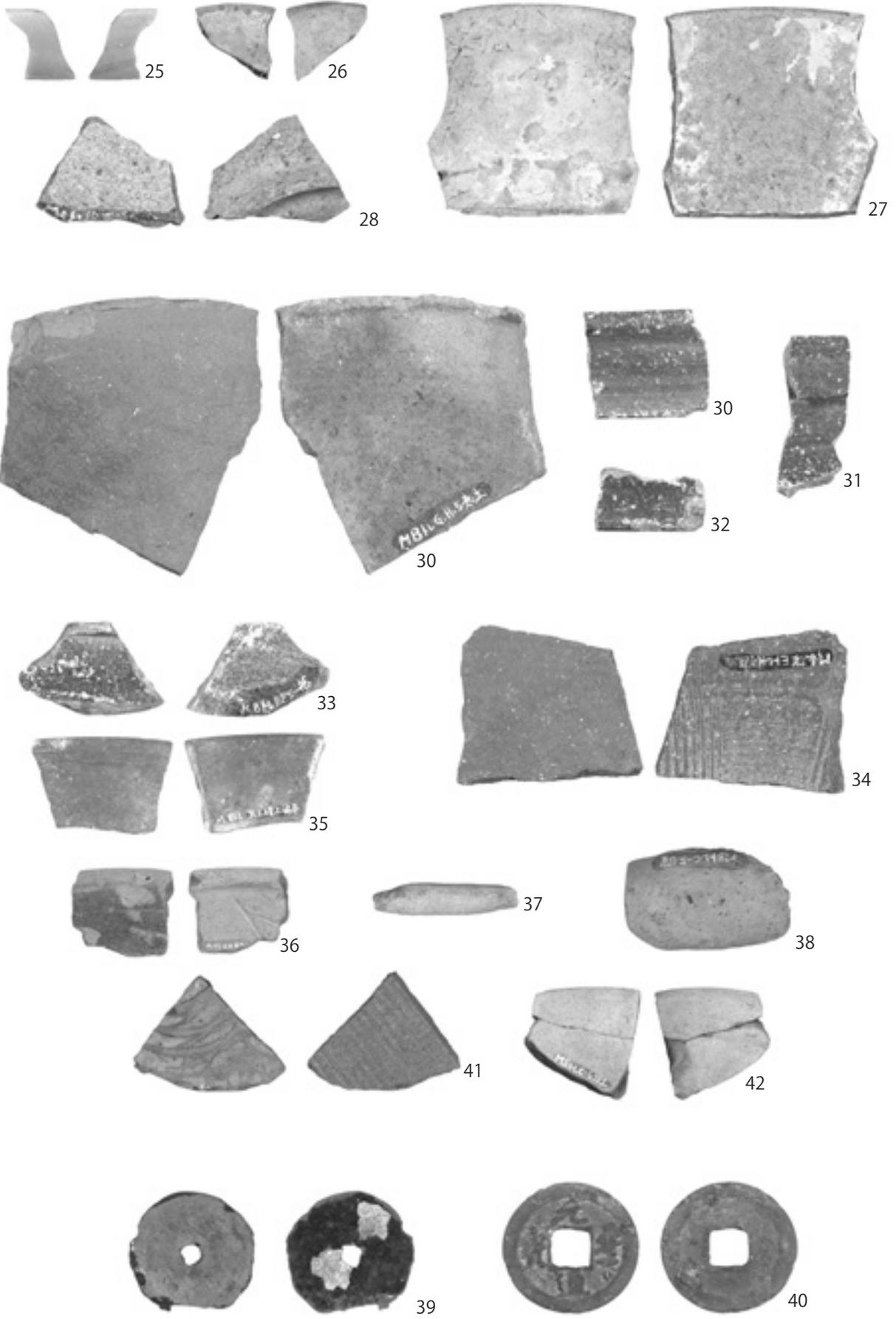


133

道具瓦



かわらけ



陶磁器・その他の遺物

総合研究

岩戸満願寺遺跡の研究－三浦半島における鎌倉時代寺院の瓦－

---

発行年月日 令和5年（2023）3月30日

発行 神奈川県立歴史博物館  
〒231-0006 神奈川県横浜市中区南仲通5-60  
TEL 045-201-0926 FAX 045-201-7364

印刷・製本 株式会社TAKT-JAPAN